岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第515集

飯岡才川遺跡第12次発掘調査報告書

いいおかさいかわ

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

2008

岩手県盛岡市

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

飯岡才川遺跡第12次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

調査区遠景（南東から）

調査区全景（直上）

調査区北側古墳完掘状況（東から）

古墳出土遺物

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万ヵ所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成17・18年度に実施された盛岡市飯岡才川遺跡第12次発掘調査の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、古代の竪穴住居・古墳をはじめとする各種の遺構が検出され、集落・墓地の姿が明らかになるとともに、土器、石製品などたくさんの遺物も出土いたしました。当地域における歴史を解明する上で貴重な資料を提供することができたと考えております。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成20年１月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　武　田　牧　雄

例　　言

1　本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田２地割43－１ほかに所在する飯岡才川遺跡第12次発掘調査の結果を収録したものである。

2　本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は以下のとおりである。

遺跡番号：LE16－2291　遺跡略号：ISW－05－12・ISW－06－12

3　本遺跡の調査は、盛岡南新都市土地区画整備事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査にあたっては盛岡市と県教委事務局生涯学習文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。

4　発掘調査は２ヵ年にわたって実施しており、調査対象面積、調査期間、調査担当者は以下のとおりである。

＜平成17年度＞　面　積：3,200㎡　　期　間：平成17年10月３日～11月10日
担当者：濱田　宏・村木　敬・石崎高臣

＜平成18年度＞　面　積：4,000㎡　　期　間：平成18年９月19日～11月24日
担当者：金子昭彦・村田　淳・菅野　梢

5　室内整理期間、整理担当者は以下のとおりである。

＜平成17年度＞　期　間：平成18年２月１日～平成18年３月31日
担当者：濱田　宏

＜平成18年度＞　期　間：平成18年11月１日～平成19年３月31日
担当者：菅野　梢・平野　祐

6　報告書の執筆は、第Ⅰ章を盛岡市、その他を濱田、金子、村田が担当し、編集は村田が行なった。項目毎の文責は文末に記した。

7　航空写真撮影および写真解析図化作業は以下の業者に業務委託を行なった。

航空写真撮影：東邦航空（株）
写真解析図化作業：（株）セビアス

8　各種鑑定・分析は次の方々にお願いした。

石材鑑定：花崗岩研究会
鉄製品保存処理：岩手県立博物館

9　野外調査および本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った。(順不同、敬称略)

千田和文・津島知弘・神原雄一郎・今野公顕・斎藤麻希子（盛岡市教育委員会）
井上雅孝（滝沢村教育委員会）

10　野外調査では盛岡市・滝沢村・雫石町・矢巾町・紫波町の方々に多大なるご協力をいただいた。

11　本遺跡の調査成果は、当センター主催の現地説明会・遺跡報告会、『平成17年度発掘調査報告書』・『平成18年度発掘調査報告書』などで公表しているが、本書の記載内容がそのいずれにも優先する。

12　本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と周辺の環境

1　遺跡の位置と地形的環境…… 1
2　歴史的環境…… 1
3　過去の調査歴…… 6
4　調査区の概要…… 6

Ⅲ　調査の方法

1　野外調査の方法…… 7
2　調査経過…… 9
3　室内整理の方法…… 10
4　凡　　例…… 10

Ⅳ　検出された遺構と遺物

1　遺構の分布状況…… 14
2　竪穴住居…… 14
3　古　　墳…… 44
4　陥し穴状遺構…… 70
5　土坑・墓坑…… 76
6　溝　　跡…… 94
7　土器埋設遺構…… 99
8　焼土遺構…… 100
9　柱穴列・柱穴…… 101
10　遺構外出土遺物…… 104

Ⅴ　調査のまとめ

1　陥し穴状遺構…… 130
2　土器の分類…… 130
3　竪穴住居…… 133
4　墓制関連の遺構…… 134
5　鉄鐸に関する検討…… 136
報告書抄録…… 201

図版目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
第２図　遺跡周辺の地形……4
第３図　調査区の位置……5
第４図　グリッド及び基準点配置図……8
第５図　遺構配置図（１）……12
第６図　遺構配置図（２）……13
第７図　ＲＡ028（１）……15
第８図　ＲＡ028（２）……16
第９図　ＲＡ029……17
第10図　ＲＡ030……19
第11図　ＲＡ031（１）……20
第12図　ＲＡ031（２）……21
第13図　ＲＡ032……23
第14図　ＲＡ033……25
第15図　ＲＡ034……26
第16図　ＲＡ035（１）……28
第17図　ＲＡ035（２）……29
第18図　ＲＡ036（１）……31
第19図　ＲＡ036（２）……32
第20図　ＲＡ037……34
第21図　ＲＡ038（１）……35
第22図　ＲＡ038（２）……36
第23図　ＲＡ039（１）……38
第24図　ＲＡ039（２）……39
第25図　ＲＡ040……40
第26図　ＲＡ041（１）……42
第27図　ＲＡ041（２）……43
第28図　ＲＺ014……45
第29図　ＲＺ017……47
第30図　ＲＺ018……49
第31図　ＲＺ019……51
第32図　ＲＺ020……53
第33図　ＲＺ021……54
第34図　ＲＺ022……55
第35図　ＲＺ023（１）……57
第36図　ＲＺ023（２）……58
第37図　ＲＺ024・025……59
第38図　ＲＺ026……60
第39図　ＲＺ027……61
第40図　ＲＺ028……63
第41図　ＲＺ029……64
第42図　ＲＺ030・031……66
第43図　ＲＺ030遺物出土状況……67
第44図　ＲＺ032……69
第45図　ＲＤ104～107……72
第46図　ＲＤ108～111……74
第47図　ＲＤ112～114……77
第48図　ＲＤ115～118……79
第49図　ＲＤ119～124……83
第50図　ＲＤ125～130……86
第51図　ＲＤ131～136……89
第52図　ＲＤ137～140・142……92
第53図　ＲＤ141・143……93
第54図　ＲＧ055・056（１）……96
第55図　ＲＧ032・056（２）……97
第56図　ＲＧ057・058……98
第57図　ＲＺ033・034、ＲＦ002……101
第58図　柱穴列・柱穴（１）……102
第59図　柱穴列・柱穴（２）……103
第60図　ＲＡ028出土遺物（１）……105
第61図　ＲＡ028出土遺物（２）……106
第62図　ＲＡ028・029出土遺物……107
第63図　ＲＡ029出土遺物……108
第64図　ＲＡ030・031出土遺物……109
第65図　ＲＡ031～033出土遺物……110
第66図　ＲＡ033出土遺物……111
第67図　ＲＡ033～035出土遺物……112
第68図　ＲＡ035・036出土遺物……113
第69図　ＲＡ036出土遺物……114
第70図　ＲＡ036～038出土遺物……115
第71図　ＲＡ038・039出土遺物……116
第72図　ＲＡ039～041出土遺物……117
第73図　ＲＺ017・018・020・022出土遺物……118
第74図　ＲＺ023出土遺物……119
第75図　ＲＺ024・030出土遺物……120
第76図　ＲＺ032、ＲＤ124・125・128・135・140・141出土遺物……121
第77図　ＲＧ056、ＲＺ033出土遺物……122
第78図　ＲＺ034、Ｐ22、遺構外出土遺物……123
第79図　飯岡才川遺跡主要遺構配置図……131

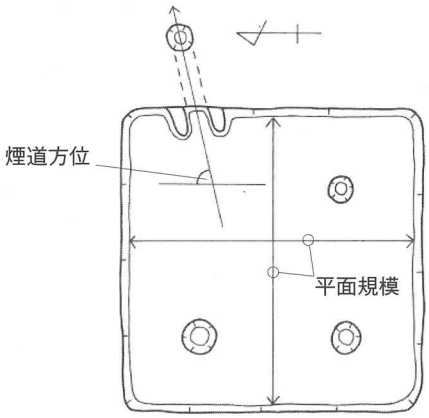
表　目　次

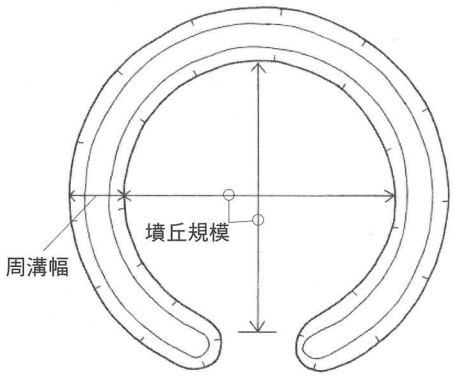
第１表　周辺遺跡一覧……３
第２表　遺構名振替一覧……11
第３表　柱穴計測表……104
第４表　遺物観察表（１）……124
第５表　遺物観察表（２）……126
第６表　遺物観察表（３）……128

写真図版目次

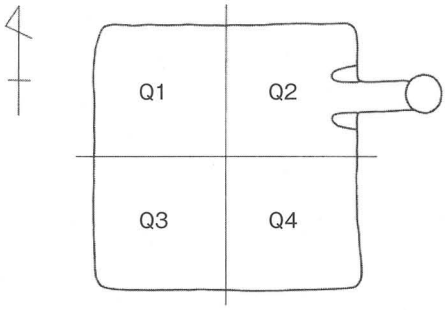
写真図版１　調査区の状況……141
写真図版２　ＲＡ028……142
写真図版３　ＲＡ029……143
写真図版４　ＲＡ030……144
写真図版５　ＲＡ031……145
写真図版６　ＲＡ032……146
写真図版７　ＲＡ033……147
写真図版８　ＲＡ034……148
写真図版９　ＲＡ035……149
写真図版10　ＲＡ036……150
写真図版11　ＲＡ037……151
写真図版12　ＲＡ038……152
写真図版13　ＲＡ039……153
写真図版14　ＲＡ040……154
写真図版15　ＲＡ041……155
写真図版16　ＲＺ014……156
写真図版17　ＲＺ017……157
写真図版18　ＲＺ018……158
写真図版19　ＲＺ020……159
写真図版20　ＲＺ022……160
写真図版21　ＲＺ023……161
写真図版22　ＲＺ024・025……162
写真図版23　ＲＺ026……163
写真図版24　ＲＺ028……164
写真図版25　ＲＺ030……165
写真図版26　ＲＺ031……166
写真図版27　ＲＺ032……167
写真図版28　ＲＺ019・021（１）……168
写真図版29　ＲＺ027・029（１）……169
写真図版30　ＲＺ019・021・027・029（２）…170
写真図版31　ＲＤ104～107……171
写真図版32　ＲＤ108～111……172
写真図版33　ＲＤ112～115……173
写真図版34　ＲＤ116～119……174
写真図版35　ＲＤ120～123……175
写真図版36　ＲＤ124～127……176
写真図版37　ＲＤ128～131……177
写真図版38　ＲＤ132～135……178
写真図版39　ＲＤ136～139……179
写真図版40　ＲＤ140～142、ＲＦ002……180
写真図版41　ＲＤ143・144、ＲＺ033・034……181
写真図版42　ＲＧ056……182
写真図版43　ＲＧ032・055・057・58……183
写真図版44　ＲＧ断面、柱穴群……184
写真図版45　ＲＡ028出土遺物（１）……185
写真図版46　ＲＡ028出土遺物（２）……186
写真図版47　ＲＡ028・029出土遺物……187
写真図版48　ＲＡ029～031出土遺物……188
写真図版49　ＲＡ031～033出土遺物……189
写真図版50　ＲＡ033出土遺物……190
写真図版51　ＲＡ033・034出土遺物……191
写真図版52　ＲＡ035・036出土遺物……192
写真図版53　ＲＡ036・037出土遺物……193
写真図版54　ＲＡ038・039出土遺物……194
写真図版55　ＲＡ039～041出土遺物……195
写真図版56　ＲＺ古墳出土遺物（１）……196
写真図版57　ＲＺ古墳出土遺物（２）……197
写真図版58　ＲＺ古墳、ＲＤ土坑出土遺物……198
写真図版59　ＲＤ土坑、ＲＧ溝、ＲＺ033出土遺物……199
写真図版60　ＲＺ034、遺構外出土遺物……200

遺構計測位置

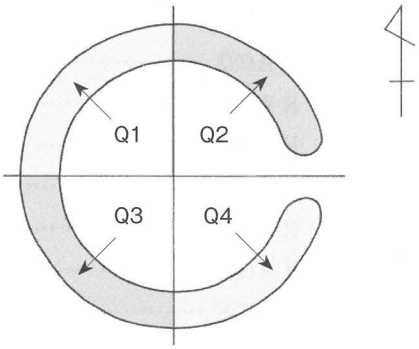


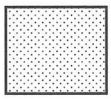


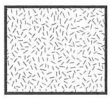
竪穴住居区割図



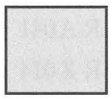
古墳区割図



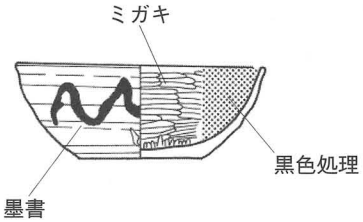

焼土

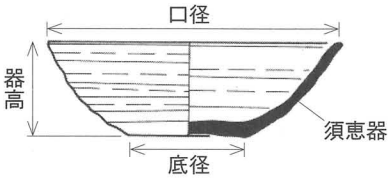

炭化物

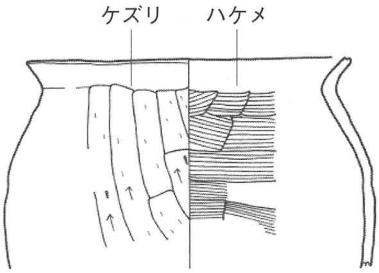
石

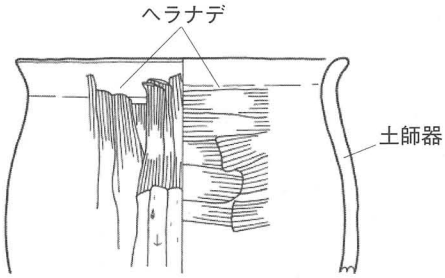

地山

土器の表現方法









凡　例　図

Ⅰ　調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が経済・文化などに対する機能を備えた北東北の拠点都市を目指して、市の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。岩手県・盛岡市・旧都南村の三者は、平成２年９月に地域振興整備公団（当時･現都市再生機構）に対して事業申請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成３年12月には建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可がおり、平成３年度から平成22年度までの20年間を事業予定期間とし、対象面積313haの土地区画整備事業が実施されることとなった。なお、本事業については平成18年度に当初計画より数年の期間延長が示されている。

飯岡才川遺跡第12次調査は、岩手県教育委員会と盛岡市とが協議し、平成17年度事業として確定した。その後、財団法人岩手文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として発掘調査を実施した。

（盛岡市都市整備部盛岡南整備課）

Ⅱ　遺跡の立地と周辺の環境

１　遺跡の位置と地形的環境（第１・２図）

飯岡才川遺跡は、岩手県盛岡市飯岡新田２地割字才川43－1ほかに所在する。ＪＲ東北本線盛岡駅から南方へ約２㎞の位置にあり、総面積は62,000㎡である。雫石川右岸の中～低位段丘上に立地しており、遺跡範囲の標高は約120～124mである。

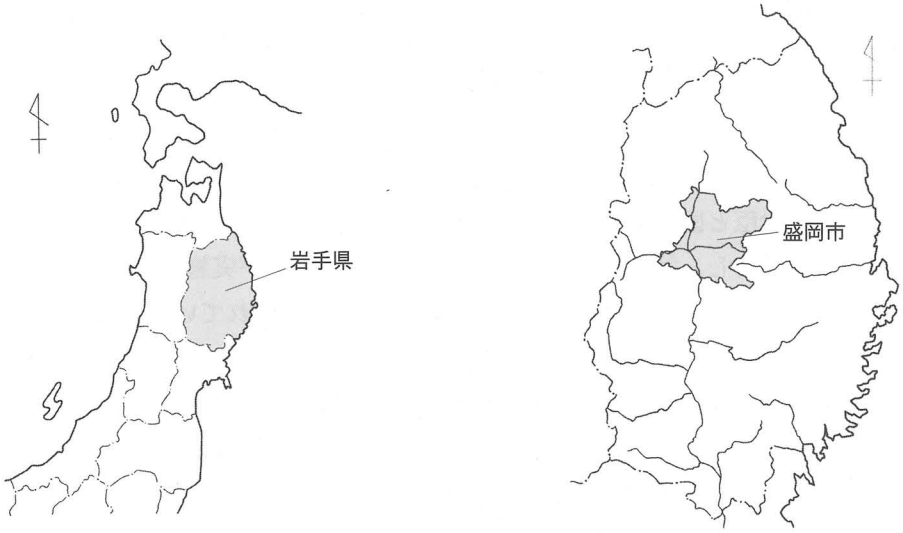
岩手県の県庁所在地である盛岡市は、江戸時代以降盛岡南部藩の城下町として発展をとげた町である。平成18年１月10日に玉山村と合併しており、総面積886万㎡、人口約30万人を擁する北東北地方における中核都市として位置づけられる。

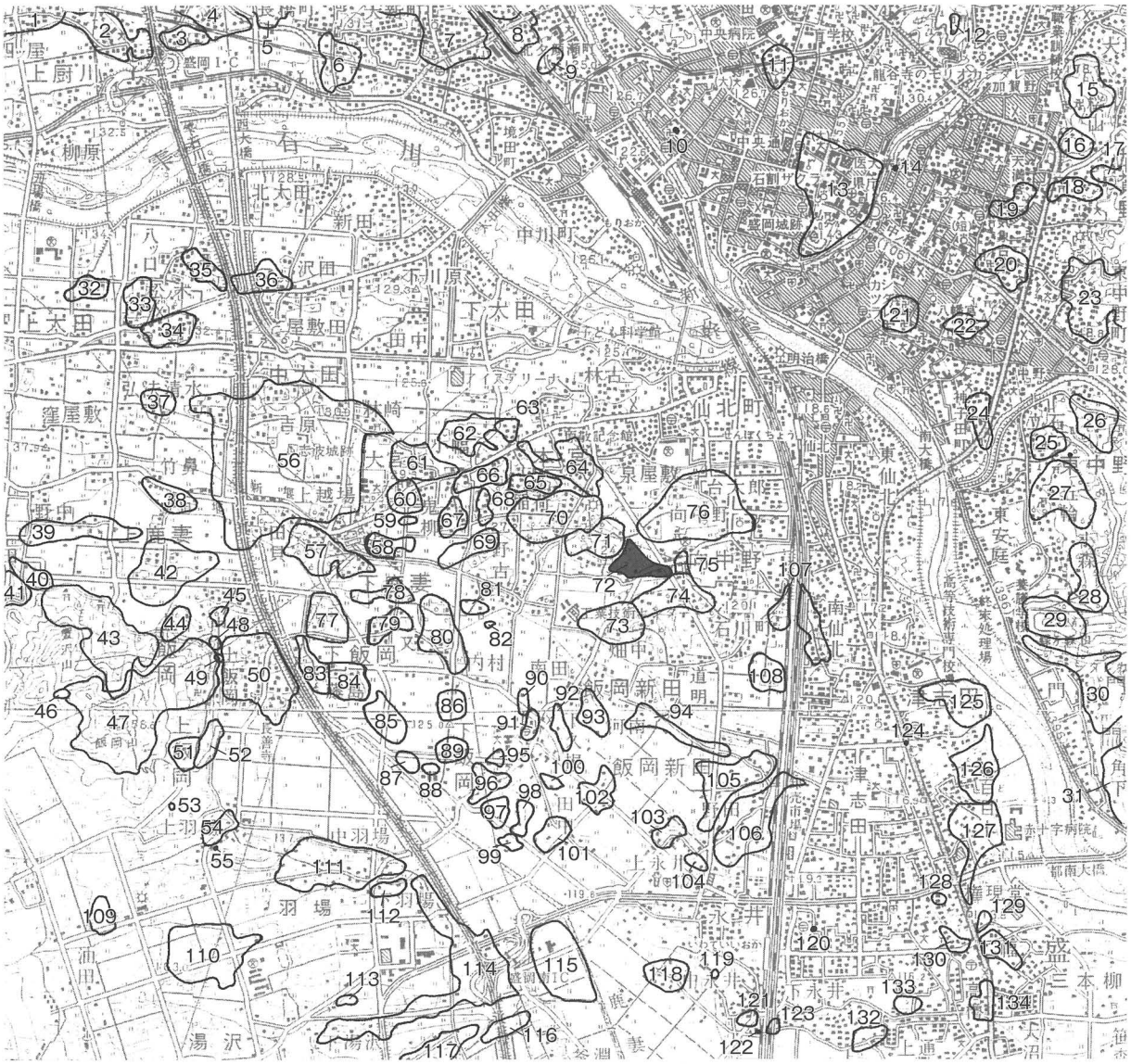
地形的にみると、盛岡市は北上低地帯に位置し、その西側には奥羽山脈、東側には北上山地が低地帯と平行するように南北方向に連なっている。市街地（低地帯）の中央を県北部の岩手郡岩手町御堂観音境内に源流を発する北上川が流れ、奥羽山脈から雫石川、北上山地から中津川と梁川が盛岡駅の南側で合流して南流する。第三系および火山岩類を主体として構成される奥羽山脈は、各支流に多量の土砂を供給しており、それによって大小の扇状地が複合する沖積地を雫石川右岸（南岸）に作り出している。また、この地域は度重なる雫石川の氾濫や流路の変化によって多くの旧河道や自然堤防が入り組む地形をしており、本遺跡はこのなかの低位段丘面に位置している。

２　歴史的環境（第１図・第１表）

盛岡市域には、現在までに500以上の遺跡の存在が確認されている。遺跡の時代・性格は多岐に渡り、古くは大新町遺跡（７）のように縄文時代草創期の遺物を出土する遺跡から、新しくは盛岡城跡（13）のような近世城館などさまざまな性格の遺跡が確認されている。本遺跡の位置する雫石川右岸の低位段丘面では、平成５年度から開始された盛岡南新都市区画整備事業関連をはじめとする大規模な発掘調査が実施されることによって数多くの遺跡の内容が判明しつつある。なかでも陸奥国最北の古代城柵遺跡であり、一辺800m以上の築地塀や大溝が検出され、竪穴住居から多数の鉄製品や施釉

陶器などが出土した志波城跡（56）をはじめ、奈良～平安時代に属する遺跡が多数発見されている。このうち本遺跡の周辺のみに限ってみても、本遺跡の東側にあり古墳時代末～平安時代にかけて600





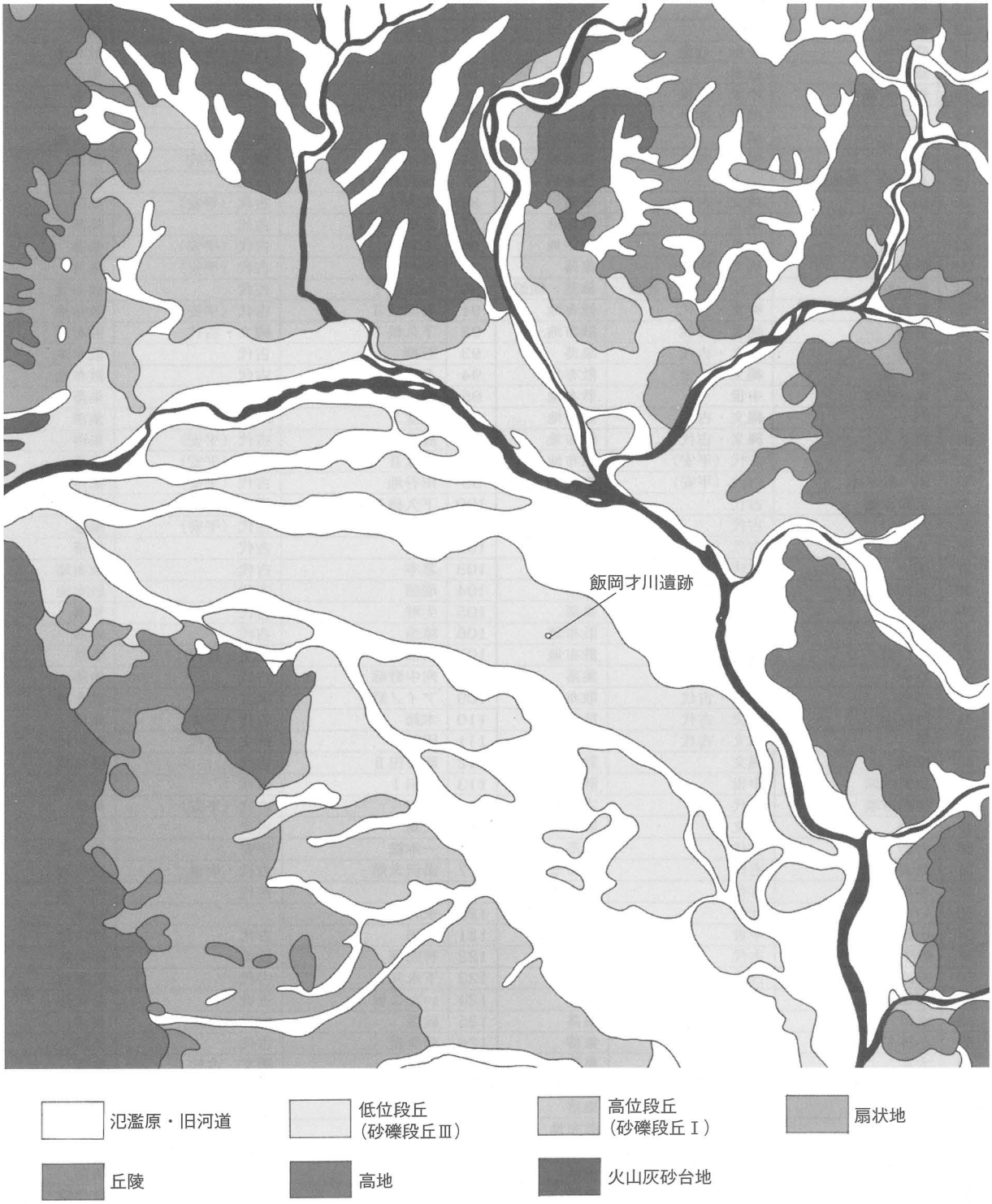
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第１表　周辺遺跡一覧

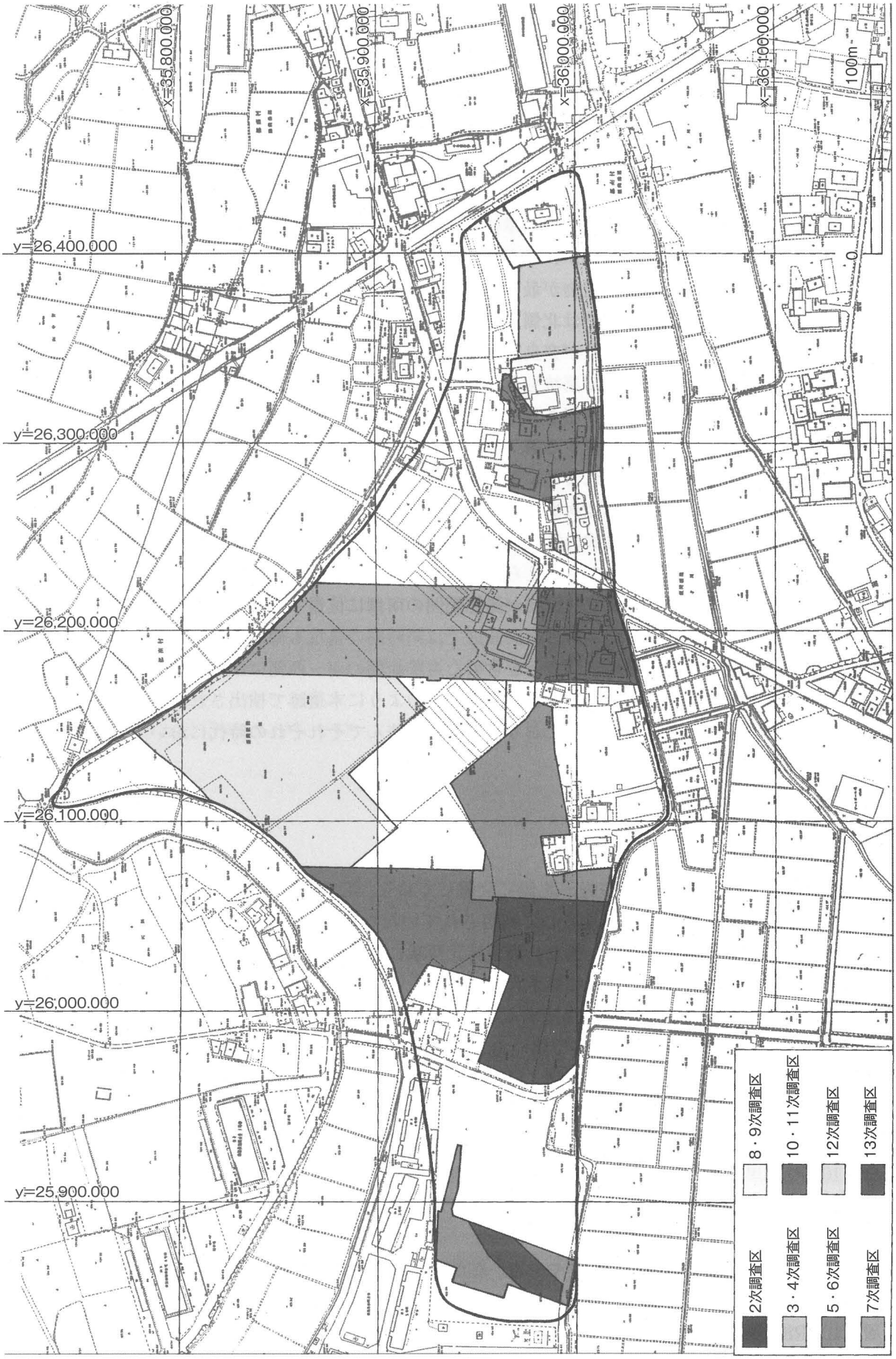
No.	遺　跡　名	時　　代	種　別	No.	遺　跡　名	時　　代	種　別
1	上ノ代	古代	集落	67	鬼柳B	古代	集落
2	幅Ⅲ	古代	集落	68	鬼柳C	古代	集落
3	幅Ⅱ	古代	集落	69	野古B	古代	散布地
4	幅Ⅰ	古代（奈良）	集落	70	野古A	奈良・平安	集落
5	長橋町	縄文・古代	散布地	71	飯岡沢田	古代	集落・古墳
6	稲荷町	縄文・古代～近世	集落	**72**	**飯岡才川**	**縄文・古代**	**集落・古墳**
7	大新町	縄文・古代	集落	73	矢盛	縄文・古代	散布地
8	前九年	縄文	集落	74	細谷地	縄文・古代	集落
9	宿田南	中世・近世	集落	75	向中野館	古代・中世	集落・城館
10	永祥院経塚	近世	経塚	76	台太郎	古代	集落
11	楢山田	縄文	散布地	77	辻屋敷	古代	集落
12	愛宕山	近世	散布地	78	上越場B	古代	集落
13	盛岡城	中世・近世	城館	79	二又	古代（平安）	散布地
14	鍛冶町	近世	一里塚	80	西田A	古代	集落
15	獅子が鼻	中世・近世	散布地	81	西田B	古代	集落
16	鼻子	縄文・弥生	散布地	82	前田	古代	集落
17	新庄	縄文	散布地	83	藤島Ⅱ	古代	散布地
18	瀬戸	縄文・弥生	散布地	84	藤島	縄文・平安	集落
19	花垣館（花坂館）	中世	散布地	85	飯岡林崎Ⅱ	古代	集落
20	山王山	縄文・古代	集落	86	深淵Ⅰ	古代（平安）	集落
21	大慈寺町	縄文	散布地	87	飯岡林崎Ⅰ	古代	集落
22	中野館	中世	散布地	88	上新田	古代（平安）	集落
23	砂溜	縄文・古代	集落	89	深淵Ⅱ	古代（平安）	集落
24	新山館	古代・中世・近世	集落・城館	90	高屋敷Ⅰ	古代	散布地
25	葛西館	縄文・古代	散布地	91	高屋敷Ⅱ	古代（平安）	散布地
26	金勢	縄文・古代	散布地	92	下久根Ⅰ	縄文・古代	散布地
27	立石	縄文・古代	集落	93	石持	古代	散布地
28	壇ヶ森	縄文～近世	散布地	94	夕覚	古代	散布地
29	蝶ヶ森館	中世	散布地	95	西	古代（平安）	集落
30	門	縄文・古代	散布地	96	熊堂Ⅰ	縄文・古代	集落
31	角下	縄文・古代	散布地	97	熊堂Ⅲ	古代（平安）	集落
32	細田	古代（平安）	散布地	98	熊堂Ⅱ	古代（平安）	集落
33	館・松ノ木	古代（平安）	集落	99	南谷地	古代（平安）	集落
34	上野屋敷	古代	散布地	100	下久根Ⅱ	縄文・古代	散布地
35	八ツ口	古代	散布地	101	田中	古代（平安）	集落
36	八掛	古代（奈良・平安）	集落	102	松島	古代	集落
37	畑中	古代	集落	103	葛本	古代	散布地
38	五兵衛新田	古代	集落	104	境田	古代	散布地
39	天沼	古代	集落	105	生畔	古代	集落
40	蟹沢下	古代	散布地	106	陣当	古代	集落
41	二ツ沢	縄文・古代	散布地	107	南仙北	縄文・古代	集落
42	竹鼻	古代	集落	108	向中野幅	古代	集落
43	山中	縄文・古代	散布地	109	アイノ野	縄文	散布地
44	月見山	縄文・古代	散布地	110	木節	古代（平安）	集落
45	堤	縄文・古代	散布地	111	因幡	縄文・古代	散布地
46	細越	縄文	散布地	112	新井田Ⅱ	古代	散布地
47	飯岡山館	中世	散布地	113	小田Ⅰ	古代	散布地
48	高館古墳	古代	古墳	114	新田	古代（平安）	集落
49	高館	縄文	散布地	115	大島	古代	集落
50	大柳Ⅰ	古代	集落	116	一本松	平安	散布地
51	飯岡赤坂	古代	散布地	117	湯沢大館	古代・中世	散布地
52	赤坂Ⅱ	古代	散布地	118	間木	古代	散布地
53	いたこ塚	近世	祭祀跡	120	永井経塚		経塚
54	小館（羽場館）	中世	散布地	121	神田	古代	散布地
55	砂子塚	古代	散布地	122	神田塚	近世	祭祀跡
56	志波城	古代	城柵跡	123	下永井	古代	散布地
57	石仏	古代	集落	124	いたこ塚	近世	祭祀跡
58	水門	古代	集落	125	碇堰	古代（奈良）	集落
59	小林	古代	集落	126	西鹿渡	古代	集落
60	大宮	古代・中世	集落	127	百目木	縄文・古代	集落
61	大宮北	古代	集落	129	中島	古代	集落
62	小幅	古代	集落	130	下永林	縄文・古代	散布地
63	宮沢	古代	散布地	131	三本柳幅	縄文・古代	集落
64	本宮熊堂A・B	縄文・古代	集落	132	荒屋	古代	集落
65	稲荷	古代	集落	133	高櫓A	古代	集落
66	鬼柳A	古代	集落	134	高櫓B	古代	散布地

軒を超える竪穴住居が検出され、東国との関連が想定される関東系土師器が出土した台太郎遺跡(76)、40基以上の古墳及び奈良～平安時代の竪穴住居が検出された飯岡沢田遺跡（71)、多数の竪穴住居をはじめ畠状遺構が検出された細谷地遺跡（74)、旧河道が検出され多量の木製品が出土した向中野館遺跡（75）などを挙げることができる。

また、この他にも縄文時代の遺跡として陥し穴状遺構が検出された矢盛遺跡（73)、晩期の住居跡が検出された本宮熊堂Ａ遺跡（64）など、中世の遺跡として居館跡や堀が検出された矢盛遺跡、曲輪や堀などが検出された向中野館遺跡などを挙げることができる。



第２図　周辺の地形


x=35,800.000
x=35,900.000
x=36,000.000
x=36,100.000
100m
y=26,400.000
y=26,300.000
y=26,200.000
y=26,100.000
y=26,000.000
y=25,900.000
8・9次調査区
10・11次調査区
12次調査区
13次調査区
2次調査区
3・4次調査区
5・6次調査区
7次調査区

第３図　調査区の位置

3　過去の調査歴（第３図）

飯岡才川遺跡では平成18年度までに試掘調査を含めて13次の調査が当センター及び盛岡市教育委員会によって実施されている。これまでの調査では縄文時代の陥し穴状遺構、古代の竪穴住居・掘立柱建物・古墳・墓坑、江戸時代の掘立柱建物などが検出されている。

陥し穴状遺構は、主に遺跡範囲の南西に位置する第５・６・10次調査区で多数検出されている。いずれも溝形をしており、旧河道を挟んで両岸に列状あるいは２～４基単位のグループで配置されている。遺物はほとんど出土していないが、いずれも縄文時代に属すると考えられる。

本遺跡では古代に属する遺構・遺物が最も多く検出されており、その種類も多岐にわたる。遺跡範囲の中央に位置する第７次調査区では北側を中心に８基の古墳が確認されている。墳丘は削平されており出土遺物も乏しいが、その多くが奈良時代～平安時代初頭に属すると考えられる。この他にも奈良～平安時代に属すると考えられる墓坑もみつかっており、今回報告する第12次調査区を含めた遺跡範囲の北側が古代には墓域として利用されていたものと考えられる。

竪穴住居は遺跡範囲の中央に位置する第７次調査区と西側に位置する第３・４・11次及び第８・９次調査Ｃ区で確認されている。これまでに調査されたものはいずれも平安時代のものであり、奈良時代に属するものは今回報告する第12次調査区でのみ確認されている。第３・４次調査区では竪穴住居とともに同時期と考えられる総柱式の掘立柱建物もみつかっており、遺跡範囲の東側が平安時代には集落の中心域として利用されていたと考えられる。

この他にも江戸時代に属する掘立柱建物が遺跡範囲の南側に位置する第13次調査区及び第８・９次調査Ｃ区で確認されている。また、第３次調査区では同時期の墓坑も確認されており、第13次調査区の南側に隣接する細谷地遺跡第12次調査区を含めた遺跡範囲の南～西側は江戸時代には居住域及び墓地として利用されていたことがわかってきている。このように本遺跡で検出された遺構・遺物は縄文時代から江戸時代までと多岐にわたっており、断絶期を挟んでそれぞれの時代において人々の生活の痕跡を留めた遺跡であるといえる。

4　調査区の概要

第12次調査区は、遺跡範囲の中央～北側に位置しており、7,200㎡を対象として２ヵ年にわたって発掘調査を実施した。調査前は畑地として利用されていたため、至る所で耕作痕（トレンチャー痕）や整地・造成の痕跡が確認された。また、調査区北西端には明治時代の衛生試験場の建物基礎が残存しており、一部の遺構がこれによって壊されている。

基本層序は、整合性を図るために隣接する第７次調査区EⅡ21グリッド（盛南開発グリッドでは－２E11bグリッド）で確認された層序を用いた。遺構検出面はⅡ～Ⅲ層上面であるが、先述の通り近年の耕作や造成の影響で調査区中央を除くほとんどの地点でⅠ層の直下にⅢ層が検出されるという状況であった。また、RG056溝の南東側（－３C16S～22ｖグリッド付近）ではⅠ層直下でⅣ層以下に存在する礫層が確認された。各層の性質と層厚は以下の通りである。

Ⅰ層　10YR3/2黒褐色　しまりやや密、粘性強　現耕作土　遺物微量包含　層厚約10cm

Ⅱ層　10YR2/2黒褐色　しまりやや密　根の影響で地山ブロック混入　層厚５～10cm
＝遺構検出面①

Ⅲ層　10YR7/8黄橙色粘質土　しまりやや密、粘性強　部分的に10YR8/8黄橙色粘質土ブロックを含む斑状に含む地山　層厚25～40cm　＝遺構検出面②

Ⅳ層　10YR8/8黄橙色粘質土　しまりやや密、粘性強　地山

Ⅲ　調査の方法

1　野外調査の方法

（1）グリッドの設定（第４図）

盛岡南新都市土地区画整備事業に関わる調査では、盛岡市教育委員会の方針に準じて平面直角座標系第Ｘ系（日本測地系）を座標変換した調査座標を用いてグリッドの設定を行っている。具体的には、本遺跡が所在する飯岡地区の調査座標点Ｘ＝－36,000.000、Ｙ＝26,000.000を基点として一辺50×50mの正方形グリッド（大グリッド）を設定し、さらにそれを25等分して２×２ｍの小グリッドとしている。グリッドの呼称は、北西隅を基点として大グリッドは南方向へ１～25、東方向へＡ～Ｙ、小グリッドは南方向へ１～25、東方向へａ～ｙとしており、小グリッドの呼称は１Ａ５bなどとなる。ただし、今回の調査区は基点座標より北側に位置し、大グリッドの呼称が基点から北方向に－１～－25となることから、小グリッドの呼称は－１Ａ５bなどとなる。

なお、今次調査区の基準点は平成17年度に隣接する第７次調査区の基準点（基１・補２）をもとに打設し、それぞれ仮番号を付した。平成18年度はそのうちの５点とさらに増設した３点を主要基準点として用い、それらをもとに調査区全体をカバーできるようにグリッドの設定を行なった。主要基準点の座標は以下の通りである。

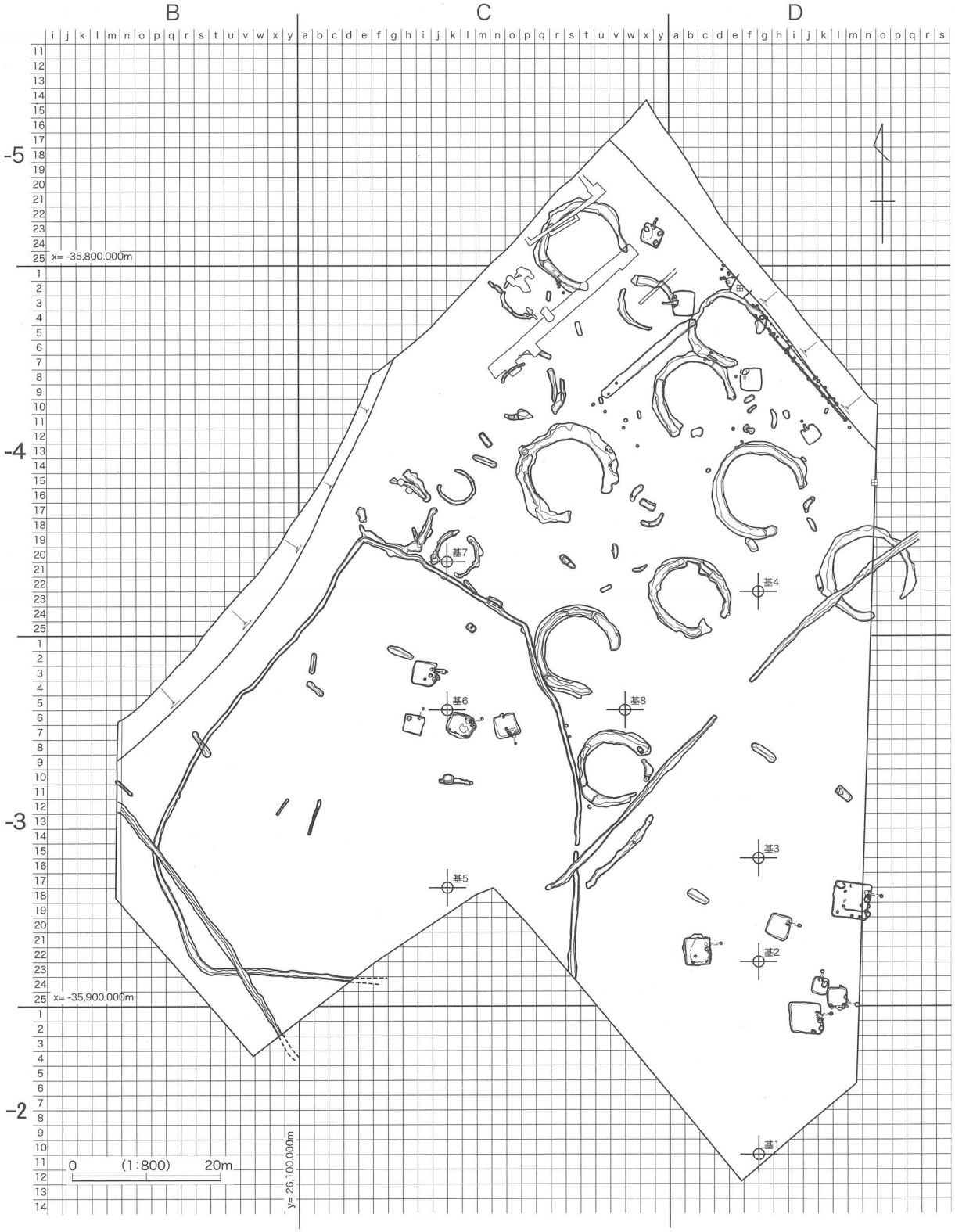
点名	グリッド名	X	Y	標高（m）	H17年度名
基１	－２D11ｇ	-35,920.000	26,162.000	124.105	仮１
基２	－３D23ｇ	-35,894.000	26,162.000	124.072	仮２
基３	－３D16ｇ	-35,880.000	26,162.000	123.869	仮３
基４	－４D23ｇ	-35,844.000	26,162.000	124.243	仮４
基５	－３C18ｋ	-35,884.000	26,120.000	124.656	仮６
基６	－３Ｃ６ｋ	-35,860.000	26,120.000	124.588	H18年新設
基７	－４C21ｋ	-35,840.000	26,120.000	124.570	H18年新設
基８	－３Ｃ６ｗ	-35,860.000	26,144.000	124.449	H18年新設

（2）精査の方法および遺構の記録

調査に先立って調査区内の雑物撤去を行い、続いて遺構の有無を確認するために調査区内の数ヵ所にトレンチを設定して人力で試掘を行った。試掘の結果、調査区内は隣接する第７次調査と同様、近年の削平により大部分で表土（盛土・耕作土）直下が遺構検出面（地山）となることが判明した。そのため、調査の迅速化と人力掘削量の軽減を図るため、調査員監督の下、重機（バックホー）によって遺構検出面付近まで表土を掘削し、その後人力で遺構検出を行った。

検出された遺構については釘やスプレーを使ってマーキングし、一部の竪穴住居や古墳については検出状況の写真撮影を行った。なお、遺構名については野外調査では各遺構に仮名（○号住居跡など）をつけ、室内整理の段階で盛岡市教育委員会が使用している略号に遺構名を変更している。

遺構の掘り下げは４分法と２分法を使い分け、土層観察を行いながら進めた。掘り下げには主に移



第４図　グリッド及び基準点配置図

植箆を使用し、カマドや遺物の集中する地点では竹箆なども使用している。遺構のプランや新旧関係が不明な場合は適宜サブトレンチを設定して層位確認を行っている。なお、竪穴住居や古墳の周溝では、遺物の取り上げ単位としてベルトを境界とした区画設定を行っている（凡例図参照）。

遺構の記録については、完掘時、土層断面、遺物出土状況には写真撮影と実測図の作成を行っている。遺構の実測は、平成17年度は簡易遣り方測量と光波測距儀を用いて作成した。平成18年度はそれらの方法に加え、デジタルカメラ及びラジコンヘリを使用した写真解析図化作業を業務委託して実施した。いずれも縮尺は1/20を基本とし、遺構配置図や大型の遺構は1/50や1/100、遺物出土状況やカマドは1/10など適宜縮尺を変更して作成している。

写真撮影は、平成17年度の調査では35㎜判カメラ２台（モノクロ・カラーリバーサル）と６×７判カメラ（モノクロ）、メモ用としてデジタルカメラ（オリンパス社製コンパクトタイプ、400万画素）を使用し、平成18年度はカラーリバーサルに代えてデジタルカメラ（キャノン社製一眼レフタイプ、1280万画素）を使用した。

（３）広報・普及啓発活動

平成18年10月３日　職場体験（岩手町川口中学校２年生２名）。
平成18年10月28日　現地説明会（28名参加）
平成19年１月20日　第28回遺跡報告会（岩手県立埋蔵文化財センター・（財）岩手県文化振興事業団主催）においてスライドを使用した報告を行った。

２　調　査　経　過

野外調査は平成17・18年度の２ヶ年にわたって実施した。平成17年度には調査区全域の表土除去と遺構検出及び遺構精査（調査区東側及び南西側3,200㎡）、18年度は遺構検出と遺構精査（17年度未了分4,000㎡）を行っている。以下に各年度の調査経過を簡単に記す。

平成17年度
10月３日　調査開始。人力による粗掘と重機による表土除去作業を行う。（～10月21日）
10月６日　遺構精査開始（～11月８日）
11月７日　終了確認。次年度繰越分の面積を確認する。
11月９日　次年度調査に備えて精査未了区域にブルーシートをかける。
11月10日　資材を搬出し野外調査終了。

平成18年度
９月19日　資材搬入し野外調査再開。
９月20日　ブルーシートを除去しながら遺構検出及び精査開始。
10月３日　職場体験
10月26日　ラジコンヘリによる写真測量（１回目）。
10月28日　現地説明会開催
11月８日　終了確認
11月９日　航空写真撮影
11月24日　ラジコンヘリによる写真測量（２回目）。午後に資材搬出し野外作業終了。

3　室内整理の方法

室内整理作業は、平成17・18年度とも最初に遺物の洗浄・註記から開始した。土器類は乾燥後に土師器と須恵器に選別して破片数と重量を計測した後に註記を行っている。註記については、平成17年度は遺跡名・遺構名（野外調査での仮遺構名）・出土層位を記した。平成18年度は取り上げた日付順に付した袋番号と遺跡名のみを記し、遺構名を変更した時点で報告書掲載分には遺構名と層位・掲載番号を追記している。各年度とも註記の後には接合・復元作業を行い、回転復元実測が可能なもの及び器形や調整に特徴があるものを中心に登録を行い、それらについて実測・拓本・トレースを行った。

金属製品のうち、鉄製品についてはX線透過写真撮影を行って遺存状況を確認しながら錆落しと実測を行った。また、一部のものについては破損防止のために保存処理作業を委託している。

剥片石器・石製品・陶磁器については、出土点数が少ないため全点登録した後に実測を行っている。礫石器については遺構内出土のものを中心に選別し、登録を行ったものについて実測を行った。

遺構図面の整理は、平成17年度は実測原図をもとに修正図（第二原図）を作成し、トレースと版下作成を行っている。平成18年度は簡易遣り方測量で実測した遺構（竪穴住居と土坑の一部）については修正図を作成しているが、その他の遺構については写真解析作業を業務委託して図化を行っている。なお、平成18年度については修正図作成分・写真解析分ともに図面の調整を行った後にレイアウトを行いデジタル版下としており、トレース及び版下作成を行っていない。ただし、表現の体裁を整えるため17年度作成分についても版下を取り込んでデジタルデータ化している。

4　凡　　例

（1）遺　構　名

遺構の名称は、盛岡市教育委員会で使用している略号に準じて付し、遺跡全体で通し番号としている。野外調査時には種別の変更や欠番を避けるために全て仮遺構名（１号住居跡など）とし、室内整理の段階で略号に振り替えている。仮遺構名と変更した略号の対応関係は第２表の通りである。

なお、遺構の略号は以下の通りである。

ＲＡ…竪穴住居　ＲＣ…柱穴列　ＲＤ…土坑・陥し穴状遺構　ＲＦ…焼土遺構
ＲＧ…溝跡　ＲＺ…古墳・土器埋設遺構

（2）掲 載 縮 尺

遺構図面の縮尺は以下の通りであり、図中にスケールを付している。

竪穴住居、土坑・陥し穴状遺構…１/50、**古墳**…１/50～100、**土器埋設遺構・焼土遺構**…１/25
カマド・遺物出土状況…１/25　**溝跡**…断面１/50・60（平面は規模に応じて使い分け）

遺構の計測位置・区割り・焼土などの表現は凡例図の通りである。

遺物図面の縮尺は、土器・石製品・陶磁器・礫石器は１/３、金属製品は１/２、剥片石器は２/３を基本としているが、大きさの関係上、縮尺を変更しているものがある。土器の表現方法及び計測位置については凡例図の通りである。なお、回転復元実測が可能な土器については、回転体分割法（島原・村田　2007）を用いた容量計測も行っている。

第２表　遺構名一覧

竪穴住居		
新		旧
RA028	←	１号住居跡
RA029	←	２号住居跡
RA030	←	７号住居跡
RA031	←	３号住居跡
RA032	←	４号住居跡
RA033	←	５号住居跡
RA034	←	６号住居跡
RA035	←	８号住居跡
RA036	←	９号住居跡
RA037	←	10号住居跡
RA038	←	11号住居跡
RA039	←	12号住居跡
RA040	←	13号住居跡
RA041	←	14号住居跡

柱穴列		
新		旧
RC003	←	柱穴列①
RC004	←	柱穴列②
RC005	←	柱穴列③

※柱穴番号は野外調査で使用した番号を使用

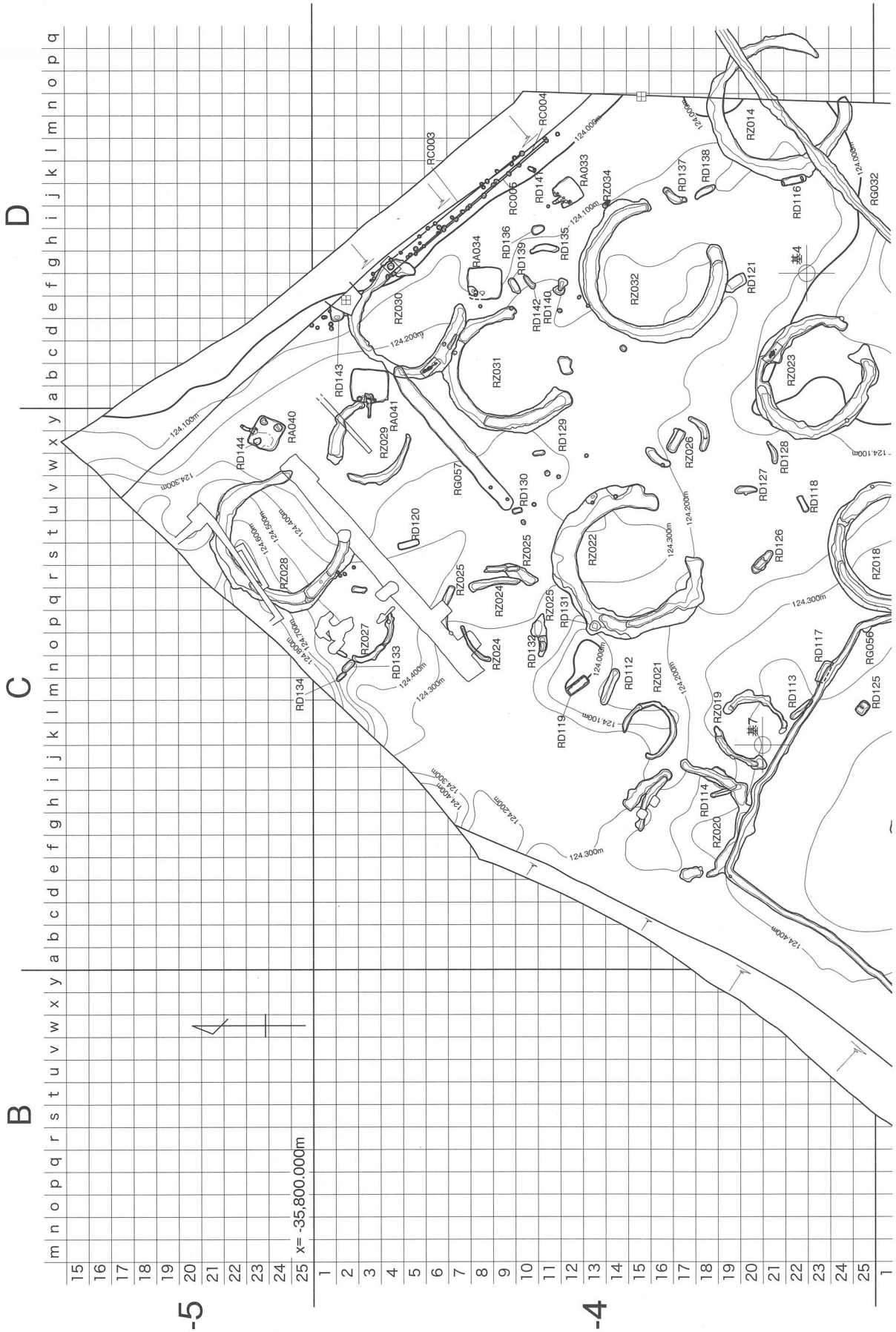
土坑・陥し穴状遺構		
新		旧
RD104	←	２号土坑
RD105	←	３号土坑
RD106	←	７号土坑
RD107	←	８号土坑
RD108	←	９号土坑
RD109	←	10号土坑
RD110	←	11号土坑
RD111	←	14号土坑
RD112	←	21号土坑
RD113	←	23号土坑
RD114	←	28号土坑
RD115	←	１号土坑
RD116	←	４号土坑
RD117	←	５号土坑
RD118	←	17号土坑
RD119	←	22号土坑
RD120	←	26号土坑
RD121	←	34号土坑
RD122	←	６号土坑
RD123	←	12号土坑
RD124	←	13号土坑
RD125	←	15号土坑
RD126	←	18号土坑
RD127	←	19号土坑
RD128	←	20号土坑
RD129	←	24号土坑
RD130	←	25号土坑
RD131	←	27号土坑
RD132	←	29号土坑
RD133	←	30号土坑
RD134	←	31号土坑
RD135	←	32号土坑
RD136	←	33号土坑
RD137	←	35号土坑
RD138	←	36号土坑
RD139	←	37号土坑
RD140	←	38号土坑
RD141	←	39号土坑
RD142	←	40号土坑
RD143	←	41号土坑
RD144	←	42号土坑

焼土遺構		
新		旧
RF002	←	１号焼土

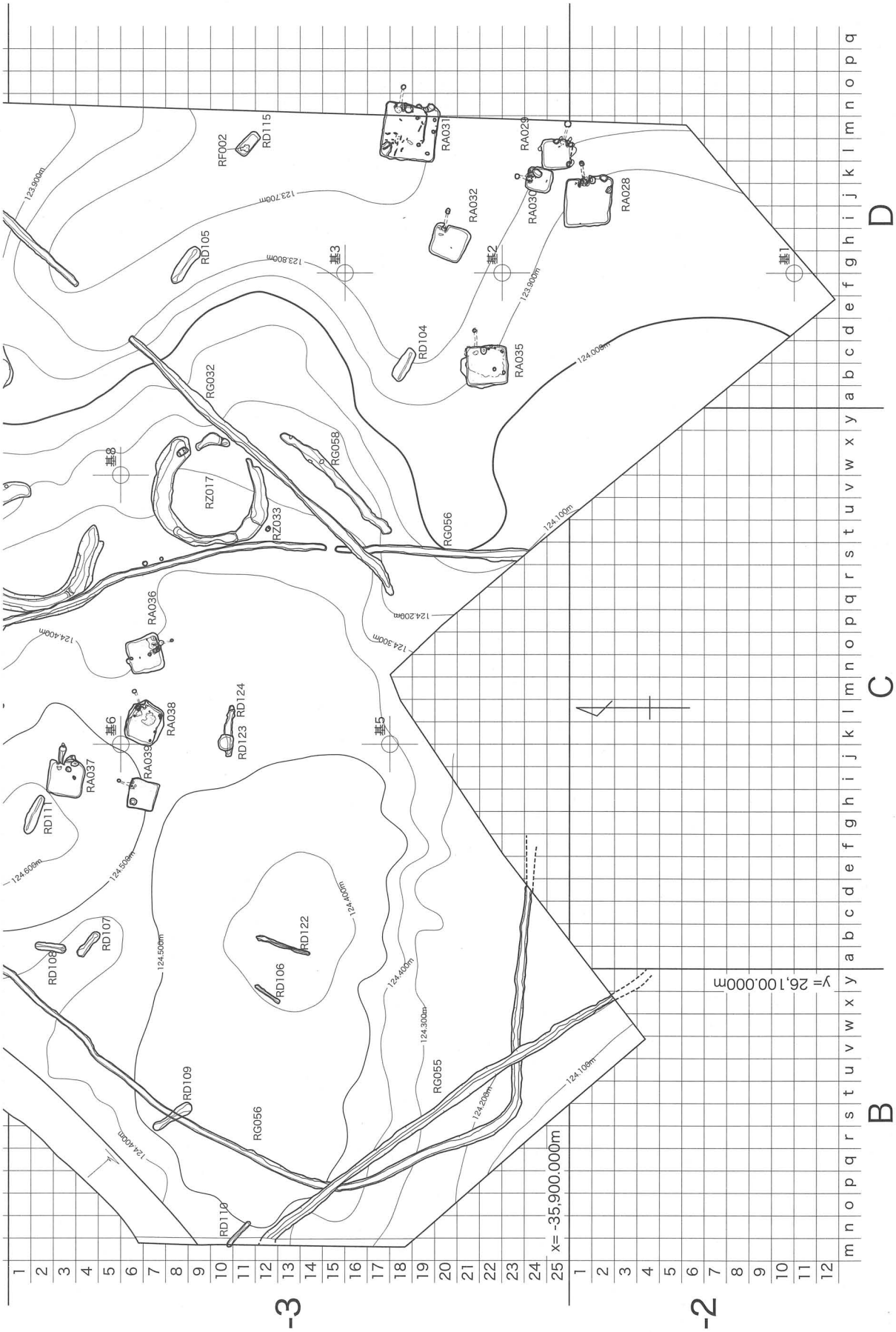
溝跡		
新		旧
RG032	←	１号溝
RG055	←	２号溝
RG056	←	３号溝
RG057	←	４号溝
RG058	←	５号溝

古墳		
新		旧
RZ014	←	SZ08
RZ017	←	１号古墳
RZ018	←	２号古墳
RZ019	←	３号古墳
RZ020	←	４号古墳
RZ021	←	５号古墳
RZ022	←	６号古墳
RZ023	←	７号古墳
RZ024	←	８号古墳
RZ025	←	９号古墳
RZ026	←	10号古墳
RZ027	←	11号古墳
RZ028	←	12号古墳
RZ029	←	13号古墳
RZ030	←	14号古墳
RZ031	←	15号古墳
RZ032	←	16号古墳

土器埋設遺構		
新		旧
RZ033	←	１号埋設
RZ034	←	２号埋設



第５図　遺構配置図（１）（S＝1/500）



第６図　遺構配置図（２）（S=1/500）

Ⅳ　検出された遺構と遺物

1　遺構の分布状況（第５・６図）

２ヵ年にわたる調査によって、竪穴住居14棟・古墳17基・土坑31基・陥し穴状遺構11基・溝跡５条・土器埋設遺構２基・焼土遺構１基・柱穴列３列を検出した。分布状況をみると、竪穴住居は調査区北辺と中央、南東側に分布する。古墳は調査区中央～北側に等間隔で分布する。土坑は調査区全域で検出されているが、このうち墓坑と推定されるものは古墳の分布範囲内でのみ確認されている。陥し穴状遺構は調査区西側に集中して分布する。遺物は土器類のほとんどが竪穴住居と古墳の周溝からの出土であり、その他からはほとんど出土していない。

2　竪　穴　住　居（ＲＡ）

ＲＡ028竪穴住居

遺　構（第７・８図、写真図版２）

〈位置・検出状況〉調査区南部、平安時代の住居跡が集中する地点の１棟である。－２Ｄ２ｉ・３ｉ付近に位置し、北東約1.2～1.5mほどにはＲＡ029・030が隣接する。Ⅲ層上面で黒色土の広がりで確認した。　〈重複関係〉認められない。

〈規模〉4.18×4.34m　〈平面形〉不整方形　〈床面積〉15.07㎡

〈壁の高さ・状態〉36～44cmほどで、いずれも直立ぎみに立ち上がっている。

〈堆積状況〉上位は褐色土粒を含む黒色土、中位は褐色土粒などを含む黒褐色土、下位は黄褐色土粒等を含む暗褐色土からなる。自然堆積層である。

〈床面〉Ⅲ層を床面とし堅く締まる。ほぼ平坦である。

〈カマド〉カマドは東壁北隅寄りに設置される。本体部・煙道部とも残存状況は良好である。

（本体部）幅は100cm前後を測る。袖部は地山の削り出しをベースにして、扁平な円礫を芯材に据えているが、左右とも芯材礫が本体中央部に崩落し奥壁の一部を覆っている。燃焼部焼土は直径30cm程度に形成され、厚さは最大で６cmである。カマド内には遺物が多く含まれていた。

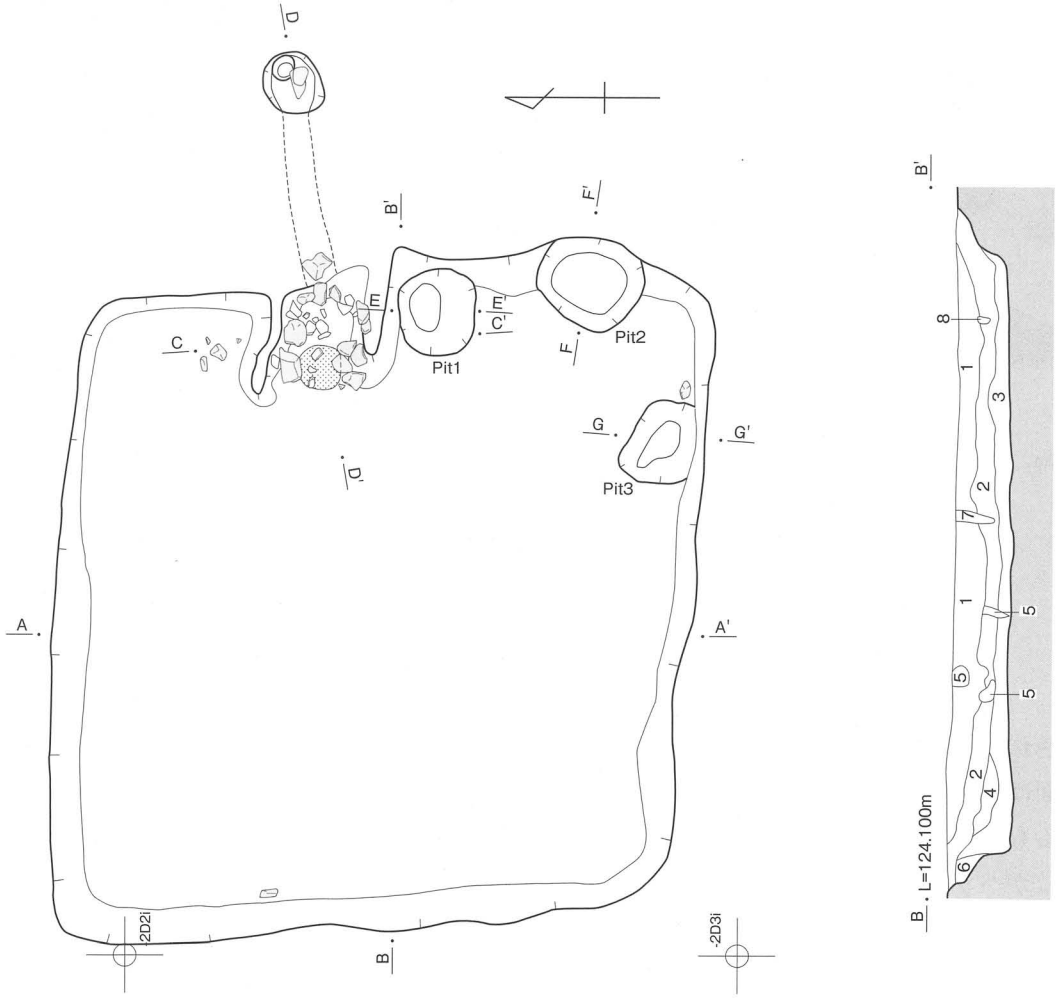
（煙道・煙出し部）刳り貫き式の煙道で、堆積土には焼土粒や炭化物粒を含む。煙出しに向かってはおよそ25度の角度で下り、奥壁からの長さは約1.1mである。煙道方位はＮ－80°－Ｅである。煙出し内からは大形の礫が数個出土したが、上部構造に関係があるものかは不明である。

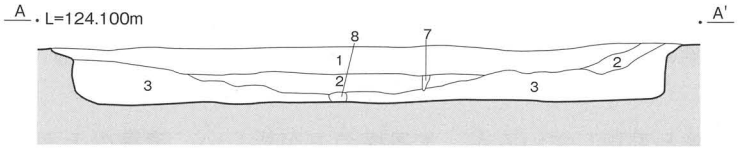
〈柱穴・土坑〉柱穴は確認されなかったが、直径25～35cmほどの貯蔵穴と思われる土坑が３基（Pit １～３）検出された。Pit １はカマドのすぐ右脇に、Pit ２は東壁南東コーナー寄りに、Pit ３は南壁南東コーナー寄りに位置している。

出土遺物（第60～62図、写真図版45～47）

〈出土状況〉土器類は、堆積土やカマド内・煙道部・袖内などから土師器が5,146g、須恵器が138g出土した。石製品は砥石１点、鉄製品では角釘が１点出土している。

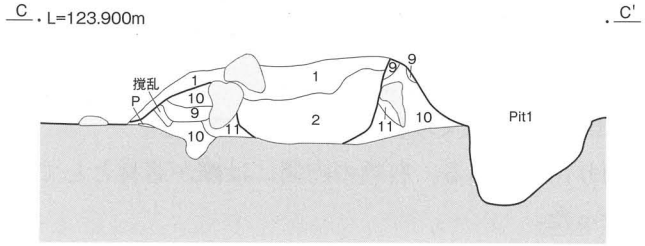
〈掲載遺物〉29点掲載した（１～29）。１～12は土師器の坏で、１～３は内面が黒色処理されるもの、４～12は非黒色処理のものである。全体的に口縁部が外反する器形のものが多い。12は倒立文字「木」と思われる破片である。13はロクロ成形後、内外面および底部まで黒色処理・ヘラミガ





堆積土（A-A'・B-B'）

1	10YR2/1	黒色シルト	褐色土粒をわずかに含む
2	10YR2/2	黒褐色シルト	褐色土粒・黄褐色土粒を全体に含む
3	10YR3/3	暗褐色シルト	黄褐色土粒・黒褐色土粒を全体に含む
4	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	3層よりも黄褐色土粒の混入多い
5	10YR3/2	黒褐色粘土質シルト	根による攪乱
6	10YR4/4	褐色シルト	地山崩落ブロック
7	10YR2/1	黒色シルト	根による攪乱か
8	10YR4/4	褐色砂質シルト	地山崩落ブロック



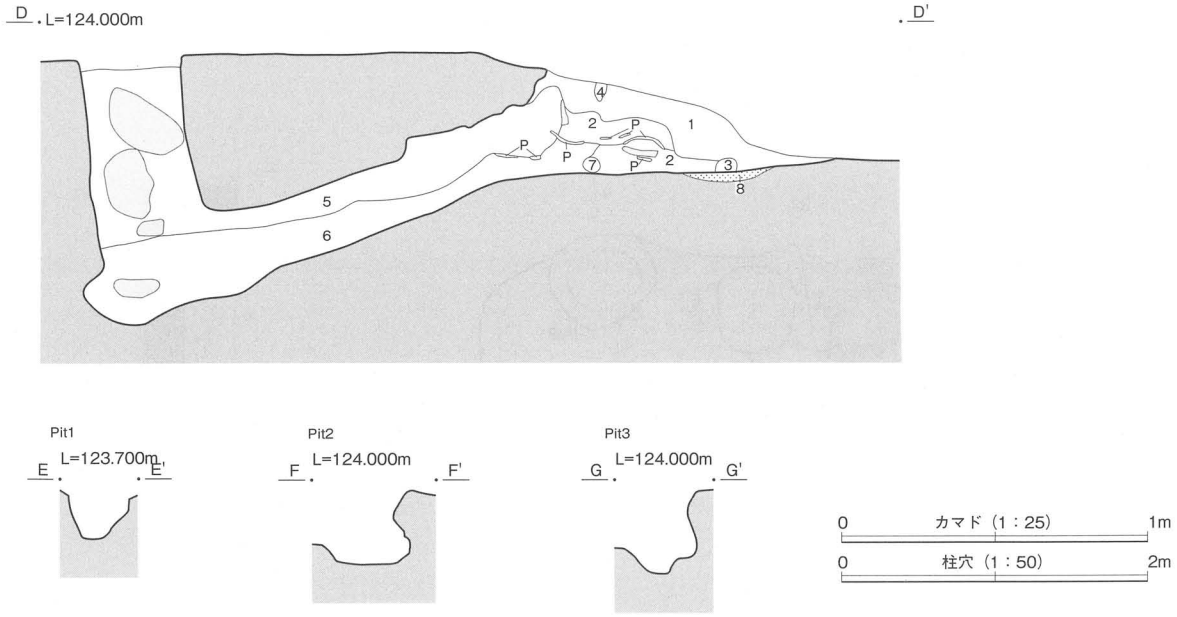
カマド（C-C'・D-D'）

1	10YR2/1	黒色シルト	褐色土1%含む
2	10YR3/3	暗褐色シルト	5YR4/8赤褐色焼土粒を3%含む
3	5YR8/4	赤褐色シルト	焼土ブロック
4	10YR2/2	黒褐色シルト	褐色土を40%含む
5	10YR2/2	黒褐色シルト	黄褐色土粒をまばらに含む
6	7.5YR3/3	暗褐色シルト	すすけた感じの色調
7	10YR4/4	褐色シルト	ブロック状
8	5YR3/4	暗赤褐色シルト	燃焼部の焼土で焼けは良好
9	7.5YR3/3	赤褐色シルト	袖の赤変部分
10	10YR3/3	暗褐色シルト	地山削り出しの袖部
11	7.5YR2/3	極暗褐色シルト	芯材礫の掘り方埋土

0　カマド（1：25）　1m

0　平・断面（1：50）　2m

第7図　RA028（1）



第８図　RA028（２）

キ調整が施された小型の鉢である。調整は非常に丁寧に行われている。14～21は非ロクロ成形の甕で、口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラケズリないしヘラナデ調整、体部内面にはヘラナデ・ハケ調整が施されるものである。いずれも短めの口縁部が特徴的である。22～24はロクロ成形の甕である。体部外面下位がヘラケズリ調整されている。24の内面には指の掻き上げ痕が観察された。25～27は須恵器の坏、28は１面使用の砥石、29は釘と思われる鉄製品である。

時　期　出土した遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初）に属するものと思われる。

ＲＡ029竪穴住居

遺　構（第９図、写真図版３）

〈位置・検出状況〉ＲＡ028同様、調査区南部の住居群のうちの１棟で、－３Ｄ25ｌ付近に位置する。Ⅲ層上面で確認した。

〈重複関係〉遺構の北西隅がＲＡ030の東壁と重複しているが、本遺構の方が新しい。遺構の上面は農業機械（トレンチャー）の痕跡が至る所に確認できた。

〈規模〉2.68×2.78m　〈平面形〉略方形　〈床面積〉5.26㎡

〈壁の高さ・状態〉35～42cm程度で、いずれも直立ぎみに立ち上がる。

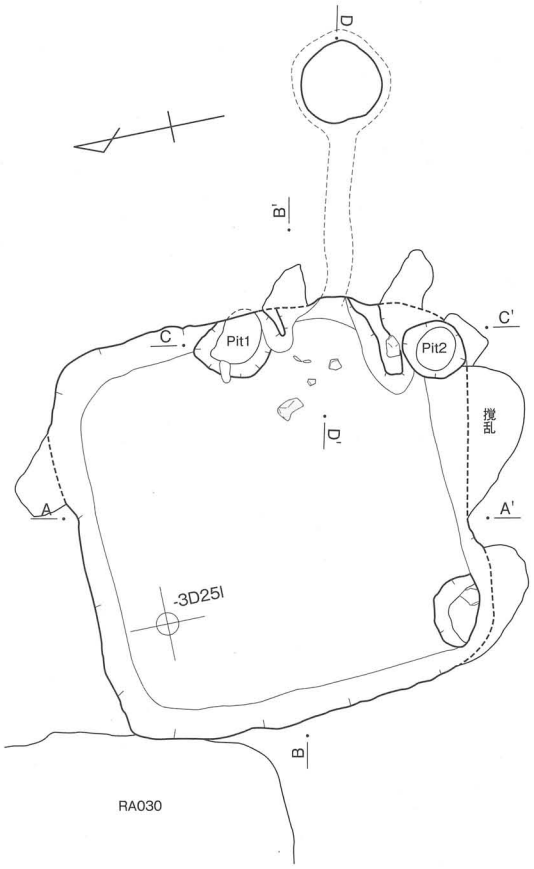
〈堆積状況〉上位は黄褐色土粒を含む黒色土、中位から下位は褐色土粒を含む黒褐色土を主体とする。北側からは最下部に褐色土が堆積している。

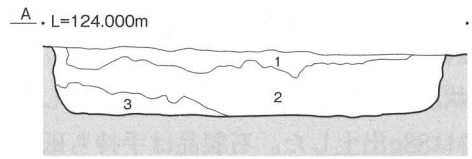
〈床面〉Ⅲ層を床面とするが、締まりはそれほどではない。全体に平坦である。

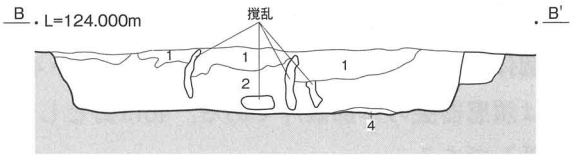
〈カマド〉東壁南東隅に設置される。煙道から煙出しにかけての残存状況は良好である。

（本体部）幅は100cm前後で、これも袖部は地山削り出しである。右袖の内側には礫が芯材として地山に埋め込まれている。燃焼部焼土は確認できなかった。

（煙道・煙出し部）刳り貫き式の煙道で、堆積土は黄褐色土粒を全体に含む黒褐色土が主体である。底面は煙出しに向かって10度前後の角度で緩やかに下り、奥壁からの長さは約1.2mである。煙道方位はＮ－192°－Ｅである。煙出しの堆積土には炭化物や焼土粒を多く含む層が見られ、わずかにオー

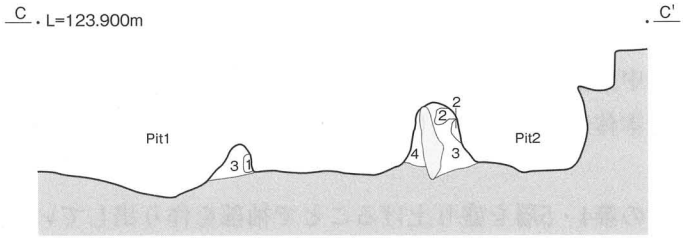






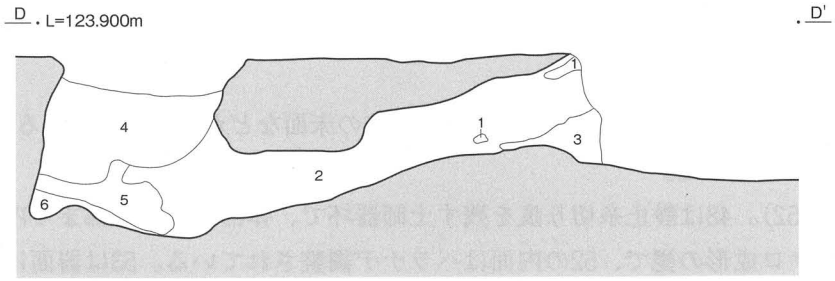
堆積土（A-A'・B-B'）

1	10YR2/1	黒色シルト	黄褐色土粒含み十和田aテフラ含まず
2	10YR2/3	黒褐色シルト	黄褐色土粒・黒色土の混合土
3	10YR4/4	褐色粘土質シルト	層下位に黒色土の帯を含む
4	7.5YR3/3	暗褐色砂質シルト	暗褐色焼土粒を含む



カマド（C-C'）

1	7.5YR3/3	暗褐色シルト	焼けの悪い焼土ブロック
2	10YR3/2	黒褐色粘土質シルト	橙色焼土粒・炭化物粒含むブロック
3	10YR4/4	褐色シルト	地山に似る
4	7.5YR4/4	褐色粘土質シルト	右袖の袖構築土



カマド（D-D'）

1	7.5YR3/3	暗褐色シルト	くすんだ色調の焼土
2	10YR2/3	黒褐色シルト	黄褐色土粒を全体に含む
3	7.5YR3/2	黒褐色シルト	暗赤褐色焼土粒・黄褐色土粒を含む
4	10YR2/2	黒褐色シルト	黄褐色土粒を全体に含む
5	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	橙色および赤褐色の焼土粒含む
6	10YR2/1	黒色粘土質シルト	炭がらみで黒みを帯びる

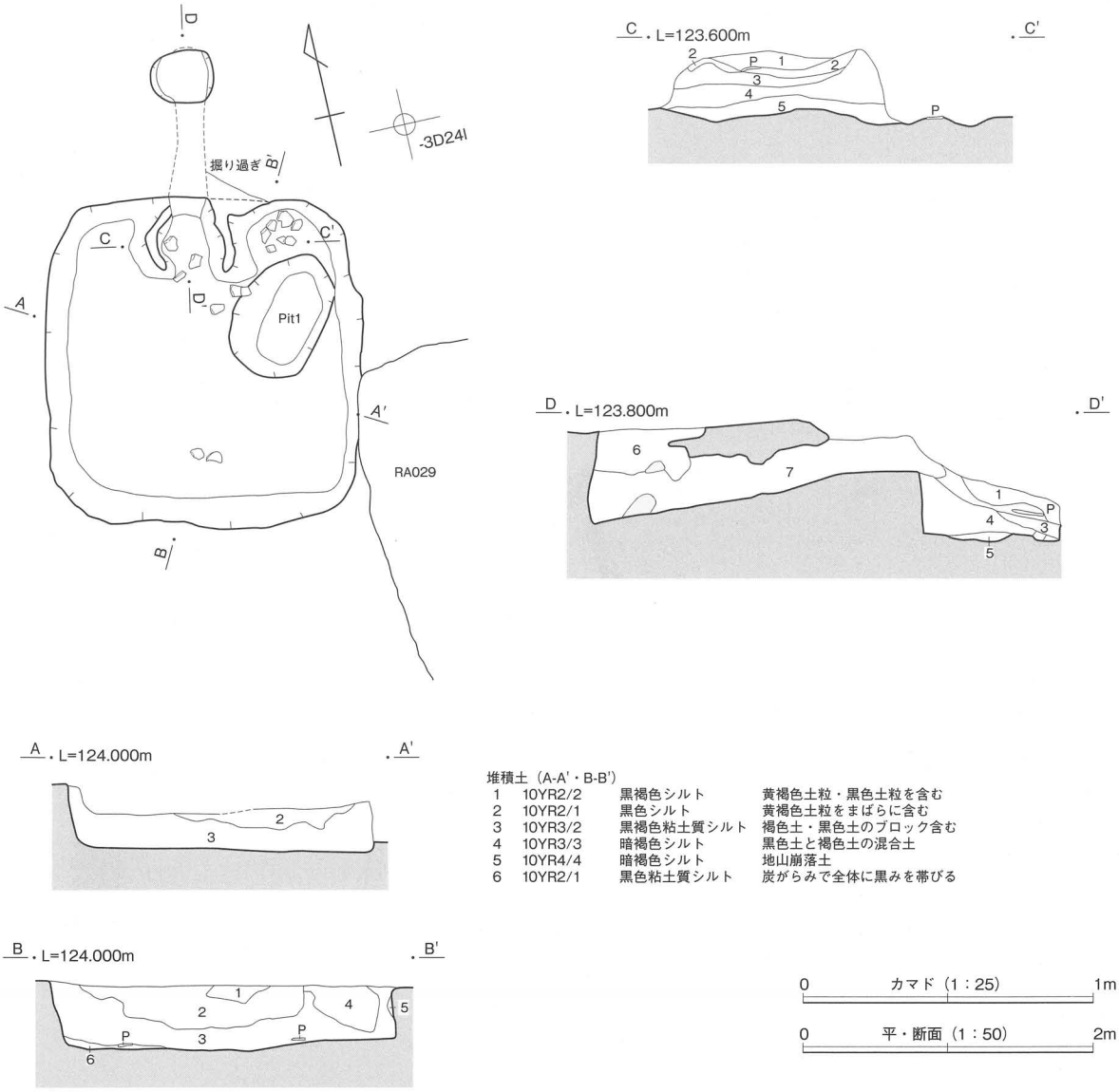
0　カマド（1：25）　1m

0　平・断面（1：50）　2m

第９図　RA029

バーハングしながら立ち上がっている。
〈柱穴・土坑〉土坑は３基（Pit １～３）確認された。Pit １は壁が袋状にふくらんでいるもの、Pit ３は南西コーナーに位置する不整形の土坑である。いずれも貯蔵に関する用途をもつものであろう。
出土遺物（第62・63図、写真図版47・48）
〈出土状況〉土器類は、堆積土を主体としてカマド内や煙道などから出土している。土師器は1,951g、須恵器は88g出土した。石製品は手持ち砥石１点、鉄製品は釘と思われる製品が１点出土している。
〈掲載遺物〉18点掲載した。30～40が土師器の坏で、30のみ内面に黒色処理が施される。31・32・35・40あたりは還元しきれなかった個体か？それ以外は非黒色処理の坏である。38は外面に線刻がある個体、39は灯明皿に転用されている。41・42は非ロクロ成形の甕、43・44はロクロ成形の甕である。45は須恵器甕の体部破片である。46は釘とした鉄製品の欠損品、47は４面が使用される凝灰岩製の置き砥石である。
時　期　出土した遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初）に属するものと思われる。

ＲＡ030竪穴住居
遺　構（第10図、写真図版４）
〈位置・検出状況〉調査区南部の住居群のうちの１棟で、－３Ｄ24ｊグリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で確認した。
〈重複関係〉東壁とＲＡ029の西隅が重複しているが、本遺構の方が古い。検出状態ではトレンチャー痕が至る所に確認されたため、重複関係の把握にかなり手間取った。
〈規模〉2.17×2.28m　〈平面形〉隅丸方形　〈床面積〉3.42㎡
〈壁の高さ・状態〉23～36cmで、いずれも直立ぎみに立ち上がる。
〈堆積状況〉上位は黄褐色土粒を含む黒色土、下位は褐色土粒を含む黒褐色土からなる。部分的に炭化物が多く含まれる箇所がある。
〈床面〉Ⅲ層を床面とし、周辺よりもわずかに中央部付近が深い。
〈カマド〉北壁中央やや西寄りに設置される。本体部･煙道･煙出し部とも残存状況は良好であったが、燃焼部焼土が確認できなかった。
（本体部）幅は80cm前後である。断面ａラインの第4・5層を盛り上げることで袖部を作り出している。先に述べたように燃焼部焼土は確認できなかった。
（煙道・煙出し部）刳り貫き式の煙道で、底面は煙出しに向かって12度前後の角度で下る。奥壁からの長さは80cmである。煙道方位はＮ－2°－Ｗである。
〈柱穴・土坑〉カマド左横に１基確認された。Pit １は61×91cmの楕円形で深さは5cmほどである。
出土遺物（第64図、写真図版48）
〈出土状況〉土器類は、堆積土を主体としてカマド内や煙道、カマド右の床面などから出土している。土師器は1,100g、須恵器は100gほど出土した。
〈掲載遺物〉５点掲載した（48～52）。48は静止糸切り痕を残す土師器坏で、体部から口縁部まで内彎して立ち上がる。50～52はロクロ成形の甕で、52の内面はヘラナデ調整されている。53は器面にロクロ調整の痕跡が明瞭に残り、内外面の凹凸が著しい須恵器坏である。
時　期　出土した遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初）に属するものと思われる。重複関係からＲＡ029より古い住居であるが、出土した土器の特徴に差が認められないことから、両者に時期差があったとしてもわずかであろう。



第10図　RA030

ＲＡ031竪穴住居

遺　構（第11・12図、写真図版５）

〈位置・検出状況〉調査区南部にある住居群の中で最も北側の－３D18m付近に位置し、ＲＡ032とは東北東に約5mの距離を置く。Ⅲ層上面で検出した。カマドを含む本遺構の東側約1/4は第７次調査区に延びていたが、同時期に調査を行っていたため、本遺構の精査はすべて第12次調査側で行った。

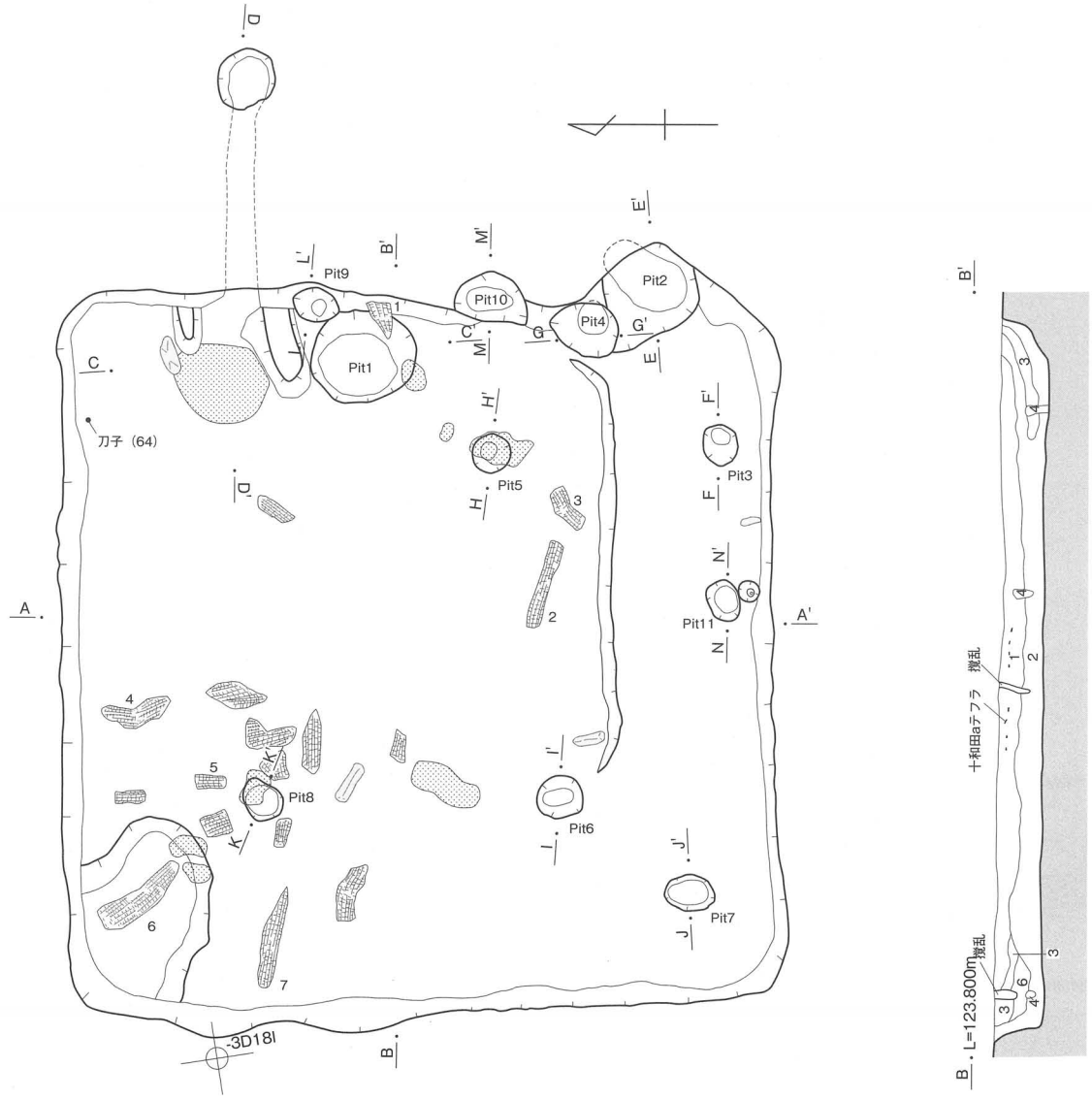
〈重複関係〉認められない。

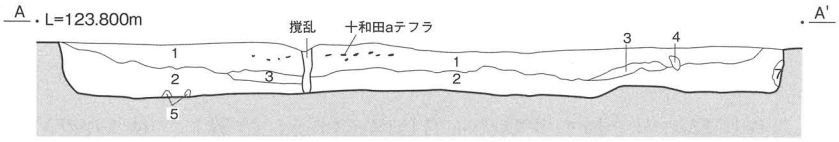
〈規模〉4.78×5.05m　〈平面形〉一部張り出しを有する方形　〈床面積〉21.46㎡

〈壁の高さ・状態〉24 ～ 35cmで、いずれも直立ぎみに立ち上がっている。

〈堆積状況〉上位は十和田ａテフラを含む黒色土、下位は黄褐色土粒を含む黒褐色土からなる自然堆積層である。火山灰は中央部に極小ブロックとして点在していた。

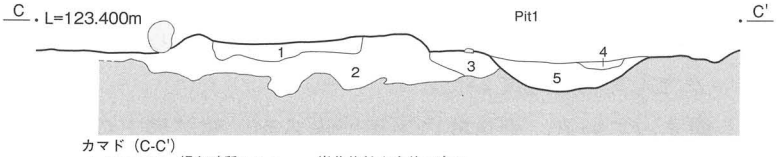
〈床面・建て替え〉Ⅲ層を床面とし、硬く締まっている。全体的に平坦であるが、建て替え拡張された痕跡（段差）を残している。その段差から判断して、拡張された方向は南側と西側、拡張前の規模は一辺が3.5 ～ 3.7mほどであったものと思われる。





堆積土（A-A'・B-B'）

1	10YR2/1	黒色シルト	層上部に十和田aテフラの極小ブロックを含む
2	10YR3/2	黒褐色シルト	黄褐色土粒を含む
3	10YR3/1	黒褐色シルト	2層よりも黒みあり
4	10YR3/2	黒褐色シルト	長いもあるいは木根痕
5	10YR4/4	褐色砂質シルト	地山崩落ブロック
6	10YR2/2	黒褐色シルト	褐色土との混合土
7	10YR4/4	褐色シルト	黒褐色土粒を含む地山崩落ブロック



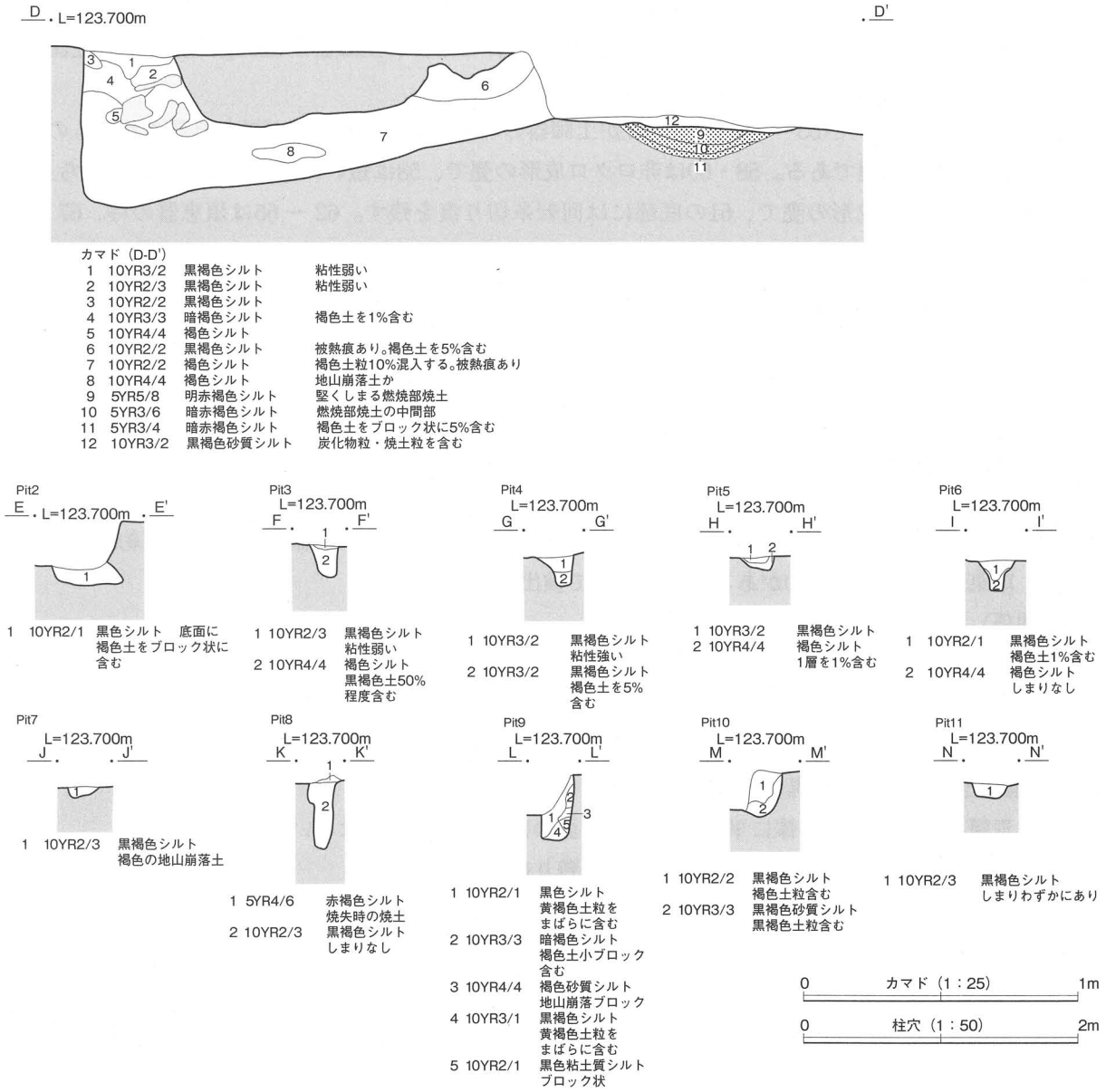
カマド（C-C'）

1	10YR4/4	褐色砂質シルト	炭化物粒を全体に含む
2	7.5YR3/2	暗褐色砂質シルト	橙色焼土粒・黒色土粒を全体に含む
3	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	貼床掘り方堆積土
4	Pit1堆積土		
5	Pit1堆積土		

0　カマド（1：25）　1m

0　平・断面（1：50）　2m

第11図　RA031（1）



第12図　RA031（2）

〈カマド〉東壁北東隅寄りに設置される。残存状況は良好である。

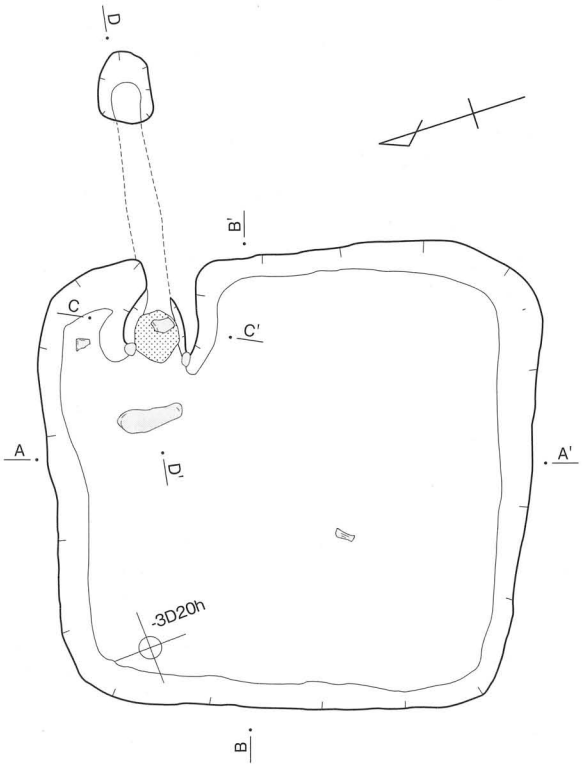
（本体部）本体の幅は約100cmである。袖部は両袖とも地山の削り出しによるが、左袖は残りが悪い。燃焼部焼土は53×64cm、厚さは最大で11cmである。焼け具合は極めて良好である。

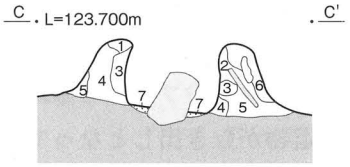
（煙道・煙出し部）刳り貫き式の煙道で、堆積土はカマド側から吹き込まれた焼土粒を含む褐色土である。煙道の底面は13度前後の角度で緩やかに下りながら煙出しに至り、奥壁からの長さは約120cmである。煙道方位はN－100°－E。煙出し部には数個の礫が落ちこんでいるが、煙出し上部の施設に伴うものであるかは判断できない。

〈柱穴・土坑〉柱穴状のピットは８個確認された。位置と深さからPit ４・６～８の４個が主柱穴となる可能性がある。土坑はカマド右にPit １、拡張部の南東隅にPit ２の２基が確認された。いずれも貯蔵用と考えられる。

出土遺物（第64・65図、写真図版49・50）
〈出土状況〉土器類は、堆積土やカマド内、貯蔵穴を主体として、土師器が1,293g、須恵器が1,226g出土している。この他には、鉄製品（刀子）が１点出土している。
〈掲載遺物〉17点掲載した(53～69)。53～57が土師器の坏である。53は内面が黒色処理されるもので、それ以外は非黒色処理である。58・60は非ロクロ成形の甕で、58は短い口縁部が直立気味に立ち上がる。59・61はロクロ成形の甕で、61の底部には回転糸切り痕を残す。62～66は須恵器の坏、67・68は同じく須恵器の壷である。67は住居南壁の床面から正立状態で出土したもので、焼成後にあけられた孔を１個、肩部に残す。色調は若干赤味を帯びている。頸部より上の破片は見つかっていない。69は5分割になった状態で見つかった刀子で、最先端部のみを失っている。
時　期　出土した遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初）に属するものと思われる。

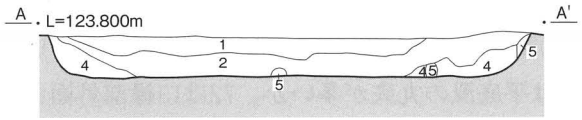
ＲＡ032竪穴住居
遺　構（第13図、写真図版６）
〈位置・検出状況〉調査区南部の住居群で最も西側の－３D20ｈ付近に位置する。東北東約5mにはＲＡ031、南東5.5mにはＲＡ030がある。Ⅲ層上面で検出した。
〈重複関係〉認められない。
〈規模〉3.03×3.27m　〈平面形〉不整方形　〈床面積〉7.16㎡
〈壁の高さ・状態〉27～30cm程度で、いずれも外傾しながら立ち上がる。
〈堆積状況〉黒褐色土が主体となるが、黄褐色土粒などの混入の割合で上下２層に分層できた。それ以前の堆積土は壁際にある黒色土である。
〈床面〉Ⅲ層を床面とし、全体に平坦である。床面の硬さはさほどではない。
〈カマド〉東壁北東隅寄りに設置される。全体に残りは良い。
（本体部）幅は最大で75cmと小さめである。左袖は地山の削り出し、右の袖は黒色のシルト質土と礫で構築されている。燃焼部焼土は28～33cmの範囲で形成され、厚さは最大で2cm、焼け具合は良好である。燃焼部の奥壁側には支脚の礫が一つ置かれている。
（煙道・煙出し部）刳り貫き式の煙道である。堆積土は焼土粒を含む黒褐色土からなる。底面は煙出しに向かって15度前後の角度で緩やかに下る。奥壁からの長さは約110cmである。煙道方位はＮ－103°－Ｅである。煙出し部には黒褐色土と暗褐色土が堆積し、壁は外傾して立ち上がっている。底面は煙道のそれよりも10cm前後深く掘り込まれている。
〈柱穴・土坑〉いずれも確認されなかった。
出土遺物（第65図、写真図版49）
〈出土状況〉堆積土から土師器78gと鉄鐸１点が出土したのみである。
〈掲載遺物〉２点掲載した（70・71）。70は赤焼きの坏の破片、71は鉄鐸と思われる筒形の鉄製品である。筒の部分は全周せず、数ミリの隙間を有する。内部には振り子状の可動部があり、上端部分は鈎状に丸みをもっていたものと思われる。錫杖状鉄製品井上分類Ｉa類（井上2002）に付属する鉄鐸か？
時　期　出土した遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初）に属するものと思われる。

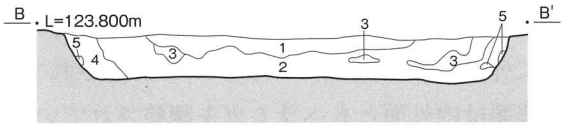




カマド（C-C'）

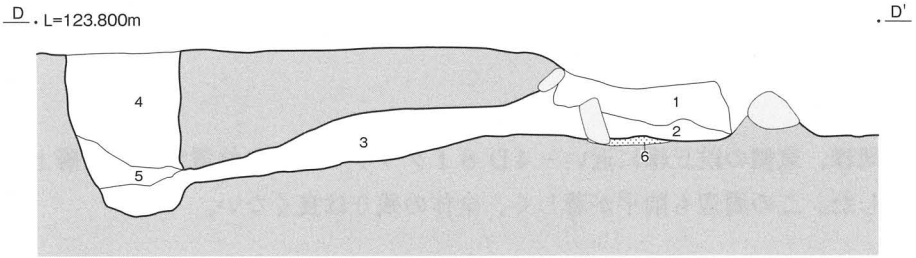
1	10YR3/3	暗褐色砂質シルト	黒褐色土粒を全体に含む
2	7.5YR3/4	暗褐色砂質シルト	焼土ブロック
3	7.5YR4/4	褐色砂質シルト	焼けの悪い焼土粒含む
4	10YR4/4	褐色砂質シルト	袖部構築土（地山）
5	10YR2/1	黒色粘土質シルト	袖部構築土の一部
6	10YR4/4	褐色砂質シルト	地山に似る
7	7.5YR3/4	褐色シルト	燃焼部焼土で焼けは良好





堆積土（A-A'・B-B'）

1	10YR2/2	黒褐色シルト	わずかに褐色土粒含む
2	10YR2/2	黒褐色シルト	褐色および黄褐色を全体に含む
3	10YR2/1	黒色シルト	十和田aテフラの極小ブロック含む
4	10YR2/1	黒色シルト	黄褐色土粒をまばらに含む
5	10YR3/3	暗褐色粘土質シルト	地山崩落ブロック



カマド（D-D'）

1	10YR3/1	黒褐色シルト	褐色土を5%含む
2	10YR3/4	暗褐色シルト	黒褐色土・赤褐色土を含む
3	10YR3/2	黒褐色シルト	焼土粒を全体に含む
4	10YR3/2	黒褐色粘土質シルト	黄褐色土小ブロックを含む
5	10YR3/3	暗褐色粘土質シルト	砂混じり
6	7.5YR3/4	褐色シルト	燃焼部焼土

0　カマド（1：25）　1m

0　平・断面（1：50）　2m

第13図　RA032

ＲＡ033竪穴住居

遺　構（第14図、写真図版７）

〈位置・検出状況〉遺跡範囲の東側の境界となる段丘縁に近い－４D11ｊ・－４D12ｊ付近に位置する。Ⅲ層上面で黒褐色土のプランを確認した。この周辺は大きく削平を受けており、表土を除去しただけで数個体の遺物がむき出しとなってしまった。　〈重複関係〉認められない。

〈規模〉2.25×2.35m　〈平面形〉不整方形　〈床面積〉4.23㎡

〈壁の高さ・状態〉３～10cmほど残存する。上述のとおり、遺構上部は削られている。

〈堆積状況〉黄褐色土粒を含む黒褐色土で、自然堆積と思われる。

〈床面〉Ⅲ層を床面とする。細かな凹凸が見られるが全体的に平坦である。

〈カマド〉北西壁のわずか西寄りに設置される。袖部・燃焼部焼土、煙道・煙出し部が残る。

（本体部）左右の袖は暗褐色土や黒褐色土などのシルト質土を被覆して構築されている。燃焼部焼土は25×42cmの長方形に形成され、厚さは最大で4cmである。支脚等は見られない。

（煙道・煙出し部）いずれも上部が削られているため、構造等は不明である。煙道の底面は14度前後で緩やかに上り煙出し部に続く。このように煙道底面が立ち上がるものは他の住居には見られないので、煙道の構造は掘り込み式の可能性がある。壁からの長さは90cmで、方位はＮ－33°－Ｗである。

〈柱穴・土坑〉いずれも検出されなかった。

出土遺物（第65～67図、写真図版49～51）

〈出土状況〉図示した土師器の坏４個体、甕４個体（総重量7,170ｇ）と、堆積土から細片が数ｇ出土した。ほぼ完形に近いこの土器群は、地表に近い部分が掘削により失われていた。

〈掲載遺物〉10点掲載した（72～81）。72～75は４枚が重なって出土した非ロクロ成形の坏で、いずれも内外面が丁寧にヘラミガキ調整されている。底部は平底風の丸底が多いか。72は口縁部外面に横ナデされた痕跡を残す。体部には明らかな段は認められない。73～75は体部外面に比較的明瞭な段を有する。74のみ底部までヘラミガキ調整が及んでいる。80は片口である。形状的には口縁部と体部の境は不明瞭であるが、器面調整の違いではきれいに分かれる。底部はヘラケズリ調整されている。81は無底式の甑と思われ、体部上半部に段をもつ。器面は内外面ともヘラミガキ調整されている。76・77は長胴甕、78・79はいわゆる球胴甕で、いずれの個体も口縁部は横ナデ、体部はヘラナデ調整を主体とする。この２点は、最大径自体とその高さが異なるため、見た目の趣は多少異なっている。

時　期　出土遺物から、奈良時代（８世紀中頃～後半か）に属すると思われる。

ＲＡ034竪穴住居

遺　構（第15図、写真図版８）

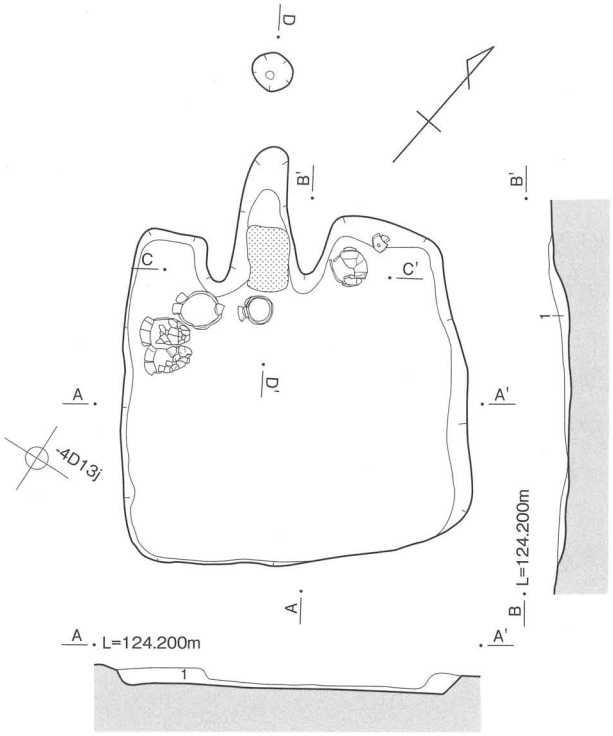
〈位置・検出状況〉ＲＡ033同様、東側の段丘縁に近い－４Ｄ８ｆグリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で黒褐色土のプランを確認した。この周辺も削平が著しく、全体の残りは良くない。

〈重複関係〉認められない。

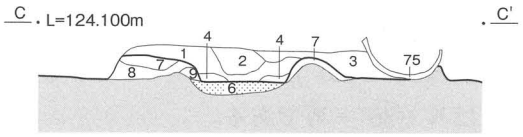
〈規模〉2.88×3.03m　〈平面形〉不整隅丸方形　〈床面積〉7.73㎡

〈壁の高さ・状態〉３～10cmほどである。これも遺構上部はかなり削られている。

〈堆積状況〉黄褐色土粒を含む黒褐色土で、自然堆積と思われる。北側のみ褐色土が黒褐色土より先に堆積したようである。

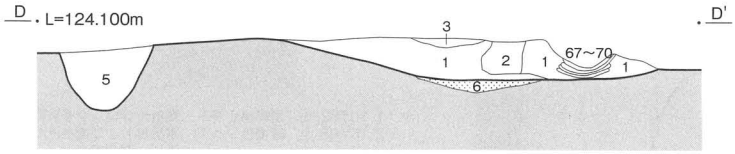


堆積土（A-A'・B-B'）
1 10YR2/2　黒褐色シルト　褐色土をブロック状に5%含む



カマド（C-C'・D-D'）

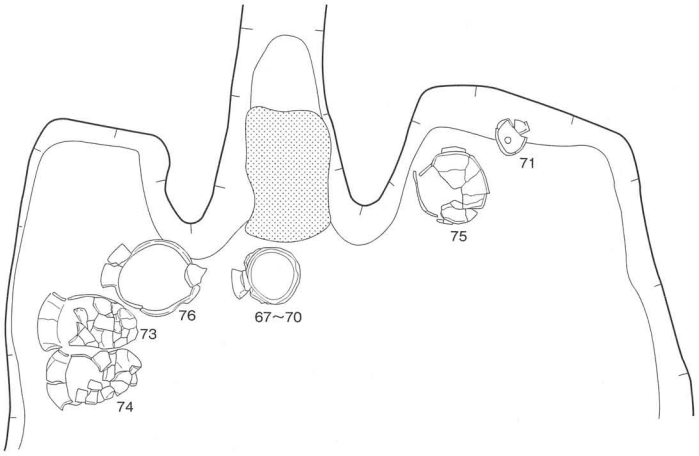
1	10YR3/3	暗褐色シルト	褐色土30%・赤褐色土5%含む
2	10YR2/2	黒褐色シルト	
3	10YR3/3	暗褐色シルト	黒褐色土・褐色土を含む
4	5YR3/6	暗赤褐色シルト	黒色土を5%含む
5	10YR2/2	黒褐色シルト	褐色土粒を全体に含む
6	7.5YR3/4	暗褐色シルト	燃焼部と捉えた焼土で焼けは良くない
7	10YR2/1	黒色シルト	袖部構築土
8	7.5YR3/3	暗褐色シルト	焼土粒をわずかに含む
9	10YR3/2	黒褐色シルト	黄褐色土粒を全体に含む



0　カマド（1：25）　1m

0　平・断面（1：50）　2m

カマド付近の遺物出土状況

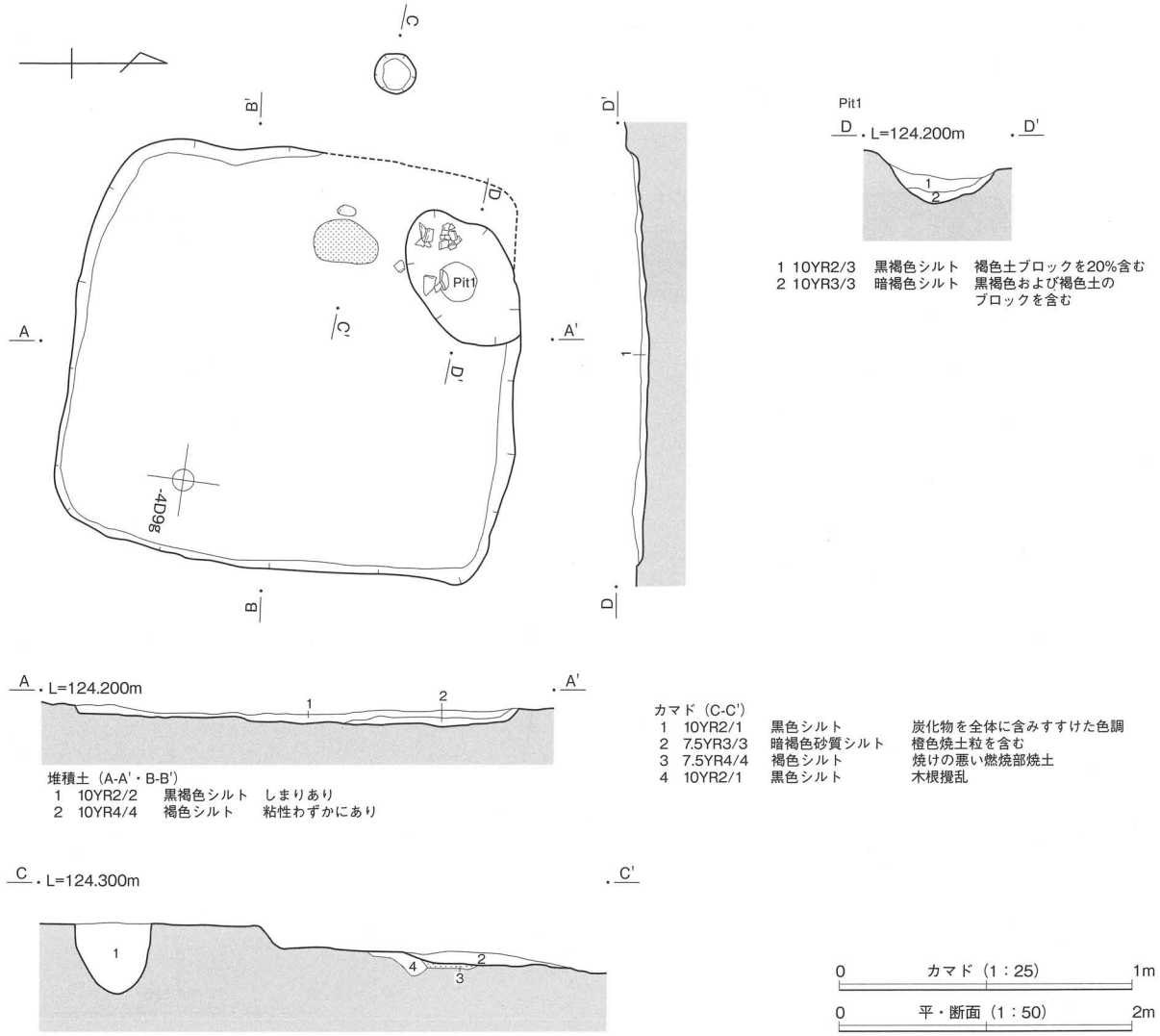


0　（1：25）　1m

第14図　RA033

〈床面〉Ⅲ層を床面とする。細かな凹凸が見られる。
〈カマド〉北壁のわずか北寄りに設置される。燃焼部焼土と支脚の可能性がある礫１個のみ残存する。
（本体部）燃焼部焼土は27×43cmほどの不整円形に形成される。厚さは2cmで焼けは良くない。
（煙道・煙出し部）削平を受けており、煙出しの一部が残るだけである。その深さは25cmほどである。方位はN－85°－Wである。
〈柱穴・土坑〉カマド左脇に長楕円形プランのPit １がある。大きさは65×105cm、深さは20cmほどで、堆積土に遺物を若干含んでいた。貯蔵に関するものかと思われる。
出土遺物（第67図、写真図版51）
〈出土状況〉床面およびPit １から非ロクロ成形の土師器が1,150g出土している。
〈掲載遺物〉２点掲載した（82・83）。２点とも床面から出土した長胴甕で、いずれも最大径は口縁部にあると思われる。83は若干下膨れのタイプである。器面調整は、内外面とも口縁部が横ナデ後に一部へラミガキ、体部にも同様の調整が施されている。
時　期　出土遺物から、奈良時代（８世紀中頃～後半か）に属するものと思われる。

（濱田）



第15図　RA034

ＲＡ035竪穴住居

遺　構（第16・17図、写真図版９）

〈位置・検出状況〉調査区東側住居群の西端、－３Ｄ21ａ～23ｃグリッドに位置する。周囲はⅢ層下部～Ⅳ層上面で、一部耕作痕等で黒土が点々と残る状態であった。検出されたプランは、上部が崩れているせいか不整形であり、炭化物や焼土粒の出土はなく、煙出しの位置も不明瞭であった。

〈精査状況〉明瞭な柱穴が床面に１つしか見つからなかったため、住居の周囲も綿密に捜したが、やはり見つけることはできなかった。カマド東西断面（Ｃライン）、Ｃ側の煙出しの上場、おそらく測り間違いのため、断面図と平面図合わない。上面に露出している東西両側の石も、おそらく高低差があって測りにくかったため合わない。焼土（焚き口）の位置も、平面図作成時には第11層上面を火床面と考え、さらにそのＣ側が下に潜り込んでいたため合わない。カマド南北断面（Ｄライン）、おそらく断面図作成時にセクション・ポイントを垂直ではなくずれて斜めに地面に落としたため、Ｄ′の位置合わない。焼土（焚き口）の位置も、理由ははっきりしないが、合わない。

〈規模〉約3.4×3.2m　〈平面形〉隅丸方形　〈床面積〉10.70㎡

〈壁の高さ・状態〉検出面から10cmくらい下までⅢ層、その下は砂質のⅣ層である。

〈堆積状況〉１層と２～３層と４層の、大きく三つに分けられ、上半は１層、下半分の大部分は２～３層が占め、４層の黒土はごく僅かで西側の壁際に認められた。１層は黒土で、下部に灰白色火山灰がブロック状に広がる。下部は、黒土と褐色土の混合土で、３層の方が褐色土の割合が多い。ただし地点によってその割合は異なり、明瞭に２層と分けられるのはカマド南側のベルト付近のみ。３層はカマドのある東壁方向から供給されたようである。住居内への堆積が自然か人為か見極めるのは容易ではないが、２～３層が掘削された土であることは間違いないであろう。

土層観察用ベルトを残しての掘削の際には、上、中、下層の３層に分けて遺物の取り上げを行っている。ベルトに沿ってトレンチを入れた結果、火山灰の上の黒土（上層）、火山灰を含む中層、その下の黄褐色土を顕著に含む下層に分かれるように見えたためであるが、その後の観察から火山灰は点々と存在してその周囲の土も上の層とは顕著な違いがなく、上層と下層は分けられないことが分かった。したがって、上～中層が１層、下層が２～４層に相当する。

〈床面〉砂質のⅣ層の掘り方の上に同じく砂質のⅣ層を貼っている。第16図に示したように、カマド側3/4の範囲は土間状に非常に硬く締まるが、貼った土は変わらない。掘り方は、該期に一般的な凹凸の著しい“うねうね掘り方”である（カマド袖下にも認められた）。

〈カマド〉東壁の北寄りに設置される。

（本体部）焚き口は、竪穴の掘り方の上面に砂質のⅣ層を貼り、壁に掘られた煙道に向かって上がるように傾斜が付けられている。規模が約50×30cm、厚さ約10cmの焼土が形成されているが（南東側、掘りすぎのため、規模不正確）、形成面が砂のためか、硬く締まらない。上面に拳大より二周りほど大きい礫が認められたが、火は受けていないようで、支脚ではなく、袖に含まれていた礫が転がったものと思われる。袖部は、原形をとどめず砂質のⅣ層の再堆積土と焼土の残骸、拳大より大きい礫（２点？）、土器小片が認められるのみであった。

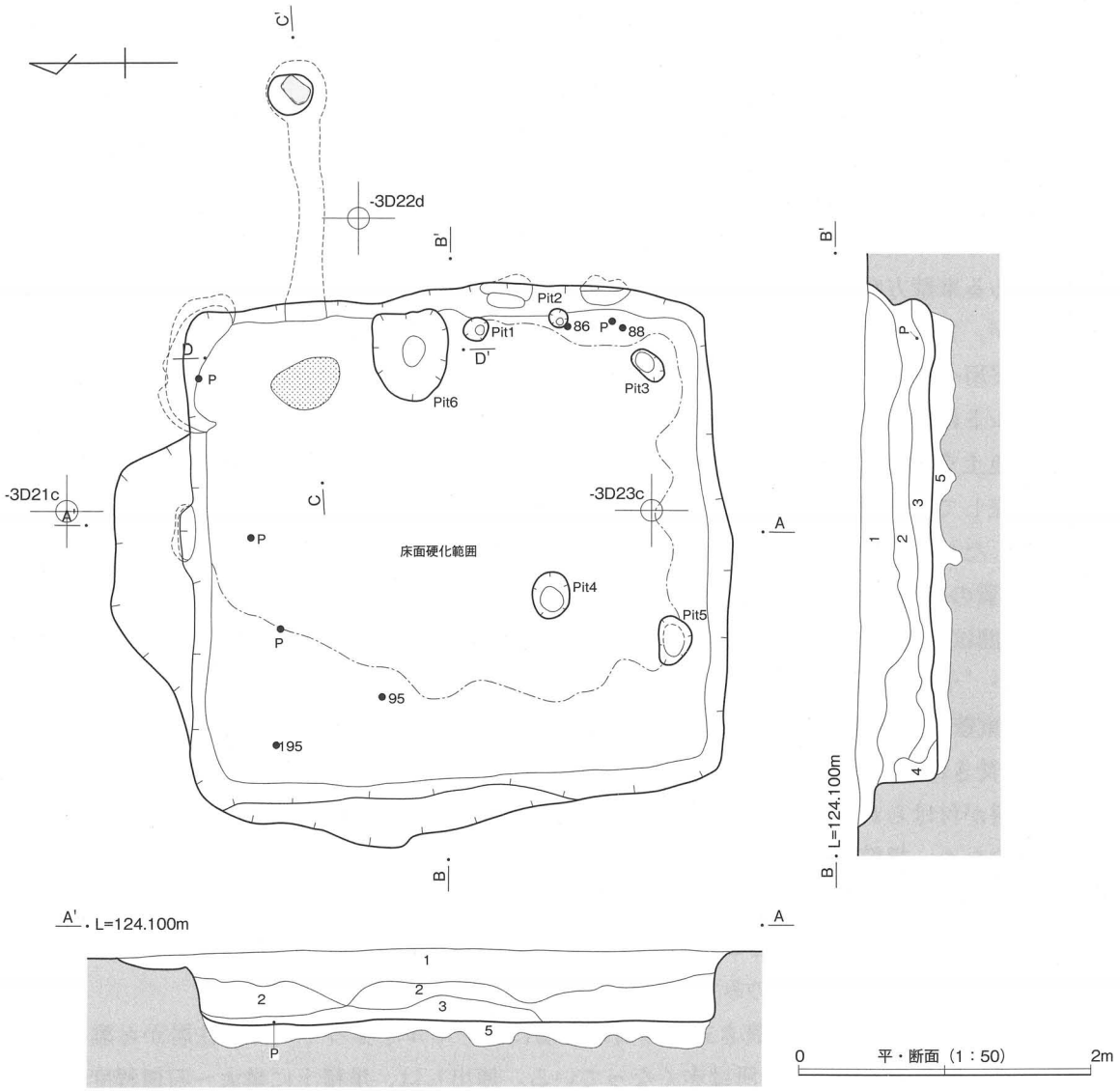
（煙道・煙出し）煙道は、刳り貫き式で砂質のⅣ層にトンネルを穿っていて、住居から離れるに従って深くなり、熱を強く受けた場所は赤くなっている。煙出しは、堆積土に拳大～石皿程度の大きさの礫が10点認められ（石皿大のもの１点を含めた５点に、砥石として使われたと推測される凹面が見られる）、拳大の礫１点が赤みを帯びていたが、明瞭に火を受けたものはなかった。煙道の堆積土は、比較的単純な構成で、人為による埋め戻しの可能性を推測させる。袖部の堆積土は、竪穴そのものと

同じだが３層が大部分を占める。

〈柱穴・土坑〉住居内外含めて丹念に検出し、あやしいものも全て断ち割り、床面を掘り方まで全面下げたが、柱穴らしいものは中央から南西に寄った１つしか認められなかった。床からの深さは約40cm、底面は周囲が砂質であるのに対して径10cmほどの範囲がテカテカ光ってグライ化している。堆積土は、上部10cmほどに椀状に10YR2/1黒土（砂質シルト、Ⅳ層粒子含む）が堆積し、下位には10YR4/4褐色地に霜降り状の10YR2/1黒～10YR4/1褐灰色土が混入する層である（シルト、粘性あり、柱の掘り方埋め土？）。

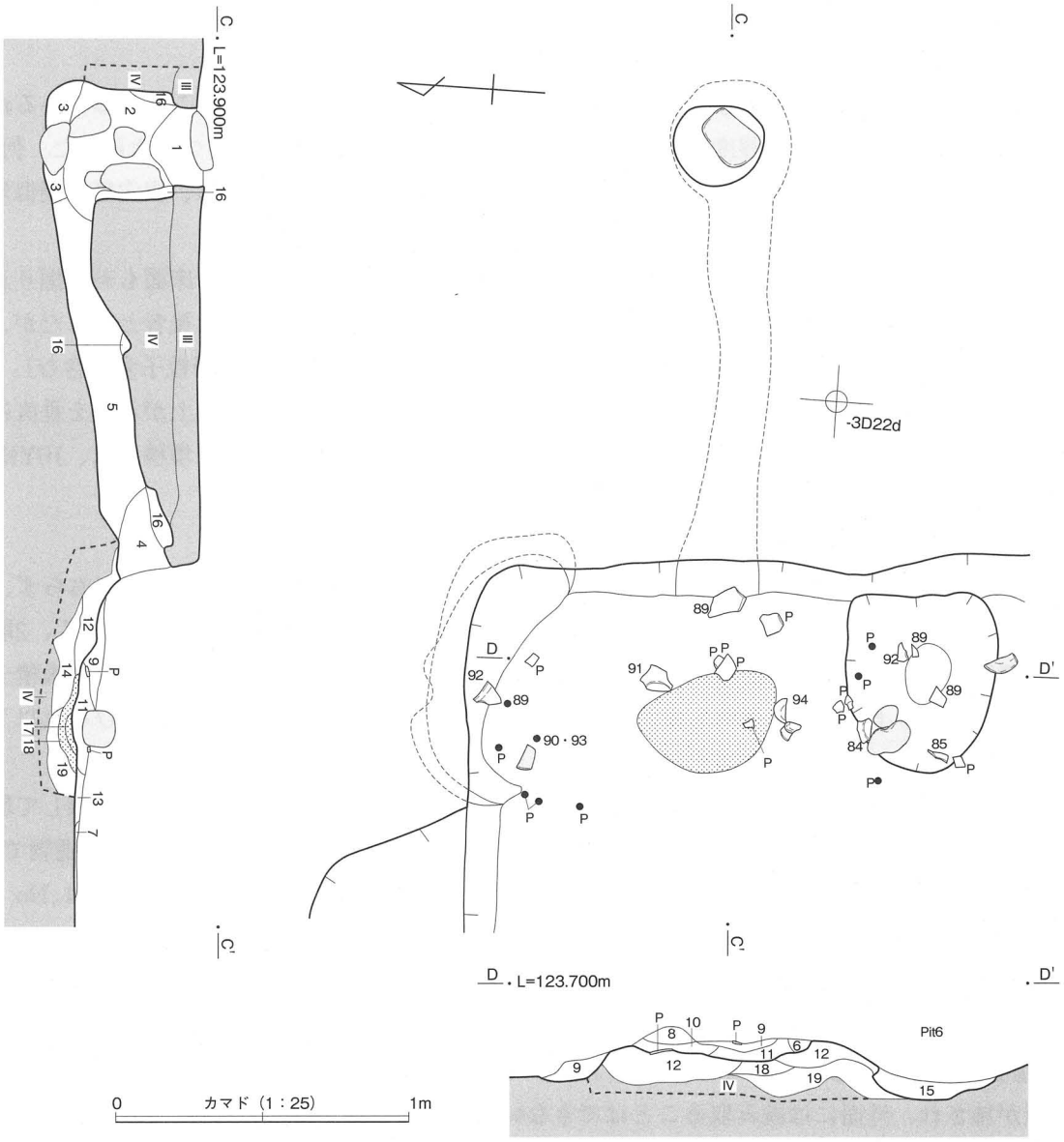
この柱穴の南西側にも、柱穴状の凹みが認められたが、深さ10cm程度の浅いもので、床面の凹み程度のものである。堆積土は10YR4/6褐色地に霜降り状に10YR4/1褐灰色土が入るもので（粘土質シルト、粘性あり）、住居掘り方埋土状である。

この他、東壁南半分に小穴が３つ認められた。北側の２つは、形も堆積土もほぼ同じで、堆積土は



堆積土（A-A'・B-B'）
1　10YR2/1　黒色シルト　Ⅱ層の再堆積　層下部中心に所々灰白色火山灰をブロック状に含み、上面はより黒く所々根撹乱で褐色土のブロック入る
2　10YR2/1黒色地に10YR4/6褐色の斑　シルト　Ⅱ層の再堆積にⅣ層粒子多く含む
3　10YR2/1黒色土と10YR4/6褐色土の混土　シルト　粘性ややあり　Ⅳ層ブロック粒子多く含むが、地点によって異なる
4　10YR1.7/1　黒色シルト　粘性ややあり　もろい　Ⅱ層の再堆積にⅣ層粒子含む
5　10YR5/6黄褐色地に霜降り状に10YR3/1黒褐色混じる　砂質　黒褐色土の入り方は地点により異なる　掘り方堆積土

第16図　RA035（1）



カマド（C-C'・D-D'）
1　10YR4/3にぶい黄褐色土と10YR3/1黒褐色土の混土　砂質　Ⅳ層粒子ブロック多く含む　Ⅲ～Ⅳ層の変色した層
2　10YR3/1　黒褐色砂質シルト　もろい　Ⅳ層ブロック含む　大きな礫多く含む
3　10YR2/1　黒色砂質シルト　もろい　Ⅳ層粒子、焼土粒、大きな礫含む
4　10YR2/1　黒色シルト　Ⅳ層粒子含む
5　10YR3/1黒褐色地に10YR4/4褐色土の斑（霜降り状に近い）　シルトⅣ層粒子多く含む
6　10YR3/1　黒褐色砂質シルト　灰？含む　根による攪乱
7　10YR3/1　黒褐色　砂質　2mm程度の炭化物含む　下に硬い床面
8　10YR4/4　褐色　砂質　Ⅳ層の再堆積で、カマド袖の崩落土と思われる
9　10YR3/3暗褐色～7.5YR3/1黒褐色　砂質　焼土粒　灰？含む　カマド袖の崩落土と思われる
10　7.5YR3/3　暗褐色砂質シルト　もろい　焼土粒多い　カマド天井の崩落土と思われる
11　5YR4/4　にぶい赤褐色砂質シルト　焼土　焼土粒が二次堆積した層か
12　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト　硬く締まる　Ⅳ層の再堆積で、掘り方堆積土
13　7.5YR3/2　黒褐色砂質シルト　焼土粒含む
14　10YR3/1　黒褐色シルト　掘り方堆積土
15　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　炭化物含む
16　7.5YR4/4　褐色　砂質　Ⅳ層が火を受けて変色した層
17　5YR4/6　赤褐色　砂質　焼土（火床面か）
18　5YR3/3　暗褐色　砂質　粘性あり　Ⅳ層（砂）が火を受けて変化したものらしい
19　10YR5/6黄褐色地に縞状に10YR4/1褐灰色入る　砂質　掘り方堆積土

第17図　RA035（2）

10YR3/1黒褐色、砂質シルトでややもろく、Ⅳ層砂粒子を多く含むものである。南側の１つは、形・堆積土ともやや異なり、隣の１つに向かって傾斜するような形で、10YR3/1黒褐色地に霜降り状に10YR3/4褐色土、砂質シルトで硬く締まる。

以上のように、本住居は、柱で上屋を支えるのは不可能と思われる。前述の３つの小穴、後述の壁に認められた３つの穴、さらに特徴的に垂直に近く立ち上がる壁や、床面の硬化範囲が北東隅に片寄ることからその外側に何かがあった可能性があることなどから、壁立もしくはそれに近い施設で上屋

を支えていたものと考えられる。周溝が認められず、また壁および壁際の床が特に硬化しているわけではないので、単純に板材などで支えていたのではないようだが。

〈その他の付属施設〉カマドの北側脇、竪穴北西隅に棚状施設がある。また、これと似ているが、壁に洞窟状に掘り込まれた柱穴程度の大きさの穴が、東壁に２、北壁に１、計３つ認められた。何れも、黄褐色土中に黒土と、明瞭に検出され、底が直線的に明確に存在することから、根穴等の疑似現象ではないと思われる。

棚状施設は、後者とは形も堆積土も異なり、こちらは断面形が椀に近い形で床面も若干掘り込んでいる。ただし、特に硬く締まるということもない。堆積土は、基本的な特徴は後者と同じだが、顕著に黒くⅣ層粒子を含む、10YR2/1黒～10YR3/1黒褐色土（シルト、細かいⅣ層粒子多く含む）。

壁に洞窟状に掘り込まれた柱穴程度の大きさの穴は、断面形が、垂直に立ち上がる壁を垂直に掘り込んで底を斜辺とする直角三角形状を呈し、床面まで掘り込まれてはいない。堆積土は、10YR2/1黒～10YR3/1黒褐色土に霜降り状に10YR4/4褐色土（シルト）。

出土遺物（第67・68図、写真図版52）

〈出土状況〉土師器は1,155ｇ、須恵器は194ｇ出土した。上半層にはほとんど含まれておらず、さらにカマドを中心にした竪穴東半分に著しく偏る。ベルト除去の際、１～2層の出土はなく、2層と思われた遺物も出土状況から3層上面と考えた方が良さそうであったことから、上～中層（堆積土の項参照）として取り上げられた遺物も僅かにあるが、実際には２層以下、特に３層およびそれ以下（カマド崩落土など）からほとんど出土していると考えて良いようである。

床面および床面直上（３層）出土遺物については、原則として番号を付けて図面に記録して取り上げた（No. １～20、以下No.○は取り上げ番号）。No.21以下は、原則としてカマド崩落土下の遺物である。No.19が鉄滓（写真図版52－195）である以外は、何れも土器の小破片で、比較的大きなものは、No. １（坏底部）、No.11（甕胴部）、No. ８（坏底部）程度である。カマド崩落土上およびその周囲のNo. ６～15は、基本的に竪穴東壁上から流れ込んだような状態で出土している。

（金子）

〈掲載遺物〉15点掲載した（84～97・195）。84～88はロクロ成形の土師器坏である。84は内面に黒色処理が施され、外面には読み取ることはできないが墨書の痕跡が認められる。85～88は非黒色処理坏で、比較的直線的に立ち上がるタイプ（85・86）と丸みをもって立ち上がるタイプ（87・88）がある。89～91は非ロクロ成形の土師器甕である。外面にケズリ、内面にハケないしヘラナデ調整が施されている。底部は91がケズリ調整、90は砂底である。92・93はロクロ成形の土師器甕である。いずれも体部上半～中央に最大径をもつタイプで、口縁部は「く」の字状に屈曲する単純口縁である。94・95はロクロ成形の須恵器坏で、内外面ともにロクロナデ調整が施される。96は須恵器長頸瓶の口縁部で、外面は横ナデ調整によって段が形成される。97は凝灰岩製の砥石である。横断面形は三角形で残存部分全面に擦痕が認められる。

時　期　出土した遺物から、平安時代（９世紀後半代）と考えられる。（村田）

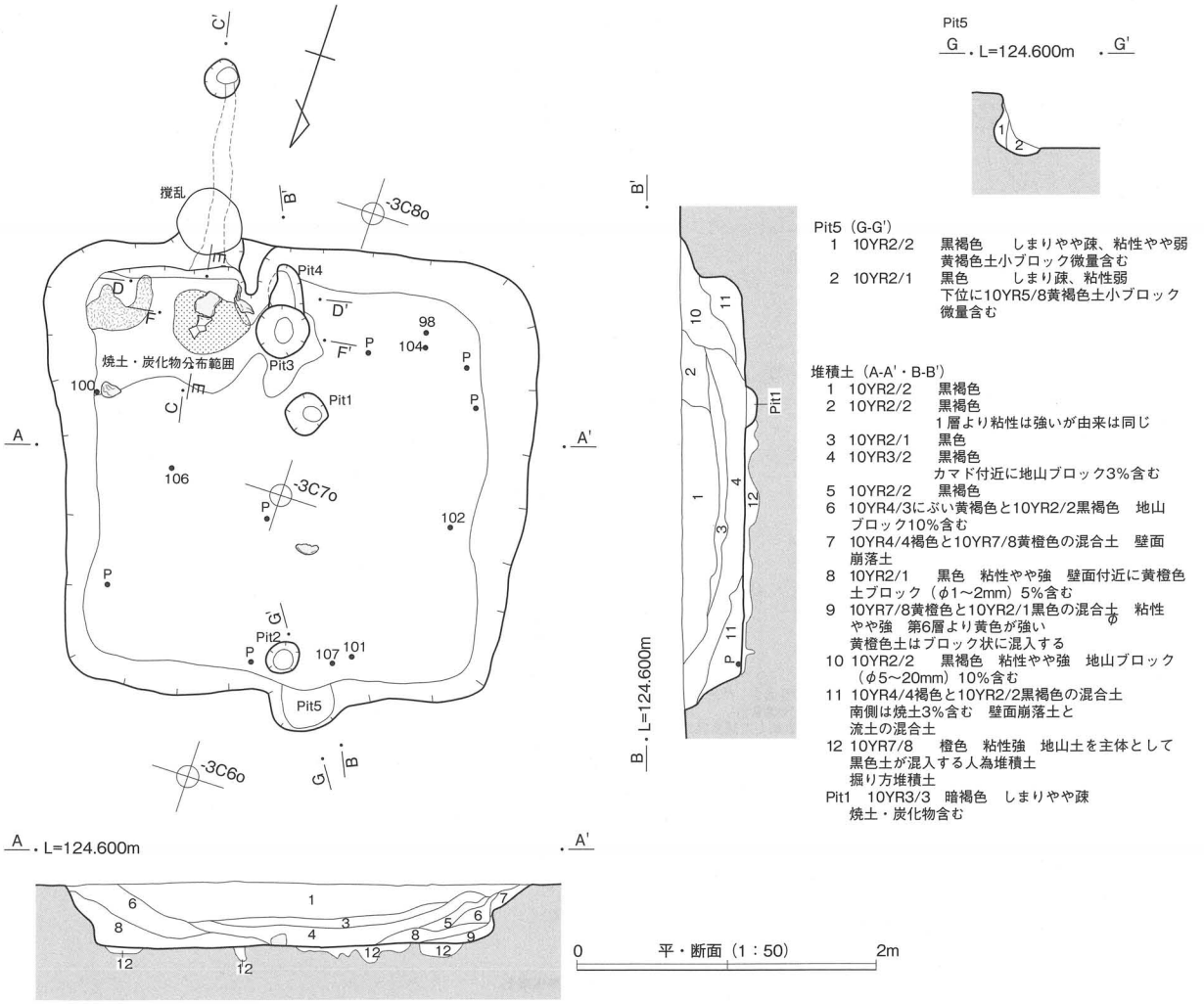
ＲＡ036竪穴住居

遺　構（第18・19図、写真図版10）

〈位置・検出状況〉調査区中央の住居群のうちの１棟で、－３Ｃ７ｏグリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で検出した。〈重複関係〉認められない。

〈規模〉南北2.6m×東西2.5～2.6m　〈平面形〉南壁より北壁が短い台形状　〈床面積〉6.77㎡

〈壁の高さ・状態〉42cm前後で、崩落のため上部はハの字状に外方に開く。
〈堆積状況〉堆積土は11層に細分した。黒褐色土を基調としているが、下位層ほど壁面崩落土の混入が多いため色調が明るくなる。カマド付近の堆積土には燃焼時とは異なる段階で形成された焼土や炭化物が多く混入している。明確に形状を把握できるものは無かったが、本住居は焼失あるいはカマド周辺のみ火を受けている可能性がある。
〈床面〉地山及び第12層を床面とする。第12層は分布範囲が狭いため貼床とはいい難いが、性質から床面を水平に整えるために人為的に埋めた土と考えられる。また、カマド周辺は被熱の影響で黒く変色している。
〈カマド〉南壁南東隅に設置される。東側の袖が失われていたが、残存状況は良好である。
（本体部）袖は礫を芯材とし、地山由来の粘質土などを利用して構築されており、被熱の影響で表面はもろく崩れやすい。東袖がないため推定になるが幅は50～60cmと考えられる。燃焼部焼土の範囲は50×40cm、被熱深度は20cm程度で非常によく焼けている。
（煙道・煙出し部）刳り貫き式の煙道で、方位はN－165°－Eである。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色土で構成される。燃焼部との境界でほぼ垂直に18cm程度立ち上がるが、そこから煙出しに向かって約３度の角度で緩やかに下っている。煙出しはほぼ垂直に立ち上がるが、中位でわずかにオーバーハングする。煙出し内は粒径の小さい地山ブロックを含む黒褐色土が堆積しており、土器片も若干混入する。

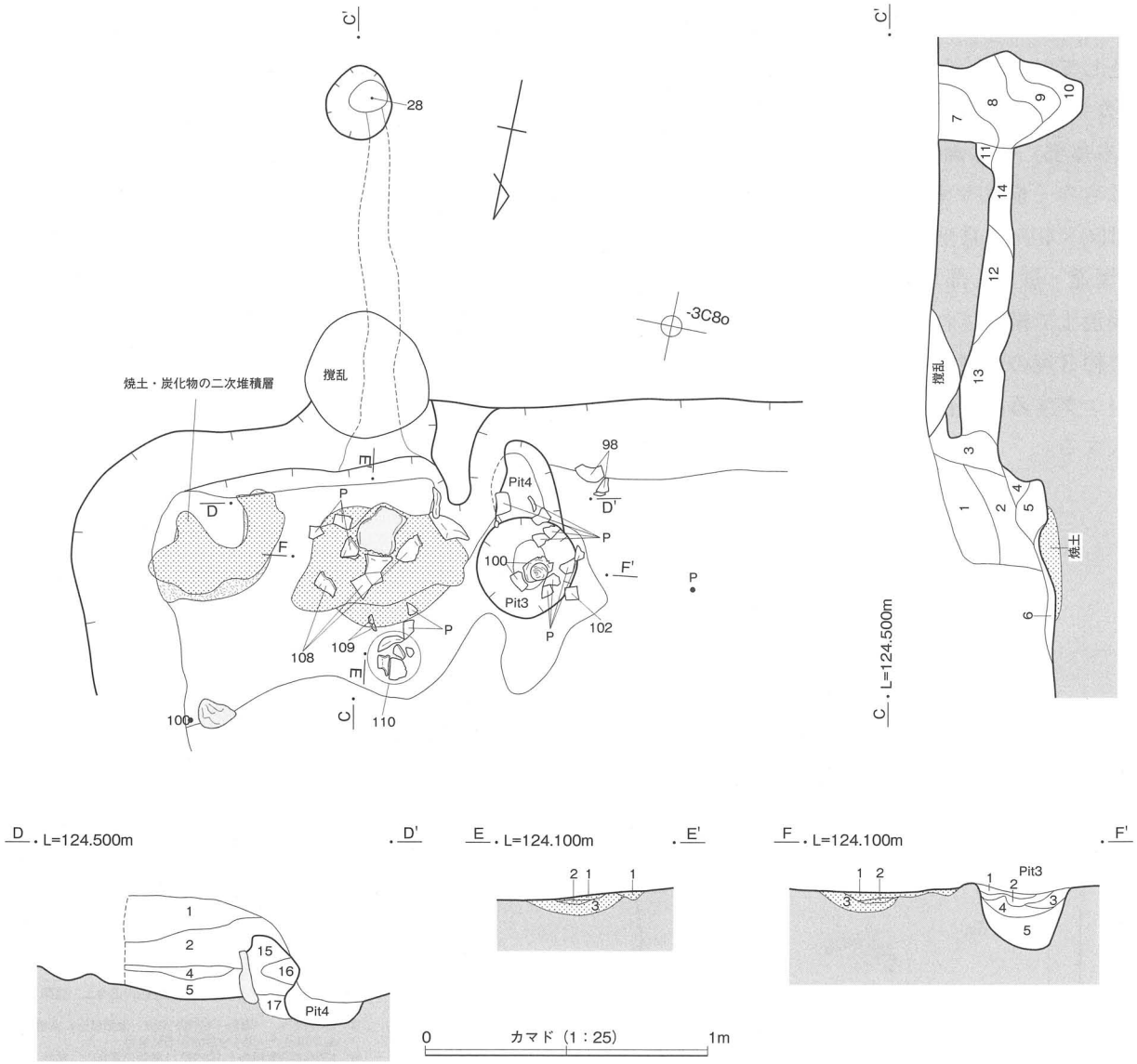


第18図　RA036（1）

〈柱穴・土坑〉５個確認された。このうちPit １・２は柱穴、Pit ３・４は貯蔵に関わる土坑の役割をしていたものと考えられる。また、Pit ５は袋状に膨らむ形状のものでPit ３・４と同様の役割をもった施設とも考えられるが、カマドと対峙する位置に設置されているため判然としない。

出土遺物（第68～70図、写真図版52・53）

〈出土状況〉カマド周辺の床面直上・堆積土下位とPit ３を中心に土師器が3,580ｇ、須恵器が166g出



カマド・煙道（C-C'・D-D'）

1	10YR2/2	黒褐色	＝堆積土断面1層
2	10YR3/2	黒褐色	地山ブロックと焼土粒それぞれ10%含む　ややしまり弱い
3	10YR4/4	褐色	地山ブロック・焼土粒をそれぞれ10%含む
4	2.5YR5/8	明赤褐色	しまりやや密　カマド側から流れ出した焼土の二次堆積層　黒色土が層状に混入
5	10YR2/2	黒褐色	地山ブロック20%、焼土粒10%含む
6	2.5YR4/6	赤褐色	粘性やや強　焼土ブロック30%含む
7	10YR3/2	黒褐色	しまりやや密、粘性やや強　地山ブロック（φ1mm）5%含む
8	10YR3/2	黒褐色	しまりやや密、粘性やや強　地山ブロック（φ1mm）5%、大型地山ブロック20%含む
9	10YR2/2	黒褐色	しまりやや疎　地山ブロック（φ10mm）3%含む
10	10YR6/4	にぶい黄橙色	粘性やや強　黒色土20%含む　壁面崩落土
11	10YR3/2	黒褐色	8層より色調暗い
12	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘性やや弱　大型の地山ブロック含む
13	10YR4/2	灰黄褐色	粘性やや強　地山ブロック・焼土粒（φ1～2mm）それぞれ10%含む
14	10YR6/6	明黄褐色	しまりやや疎　煙（被熱）の影響による地山の変色層
15	10YR7/6	明黄褐色	粘質土しまりやや密、粘性やや強　地山を利用した袖構築土で混和物はほとんど含まない
16	10YR3/2	黒褐色	しまりやや密、粘性やや強　地山ブロック（φ1～2mm）20%含む　袖構築土
17	10YR7/6	明黄褐色粘質土	しまりやや密、粘性やや強　5層と同じ性質の掘り方堆積土

Pit4

10YR3/2	黒褐色	粘性弱　黄褐色土ブロック多く含む

焼土（E-E'・F-F'）

1	2.5YR4/6	赤褐色	しまりやや疎　炭化物・焼土ブロックそれぞれ10%含む　燃焼面
2	2.5YR6/8	橙色	しまりやや疎、粘性やや弱　焼土がブロック化した層　燃焼面
3	2.5YR5/8	明赤褐色	粘性やや強　燃焼による影響層

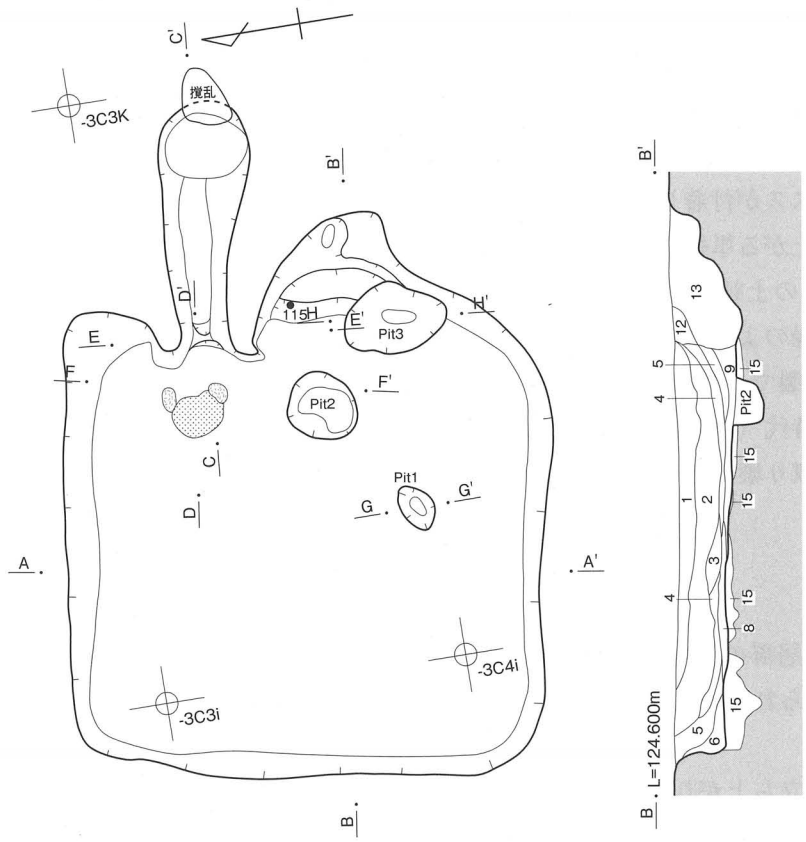
Pit3（F-F'）

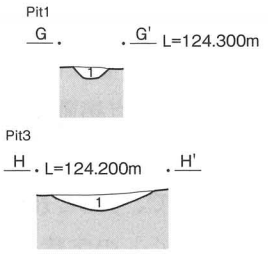
1	10YR3/3	暗褐色	粘性やや弱　焼土微量含む
2	2.5YR3/4	暗赤褐色	しまりやや疎、粘性中　焼土層（二次堆積）
3	10YR3/4	暗褐色	しまりやや疎、粘性中　炭化物多く含む
4	10YR3/4	暗褐色	炭化物・焼土含む
5	10YR3/4	暗褐色	4層より混入物多い

第19図　RA036（2）

土している。現位置を保つ状態で出土したものは少ないが、Ｑ２・Ｑ３区出土の破片が接合するなど遺構内全地点・層位にわたって接合できたため復元率は高い。
〈掲載遺物〉17点掲載した（98 ～ 114）。98 ～ 105はロクロ成形の土師器坏である。98 ～ 100には内面に黒色処理が施されるが、101 ～ 105には施されずロクロナデの痕跡のみ確認される。底部はいずれも回転糸切で、103と105は内面にススが付着している。106 ～ 111は非ロクロ成形の土師器甕である。口縁部は「く」の字状に短く立ち上がる単純口縁で、外面にはケズリ、内面にはヘラナデまたはハケ調整が施される。112はロクロ成形の土師器甕である。ロクロナデ調整が施されているが磨耗が著しく不明瞭である。口縁部は単純口縁のようにみえるが、口縁端部に粘土を貼り付けている様子が断面で観察できる。磨石（114）は砂岩製で、4面に使用痕が認められる。
時　期　出土した遺物から、平安時代（９世紀後半）と思われる。カマドの残存状況及び床面直上出土遺物の分布状況から、人為的に取り壊しを行なった住居の可能性がある。

ＲＡ037竪穴住居
遺　構（第20図、写真図版11）
〈位置・検出状況〉調査区中央の住居群のうちの１棟で、－３Ｃ３iグリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で検出した。　〈重複関係〉認められない。
〈規模〉南北2.8×東西2.6 ～ 2.9m
〈平面形〉略方形であるが、東壁の立ち上がりが不明瞭で張り出し状になる。　〈床面積〉7.86㎡
〈壁の高さ・状態〉25 ～ 30cmで、崩落のため上部はハの字状に開く。また、東壁は立ち上がりが不明瞭で、階段状になって上面へと至る。
〈堆積状況〉堆積土は13層に細分した。大部分が黒褐色を基調としており、中位までの層には十和田aテフラが若干混入する。また、黒褐色土層の間に薄く層状に壁面崩落または地山流土と考えられる黄褐色系の粘質土が堆積していた。ほとんどの層がレンズ状堆積ないし三角堆積をしていることから自然堆積と考えられる。
〈床面〉第14・15層を床面としている。第14・15層は貼床と考えられる黒褐色土であるが、しまりは弱く硬化範囲は認められなかった。ただし、カマド付近だけは締まりのある黄褐色系の粘質土を使用して周囲より固く締まるように構築されている。
〈カマド〉東壁北東側に設置される。煙道の天井部が削平されているものの残存状況は良好である。
（本体部）残存する袖部は地山削り出しにより造られているが、非常に規模が小さい。燃焼部は袖部より20cm程内側に認められる。燃焼部の焼成は良好で、焼土周辺には炭化物の散布と被熱による床面の白色化現象が認められた。
（煙道・煙出し部）天井部が削平されていたため構造は不明であるが、周囲に石材などの散布がないことから刳り貫き式と考えられる。煙道方位はN－95°－Eである。堆積土は黒褐色土を主体とし、各層に天井または壁面の崩落土と考えられる地山ブロックが混入する。燃焼部付近から35cm程の地点まで緩やかに立ち上がるが、そこから煙出しに向かって約15度の角度で傾斜するが、煙出しとの境界は不明瞭である。煙出しはわずかに外方に開きながら立ち上がる。
〈柱穴・土坑〉３個確認された。このうちPit １は柱穴、Pit ２・３は貯蔵に関する施設と考えられる。
出土遺物（第70図、写真図版53）
〈出土状況〉土器類は、カマド付近や煙道から出土しているが出土量は少ない。土師器は300g、須恵器は17g出土している。





堆積土（A-A'・B-B'）

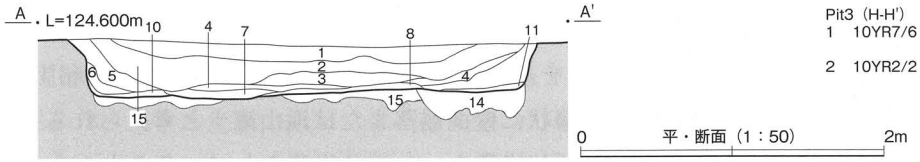
1	10YR2/2	黒褐色	
2	10YR4/2	灰黄褐色	十和田aテフラ15%含む（下位に多い）
3	10YR2/2	黒褐色	粘性やや強　十和田aテフラ10%含む
4	2.5Y7/3浅黄色と10YR2/2黒褐色の混合土		粘性弱い　十和田aテフラ層
5	10YR3/2	黒褐色	粘性やや強
6	10YR4/2灰黄褐色と10YR2/2黒褐色の混合土		黄橙色地山ブロック5%含む
7	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	粘性やや強　地山ブロック30%以上含む
8	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	しまりやや密　粘性やや弱　十和田aテフラ含まない　下位に地山ブロック20%含む
9	10YR4/3	にぶい黄褐色	地山ブロック（φ2～4mm）20%、炭化物・焼土粒微量含む
10	10YR7/8	黄橙色粘土	しまりやや密　粘性強　地山崩落土
11	10YR3/3	暗褐色	しまりやや疎　地山ブロック20%含む
12	10YR4/2	灰黄褐色	しまりやや密
13	10YR2/2	黒褐色	黄色粒子3%含む
14	10YR2/3	黒褐色	しまりやや疎、10YR4/6褐色土ブロック少量含む　掘り方堆積土
15	10YR2/3	黒褐色	掘り方堆積土

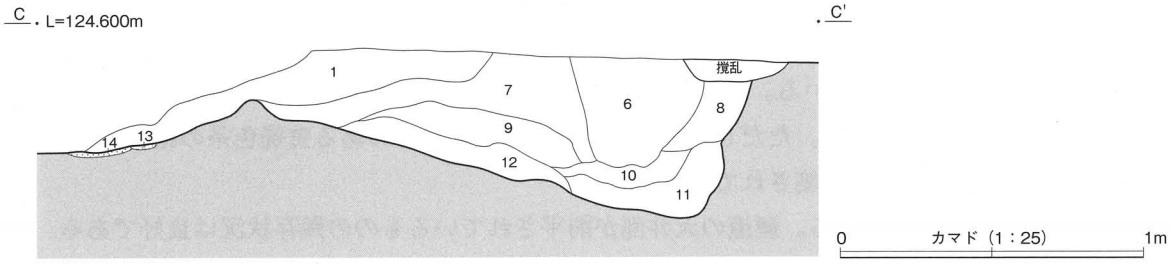
Pit1（G-G'）・Pit2

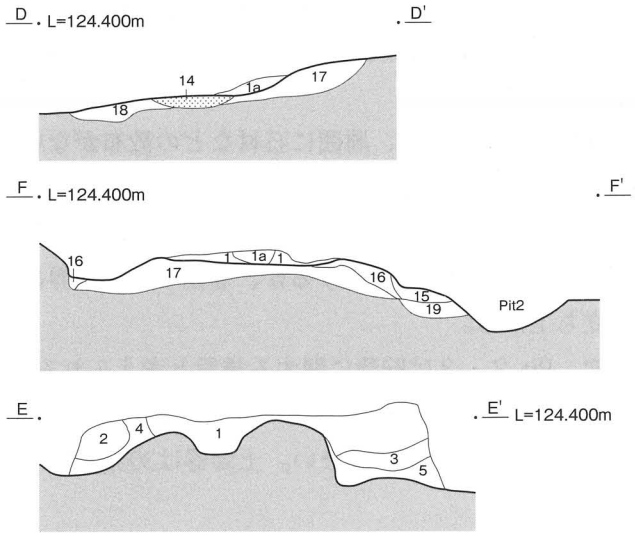
1	10YR5/4	にぶい黄褐色	地山ブロック20%含む

Pit3（H-H'）

1	10YR7/6	明黄褐色	粘性やや強　地山ブロック20%含む
2	10YR2/2	黒褐色	地山ブロック（φ1mm）30%含む







カマド・煙道（C-C'・D-D'・E-E'・F-F'）

1	10YR2/2	黒褐色	横断面1層と同じで前庭部に十和田aテフラ10%含む
1a	10YR2/2	黒褐色	1層よりしまり弱い　根撹乱か
2	10YR2/2	黒褐色	
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	地山ブロック10%含む
4	10YR7/8黄橙色と10YR3/2黒褐色の混合土		壁面崩落土と流土の混合層
5	10YR3/2	黒褐色	1層と類似するが、カマド構築土の可能性あり
6	2.5Y7/6	明黄褐色	粘性やや強　煙道天井部の崩落土
7	10YR3/2	黒褐色	地山ブロックを多く含むため全体として黄色がかる
8	10YR3/2	黒褐色	地山ブロック多く含む
9	10YR5/3	にぶい黄褐色	地山ブロック（φ1～3mm）5%含む
10	10YR2/2	黒褐色粘質土	しまりやや疎、粘性やや強
11	10YR2/2	黒褐色粘質土	しまりやや疎、粘性やや強　地山ブロック20%含む
12	10YR6/4	にぶい黄橙色	しまりやや疎、粘性やや強　壁面崩落土
13	10YR2/2	黒褐色	しまり疎、粘性弱　炭化物を含む層
14	2.5YR5/8	明赤褐色	しまり密、粘性弱　強変焼土で、高熱により中央は白色化
15	10YR4/1	褐灰色	黄色土ブロック（φ1～2mm）10%含む　床面構築土
16	10YR6/4	にぶい黄橙色	しまりやや密、粘性やや強　固くしまったカマド構築土
17	10YR5/2	灰黄褐色	粘性やや強　黄色粘土ブロック（φ10～20mm）含む　カマド構築土
18	10YR6/4	にぶい黄橙色	しまり密、粘性強　固くしまった床面構築土
19	10YR7/6明黄褐色と10YR4/1褐灰色の混合土		焼土粒3%含む

第20図　RA037

〈掲載遺物〉６点を掲載した（115～120）。115・116は内面に黒色処理が施されるロクロ成形の土師器坏である。116は外面に墨書が認められるが、小片のため詳細は不明である。117は高台坏の底部破片で、体部内面には黒色処理が施される。118はロクロ成形の土師器坏で、内外面ともにロクロナデ調整が施される。内面非黒色処理の坏である。119はロクロ成形の甕で、口縁端部は外側に折り返されている。120はロクロ成形の須恵器坏で、内外面ともロクロナデ調整が施される。

時　期　出土した遺物と十和田aテフラの堆積状況から、平安時代（９世紀後半～10世紀初）と考えられる。

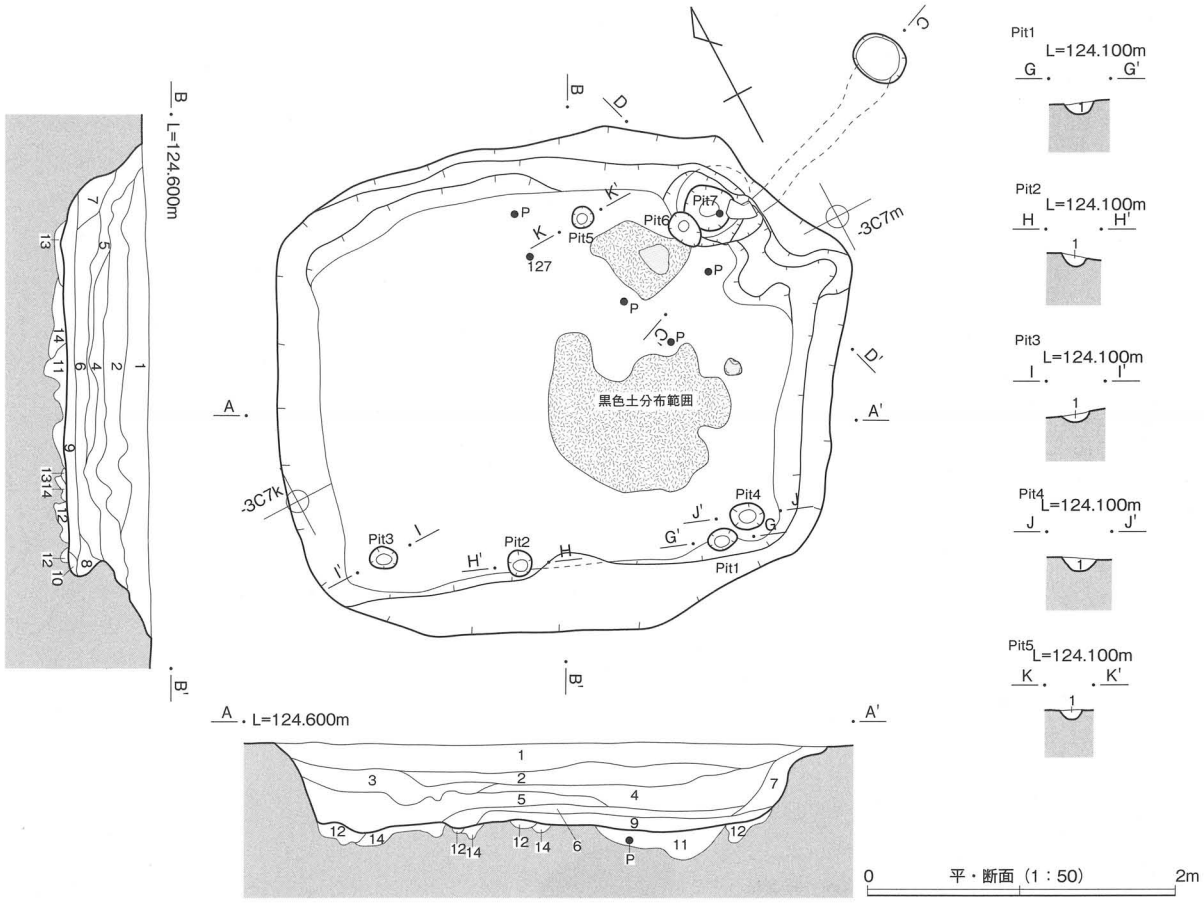
ＲＡ038竪穴住居

遺　構（第21・22図、写真図版12）

〈位置・検出状況〉調査区中央の住居群のうちの１棟で、－３Ｃ 71グリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で検出した。　〈重複関係〉認められない。

〈規模〉2.95×2.45m　〈平面形〉略方形　〈床面積〉6.84㎡

〈壁の高さ・状態〉深さは54cm前後で、壁面は崩落のため上部がハの字状に開く。



堆積土（A-A'・B-B'）
1　10YR3/2　黒褐色　十和田aテフラ（φ5mm程度のブロック）10%含む
2　10YR3/3　暗褐色　明黄褐色土ブロック（φ1～2mm）20%、焼土粒1%含む
3　10YR3/3　暗褐色　しまりやや密　黄橙色土ブロック15%含む　2層より色調暗い
4　10YR3/3　暗褐色　明黄褐色土ブロック40%、黒色土15%含む
5　10YR2/2　黒褐色　明黄褐色～黄橙色ブロック15%含む　固くしまる
6　10YR4/3　にぶい黄褐色　粘性やや強　黄橙色土ブロック20%含む　南側は少ない
7　10YR4/3にぶい黄褐色と10YR2/2黒褐色の混合土　地山ブロック5%含む　壁面崩落土
8　10YR3/2　黒褐色　地山ブロック15%含む
9　10YR3/2黒褐色と10YR7/8黄橙色の混合土　粘土質でしまり強い
10　10YR3/2　黒褐色
11　10YR2/3　黒褐色　しまりやや疎　褐色土ブロック少量、焼土粒含む　掘り方堆積土
12　10YR2/3　黒褐色　しまりやや疎　褐色土ブロック少量含む　掘り方堆積土
13　10YR3/4　暗褐色　しまり疎、粘性やや弱　黒褐色土微量含む　掘り方堆積土
14　10YR3/4　暗褐色　しまりやや疎、粘性中　掘り方堆積土

Pit1（G-G'）
1　10YR2/1　黒色　しまりやや疎

Pit2（H-H'）
1　10YR2/1　黒色　しまりやや疎

Pit3～5（I-I'・J-J'・K-K'）
1　10YR2/2黒褐色と10YR7/8黄橙色の混合土

第21図　RA038（1）

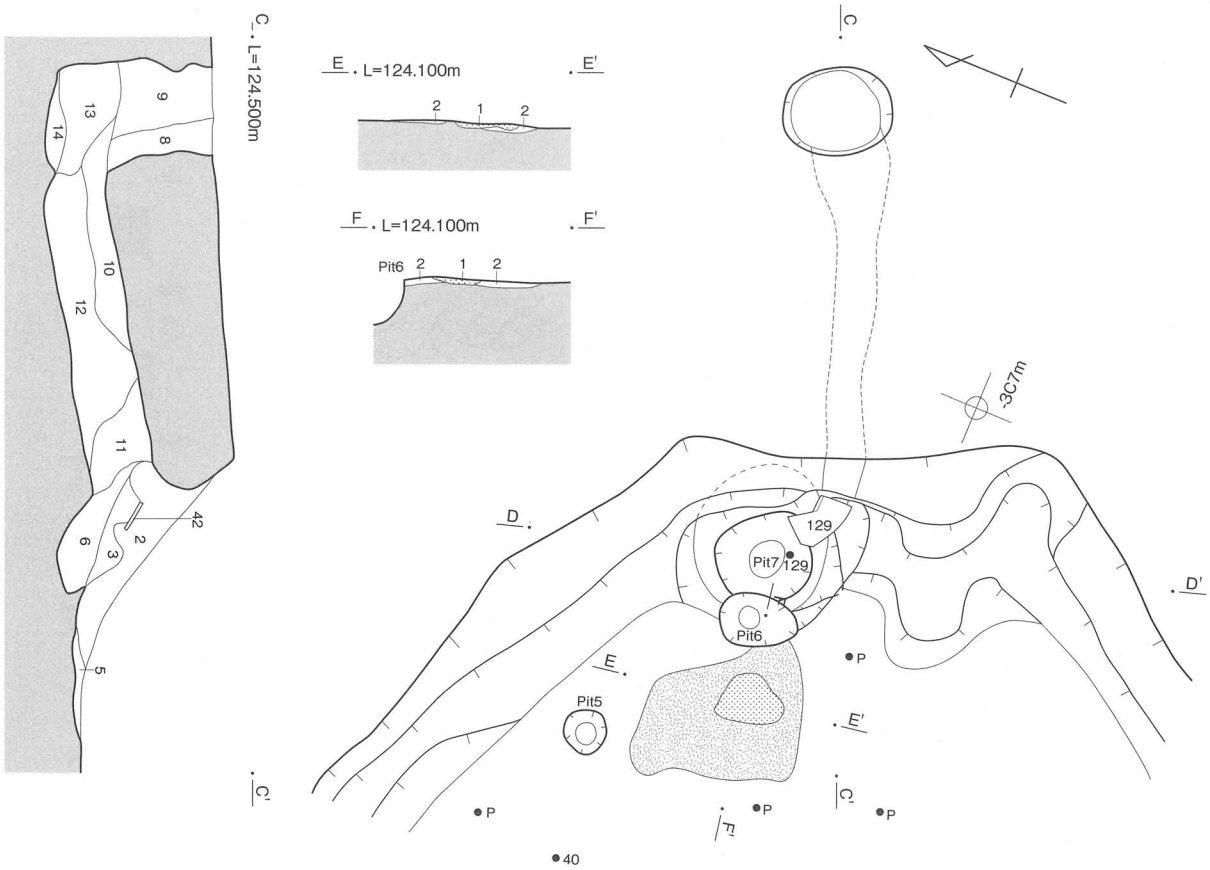
〈堆積状況〉堆積土は10層に細分した。上位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体としており、下位層ほど粘性が強くなる。最上位には十和田aテフラがブロック状に混入していた。堆積状況からは自然堆積と判断できる。

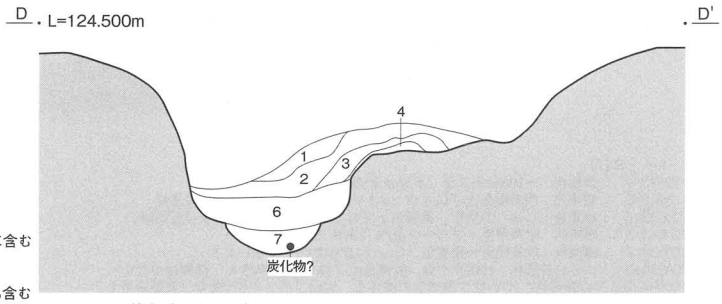
〈床面〉第11～14層を床面とする。いずれも褐色土を混和物とした貼床であるが、いずれも締まりは弱く硬化範囲は認められない。

〈カマド〉北東コーナー部に設置される。煙道直前に土坑を設ける左右非対称の特殊な構造である。

（本体部）袖は右側のみ確認されている。地山削り出しで造られており、張り出しも微弱なものである。左袖の位置には土坑（Pit 7）が設けられている。住居構築以前に存在した土坑の可能性もあるが、上部に袖の痕跡は認められなかった。燃焼部範囲は20×15cmと狭く、被熱深度も浅い。ただし、周囲には炭化物が多量に分布していたことから、現地性焼土であると考えられる。

（煙道・煙出し部）刳り貫き式の煙道である。堆積土は灰黄褐色土が主体であり、崩落土である地山ブロックを多く含む。煙道はPit 7の東端から約10度の角度で煙出しに向かって傾斜しており、





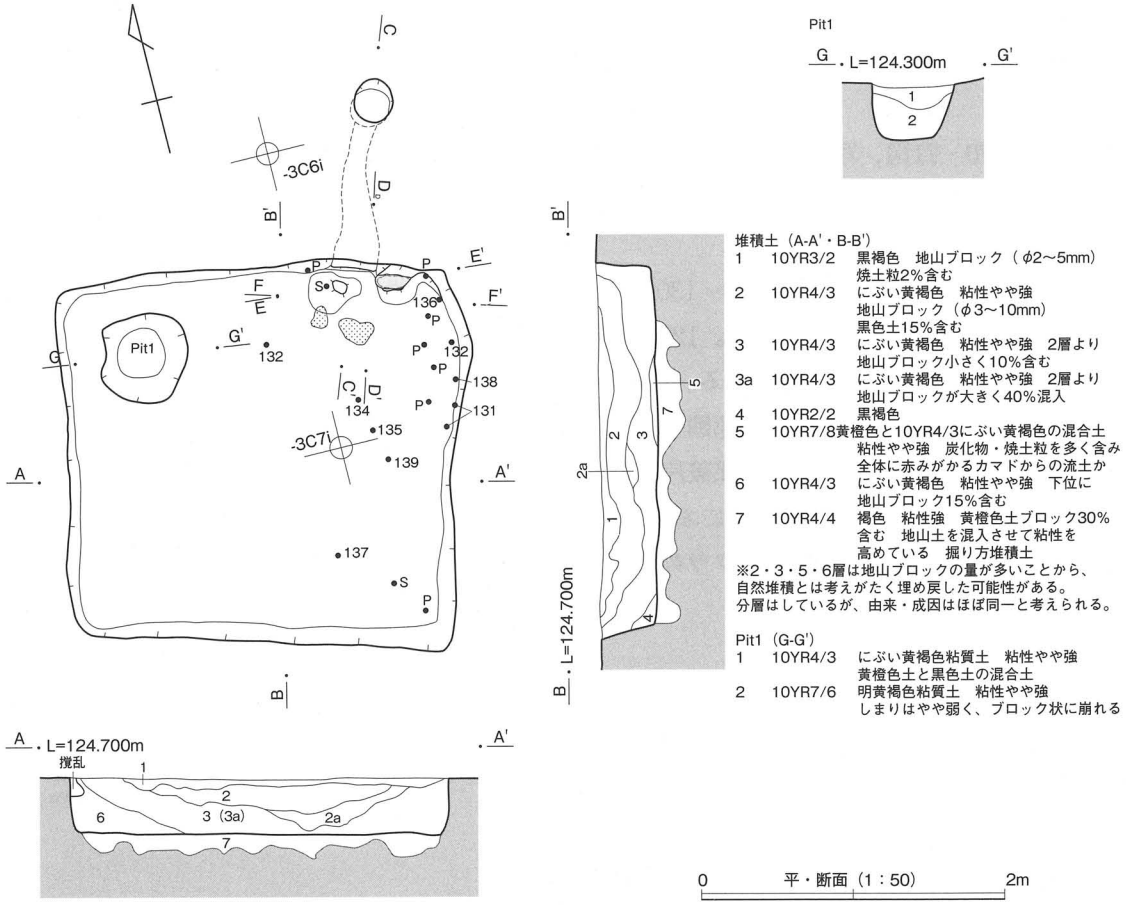
カマド・煙道（C-C'・D-D'）
1　10YR5/2　灰黄褐色　地山ブロック3%含む
2　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック（φ1～3mm）10%含む
3　10YR8/8　黄橙色　砂質だが粘性は強い　壁または袖崩落土
4　10YR3/2黒褐色と10YR6/4にぶい黄橙色の混合土
5　10YR3/2黒褐色と10YR7/8黄橙色の混合土＝堆積土断面9層
6　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック含む
7　10YR2/2黒褐色と10YR7/8黄橙色の混合土　黄色が強く
地山ブロック（φ1～3mm）30%含む
8　10YR5/2　灰黄褐色　地山ブロック（φ1～2mm）20%含む
9　10YR5/2　灰黄褐色　粘性やや強　黄橙色・黒色土ブロック多量に含む
10　10YR4/2　灰黄褐色　粘性やや強　地山ブロック（φ2～10mm）
10%含む　9層より色調暗い
11　10YR2/2　黒褐色　粘性やや強　地山ブロック10%、焼土粒2%含む
カマド側からの流土
12　10YR5/2　灰黄褐色　粘性やや強　地山ブロック（φ2～10mm）20%含む
13　10YR5/2灰黄褐色と10YR6/4にぶい黄橙色の混合土　黒色土を層状に含む
やや砂質で他の層に比べて粒子細かい
14　10YR1.7/1　黒色　地山ブロック5%含む

焼土（E-E'・F-F'）
1　2.5YR3/2～3/3　暗赤褐色　粘性やや弱　焼土ブロック含む　現地性焼土
2　10YR2/2　黒褐色　粘性やや弱　炭化物と焼土ブロック含む

第22図　RA038（2）

煙出しとの境界は一段高くなっている。煙出しは底面からほぼ垂直に立ち上がる。
〈柱穴・土坑〉７個確認されている。非常に浅く、位置関係にも規則性が無いため柱穴となるかは検討を要する。
出土遺物（第70・71図、写真図版54）
〈出土状況〉カマド内とＱ２区を中心に土師器950gと須恵器1,067g、堆積土中から土錘１点が出土している。
〈掲載遺物〉10点を掲載した（121～130）。121～124は土師器坏である。いずれもロクロ成形で、121のみ内面に黒色処理が施される。122は口縁部のナデ調整が強く、端部が短く外折する。125～127は非ロクロ成形の土師器甕である。126は台状の底部破片で、底部にはケズリ調整が施される。127も台状の底部破片であるが、底部調整は行なわれず木葉痕が明瞭に残る。128はロクロ成形の須恵器坏である。129は須恵器大甕の体部破片である。内外面とも叩き・当て具の痕跡が明瞭に残る。130は土錘である。ほぼ完形で、色調はにぶい黄褐色である。
時　期　出土した遺物と十和田aテフラの堆積状況から、平安時代（９世紀後半～10世紀初）と思われる。

ＲＡ039竪穴住居
遺　構（第23・24図、写真図版13）
〈位置・検出状況〉調査区中央の住居群のうちの１棟で、－３Ｃ７iグリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で検出した。　〈重複関係〉認められない。
〈規模〉2.4×2.35m　〈平面形〉略方形　〈床面積〉5.58㎡
〈壁の高さ・状態〉35～40cmで、壁面は垂直に立ち上がる。
〈堆積状況〉堆積土は６層に細分した。ほとんどの層がにぶい黄褐色土であり、混和物の割合によって細分できるのみである。とくに第２層以下は地山ブロックが大きく、残存状況が良好である割に十和田aテフラも確認されていない。自然堆積で埋没した遺構と比べて不自然な印象を受ける堆積状況であることから、本住居については廃絶後に人為的に埋め戻しが行われた可能性がある。
〈床面〉第７層を床面とする。硬化範囲は認められないが、粘性の強い土を用いている。
〈カマド〉北壁北東隅付近に設置される。煙道は良好に残っているが、袖部は崩落している。
（本体部）袖は礫を芯材としてやや粘性の強い土を用いて構築されているが、崩落が著しく残存状況は良くない。焼土は袖より手前で２つ確認されているが、いずれも範囲は狭く被熱深度も浅いことから現地性焼土か否かは判断できない。
（煙道・煙出し部）刳り貫き式の煙道で、方位はN－21°－Eである。ある。堆積土は黒褐色土主体で構成されており、しまりの弱い層と粘質土の層が交互に確認される。燃焼部との境界がわずかに立ち上がり、そこから煙出しへ向けて約17度の角度で傾斜する。煙出しは底面からほぼ垂直に立ち上がる。
〈柱穴・土坑〉１基確認された。Pit １は大きさから貯蔵に関わる施設の可能性があるが、堆積土中からはそれを示すものは出土していない。
出土遺物（第71・72図、写真図版54・55）
〈出土状況〉土器はカマド付近を中心に、土師器750gと須恵器630ｇが出土した。カマドの設置されるＱ２区では床面直上から小破片の状態で出土しているが、接合率は高く出土重量に比して復元点数は多い。また、隣接するＲＡ038出土の破片と接合するものもあった。



第23図　RA039（1）

〈掲載遺物〉10点を掲載した（131～140）。131は内面に黒色処理が施されるロクロ成形の土師器坏である。外面には「M」字状の墨書が書かれているが、読み方は不明である。133は土師器高台坏である。高台はハの字状に外方に開く貼付高台である。134は非ロクロ成形の土師器小甕である。外面にケズリ、内面にハケ調整が施され、口縁部と底部付近は最終調整に横ナデが施される。135～138はロクロ成形の須恵器坏で、内外面ともロクロナデ調整が施される。140は瑪瑙製の石器剥片である。当初火打石と考えていたが、使用痕が認められないため今回は剥片とした。

時　期　出土した遺物から、平安時代（９世紀後半）と思われる。

ＲＡ040竪穴住居

遺　構（第25図、写真図版14）

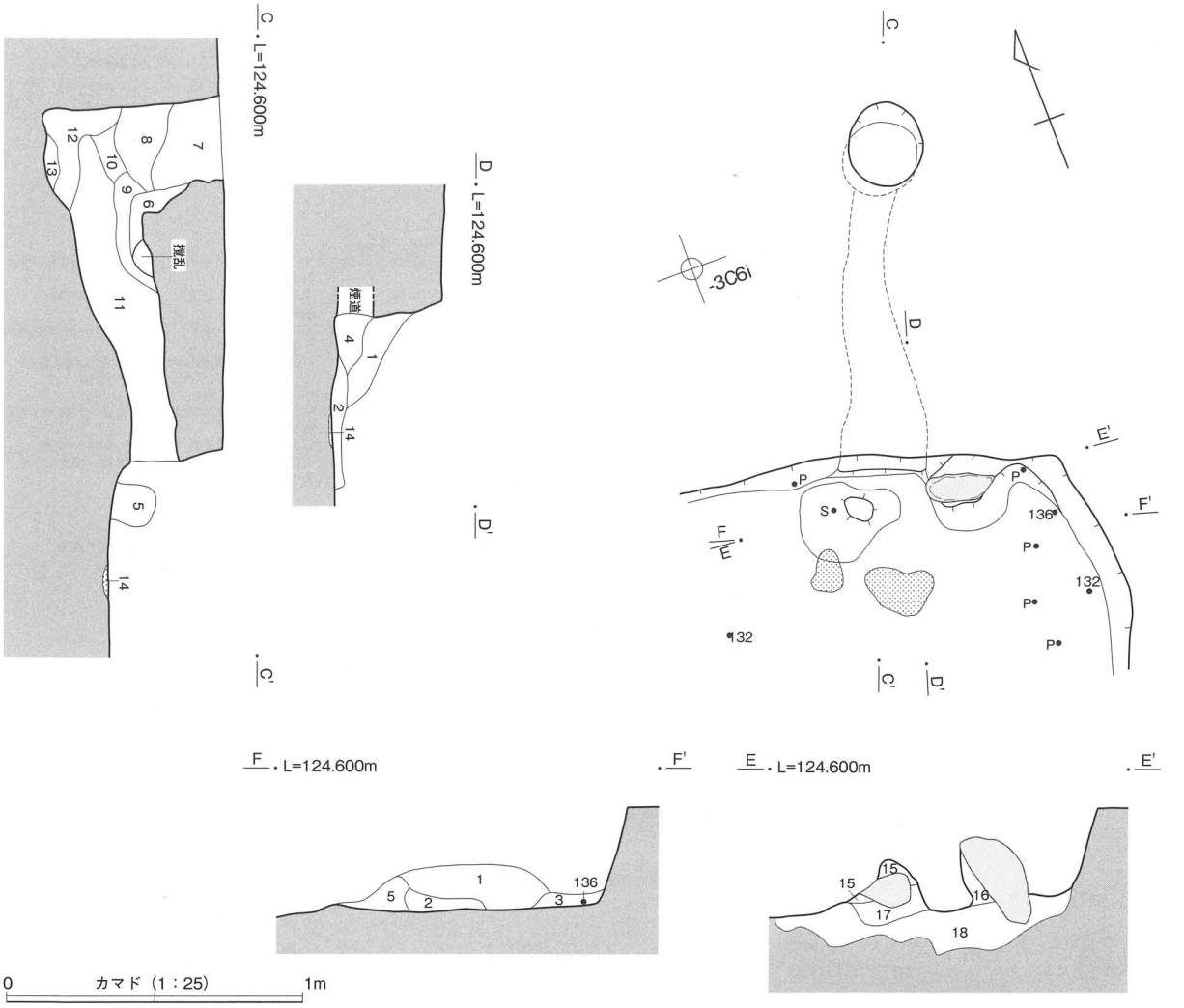
〈位置・検出状況〉調査区北側－５Ｃ24ｙグリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で検出された。

〈重複関係〉ＲＤ144と重複関係にあり、ＲＤ144の埋没後に本住居が構築されている。

〈規模〉2.6×2.35m　〈平面形〉略方形　〈床面積〉6.03㎡

〈壁の高さ・状態〉崩落が著しいため壁面の立ち上がりはほとんどなく、床面からハの字状に広がるように立ち上がる。後述するように床面は平坦ではないため検出面からの深さは地点によって異なっているが、全体に浅く最も深い中央部分でも20㎝程度である。

〈堆積状況〉黒褐色土が主体であり、５層に細分した。全体として締まりは弱く、炭化物や焼土の粒を多く含む。床面直上やカマド付近の堆積土中から炭化材や焼土の広がりが検出されていることか



カマド・煙道堆積土（C-C'・D-D'・E-E'・F-F'）

1	10YR3/2	黒褐色　地山ブロック（φ2～4mm）30%含む　全体に黄色がかる
2	2.5YR4/3	にぶい赤褐色　炭化物3%、前庭部に焼土粒（φ1～3mm）10%含む　焼土の流土層で全体として粒子粗い
3	10YR2/2	黒褐色　地山ブロック5%含む
4	10YR2/2	黒褐色　粘性やや弱　全体的にしまり弱い
5	10YR5/4	にぶい黄褐色　地山崩落土が変色したものか
6	10YR4/2	灰黄褐色　しまりやや疎、粘性やや弱　被熱や煙の影響などで黒く変色した層
7	10YR2/2	黒褐色　地山ブロック3%含む
8	10YR3/2	黒褐色　しまりやや疎　地山ブロックをわずかに含むためやや黄色がかる
9	10YR2/2	黒褐色　粘性やや強
10	10YR6/4	にぶい黄橙色　粘性やや強　壁面崩落土が変色した層
11	10YR2/2	黒褐色　全体として粒子はやや粗くカマド側には黄色地山ブロック5%含む
12	10YR1.7/1	黒色　粘性やや弱　炭化物を多量に含む　粒子粗くしまり弱い
13	10YR3/2	黒褐色　黄色地山ブロック（φ1～2mm）5%含む　全体にしまり弱い
14	2.5YR4/6	赤褐色　現地性焼土であるが若干黒ずんでいる
15	10YR6/6	明黄褐色　粘質土　粘性やや強　黄橙色土10%含む　袖構築土
16	10YR3/2	黒褐色　炭化物・黄橙色土ブロック合わせて15%含む
17	7.5YR3/3	暗褐色　層状に焼土粒混入　袖構築土
18	10YR4/4	褐色　粘性強　黄橙色土ブロック30%含む　地山土を混入させて粘性を高めている　掘り方堆積土

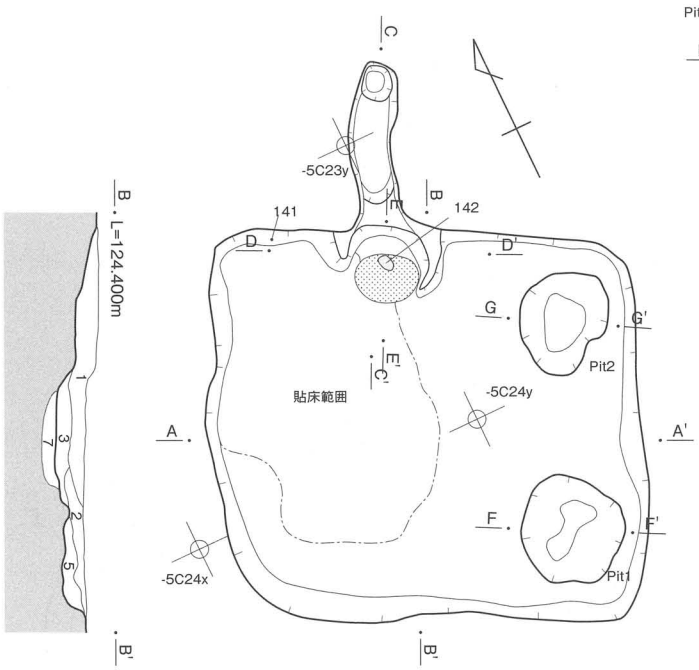
第24図　RA039（2）

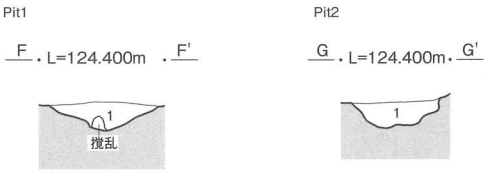
ら、本住居は焼失家屋と考えられる。

〈床面〉地山であるⅢ層と第6･7層を床面としているが、焼失時の影響か全体的に黒みがかっており、締まりも弱い。貼床である第6・7層は、床面西側半分弱にのみ敷設されており、これらの層を除去するとＲＤ144の検出面となることから、住居構築以前に窪んでいた範囲を埋めるためのものと考えられる。ただし、貼床敷設後も地山削り出しの床面よりは若干低く、そのため貼床範囲のみ窪地状になっている。

〈カマド〉北壁やや西寄りに設置されている。煙道の天井部は削平されていたが、全体として残存状況は良好である。

（本体部）地山土を利用した袖をもち、両袖間の距離は約40cmである。焼失時の被熱のためか全体に



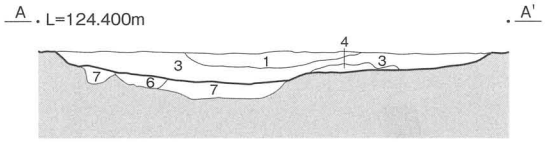


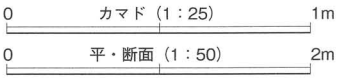
堆積土（A-A'・B-B'）

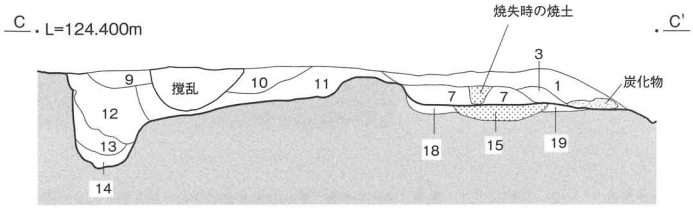
1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック（φ1～3mm）5%、中央に焼土を集中して含む
2　10YR3/2　黒褐色　東西2層に似るがブロック少なくやや砂質。由来は同一
3　10YR3/2　黒褐色　地山ブロック（φ2～5mm）10%、焼土粒2%含　東側はやや色調明るい
4　10YR7/8黄橙色と10YR6/4 にぶい黄橙色の混合土　壁面崩落層か
5　10YR7/8黄橙色と10YR3/2 黒褐色の混合土　粘性やや強　地山崩落土に黒褐色土が混入
6　10YR2/2　黒褐色　粘性やや強　地山ブロック（φ3～10mm）含む　掘り方堆積土
7　10YR7/8黄橙色と10YR5/3にぶい黄褐色の混合土　粘性やや強　地山粘土ブロックをベースにににぶい黄褐色・黒色土が混入　掘り方堆積土

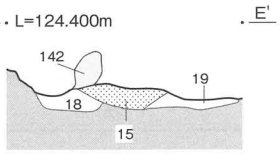
Pit1・2（G-G'・H-H'）

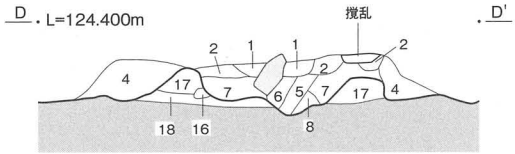
1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック（φ3～10mm）20%含む



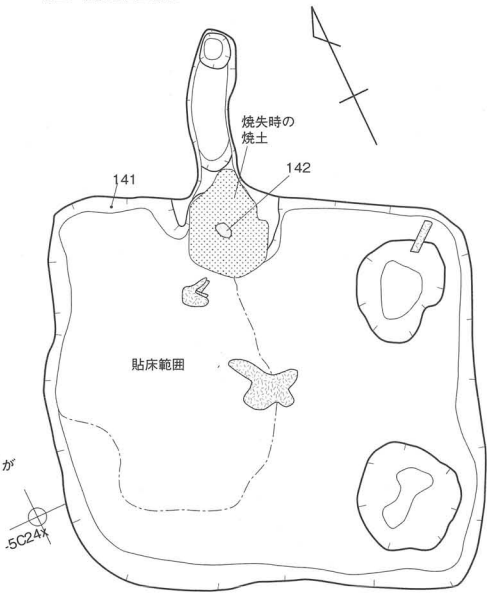








焼土・炭化物出土状況



カマド・煙道（C-C'・D-D'・E-E'）

1　10YR2/2　黒褐色　焼土粒（φ1～2mm）5%含む　堆積土1層と由来は同じ
2　2.5YR3/6　暗赤褐色　炭化物・焼土粒（φ1～3mm）それぞれ5%含む　住居焼失時に発生した焼土の二次堆積層
3　10YR2/2　黒褐色　焼土粒（φ1～2mm）30%含む
4　10YR2/2　黒褐色　＝堆積土2層
5　10YR6/4　にぶい黄橙色　しまりやや疎　焼土（φ1～2mm）10%含む
6　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック10%含む
7　2.5YR4/6　赤褐色　住居焼失時に形成された焼土層　炭化材と大型の焼土ブロックが混入し、2層より赤みが強い
8　10YR5/3　にぶい黄褐色　粘性やや強　焼土ブロック（φ2～5mm）10%含む
9　10YR2/2　黒褐色　焼土粒（φ1～2mm）30%含む
10　10YR3/2　黒褐色　粘性やや強　地山ブロック30%含む
11　10YR5/3　にぶい黄褐色　粘性やや強　大型の地山ブロック20%含む　砂質だが粘性あり　天井崩落土か
12　10YR3/2　黒褐色　地山ブロック（φ2～5mm）5%含む
13　10YR6/4にぶい黄橙色と10YR2/2黒褐色の混合土　壁面崩落土
14　10YR7/6明黄褐色と10YR2/2黒褐色の混合土　13層と由来は同じか
15　2.5YR5/8　明赤褐色　焼土ブロック（φ2～3mm）20%、炭化物5%含む　現地性焼土だが混入物多い
16　10YR5/3　にぶい黄褐色　しまり中、粘性やや強　焼土ブロック（φ2～5mm）10%含む
17　10YR7/8黄橙色と10YR2/2黒褐色の混合土　粘性やや強　粘質土　地山土を利用した袖構築土
18　10YR5/3　にぶい黄褐色　粘性やや強　炭化物・黒色土それぞれ20%含む　カマド床面構築土
19　10YR3/3　暗褐色　粘性やや強　焼土ブロック5%含む　カマド床面構築土

第25図　RA040

もろく崩れやすくなっており、部分的に赤色化している。燃焼部焼土は両袖のほぼ中央に位置しており、範囲は40×30cmの円形である。燃焼部焼土はよく焼け締まっており、炭化物を含み暗赤褐色の焼失焼土とは明確に判別できる。また、焼土の直上では礫（142）が出土しているが、掘り込みの痕跡などが確認できないため支脚であったか否かは不明である。

（煙道・煙出し部）刳り貫き式の煙道と考えられ、方位はＮ－27°－Ｅである。堆積土は黒褐色でやや粘性の強い土が主体となっており、壁面崩落土である黄橙色土ブロックを含む。燃焼部と煙道との境界は土手状に高くなっており、煙道はそこから約９度で緩やかに傾斜して煙出しへと至る。煙出しは上面が若干崩落しているが、底面からほぼ垂直に立ち上がる。

〈柱穴・土坑〉東壁付近で土坑状のプランを２個確認している。位置関係から柱穴としたが、いずれも底面が不整形であり、根の侵食も著しいことから根撹乱の可能性もある。

出土遺物（第72図、写真図版55）

〈出土状況〉全体として乏しく、北西壁付近で土師器46ｇと焼土直上で礫１点が出土したのみである。

〈掲載遺物〉土師器と敲磨器類をそれぞれ１点ずつ掲載した（141・142）。141は土師器坏で、内外面ともミガキ調整の後に黒色処理が施される。外面下半にはさらにハケ調整の痕跡も認められる。142は磨石で、１面にのみ使用痕が認められる。

時　期　出土遺物に乏しいため根拠として弱いが、両面黒色処理された坏が出土していることから平安時代に属すると思われる。なお、本住居は焼失家屋であるが、先述したＲＡ031に比べて炭化材の残存状況は良くないため、構築材の樹種を特定することはできなかった。

ＲＡ041竪穴住居

遺　構（第26・27図、写真図版15）

〈位置・検出状況〉調査区北側－４Ｄ３bグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面で、黒褐色の方形プランとして検出された。

〈重複関係〉ＲＺ029古墳と重複し、本遺構の煙道部が周溝の一部を破壊している。

〈規模〉3.2×2.7m　〈平面形〉隅丸方形　〈床面積〉8.37㎡

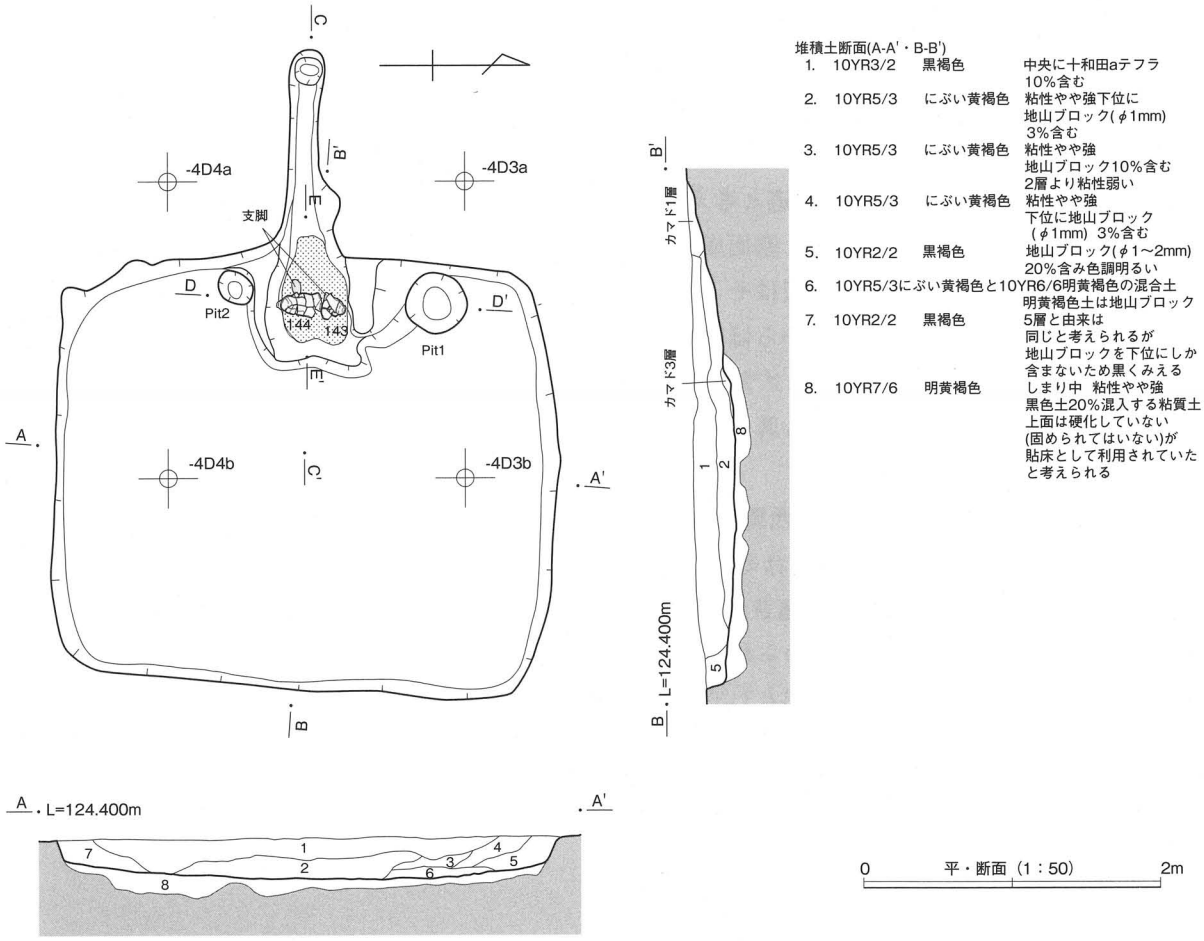
〈壁の高さ・状態〉壁面は崩落のためハの字状に広がりながら立ち上がる。検出面からの深さは25cm前後である。

〈堆積状況〉堆積土は７層に細分した。にぶい黄褐色土と黒褐色土が主体であり、最上位層である第１層には十和田aテフラがブロック状に混入する。壁面付近にはⅡ層の流土と考えられる黒褐色土が堆積していたため、堆積土と壁面との判別は比較的容易であった。

〈床面〉第８層を床面としている。第８層は黒色土が混入する明黄褐色の粘質土で、上面は硬化していないが貼床と考えられる。

〈カマド〉西壁中央に設置される。煙道の天井部が削平されているが、残存状況は良好である。

（本体部）床面より一段高い台状の高まりとなっており、袖は右袖のみ残存する。床面及び袖は貼床と同様の明黄褐色粘質土を用いているが、被熱のため表面はもろく崩れやすい。燃焼部焼土は煙道側に広く、70×40cmの長楕円形に広がっている。焼土内には礫が２点見つかっているが、被熱痕跡があることと設置状況から焼成前に設置された支脚と考えられる。支脚の手前側には土師器の長胴甕２個体が合わせ口のように横倒しの状態で出土している（143・144）。土師器甕の外面にはススが付着し、さらに143の内面には喫水線が認められることから実際に煮炊きに使用されていたことは明らかである。なお、土師器甕の設置部分は良く焼け締まっていることから、この部分が燃焼部の中心と考えら



第26図　RA041（1）

れる。

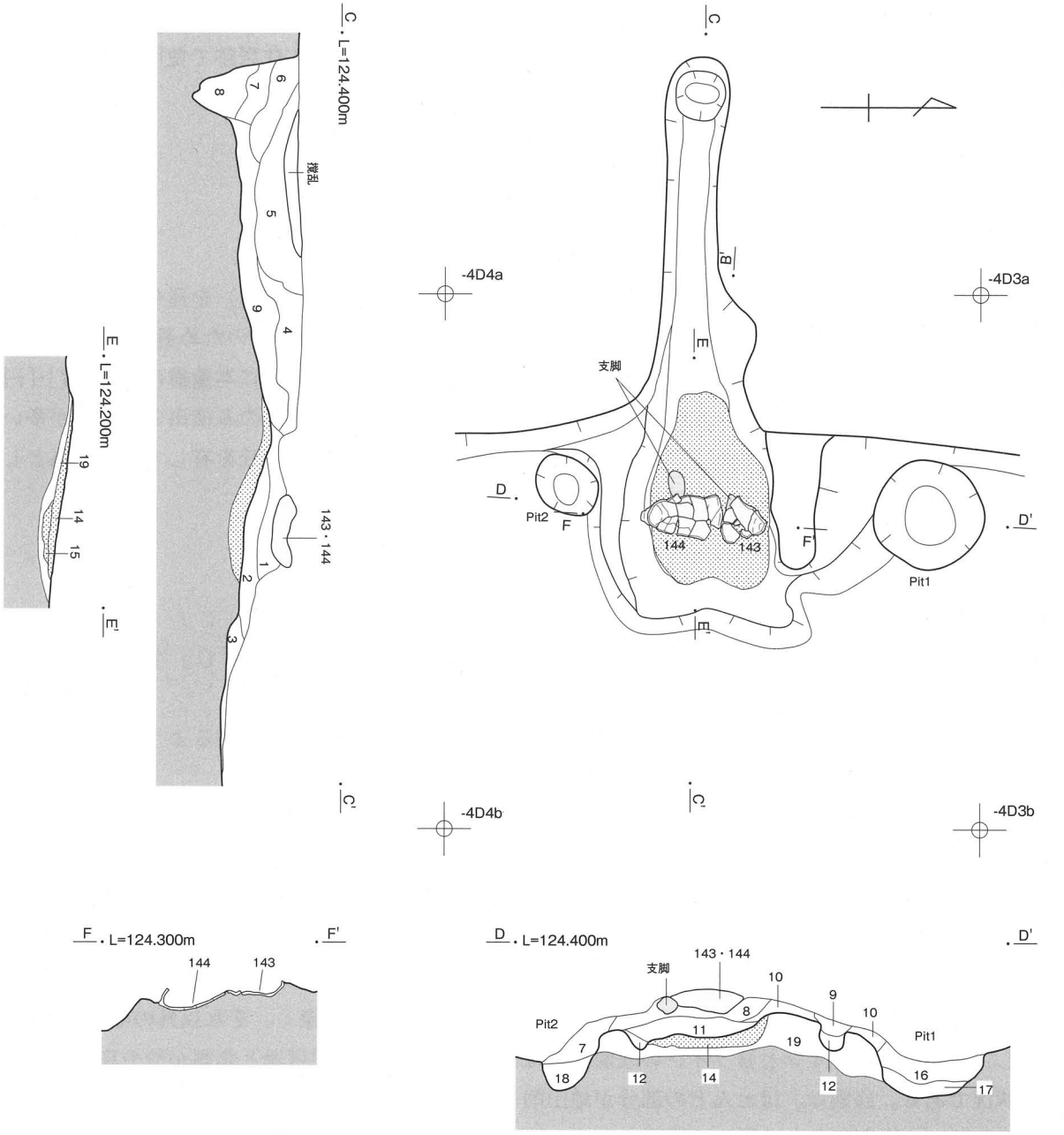
(煙道･煙出し部)煙道は燃焼部焼土の西端から約７度の角度で緩やかに傾斜しながら煙出しへと至る。堆積土は黒褐色土主体で、焼土と炭化物を少量含んでいる。煙出しは縦断面形が鋭角な逆三角形状であり、ハの字状に立ち上がって上面へと至る。

〈柱穴・土坑〉カマドの両脇に２個確認しており、位置関係から両者とも柱穴と考えられる。ただし、これらの対になる柱穴については床面を掘り方まで掘り下げても検出することができなかった。

出土遺物（第72図、写真図版55）

〈出土状況〉カマドの燃焼部直上から土師器甕の破片が2,760ｇ出土している。

〈掲載遺物〉燃焼部焼土直上の土師器甕２点を掲載した（143・144）。143は口縁部に最大径をもつ長胴甕である。底部脇が強く屈曲しながらハの字状に立ち上がり、体部上半は直立気味となる。頸部には段が形成され、そこから口縁部はハの字状に開きながら立ち上がる。口縁端部は強い横ナデ調整が施されているため直立気味となる。体部は内外面ともヘラナデ調整が施され、さらに外面下半から底部脇にかけてナデ調整が施される。底部はわずかに上げ底で、単位の細かいケズリ調整が施される。144も口縁部に最大径をもつ長胴甕である。底部脇から斜め上方に立ち上がり、体部上半は直立気味となる。頸部には弱い段をもち、口縁部は直線的に外方へと開く。口縁部には横ナデ調整が施されており、端部はわずかに外方につまみ出される。体部は内外面ともにハケ調整が施され、底部にはケズリ調整が施される。



カマド・煙道・柱穴(C-C'、D-D'、E-E')

1.	10YR2/2	黒褐色粘質土	粘性やや強　地山ブロック5%含む
2.	10YR3/2	黒褐色	地山ブロック5%含む　やや砂質
3.	10YR7/6	明黄褐色	粘性やや強　炭化物3%含む　地山流土
4.	10YR2/2	黒褐色	しまりやや疎　地山ブロック(φ1～3mm)5%含む
5.	10YR6/4	にぶい黄橙色	粘性やや強　黒褐色土含む
6.	10YR7/6	明黄褐色	粘性やや強　5層より色調明るく粘性も強い
7.	10YR2/2	黒褐色	地山ブロック10%　袖崩落土含む
8.	10YR2/2	黒褐色	焼土2%含む
9.	2.5YR5/4	にぶい赤褐色	炭化物3%含む　焼土の二次堆積層
10.	10YR7/6	明黄褐色	やや砂質　黒色土含む　袖構築土の流土か
11.	10YR5/3	にぶい黄褐色	下位に炭化物3%　焼土10%含む
12.	7.5YR3/2	黒褐色	
13.	10YR4/2	灰黄褐色	粘性やや強　地山ブロック3%含む
14.	5YR6/8	橙色	炭化物15%含む焼土
15.	5YR6/8	橙色	第1層と異なり混和物を含まない強変焼土で　この層の上面が燃焼面
16.	10YR1.7/1	黒色	地山ブロック(φ1～2mm)10%含む　やや粒子粗い　Pit1堆積土
17.	10YR6/4	にぶい黄橙色	粘性やや強　黒色土10%含む　Pit1堆積土
18.	10YR2/2	黒褐色	Pit1堆積土
19.	10YR7/6	明黄褐色	粘性やや強　黒色土10%混入する砂質土でカマド構築土(＝東西3層)

0　(1：25)　1m

第27図　RA041（2）

時　期　土師器甕のみの出土であるため年代的根拠としては弱いが、両者とも奈良時代（８世紀中頃～後半か）に属するものと考えられ、使用痕の観察からこれらは実際に本住居跡で使用されていた可能性が高いことから、本住居の構築年代もこの頃と考えておきたい。

（村田）

3　古　　墳（RZ）

17基検出されている。中央に円形や方形の墳丘を築き、その周囲に溝（周溝）を巡らすという形態の遺構で、古代墓制の一形態である。ただし、今回検出したものは削平が著しいため遺存状況は悪く、加えて出土遺物も多くないため性格や年代について不明な点が多い。一般的に本遺構には「古墳」・「円形周溝」・「周溝状遺構」など様々な呼称が用いられる。平地の遺跡では周溝のみ検出される例が多いことから「円形周溝」と呼称されることが多いが、本報告では本来的には墳丘を有しており、墓としての機能を備えた遺構ととらえ、「古墳」の名称を用いることにしたい。

ＲＺ014古墳

遺　構（第28図、写真図版16）

〈位置・検出状況〉－４Ｃ19ｌ～－４Ｃ24ｏグリッドに位置する。Ⅲ層上面で「Ｃ」字状に巡る黒褐色プランとして検出された。

〈重複関係〉ＲＧ032、ＲＤ116と重複関係にあり、ＲＧ032は本遺構の中央を横切るように掘削されているが、一方で本遺構がＲＤ116の一部を壊して掘削されている。

〈墳丘〉平面形は円形で、現存規模は直径9.90mである。削平によりⅢ層が露出しており墳丘は残存していない。そのため墳丘の高さ・構築方法などの情報を得ることはできなかった。

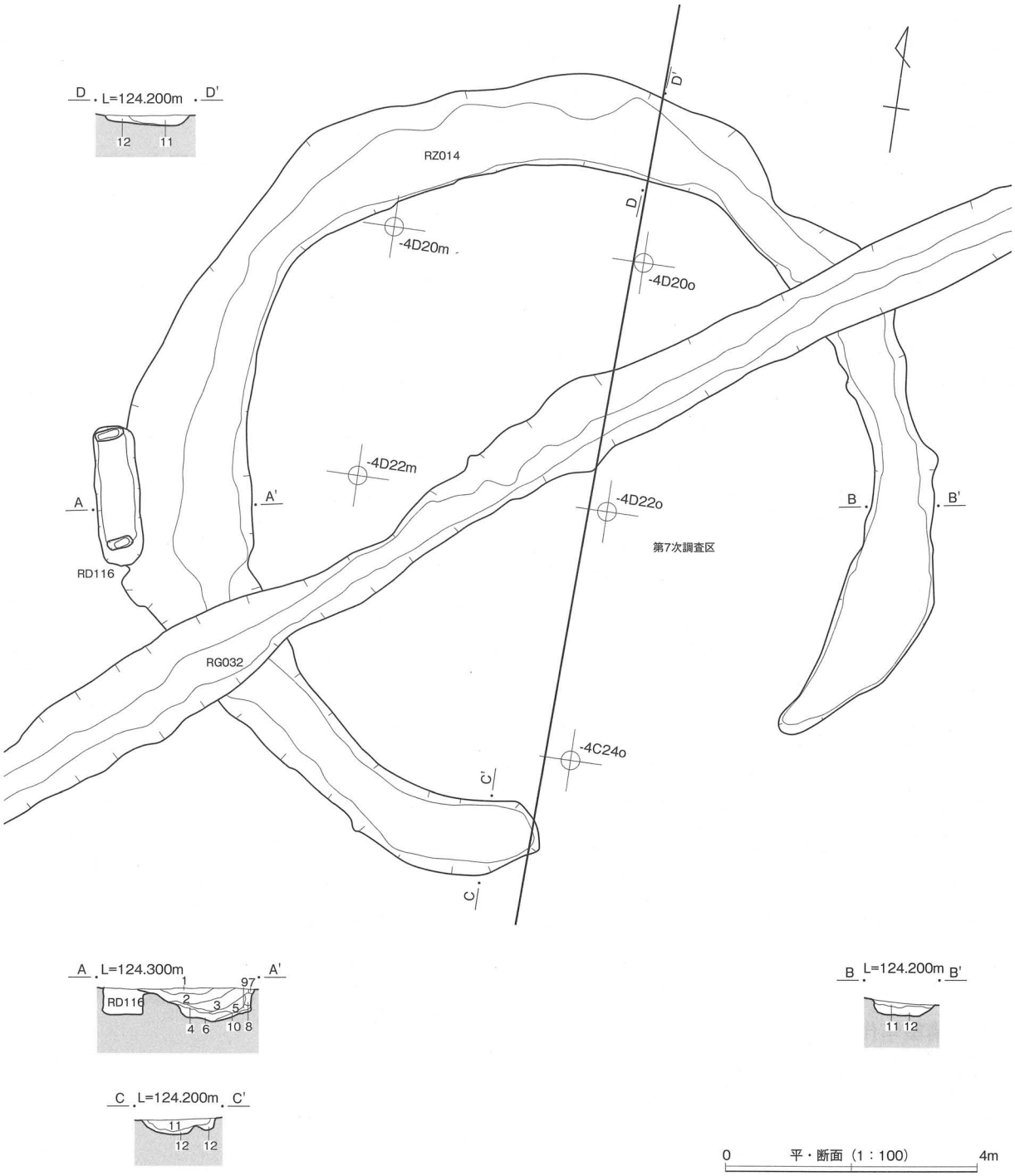
埋葬施設も墳丘とともに削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。

〈周溝〉南東方向が開く「Ｃ」字状プランの周溝である。断面形は浅いⅢ形ないし逆台形で、墳丘側壁面はほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの深さは一定ではなく、上面が東側に向かって傾斜するように削平されているためＲＤ116との重複部分（断面Ａライン）付近が深く、それ以外の部分は浅い。ただし、実際にはＡラインとＢラインの底面標高はほぼ等しく、開口部付近と北側がやや高くなるという状況である。底面は、ほとんどの部分が地山削り出しによって水平に整えられている。上面幅は0.78～2.00m、検出面からの深さは断面Ａライン付近で0.52m前後である。

〈堆積状況〉黒褐色の粘質土と砂質土が主体であり、12層に細分した。最も残りの良い断面Ａラインの観察によると、墳丘側から流れ込んだと思われる層が多く、これらは墳丘盛土の崩落土（第３・５・12層）と地山崩落土（第７・８層）と考えられる。墳丘は既に削平されているため推定ではあるが、本古墳では墳丘の構築には黒褐色粘質土と地山土（もしくは掘削土）が用いられていたようである。なお、ＲＤ116との重複関係は先に述べているが、断面観察から本古墳はＲＤ116埋没（埋め立てか）後に構築されたものと考えられる。

出土遺物　第７次調査区に位置する断面Ｂラインの南側から土師器片が１点（６ｇ）出土している。非黒色処理坏の破片であるが、細片であり図示することができなかった。

時　期　重複関係からＲＧ032より古く、ＲＤ116より新しい遺構と判断できるが、出土遺物が乏しく詳細は不明である。ただし、堆積土上位に十和田aテフラを含む層が確認されていることから、10世紀初頭には既に周溝は埋没していたものと考えられる。



1	10YR4/4	褐色砂質シルト	赤みを帯びる
2	10YR2/1	黒色シルト	十和田aテフラの極小ブロックを含む
3	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	十和田aテフラ混入せず
4	10YR1/2	黒色粘土質シルト	黄褐色土粒を含み粘性強い
5	10YR3/1	黒褐色粘土質シルト	黄褐色土粒を全体に含む
6	10YR2/3	黒褐色粘土質シルト	黄褐色土粒の混入は5層より多い
7	10YR3/3	暗褐色砂質シルト	地山崩落ブロック
8	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	褐色土粒を全体に含む
9	10YR4/4	褐色シルト	地山崩落土
10	10YR2/1	黒色粘土質シルト	黄褐色土粒を全体に含む
11	10YR2/2	黒褐色シルト	地山ブロック5%含む
12	10YR7/8黄橙色粘質土と10YR2/2黒褐色土の混合土　粘性やや強　黄橙色土は地山崩落土		

第28図　RZ014

ＲＺ017古墳

遺　構（第29図、写真図版17）

〈位置・検出状況〉－３Ｃ８ｔ～－３Ｃ12ｘグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、「Ｃ」字状に巡る黒褐色プランとして検出された。〈重複関係〉認められない。

〈墳丘・埋葬施設〉平面形は円形で、現存規模は7.40×8.10mである。墳丘は既にⅢ層まで削平されており、部分的に根撹乱による黒色土が分布するのみであった。そのため墳丘の高さ・構築方法などの情報を得ることはできなかった。

埋葬施設も墳丘とともに削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。

〈周溝〉南東方向が開く「Ｃ」字状プランの周溝である。自然崩落や削平のため上面幅や深さは一定ではなく、現存規模は幅0.70～2.05m、深さ0.25～0.50mである。断面形は逆台形または箱形であるが、墳丘側がほぼ垂直に立ち上がる部分が多く、底面は掘り方のまま凹凸が著しいため不整形な部分が多い。深さも一定ではなく、北側（断面Ｂ・Ｄライン付近）は深く、南西側（断面Ａライン付近）と開口部付近は浅い。なお、当初は人為堆積土と思われる第11層がほぼ全域で確認されたため、底面を整地している可能性が考えられた。しかし、第11層は墳丘側が厚く、外側が薄いという部分が多く上面レベルが一定しないことから墳丘側から流れ込んだ盛土とみなし、整地行為は行われていないものと判断した。

〈堆積状況〉地山ブロックを含む黒褐色土が主体であり、11層に細分した。堆積状況をみると墳丘側もしくは墳丘外から流れ込んだ状況を示していることから、ほとんどが自然堆積土と考えられる。墳丘が残存していないため断定はできないが、流入方向から第４・５・８・９・11層は墳丘（盛土）の崩落土と考えられる。

〈付属施設〉周溝西側の底面やや墳丘寄りの位置で土坑を１基検出した。北西－南東方向に長軸をとる長方形プランの土坑で、規模は上面1.08×0.58m、底面0.92×0.43m、深さ0.34mである。周溝内堆積土掘削時に角礫を含む黒褐色の長方形プランとして検出したため、当初から古墳の従属埋葬施設である可能性を考慮して上面プランの実測を行った後に掘り下げたところ、南東側底面で「Ｃ」字状の礫1点と北西側底面で棒状礫１点が設置されたような状況で検出された。副葬品や人骨などの出土が皆無であるが、礫の設置状況や構築位置を考慮してＲＺ017に伴う従属埋葬施設と判断した。なお、底面で検出されていることから周溝埋没前に構築されたことは確実であるが、出土遺物が無いため具体的な構築年代については不明である。

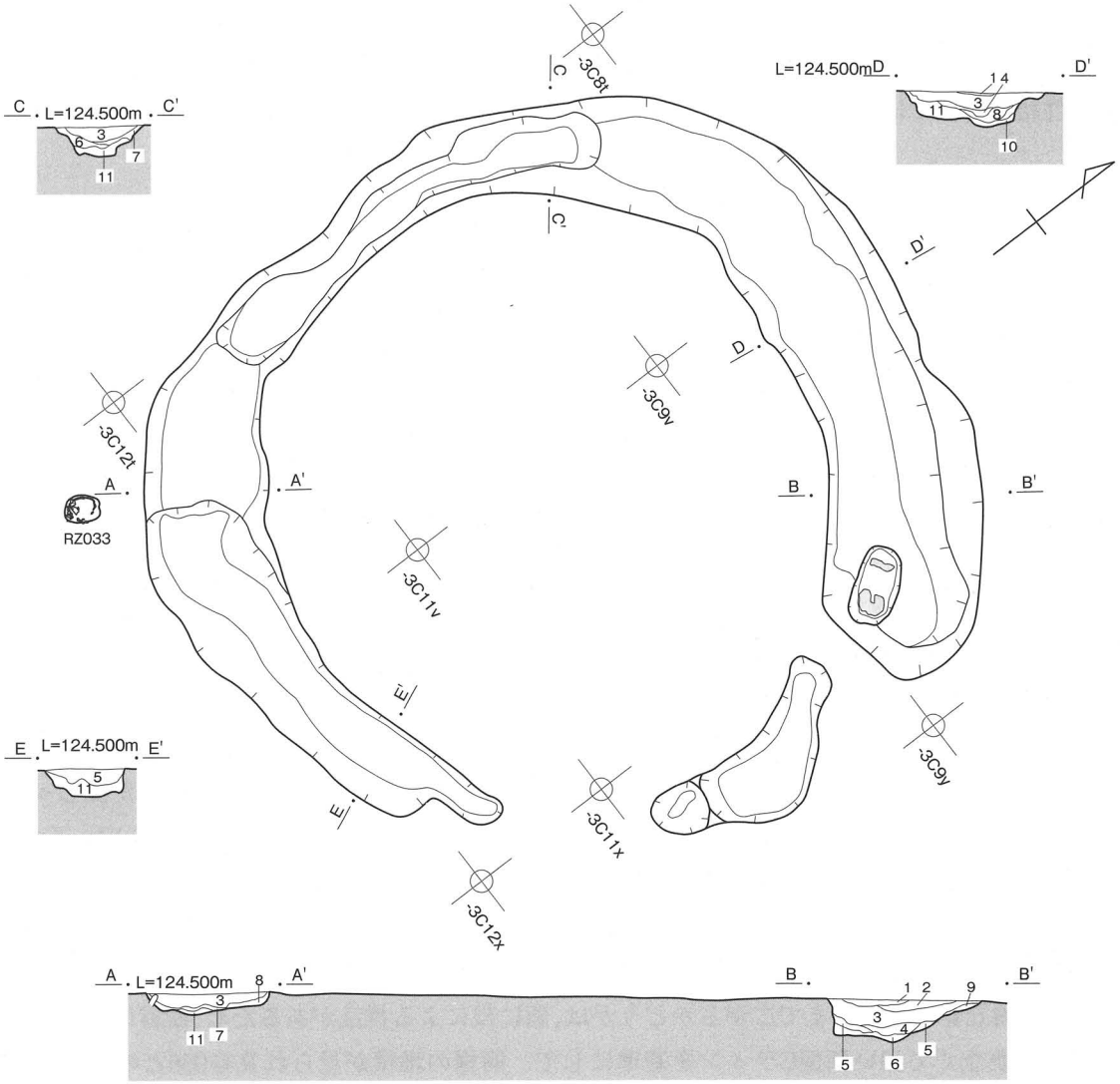
出土遺物（第73図、写真図版56）

〈出土状況〉検出面から土師器24ｇ、断面Ｂライン東側の底面付近から刀子１点が出土している。また、付属土坑の底面からは枕状と棒状の礫が設置された状態で出土している。

〈掲載遺物〉周溝内出土の土師器１点と刀子１点、付属土坑出土の礫を２点掲載した（145～147、写真図版56－196）。145はロクロ成形の土師器坏である。外面には読み方は不明だが刻書が認められる。146は刀子である。関部は斜関で、刃部側より柄部側が太い。

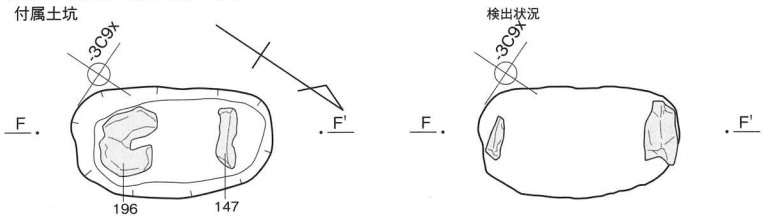
147は付属土坑出土の礫で、加工痕及び使用痕は確認できない。196は「Ｃ」字状に中央部が削られている。ホルンフェルス製で、147と正対する位置に設置されており、枕のようにも思われるが、用途については不明である。なお、196は検出段階から風化が著しく実測不可能な状況であったことから写真のみ掲載した。

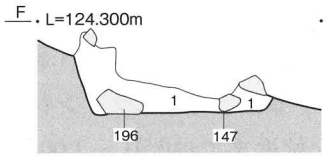
時　期　出土遺物が乏しく、重複する遺構もないため構築年代は不明である。墳丘が削平された時期についても定かではないが、検出面からロクロ成形の土師器坏が出土していることと十和田ａテテフ



0　平・断面（1：100）　4m

1　十和田aテフラ層
2　10YR3/2　黒褐色　混和物ほとんどなく3層より色調が明るい
3　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック(φ1～3mm)5%含む
4　10YR3/2　黒褐色　地山ブロック(φ1～2mm)30%含む　墳丘崩落土か
5　10YR3/2　黒褐色　地山ブロック(φ1～2mm)20%含む　墳丘崩落土か
6　10YR4/3　にぶい黄褐色　黒色土と黄橙色土ブロックを多量含む
7　10YR4/3　にぶい黄褐色　壁面付近に黒色土と黄橙色土を多く含む
8　10YR7/8黄橙色と10YR4/3にぶい黄褐色の混合土　黄橙色土は粘土ブロック　墳丘崩落土か
9　10YR3/2　黒褐色　粘性やや強　墳丘崩落土
10　10YR2/2　黒褐色　黄橙色土10%含む
11　10YR7/8　黄橙色粘土　粘性強　黒色土30%　地山小ブロックを含む　墳丘崩落土か
付属土坑
1　10YR2/2　黒褐色　粘性強　地山ブロック含む





0　平・断面（1：40）　2m

第29図　RZ017

ラが上面に堆積していることから平安時代には周溝は既に埋没していたものと考えられる。また、付属土坑については枕状の礫が設置されていることから本古墳の従属埋葬施設であると考えられるが、被葬者の性格については不明である。

ＲＺ018古墳

遺　構（第30図、写真図版18）

〈位置・検出状況〉－４Ｃ24ｑ～－３Ｃ５ｓグリッドに位置し、周溝のみ検出されている。検出面はⅢ層下部～Ⅳ層上面で、植物の痕跡か、所々黒土が残る。この黒土は地山が汚れたといった感じで良く締まり、遺構の堆積土とは比較的明瞭に異なる。周溝が途切れる部分にも、比較的広い範囲にこの土があり、その下に周溝の続きが出るかと一部下げてみたが、存在しなかった。

〈精査状況・図〉重複の項に詳述したように、重複関係の把握に最後まで悩んだ。堆積土は一部地山再堆積土でわかりにくい部分もあったが、全体的には判断に迷うものは少なく順調に進んだ。ただし、深いためもあって掘削に作業員約７名で約６日、ベルト除去に２名で約１日費やしている。

〈重複関係〉周溝の南西隅で、ＲＧ056と重複している。新旧関係は検出面でははっきりせず、灰白色火山灰を含む３層が両方の溝を横断するように広がっていたため、むしろＲＺ018の方が新しいとさえ見えた。掘り下げ始めてしばらくも堆積土の様子から同様に見えた。掘り上がった後もＲＧ056が、ＲＺ018との重複部分だけ前後より深く掘り込んでいるため、他の地点と異なった特徴を示すこと、堆積土が、灰白色火山灰が混じる以外は、基本的に黒～黒褐色土と黒褐色土に黄褐色土が混じったものの２種類しかなくて区別がつきがたいこと、さらに、底面はＲＧ056も地山まで掘り込んでいるため、間に分水嶺状の高まりがあるのだが、それを挟んで両遺構の土層が比較的似た特徴を示すため明瞭にどちらの遺構に帰属するか分けがたいこと（両遺構とも原則として上半分は黒～黒褐色土、下半分は黄褐色土混じりの土）から、新旧関係は明瞭とは言えなかった（特に断面Ａラインの部分で、３層が本当に古墳の墳丘側いっぱいまで広がるかどうかは、間に根による撹乱があるため、断言はできない）。

結局、重複がなくて深い断面Ｃラインを基準にして、同様の堆積が見られＲＧ056との重複関係が比較的はっきりしている断面Ｄラインから、ＲＺ018→ＲＧ056と判断した。第３層は、ＲＺ018の最上面にも存在するが、基本的には第１～７層がＲＧ056、それ以下がＲＺ018に帰属すると考える。第６・７層及び第11～16層は、地山掘削土の再堆積であろう。

何故、ＲＧ056はＲＺ018と重複している部分を他と比べて深く掘り、上部を古墳の墳丘側にかなり幅広く掘ったのか（特に断面Ａラインの所）、不明だが、Ａラインの部分で３層が墳丘側いっぱいまで広がっているところは、周溝の上部に不連続な段が形成されており、異なる遺構が重複し、この部分を覆う３層が主体的に存在するＲＧ056の方が新しいことの傍証になると思われる。

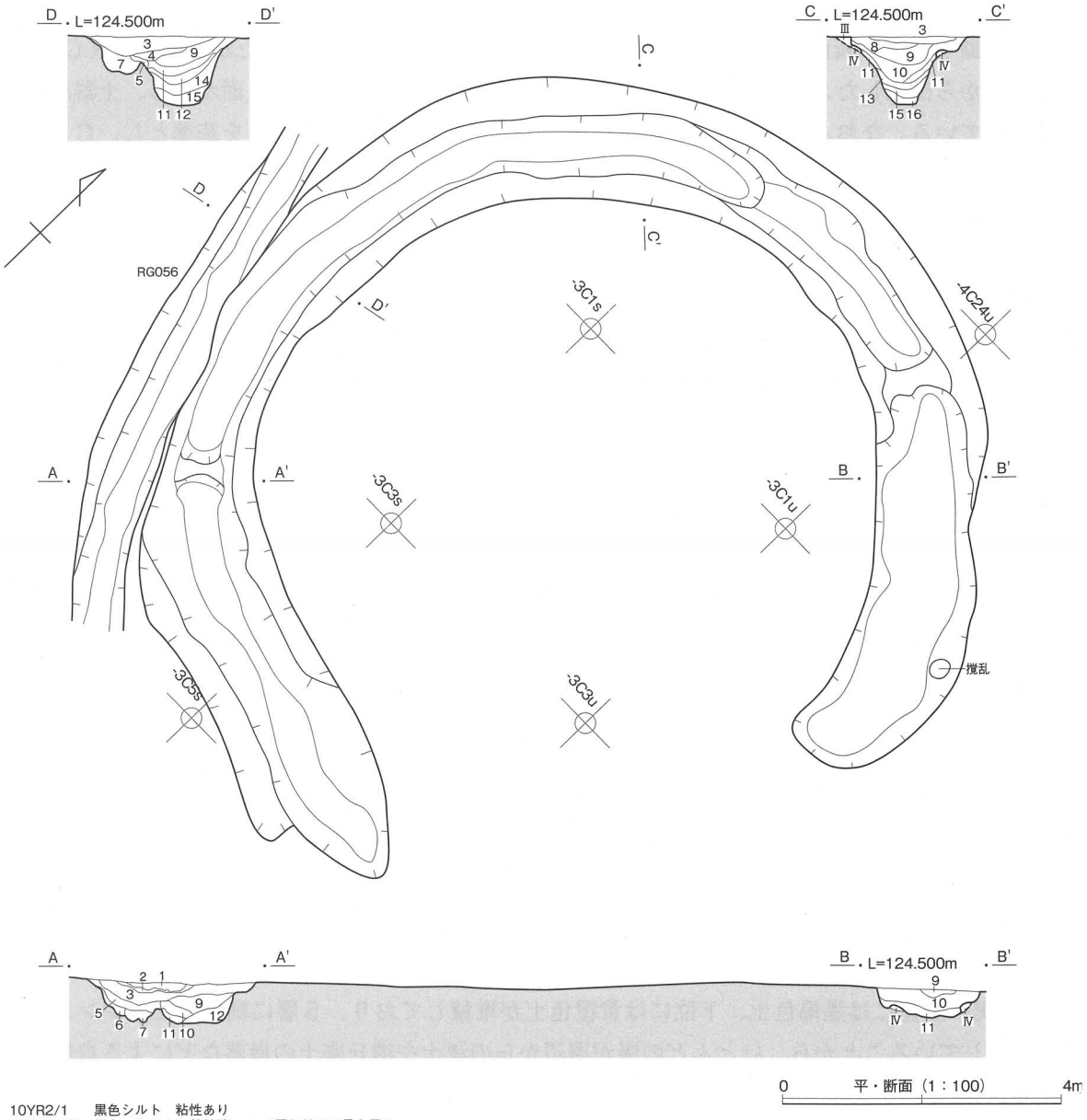
また、上記のような重複関係であり、３層はＲＺ018のＲＧ056と重複しない最上部からも検出されたことから、両者の時期差はそれほど大きくないと推測される。

〈墳丘・埋葬施設〉平面形は円形で、現存規模は8.30×8.90mである。墳丘は既にⅢ層まで削平されており、墳丘の高さ・構築方法などの情報を得ることはできなかった。

埋葬施設も墳丘とともに削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。

〈周溝〉南東方向が開く馬蹄形で、検出面での幅は1.75mである。検出面からの深さ・断面形は、地点による違いが大きい。断面形は逆台形～かまぼこ形を基本とするが、断面Ｃライン付近は非常に深いためＶ字形に近い。ＲＧ056と重複する付近～断面Ｃライン付近までは0.70～1.00mと深いが、

周溝が途切れる部分では浅く0.5m以下で、次第に消えていくといった状態に近い。壁面は、検出面から下に10cmほどがⅢ層で、その下が砂質のⅣ層となり、底は深い場所（断面A→D→Cライン付近の大部分）ではⅤ層（粗砂）、それ以外の場所では砂質のⅣ層となる。底面は、掘り方そのままの様相で凹凸が著しい。以上から、周溝には“形を整える”という意識があまり窺えず、古墳の墳丘の土量確保という目的の“結果”に過ぎないのではないかと推測される。



1　10YR2/1　黒色シルト　粘性あり
2　10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性強　4・8層と並んで最も黒い
3　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり　下部にブロック状に灰白色火山灰含む　炭化物含む
4　10YR1.7/1　黒色　シルト
5　10YR2/1　黒色　シルト　粘性あり　硬くしまる　根撹乱か　Ⅳ層粒子含む
6　10YR3/1黒褐色地に10YR5/6黄褐色の大きなブロック　シルト　粘性強　Ⅳ層崩落土の再堆積
7　10YR3/1黒褐色地に霜降り状に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　粘性強　Ⅳ層粒子多く　Ⅳ層ブロック含む　11層によく似る
8　10YR1.7/1　黒色　シルト　性質は4層に類似する　同一層か
9　10YR2/1　黒色　シルト　粘性あり
10　10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性強い　2・4・8層に次いで黒い
11　10YR3/1黒褐色地に霜降り状に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　粘性強い　Ⅳ層粒子多く含み　Ⅳ層ブロック含む　7層によく似る
12　10YR1.7/1　黒色の下部に10YR4/4褐色のブロック　シルト　粘性あり　下部にⅣ層粒子多く含む
13　10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色の斑　粘土質シルト　Ⅳ層再堆積土に黒褐色土混じる
14　10YR3/1黒褐色地に霜降り状に10YR5/6黄褐色のブロック　粘土質シルト　Ⅳ層再堆積土と黒褐色土の混土
15　10YR4/2灰黄褐色地に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト　褐色土にⅣ層再堆積土混じる
16　10YR5/6黄褐色地に10YR3/1黒褐色の斑　砂質シルト　Ⅳ層　Ⅴ層（砂層）再堆積土に黒褐色土混じる

第30図　RZ018

〈堆積状況〉周溝内堆積土は、上半部（８～10層）黒～黒褐色土、下半部（11～16層）は黒～黒褐色土に黄褐色土が混じる層で地山掘削土の再堆積と思われる。堆積方向から考えると、ほとんどの層は墳丘側から供給されたことが分かる。３層の下部にある火山灰はブロック状で層をなさない。３層は、ＲＧ056との重複部分ではＲＧ056の方に帰属し、重複しない部分でも、他層と異なって周溝の中央付近に浅くレンズ状に堆積していないこと、さらに周溝の堆積土上面で３層は不連続に点在することなどから考えると、本来的には３層は本遺構の堆積土ではない可能性もある。

出土遺物（第73図、写真図版56）

〈出土状況〉遺物の出土は非常に少ない。何れも土師器・須恵器の小破片で、本遺構に伴うものではないと判断される。断面Ａラインの辺りから比較的多くの土器片が出土したが、本来はＲＧ056の第５層上面から出土したようである。断面Ｂラインの北側の第10層、第11層上面からも、土器片の出土を確認している。なお、遺物取り上げの区画として、断面図Ａ～Ｄのベルトを基準とし、ＣとＤの間をＱ１Ａ、ＤとＡの間をＱ１Ｂ、ＣとＢの間をＱ２、Ａより南をＱ３、Ｂより南をＱ４と呼称した（ベルトは含まない）。（金子）

〈掲載遺物〉須恵器大甕の体部破片２点と凝灰岩製の磨石１点を掲載した（148～150）。大甕はいずれも内外面に叩きの痕跡が認められる。磨石は２面に使用痕が認められる。

時　期　重複関係からＲＧ056より古い古墳と判断できるが、厳密に本遺構に伴う遺物がないため構築時期については不明である。周溝の埋没時期についても不明な点が多いが、十和田aテフラと第３層の堆積状況から平安時代にはほぼ埋没していたものと考えられる。（村田）

ＲＺ019古墳

遺　構（第31図、写真図版28・30）

〈位置・検出状況〉－４Ｃ19ｋ～－４Ｃ22ｌグリッドに位置する。検出面はⅡ層下位で、弧状の黒褐色プランが向かい合うよう状況で確認された。周溝のみ残存しており、墳丘及び埋葬施設は削平のため消滅している。〈重複関係〉認められない。

〈墳丘・埋葬施設〉平面形はやや不整な円形で、現存規模は直径約4.90mである。Ⅱ層まで削平されていたため墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

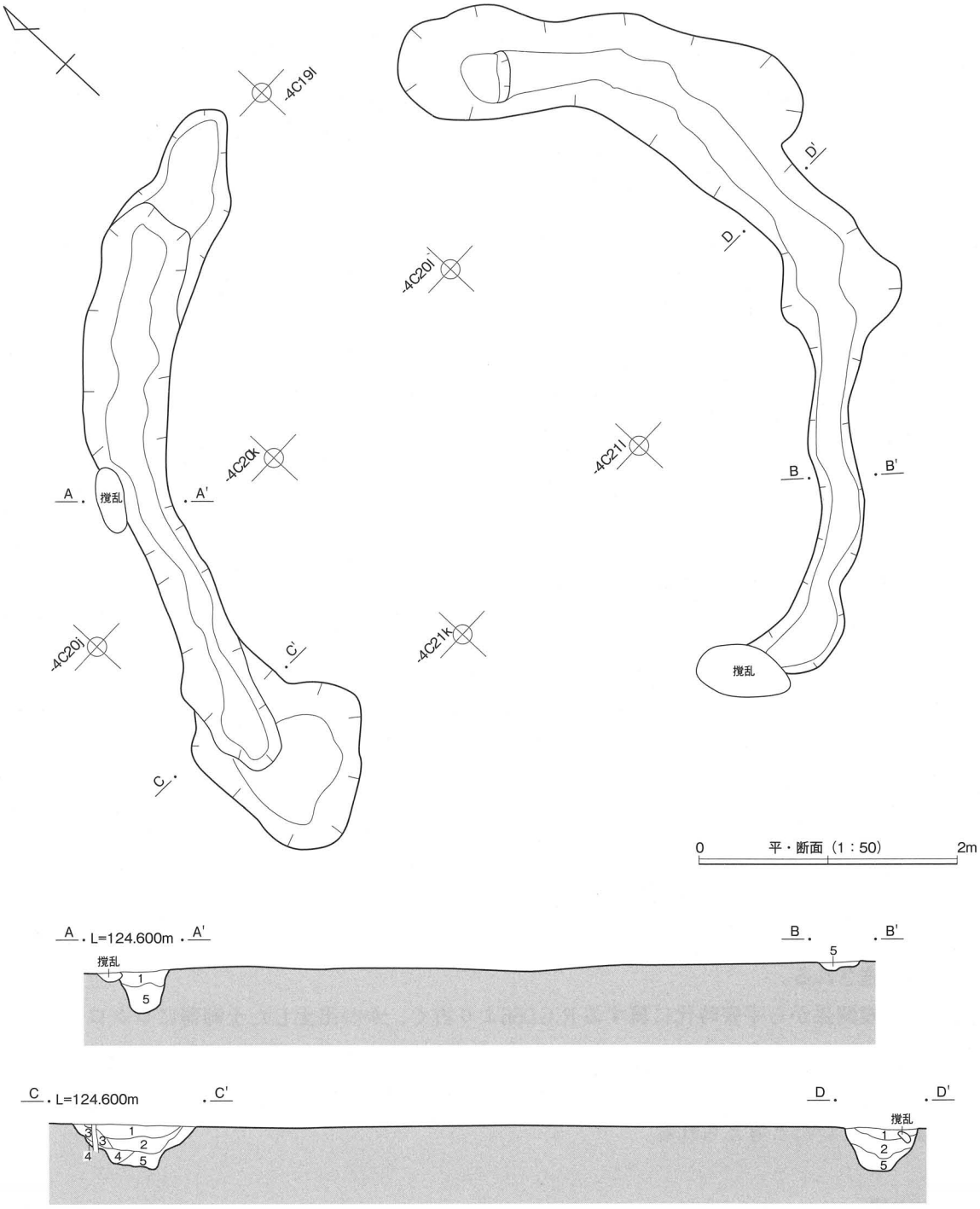
また、埋葬施設も削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。

〈周溝〉２ヵ所が途切れるタイプの周溝で、北東側と南西側に開口部をもつ。削平と撹乱の影響で幅や深さが一定ではなく、西側周溝のほうが東側周溝よりも深い。断面形は逆台形を基調としており、深さは５～35cmと一定ではないが両側とも中央部が最も深くなる。底面の凹凸は少ないが、幅も高さも一定ではなく、平坦に整えるという意識は高くなかったものと考えられる。

〈堆積状況〉上位には黒褐色土、下位には黄橙色土が堆積しており、５層に細分した。レンズ状の堆積状況をしていることから、ほとんどの層が周辺からの流土や墳丘盛土の崩落などによる自然堆積と考えられる。

出土遺物　東側周溝から土師器片が１点（３ｇ）出土しているが、細片のため図示できなかった。

時　期　出土遺物が乏しく、重複する遺構もないため構築年代は不明である。



1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック5%含む
2　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック15%含む　1層と由来は同じ
3　10YR3/2黒褐色～10YR6/4にぶい黄橙色　墳丘崩落土
4　10YR7/8　黄橙色　粘性やや強　壁面崩落層で黒色土が若干混入する
5　10YR7/8黄橙色と10YR3/2黒褐色の混合土　粘性やや強　黄橙色土は粘質土で地山崩落ブロック

第31図　RZ019

ＲＺ020古墳

遺　構（第32図、写真図版19）

〈位置･検出状況〉－４Ｃ15ｇ～－４Ｃ20ｉグリッドに位置する。検出面はⅡ層下位～Ⅲ層上面で、「Ｃ」字状の黒褐色プランとして確認された。周溝のみ残存しており、墳丘及び埋葬施設は削平のため消滅

している。
〈重複関係〉周溝南側でＲＧ056、東側でＲＤ114陥し穴状遺構と重複し、ＲＤ114の上面を本遺構が壊している。ＲＧ056との新旧関係については、十和田aテフラ混入層である第１層が両遺構のほぼ中央に堆積していたため検出段階では不明であったが、断面観察の結果、ＲＧ056堆積土がＲＺ020の周溝内堆積土を切るように堆積している状況が確認されたことからＲＺ020の周溝埋没後→ＲＧ056掘削と判断した。
〈墳丘・埋葬施設〉平面形は円形である。北東側に二股に分かれた溝があり、どちらかが本古墳の周溝と考えられる。ただし、重複部分と考えられた断面Ｂライン付近の堆積状況を観察しても堆積土が全く同じで分層できなかったため、どちらが周溝となるのかは不明である。墳丘規模は内側の溝を周溝と仮定すると直径約8.00m、外側の溝と仮定すると直径約8.50mとなる。
　なお、Ⅲ層まで削平されていたため墳丘と埋葬施設は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。
〈周溝〉北西側が大きく開く形状の周溝である。西側と東側にも周溝が途切れる部分があるが、この部分は元々浅かったために削平によって消滅したものであり、本来的には北西側を除いて周溝は全て繋がっていたと考えられる。断面形は皿形の部分が多いが、削平の影響で浅くなっているため本来の形状は不明である。底面・壁面とも掘り方のままの部分がほとんどであり、凹凸が著しい。
〈堆積状況〉重複するＲＧ056堆積土とあわせて11層に細分しており、そのうち第６～10層が周溝内堆積土である。上位には黒褐色土、底面付近には黒褐色土と黄橙色土の混合土が堆積する。全体に浅いため堆積要因については不明である。
出土遺物（第73図、写真図版56）
〈出土状況〉周溝内から土師器が328ｇ出土している。ＲＧ056との重複部分であるＡ・Ｄライン付近からの出土がほとんどで、このなかで第９・10層出土のものについてのみ本古墳に帰属するものとみなしている。
〈掲載遺物〉土師器坏を１点掲載した（151）。成形にロクロを用いない丸底の坏であるが、体部上半を欠損しているため全形は不明である。外面には横位・斜位にヘラ削り調整、内面にはミガキ調整と黒色処理が施される。
時　期　重複関係から平安時代に属するＲＧ056より古く、かつ出土した土師器にロクロ成形のものが含まれないことから奈良時代までに構築された古墳と考えられる。墳丘の削平時期については不明であるが、ＲＧ056が本古墳周溝の堆積土を切るように構築されていることから、平安時代前半には周溝は埋没していたと考えられる。

ＲＺ021古墳

遺　構（第33図、写真図版28・30）
〈位置・検出状況〉－４Ｃ14ｋ～－４Ｃ16mグリッドに位置する。検出面はⅡ層最下位～Ⅲ層上面で、「Ｃ」字状の黒褐色プランとして検出された。周溝のみ残存しており、墳丘及び埋葬施設は削平のため消滅している。　〈重複関係〉認められない。
〈墳丘・埋葬施設〉平面形は円形で、直径は約3.8mである。削平のため墳丘は既に消滅しており、樹木根と考えられる黒色土が点々と分布しているのみであった。そのため、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。
　また、埋葬施設も削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。

1　10YR2/2　黒褐色　十和田aテフラブロック含む
2　10YR2/2　黒褐色　粘性やや強
3　10YR4/3　にぶい黄褐色　地山ブロック（φ3～10mm）20%含み、色調が若干黄色がかる※1～5層がRG056堆積土、6～10層がRZ020堆積土
4　10YR3/2　黒褐色粘質土　粘性やや強　地山ブロック5%含む
5　10YR7/8黄橙色と10YR3/2黒褐色の混合土　粘性やや強　黄橙色土は地山崩落ブロック
6　10YR2/2　黒褐色粘質土　粘性やや強　地山ブロック5%含む
7　10YR2/2黒褐色と10YR4/3にぶい黄褐色の混合土　地山ブロック20%含む　墳丘崩落土
8　10YR2/2黒褐色と10YR7/8黄橙色の混合土　粘性やや強　やや砂質　壁面崩落土
9　10YR3/2　黒褐色　粘性やや強　4層に類似するが地山ブロックを15%含む
10　10YR3/2　黒褐色　粘性やや強　地山ブロック30%含む
11　10YR5/3　にぶい黄褐色　基本土層Ⅱ・Ⅲ層の漸移層

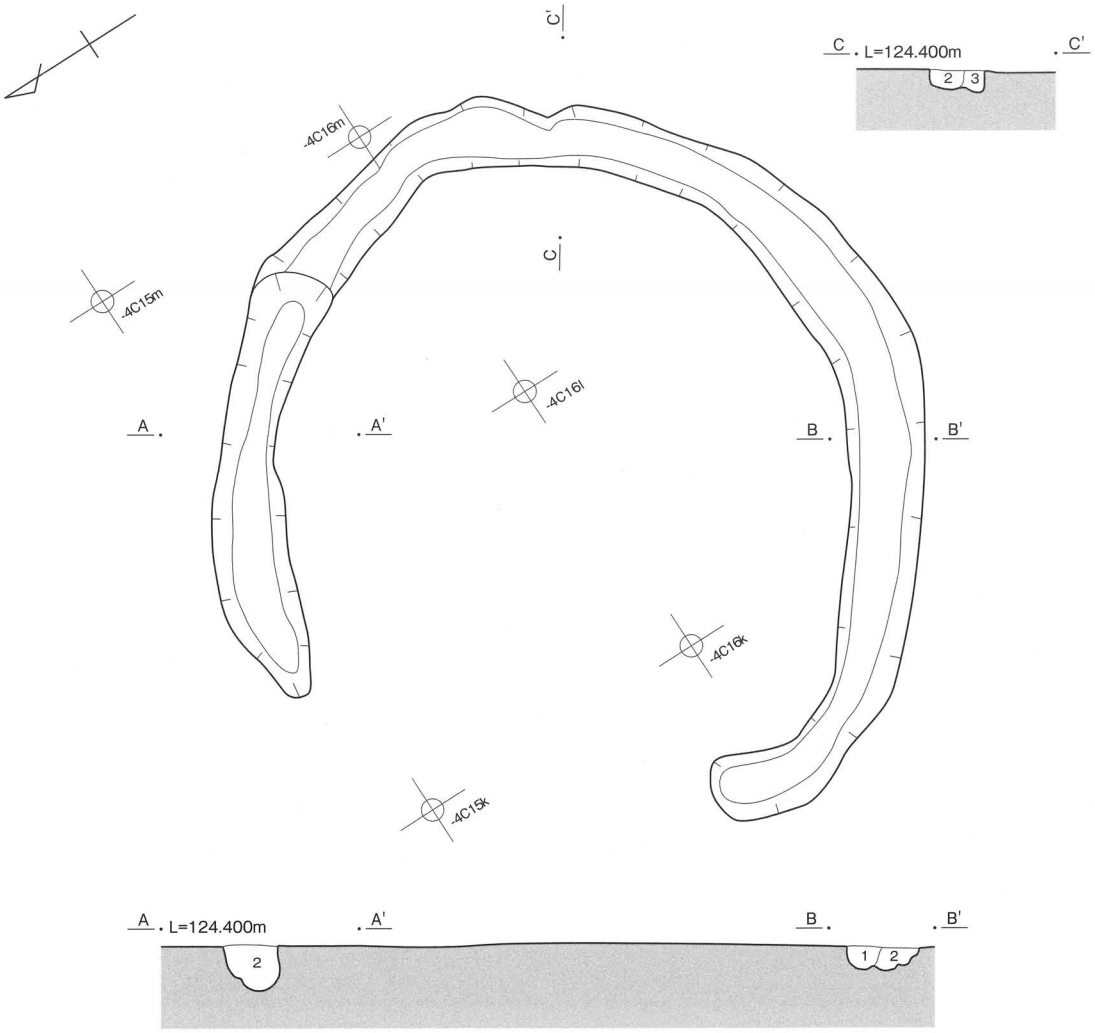
第32図　RZ020

〈周溝〉北西側が開く「C」字状プランの周溝である。大幅に削平されているが、上面の幅は比較的一定であり、現存規模は0.33～0.58mである。断面形は箱型を基調としており、深さは0.15m前後である。底面は根撹乱以外の凹凸はほとんどなく、水平を意識して平坦に整えられている。ただし、北側（Aライン付近）は二段に掘り込まれているため断面形は蒲鉾形となり、深さも0.30m前後と若干深くなる。

〈堆積状況〉３層に細分できるが、非常に浅いため各層の由来や流入方向は判然としない。

出土遺物　なし。

時　期　出土遺物・重複関係ともにないため構築年代は不明である。今回検出されたなかでは最も小



1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック5%含む
2　10YR2/1　黒色　粘性やや強　地山ブロック（φ10mm）20%含む
3　10YR4/2　黄褐色　漸移層か

0　平・断面（1：50）　2

第33図　RZ021

規模な古墳であり、かつ唯一北西方向のみに開口部をもつものである。

ＲＺ022古墳

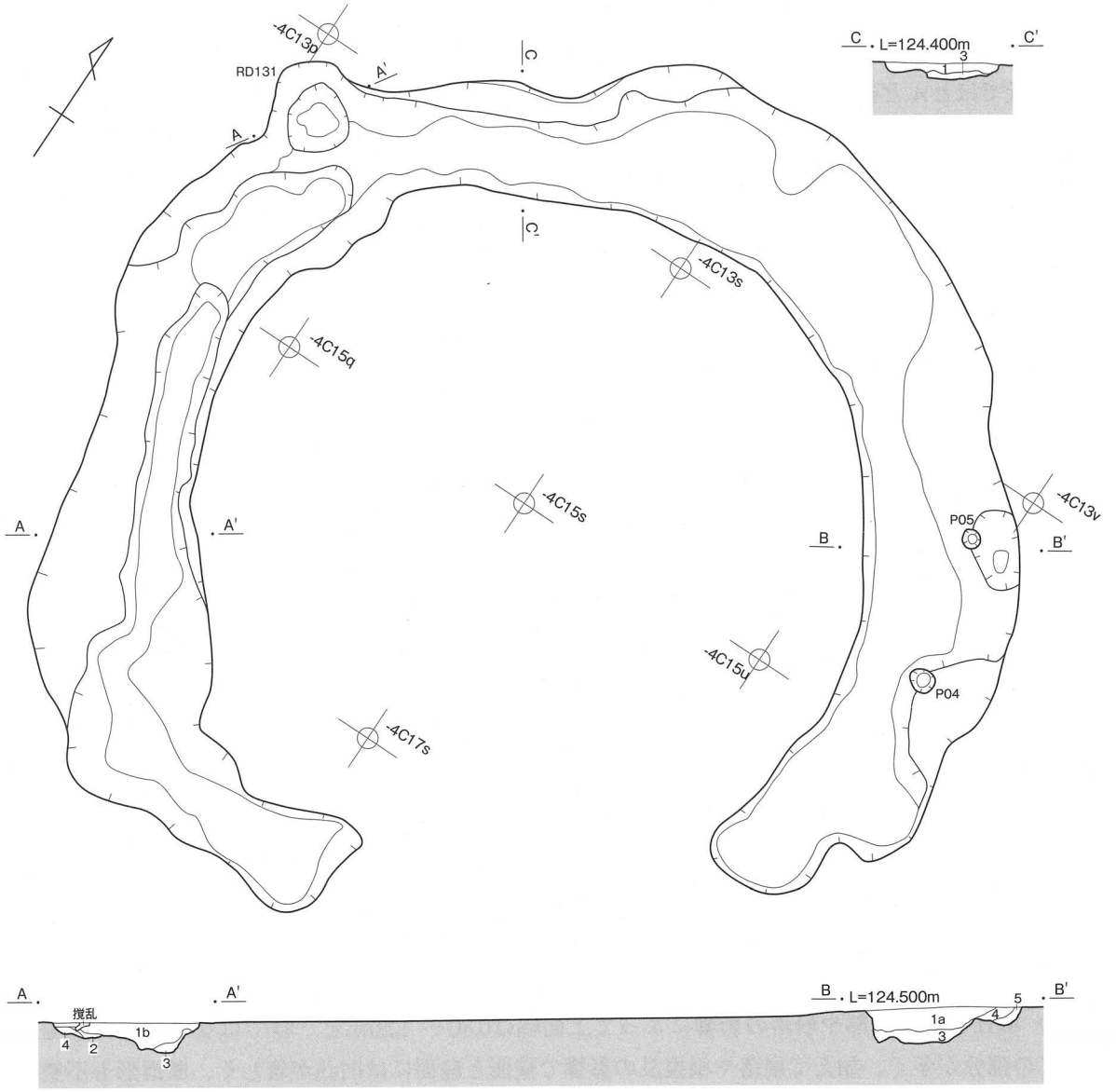
遺　構（第34図、写真図版20）

〈位置・検出状況〉－４Ｃ12ｑ～－４Ｃ18ｓグリッドに位置する。検出面はⅡ層下位で、「Ｃ」字状の黒褐色プランとして検出された。

〈重複関係〉ＲＤ131土坑、Ｐ04・05と重複関係にある。ＲＤ131との関係については、ＲＤ131堆積土には十和田ａテフラは混入せず、さらにＲＤ131堆積土を切るように本古墳の第１層が堆積していることからＲＤ131埋没後→ＲＺ022周溝掘削と判断した。Ｐ04・05については周溝内堆積土と性質がほとんど変わらないため新旧関係を把握することはできなかった。

〈墳丘・埋葬施設〉平面形は円形で、現存規模は直径約9.30ｍである。Ⅱ層下位まで削平されていたため墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

また、埋葬施設も削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。



1a 10YR2/2　黒褐色　十和田aテフラを含まない
1b 10YR2/2　黒褐色　十和田aテフラ5%含む
2 10YR4/2　灰黄褐色　地山砂質土10%含む周辺からの流土
3 10YR7/8黄橙色と10YR2/2黒褐色の混合土　粘性やや強　墳丘崩落土
4 10YR6/4　にぶい黄橙色　地山または漸移層の流土か　やや砂質
5 10YR2/2黒褐色～10YR6/4にぶい黄橙色　地山ブロック3%含む　砂質
6 10YR4/2　灰黄褐色
※十和田aテフラは断面Cラインより南側にのみ混入する

0　平・断面（1：100）　4m

第34図　RZ022

〈周溝〉南東側が開く「C」字状プランの周溝である。規模は開口部付近とその反対側が上面幅1.00～1.60m、深さ0.20m、その両脇にあたるA・Bライン付近が上面幅2.0m前後、深さ0.40～0.50mである。壁面は墳丘側が垂直ないし鋭角に立ち上がり、外側がハの字状に開く形状である。底面は掘り方の凹凸と根搅乱が著しく、底面のレベルは一定ではない。なお、後述するように本古墳には貼床状の堆積土は認められず、底面は墳丘盛土確保のための掘り方そのままである。

〈堆積状況〉黒褐色土と黄褐色系の砂質土が主体であり、5層に細分した。このうち最上位層である第1層は周溝内堆積土の大半を占めており、ブロック状に十和田aテフラが混入する。ただし、堆積状況は一様ではなく、十和田aテフラはCラインから南側でのみ確認されており、それより北側は混和物のほとんどない黒褐色土である。堆積状況から第1・2・4・5層は自然堆積層と考えられるが、

第３層のみ人為堆積とも判断できる水平堆積が確認されている。第３層については周溝底面を平坦に整えるための貼床状堆積土とも考えたが、上面レベルが一定でないことと掘り方の凹凸が著しいＡライン付近でほとんど確認されていないことから墳丘盛土の崩落土と判断した。

出土遺物（第73図、写真図版56）

〈出土状況〉周溝内から土師器が500ｇ出土している。出土地点は周溝南側（Ｑ４＝Ａラインより東側）と北側（Ｑ１＝Ｂ－Ｃライン間）に限られており、それぞれ坏１個体分の破片が出土している。

〈掲載遺物〉土師器坏２点を掲載した（152・153）。いずれも成形にロクロを用いない丸底の坏で、内面にはミガキ調整と黒色処理が施される。152は丸みをもって立ち上がり、中位に段を形成して口縁部は直線的に外方に開く。153も類似した形態であるが、152よりも段の位置が低く、屈曲も明瞭ではない。

時　期　出土した土師器坏が8世紀代に位置づけられることから奈良時代には構築されていたと考えられる。墳丘の削平時期及び周溝の埋没時期については、最上位に十和田aテフラが混入することから平安時代と考えられる。なお、今回調査した古墳のなかでは墳丘規模・周溝幅とも最大である。

ＲＺ023古墳

遺　構（第35・36図、写真図版21）

〈位置･検出状況〉－４Ｃ21y～－３Ｄ１cグリッドに位置する。検出面はⅡ層最下位～Ⅲ層上位で､「Ｃ」字状の黒褐色プランとして検出された。周溝のみ残存しており、墳丘及び埋葬施設は削平のため消滅している。

〈重複関係〉認められない。

〈墳丘〉平面形は隅丸方形に近く、推定規模は8.50×7.20ｍである。北側に幅1.80ｍ程の張り出し部をもっているため、この部分のみ周溝幅が非常に狭くなる。樹木根は多々見られるが、削平によって墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

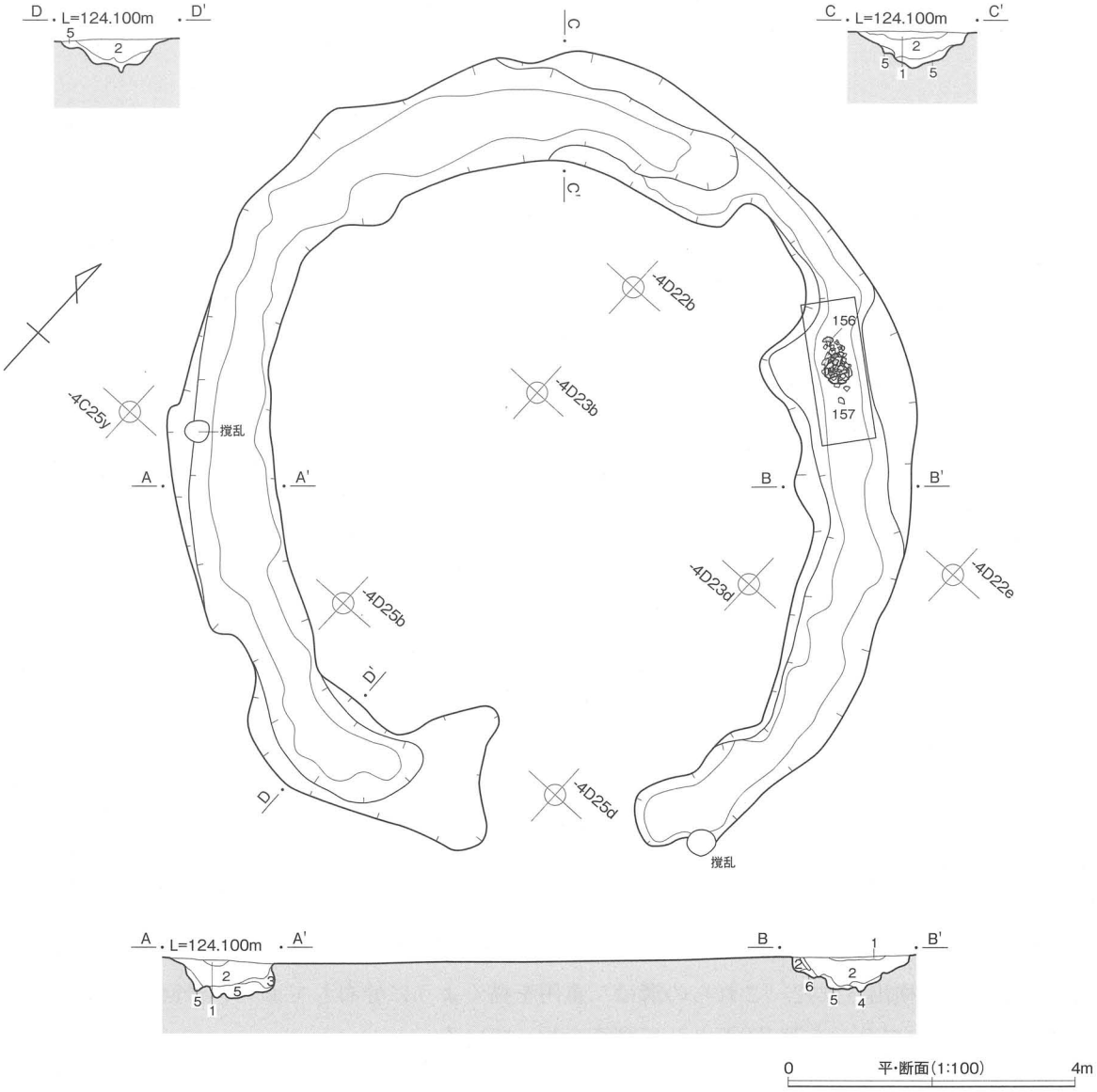
　また、埋葬施設も削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。

〈周溝〉墳丘張り出し部や崩落の影響によって上面幅は0.80～1.50ｍと一様ではない。底面は掘り方のままの部分が多く、加えて崩落や根撹乱の影響で壁面と底面には凹凸が著しく、断面形も不整形な部分がほとんどである。

〈堆積状況〉黒褐色土主体で６層に細分した。南東側開口部付近を除く全域で最上位に十和田aテフラを多く含む黒褐色土（第１層）が薄く堆積し、その下位に地山ブロックを含む黒褐色土（第２層）が厚く堆積する。第２層の直下には黒褐色土と黄橙色土の混合土である第５層がほぼ全域で堆積している。地山ブロックを多く含むことと本層の上面及び直上の層で遺物の出土がみられることから底面を平坦にするために人為的に埋めた土とも考えられるが、上面の高さが一定でないことや人為堆積土としては締まりや粘性が弱いことなどから墳丘盛土の崩落土の可能性もある。

出土遺物（第74図、写真図版56・57）

〈出土状況〉第２層下位と第５層直上で土器片が出土している。断面Bライン北西側で須恵器大甕長頸瓶の破片が4,017ｇ出土している。大甕は、底部の残存状況から第４層中に立て置かれていたものと考えられる（第36図）。上部は破片状態であり、長頸瓶の破片も混在していたが、接合の結果ほぼ欠損無く復元することができた。なお、大甕内部及び周辺の土壌をサンプリングして室内整理の段階で洗浄を行ったが、須恵器の微細破片以外には何も出土しなかった。また、断面Cライン南西側では土師器坏１個体分（100ｇ）の破片が出土している。

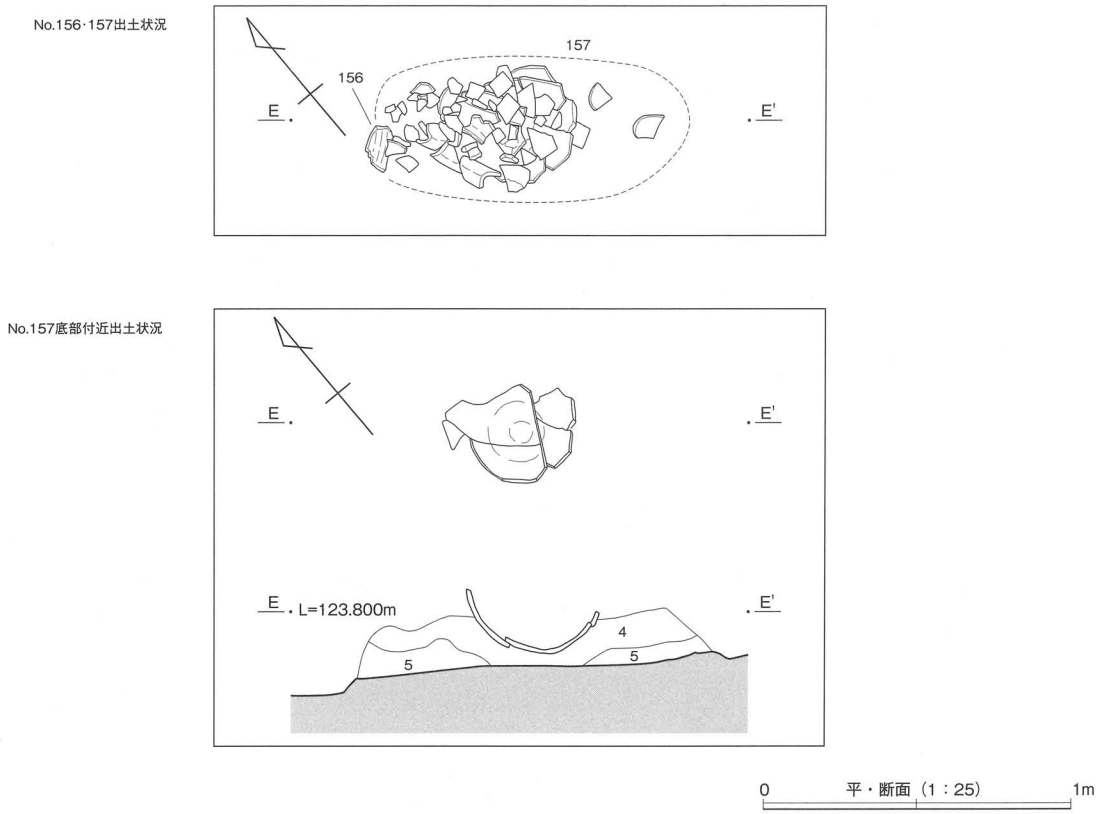


1　10YR2/2　黒褐色　十和田aテフラ30%含む
2　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック(φ1～3㎜)5%含む
3　10YR2/2　黒褐色土　地山ブロック20%含む　墳丘崩落土か
4　10YR2/2　黒褐色　しまりやや疎　地山砂質土25%含み、2層より色調明るい
5　10YR2/2黒褐色と10YR7/8黄橙色砂質土の混合土　しまりやや疎、粘性やや弱　全体的にはにぶい黄橙色
6　10YR7/8　黄橙色砂質土　地山崩落土
※地山は北側(断面B－C間)が黄橙色砂質土、南側(断面A－D間)が黄橙色粘質土　いずれも基本土層Ⅳ層相当

第35図　RZ023（1）

〈掲載遺物〉土師器１点、須恵器３点を掲載した（154～157）。154は内黒土師器の丸底坏である。体部は開き気味に立ち上がり、口縁部はナデ調整によって外反する。外面中央には段が形成されるが、内面にはそれに対応するものは認められない。155は須恵器長頸瓶の口縁部、156は体部の破片であり、外面の色調や胎土の特徴から接合はしないが同一個体と考えられる。157は須恵器大甕である。底部は尖底気味の丸底で、体部中央やや上に最大径をもつ。口縁部はハの字状に立ち上がり、端部はナデ調整によって外方に引き出されたように見える。

時　期　堆積土中位から出土した土師器坏が奈良時代、最上位に十和田aテフラが混入することから平安時代には既に埋没していたものと考えられる。



第36図　RZ023（2）

ＲＺ024・025古墳

遺　構（第37図、写真図版22）

〈位置・検出状況〉－４Ｃ７ｏ～－４C11ｒグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面で、弧状の溝が途切れながら複数検出された。これらの溝は二重円を描くように分布しており、今回は内側のプランをＲＺ024、外側のプランをＲＺ025として調査を行っている。

〈重複関係〉両者は東側周溝で重複関係にあるが、 両者とも遺存状況が良くないため断面観察でも新旧関係を判断することはできなかった。なお、ＲＺ025は南側周溝でＲＤ132土坑と重複関係にあるが、こちらについても堆積土が酷似していたため新旧関係を判断することができなかった。

〈墳丘･埋葬施設〉両者とも円形の墳丘であったと考えられるが、削平が著しいため全形は不明である。残存する周溝間から規模を推定するとＲＺ024が直径約6.5m、ＲＺ025が直径約7.5mとなる。開口部についても不明な点が多いが、周溝の位置関係から南東側や西側に存在した可能性がある。

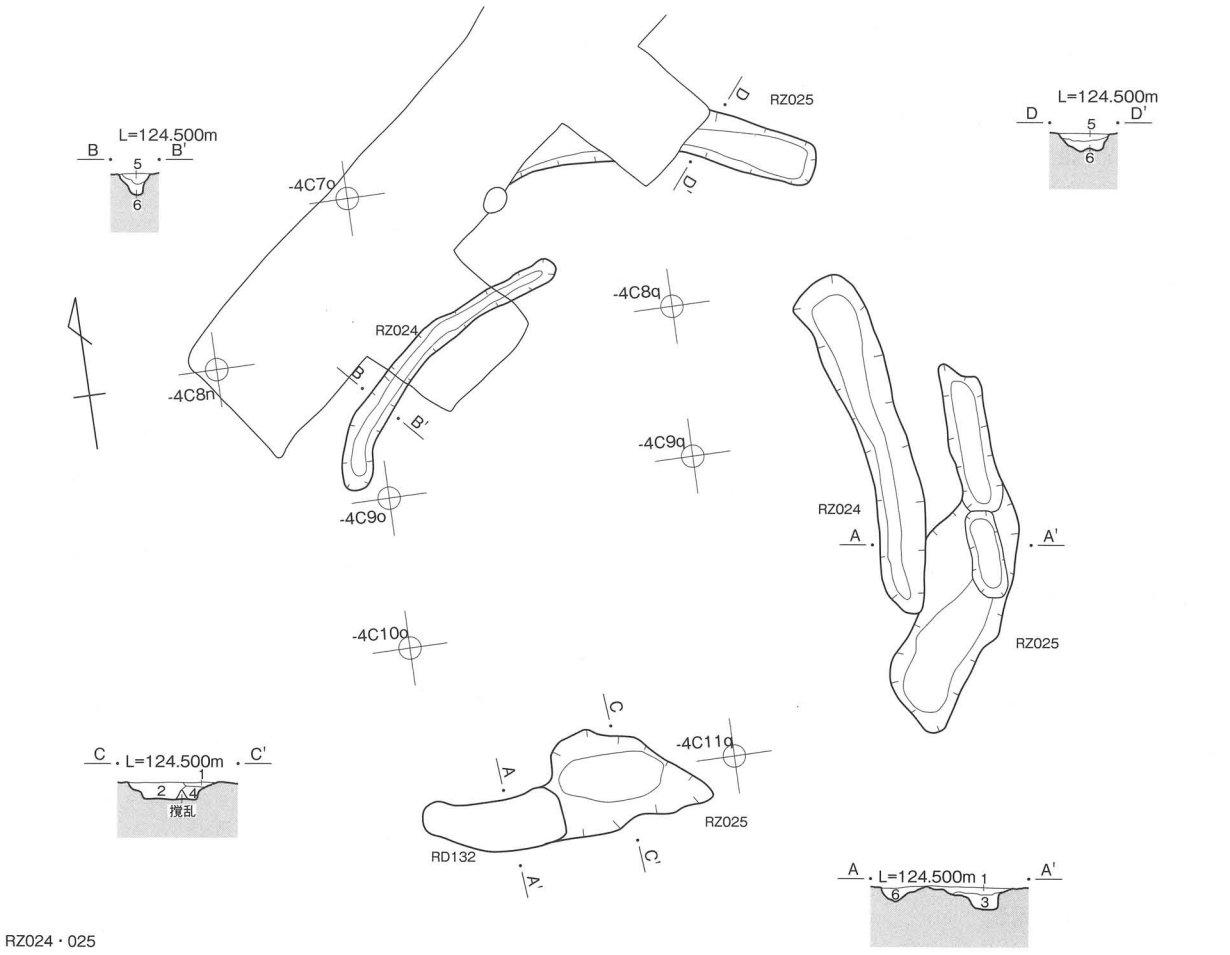
また、両者とも埋葬施設は削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。

〈周溝〉ＲＺ024は北西側と東側のみ残存する。両者とも比較的直線的な溝で、現存規模は北西側が上面幅0.4m、深さ0.25m、東側が上面幅0.6～0.8m、深さ0.15mである。断面形は逆台形で、北西側の底面は平坦であるが、東側は掘り方のままで凹凸がある。

ＲＺ025は北側・東側・南側が残存するが、削平と宅地造成時の撹乱によって非常に残りが悪い。断面形は逆台形で、深さは0.2～0.3mである。底面は全地点とも掘り方のままで凹凸が著しい。

〈堆積状況〉黒褐色土が主体であり、性質も非常に似ていたため両古墳をあわせて６層に細分した。削平の影響で遺存状況がよくないため各層の由来や堆積時期などは不明である。

出土遺物（第75図、写真図版57）



RZ024・025

1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック（φ5mm）3%含む
2　10YR3/2　黒褐色　粘性やや強　地山ブロック50%含む
3　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック（φ3～5mm）20%含む　1層より粒子粗くしまりも弱い
4　10YR3/2　黒褐色　粘性やや強　地山ブロック・にぶい黄橙色土合わせて30%含む
5　10YR2/2　黒褐色　混和物ほとんどなく1層より粘性強い
6　10YR7/8黄橙色と10YR2/2黒褐色の混合土

第37図　RZ024・025

〈出土状況〉重複する東側周溝で土師器片45ｇと陶磁器１点、ＲＺ025周溝内から土師器片22ｇが出土している。東側周溝では検出面と第１層で出土しており、出土地点からみるといずれもＲＺ025に帰属すると考えられるが、陶磁器も含まれているため周囲からの混入も考慮する必要がある。

〈掲載遺物〉検出面出土の陶磁器１点を掲載した（158）。瀬戸産の磁器端反碗で、外面に海浜風景文が描かれ、全面に透明釉が施される。土師器についてはいずれも細片で接合しなかったため図示することができなかった。

時　期　ＲＺ025の検出面～堆積土上位で近世陶磁器と土師器が出土している。しかし、後世に混入したものである可能性が高く判断根拠とするには弱いため、具体的な構築・埋没時期については不明である。また、両古墳及びＲＺ025と重複関係にあるＲＤ132とも堆積土が酷似していることから新旧関係も把握することができなかった。ただし、古墳が立体構造物であるという点を考慮すると、いずれかの墳丘が削平、あるいは周溝埋没後にもう一方が構築されたと考えられる。規模の点からいえば、先に小型のＲＺ024が構築されており、それが削平・埋没した後に一回り大きなＲＺ025が構築されたと考えるのが妥当であるが、先述したように周溝の重複部分が非常に少ないことからこれについても判断できなかった。

ＲＺ026古墳

遺　構（第38図、写真図版23）

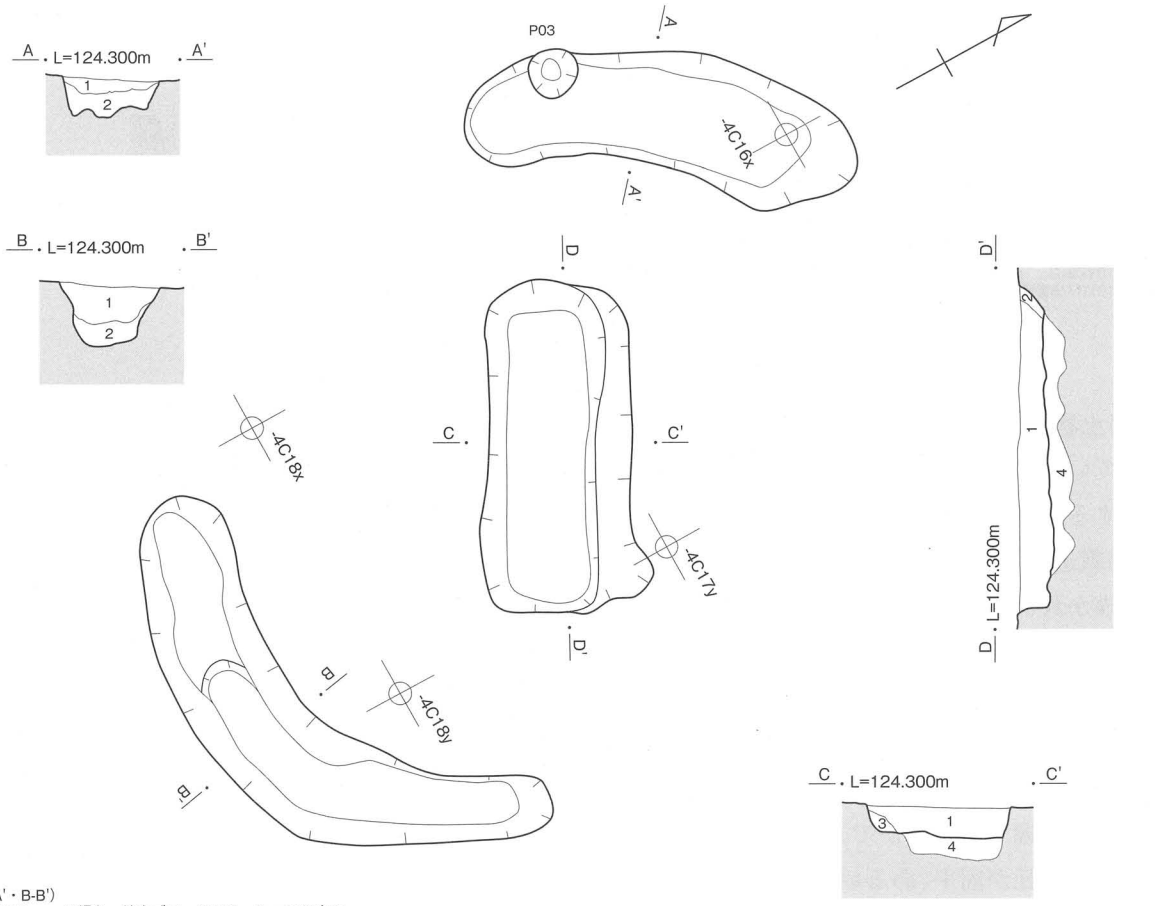
〈位置・検出状況〉－４Ｃ16ｗ～－４Ｃ18ｙグリッドに位置する。検出面はⅡ層下位である。

〈重複関係〉北西側周溝とＰ03が重複関係にある。堆積土は類似しているが、検出状況からＰ03が新しいと判断した。

〈墳丘・埋葬施設〉長方形プランの埋葬施設とその周囲を巡る周溝からなる。ただし、Ⅱ層まで大幅に削平されているため埋葬施設と北西側・南東側周溝しか残存しておらず、墳丘の高さや構築方法は不明である。残存する周溝から推定すると、平面形は円形で、規模は直径約4.30mである。

埋葬施設は北西－南東方向に長軸をとる長方形プランの土坑として検出した。上面規模2.2×0.94m、底面規模1.95×0.80m、検出面からの深さ0.20mである。主軸方位はN－62°－Wである。上面プランより一回り小型に掘り込み、そのなかに締まりのある黄橙色土と黒褐色土の混合土を充填して床面を構築している。床面は根撹乱の影響で凹凸もみられるが、基本的には平坦に整えられている。木棺が設置されていたと考えられるが、棺の痕跡を確認することはできなかった。また、副葬品や人骨なども出土していないため、被葬者の性格についても不明である。

〈周溝〉埋葬施設の北西側と南東側にのみ残存する。両者とも弧状プランであり、上面幅は0.7m前後である。深さは北西側が0.25m前後、南西側が0.40m前後となり南西側のほうが深い。南西側は砂質のⅣ層まで掘り込んでいるため比較的平坦であるが、北西側は根撹乱と掘り方によって凹凸が



周溝（A-A'・B-B'）
1　10YR2/2　　黒褐色　地山ブロック(φ2～5mm)3%含む
2　10YR2/1黒色と10YR7/8黄橙色の混合土　しまりやや疎　黄橙色土は地山砂質土

埋葬施設（C-C'・D-D'）
1　10YR2/2　　黒褐色　下位に地山ブロック(φ2～5mm)10%含む
2　10YR3/2　　黒褐色
3　10YR2/2黒褐色と10YR7/8黄橙色の混合土　黄橙色土は地山崩落土
4　10YR7/8黄橙色と10YR2/2黒褐色の混合土　しまりやや密　貼床か

第38図　RZ026

著しい。断面形は逆台形を基調としており、両壁とも立ち上がりの角度はほぼ同じである。
〈堆積状況〉埋葬施設内には黒褐色土が主体となって堆積していた。堆積状況から第２・３層は地山崩落土や流土と考えられるが、第１層は人為堆積の可能性がある。なお、底面は締まりのある黄橙色と黒褐色の混合土を貼床として用いているが、床面の硬化は認められなかった。

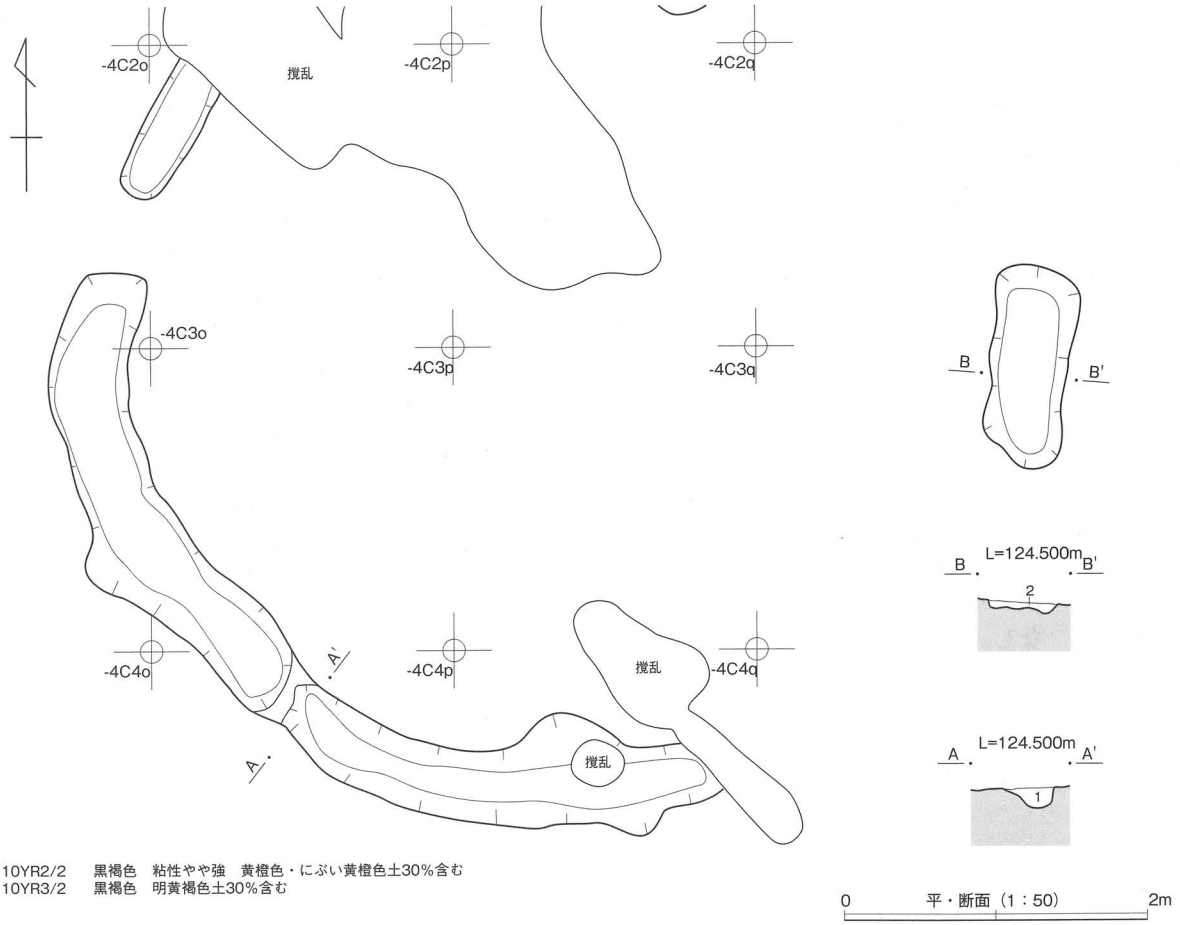
周溝内は上位に地山ブロックを微量含む黒褐色土、下位に黒色土と地山砂質土（Ⅳ層）の混合土が堆積していた。各層ともレンズ状堆積をしていることから自然堆積と考えられる。

出土遺物　なし。

時　期　重複関係からP03より古いと判断できるが、両者とも出土遺物がないため年代は不明である。今回検出した古墳のなかで唯一埋葬施設が検出されているが、副葬品などが全く出土していないため被葬者の性格についての情報を得ることはできなかった。

ＲＺ027古墳

遺　構（第39図、写真図版29・30）
〈位置・検出状況〉－４Ｃ２ｏ～－４Ｃ４ｑグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、半円形の弧状プランとして検出された。
〈重複関係〉他遺構との重複はないが、撹乱により墳丘部分・周溝ともに大きく壊されている。
〈墳丘〉平面形は円形と考えられるが、北西側が大幅に削平されているため規模は不明である。Ⅲ層まで削平が及んでいたため墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

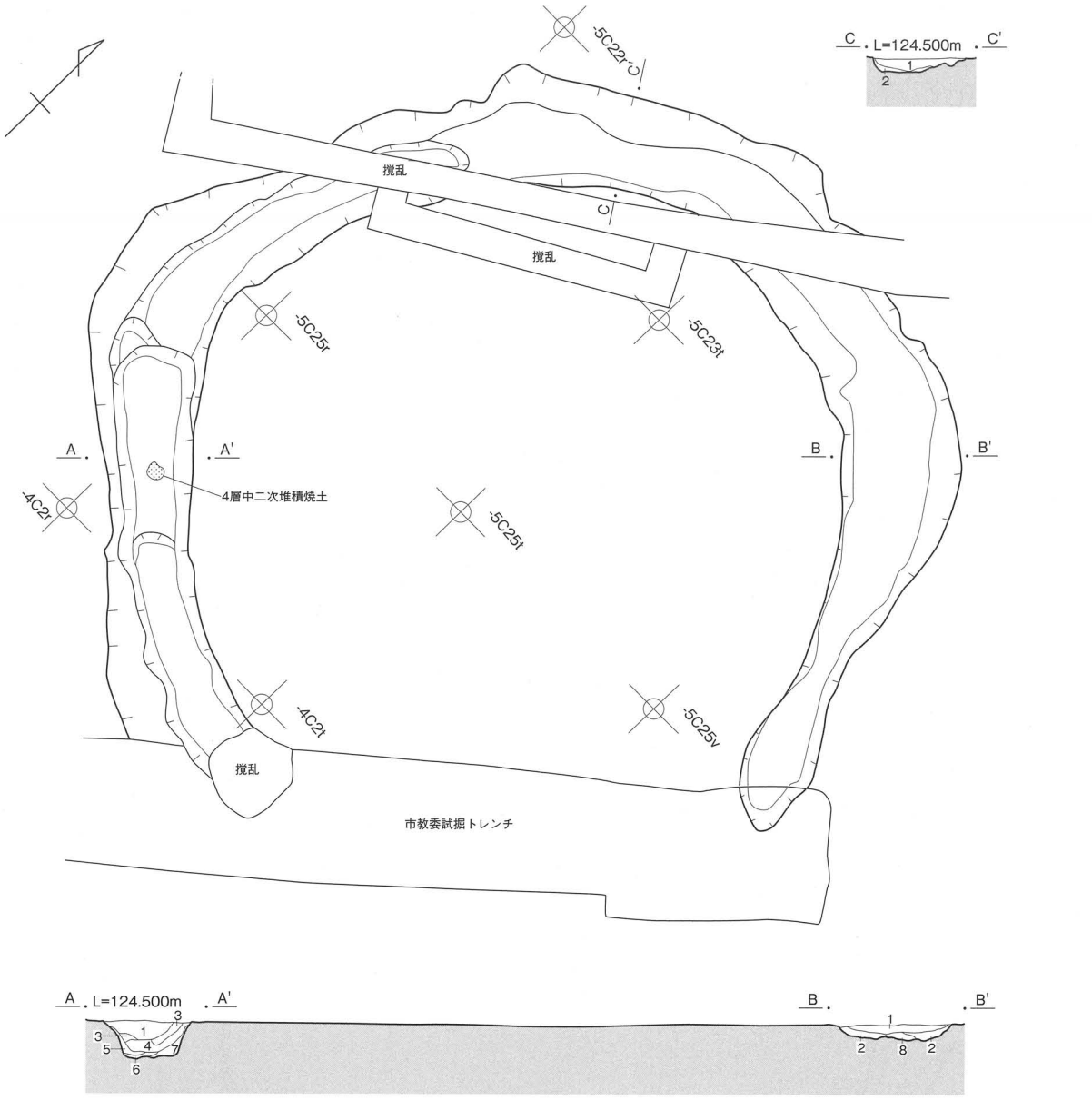


1　10YR2/2　黒褐色　粘性やや強　黄橙色・にぶい黄橙色土30%含む
2　10YR3/2　黒褐色　明黄褐色土30%含む

第39図　RZ027

埋葬施設についても墳丘とともに削平されていたため不明である。
〈周溝〉北西側と南側、東側の周溝が残存している。最も残りの良い南側周溝をみると、上面幅は0.45m前後である。深さは0.30m前後であるが、周溝の中央部（断面Aライン付近）のみ島状に高くなって深さ0.15m程となる。断面形は蒲鉾形であるが、底面は後世の撹乱が著しいため凹凸が多い。なお、東側で検出されたプランについては、南側周溝とは大きく離れているが墳丘推定部分の外縁に位置するため周溝の一部と判断した。現存規模は長さ1.20m、幅0.50m、深さ0.80cmである。
〈堆積状況〉若干色調は異なるものの、ほぼ全域で地山崩落土と考えられる黄橙～黄褐色土を含む黒褐色土が堆積していた。非常に浅いため堆積の由来や時期については不明である。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物・重複関係ともにないため詳細は不明である。

ＲＺ028古墳
遺　構（第40図、写真図版24）
〈位置・検出状況〉－５C22r～－４C ２uグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、「C」字状の黒褐色プランとして検出された。
〈重複関係〉周溝南側でP08～11と重複する。柱穴はいずれも周溝掘り下げ中に南壁際で検出しているが、重複関係については不明である。墳丘部分より西側には明治～大正時代に建てられた農業試験場の基礎が残っており、それによって周溝の一部が壊されている。
〈墳丘〉平面形は円形で、現存規模は直径約9.20mである。Ⅲ層まで削平されていたため墳丘は既に消滅しており、農業試験場の基礎跡が全域で確認されている。このような状況であったため、墳丘の高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。
　埋葬施設も削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。
〈周溝〉南東側が開く「C」字状プランの周溝である。上面幅は0.55～1.75mで、北東側開口部付近のみ幅が狭くなる。削平によって上面が大幅に失われているため断面形はⅢ形で、深さは0.25m前後である。ただし、周溝南側（断面Aライン付近から東側）は底面をさらに二段に掘り込んでいるため、断面形は逆台形となり深さも0.50m前後となる。底面は二段に掘りこんだ部分は比較的平坦に整えられているが、その他の部分は掘り方のままか撹乱による凹凸が著しい。
〈堆積状況〉上位に黒褐色土、それ以下に黄褐色系の土と黒褐色土が互層となって堆積しており、８層に細分した。各層とも地山崩落土あるいは周辺から流れ込んだ状況であることから自然堆積と考えられる。なお、Aライン東側の第４層上面では焼土が検出されており、当初は周溝埋没途中に火を使った何らかの行為が行われた痕跡と考えて検出状況の記録と周辺の精査を行った。しかし、周辺には関連する痕跡が無く、堆積土の土壌洗浄を行っても炭化物などが検出されなかったことから周辺から流れ込んだ焼土と判断した。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物が皆無であるため詳細は不明である。近代の農業試験場の基礎跡によって壊されており、柱穴とも重複関係にあるが、年代のわかる遺構との重複関係がないため削平された時期についても不明である。



1　10YR3/2　黒褐色　地山ブロック5%含む
2　10YR7/6　明黄褐色粘質土　粘性やや強　地山ブロックと黒色土を20%含む
3　10YR4/2　灰黄褐色　下位に黄色土多く含む
4　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック5%、部分的に焼土含む
5　10YR7/8　黄橙色土　粘性やや強　中央に黒褐色土を含む
6　10YR3/2　黒褐色　黄橙色土を層状に含む
7　10YR7/8黄橙色と10YR2/2黒褐色の混合土　粘性やや強　6層と由来・堆積時期は同じか
8　10YR7/8　黄橙色粘土　しまりやや密、粘性強　地山流土層で黒褐色土含む

0　平・断面（1：100）　4m

第40図　RZ028

ＲＺ029古墳

遺　構（第41図、写真図版29・30）

〈位置・検出状況〉－４Ｃ２ｗ～－４Ｃ５ｘグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、「C」字状の黒褐色プランとして検出された。

〈重複関係〉ＲＡ041と重複しており、ＲＡ041に北側周溝の東端が壊されている。

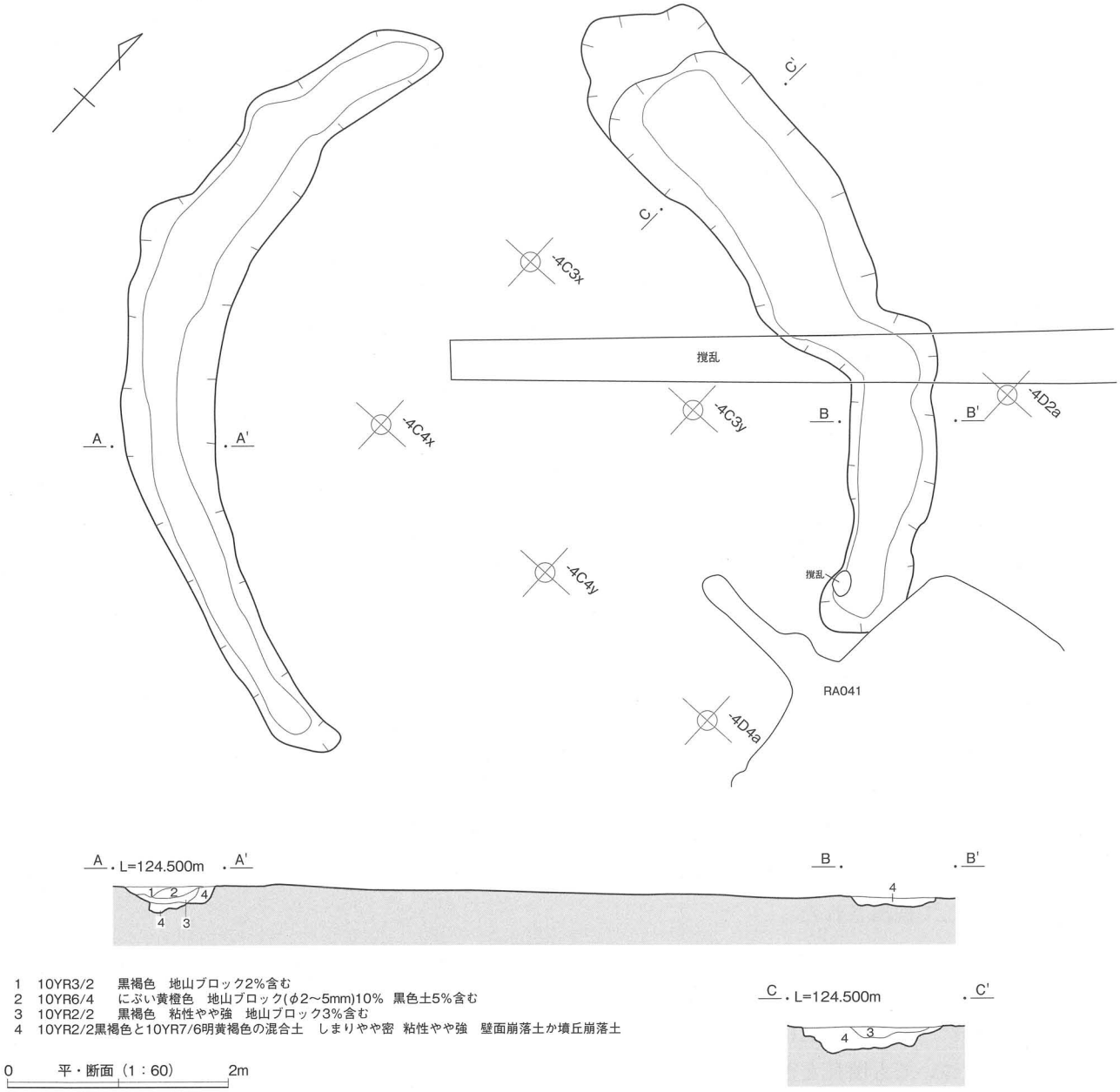
〈墳丘〉平面形は円形で、周溝の位置関係から推定される規模は直径約5.20mである。Ⅲ層まで削平が及んでいたため墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。埋葬施設についても墳丘とともに削平されていたため不明である。

〈周溝〉北側と南側に弧状プランの周溝が残存しており、南東側と北西側に開口部を有する。断面形は逆台形を基調とするが、削平の影響で浅い皿形となる部分がある。底面と壁面は掘り方のままであり凹凸が著しく、そのため壁面の立ち上がりも一定ではない。

〈堆積状況〉黒褐色土主体であり、４層に細分した。堆積状況から第１～３層は周辺からの流土、第４層は締まりのある混合土であることから墳丘盛土の崩落土の可能性がある。なお、ＲＡ041との重複部分について断面観察を行ったところ、本古墳の第４層を切るようにＲＡ041の堆積土が確認された。このことから本古墳→ＲＡ041の順で構築されたものと判断した。

出土遺物　なし。

時　期　出土遺物は皆無であるが、奈良時代に属するＲＡ041に切られていることから、奈良時代もしくはそれ以前に構築されたと考えられる。また、ＲＡ041の煙道が本古墳の墳丘部分に及んでいることと北側周溝の堆積土を切るようにＲＡ041が掘削されていることから、ＲＡ041構築直前には墳丘は消失しており、周溝も埋没していたと考えられる。ただし、墳丘消失の具体的な時期と要



第41図　RZ029

因（人為か自然か）については不明である。

ＲＺ030古墳

遺　構（第42・43図、写真図版25）

〈位置・検出状況〉－４Ｄ３ｃ～－４Ｄ７ｆグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面で、ＲＺ031とともに「Ｃ」字状の黒褐色プランが２個連結した状態で検出された。

〈重複関係〉ＲＺ031、ＲＧ057、Ｐ14・17・31と重複関係にある。ＲＺ031の周溝内堆積土には本古墳周溝の堆積土にほとんど含まれない十和田aテフラが混入していたため、検出状態ではＲＺ031のほうが新しいものと考えられた。しかし、両古墳にまたがる形でベルトを設定して掘り下げたところ、ＲＺ031の周溝内堆積土を切るように本古墳の周溝が掘削されている状況が確認されたことからＲＺ031→本古墳の順に構築されたものと判断した。なお、ＲＧ057、Ｐ14・17・31についてはいずれも検出時から周溝を壊している状況が確認されたため本古墳より新しいと判断している。

〈墳丘〉平面形は隅丸方形に近い円形で、推定規模は7.50×7.30mである。Ⅲ層まで削平が及んでいたため墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

また、埋葬施設についても墳丘とともに削平されていたため不明である。

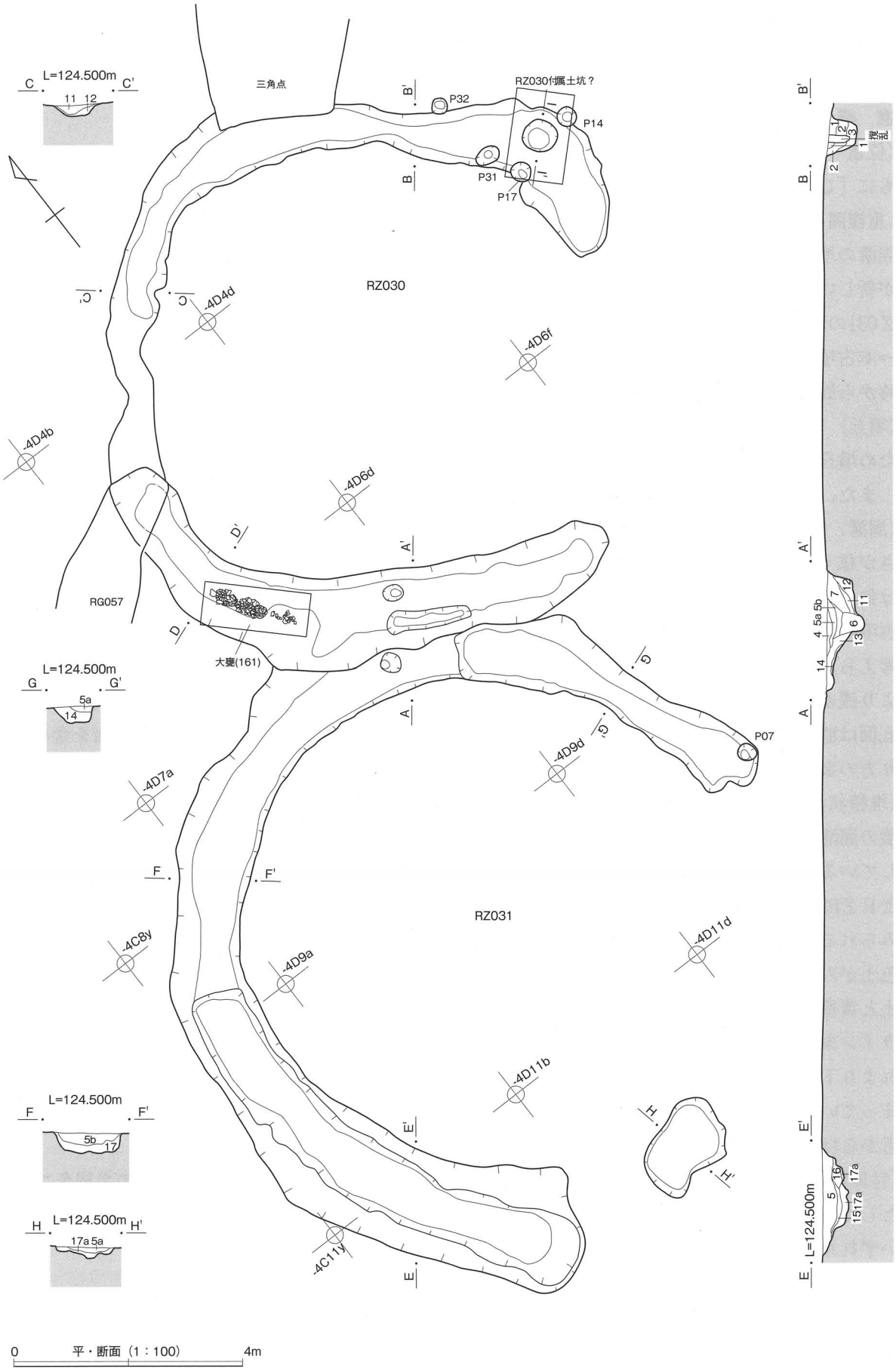
〈周溝〉南東側が開く「Ｃ」字状プランの周溝である。断面形は逆台形を基調とするが、上面幅や深さが様々であるため地点によって形状が異なる。とくにＲＺ031との重複部分（断面Ａライン付近）は他の部分よりも幅広で深く掘削されているが、これは先述したＲＺ018とＲＧ056の関係と同様、本古墳構築時にはＲＺ031の周溝が完全に埋没せずに窪んでいたために周辺よりも深く掘削したものと考えられる。一方で、周溝西側（断面ＣラインからＲＧ057との重複部分の間）はもとより他の部分より浅かったと考えられ、底面の掘り方の痕跡が残るのみで壁面の立ち上がりは確認できなかった。底面は断面Ａ・Ｂ・Ｄライン付近は比較的平坦に整えられているが、その他の部分は壁面を含めて掘り方の痕跡が残っており凹凸が著しい。

〈堆積状況〉重複するＲＺ031とあわせて17層に細分している。堆積状況から第１～12層までは本古墳の周溝内堆積土であるが、このうち第４・５層は断面Ａライン付近で両古墳にまたがるように堆積しているため本古墳に帰属するかは不明である。とくに第５層は十和田aテフラの割合を抜きにするとＲＺ031に堆積しているほうが厚いため、厳密にはＲＺ031の周溝内堆積土であり、断面ＡラインでみられるものはＲＺ031側から流入した層と考えられる。周溝北側には粘性の強い暗褐色土や灰黄褐色土がみられるが、基本的には黒褐色土主体であり、部分的に墳丘盛土の崩落土と考えられる黒褐色土と黄橙色土の混合土が墳丘側から流れ込んでいる状況が確認できる。なお、後述するように断面Ｄライン東側では第７層下位～第10・11層上位で須恵器大甕が敷き詰められた状態で出土している。これより下位の層は堆積状況をみるかぎり自然堆積と考えられるが、須恵器大甕の周辺のみ若干固く締まっていることから、周溝埋没途中に大甕を使った祭祀などを行っていた可能性がある。ただし、付近からは大甕の破片以外に出土遺物が無いため具体的な状況については不明である。

〈付属施設〉土坑１基がある。周溝北東隅で第３層掘り下げ時に土器が混入する円形の黒褐色プランとして検出された。平面形は円形で、規模は0.60×0.55m、深さ0.20mである。堆積土は３層に細分でき、いずれも周溝内堆積土と性質は類似している。

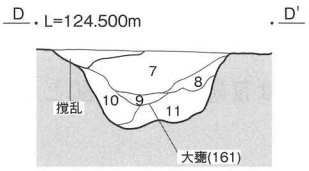
出土遺物（第75図、写真図版57）

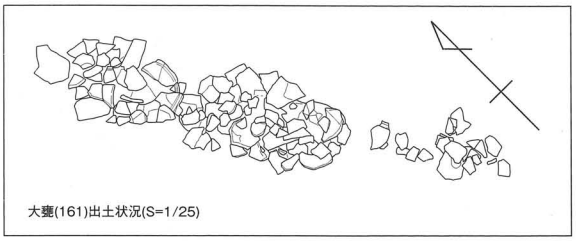
〈出土状況〉周溝内全域で土器片が出土しているが、断面Ｄライン南側で須恵器大甕１個体分（5,360g）、



0　平・断面（1：100）　4m

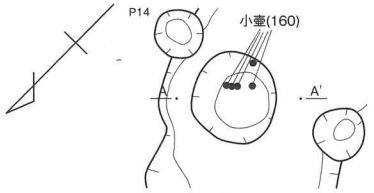
第42図　RZ030・031



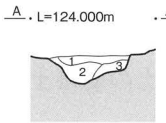


RZ030・RZ031

1　10YR3/3　暗褐色　粘性やや強
2　10YR4/2　灰黄褐色粘質土　粘性やや強　黄橙色土を微量含む
3　10YR7/8黄橙色と10YR6/4にぶい黄橙色の混合土　粘性やや強　墳丘崩落土か
4　10YR2/2　黒褐色　しまりやや密
5　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック(φ1～2mm)と十和田aテフラ５％ずつ含む
5a　10YR3/2　黒褐色　しまりやや密　十和田aテフラ5%含む
5b　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック(φ1～2mm)含む
6　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック(φ3～10mm)15%含む
7　10YR3/2　黒褐色　粘性やや強　やや固くしまる　中位から須恵器大甕(161)出土
8　10YR4/2灰黄褐色と10YR7/8黄橙色の混合土　粘性やや強　墳丘崩落土
9　10YR5/3　にぶい黄褐色　地山ブロック(φ1～2mm)3%含む
10　10YR5/3にぶい黄褐色と10YR2/2黒褐色の混合土　下位に地山ブロック含む
11　10YR2/2　黒褐色　粘性やや強　地山ブロック(φ1～3mm)5%含む
12　10YR2/2黒褐色と10YR7/8黄橙色の混合土　粘性やや強　墳丘崩落土
13　10YR2/2　黒褐色粘質土　しまりやや疎　粘性やや強　しまりは弱くブロック状に崩れる
付属土抗？
14　10YR7/8　黄橙色　しまりやや密、粘性やや強　砂質の墳丘流土
15　10YR5/3　にぶい黄褐色　地山ブロック(φ1～2mm)5%含む
16　10YR5/3　にぶい黄褐色　15層より地山ブロックが大きい
17　10YR7/8黄橙色と10YR6/4にぶい黄橙色の混合土　しまりやや疎
黄橙色土は地山ブロック(φ5～20mm)黒色土微量含む
埋め戻しの土か墳丘流土
17a　10YR2/2黒褐色と10YR7/6明黄褐色の混合土
17層と由来は同じだが全体として色が明るい
※1～3・6～12層がRZ030堆積土、13～17層がRZ031堆積土、
4・5層は両古墳にまたがる



付属土坑（3層中で検出）
1　10YR2/2　黒褐色　しまりやや密　遺物包含
2　10YR4/2　灰黄褐色粘質土　粘性やや強　黄橙色土を微量含む
3　10YR7/8黄橙色と10YR2/2黒褐色の混合土



0　(1：50)　2m

第43図　RZ030 遺物出土状況

周溝南東隅で土師器坏１個体分（172ｇ）、付属土坑検出面で須恵器小型壷１個体分（136ｇ）と地点は偏る。なかでも第７層下位～第10・11層上位で出土した須恵器大甕（161）は、口縁部から底部まで破片が確認されたため当初は周溝内祭祀などに用いられたものが周溝埋没途中で潰れたものと考えた。しかし、詳細に観察すると破片の重なり方や表裏が自然に割れた場合にはなりえない状態であったことから、意図的に破片を敷き詰めるように設置したものと判断した。

〈掲載遺物〉土師器１点、須恵器２点、鉄製品２点を掲載した（159 ～ 163）。159は成形にロクロを用いない内面黒色処理坏である。丸底の底部から開きながら立ち上がり、口縁端部は横ナデ調整により尖り気味となる。体部外面中位には沈線状の段が形成されるが、内面にはそれに対応する段は認められない。160は須恵器小型壷である。焼成は良好で、口縁部から肩部にかけて淡緑色に発色した自然釉が付着している。肩部が張る形状で、外面にはロクロナデ調整の後に中位～下位に回転ヘラケズリ調整が施される。口縁部はわずかに直立して受口状となる。底部は切り離しの後に回転ヘラケズリ調整が施され、さらに断面台形の高台が貼り付けられる。161は須恵器大甕である。体部中央やや上位に最大径をもち、体部は内外面に叩きによる工具痕が認められる。口縁部は頸部かからハの字状に開く形状で、端部はわずかに外方に引き出される。なお、159 ～ 161はいずれも焼成後に底部穿孔が行われている。162・163は鉄釘であるが、欠損しているため全形は不明である。

時　期　重複関係からＲＧ057より古くＲＺ031より新しい古墳と判断できる。なお、出土した土師器坏は８世紀代、付属土坑の上位から出土した須恵器小壷が９世紀代に位置づけられることから９世紀には周溝の埋没は進んでいたと考えられる。

ＲＺ031古墳

遺　構（第42図、写真図版26）

〈位置・検出状況〉－４Ｄ７ａ～－４Ｄ12bグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、ＲＺ030とともに「Ｃ」字状の黒褐色プランが２個連結した状態で検出された。

〈重複関係〉ＲＺ030と重複関係にある。ＲＺ030の項で記したように、十和田aテフラの混入状況から検出時には本古墳のほうが新しいと考えられたが、周溝内堆積土の切り合いから本古墳のほうが古いと判断した。

〈墳丘〉平面形は円形で、推定規模は直径約8.20mである。Ⅲ層まで削平が及んでいたため墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

埋葬施設についても墳丘とともに削平されていたため不明である。

〈周溝〉南東側が開く「Ｃ」字状プランの周溝である。断面形は断面Ｆラインより北東側は箱形で、墳丘側の壁面がほぼ垂直に立ち上がる。断面Ｆラインの２ｍ南側から開口部までは二段に掘り込まれているため北東側よりも幅広で深く掘削されている。なお、この付近も断面形は箱形を基調としているが、壁面の上部が崩落しているためハの字状に開いた形状となっている。なお、開口部付近で検出された土坑状のプラン（断面Ｈライン付近）については堆積土が類似していたことから周溝の残存部分としたが、周溝の円周上より若干墳丘側に位置することから本古墳の周溝ではない可能性もある。

〈堆積状況〉ＲＺ030とあわせて17層に細分しているが、このうち本古墳の周溝のみに堆積するのは第13～17層の５層である。ＲＺ030と同じく上位には黒褐色土である第５層が厚く堆積しており、開口部付近では十和田aテフラのブロックが検出されている。第５層より下位は地山ブロックを含む黄褐色土と黒褐色土が堆積している。堆積状況から第14・17層は墳丘盛土の崩落土、第15層は周辺からの流入土と考えられる。

出土遺物　ＲＺ030との重複部分（断面Ａ－Ｇライン間）から土師器片が１点（４ｇ）出土しているが、細片のため図示できなかった。接合はしなかったが内黒の土師器片であることからＲＺ030に帰属するものの可能性が高い。

時　期　重複関係からＲＺ030より古い古墳であると判断できるが、出土遺物がほとんどないため具体的な構築時期などは不明である。ただし、本古墳の周溝が完全に埋没する前にＲＺ030が構築されていることから両者の時期差はそれ程大きくないと考えられる。なお、墳丘の削平時期は不明であるが、堆積土上位に十和田aテフラが若干混入することから平安時代前半には既に埋没が進行していたものと考えられる。

ＲＺ032古墳

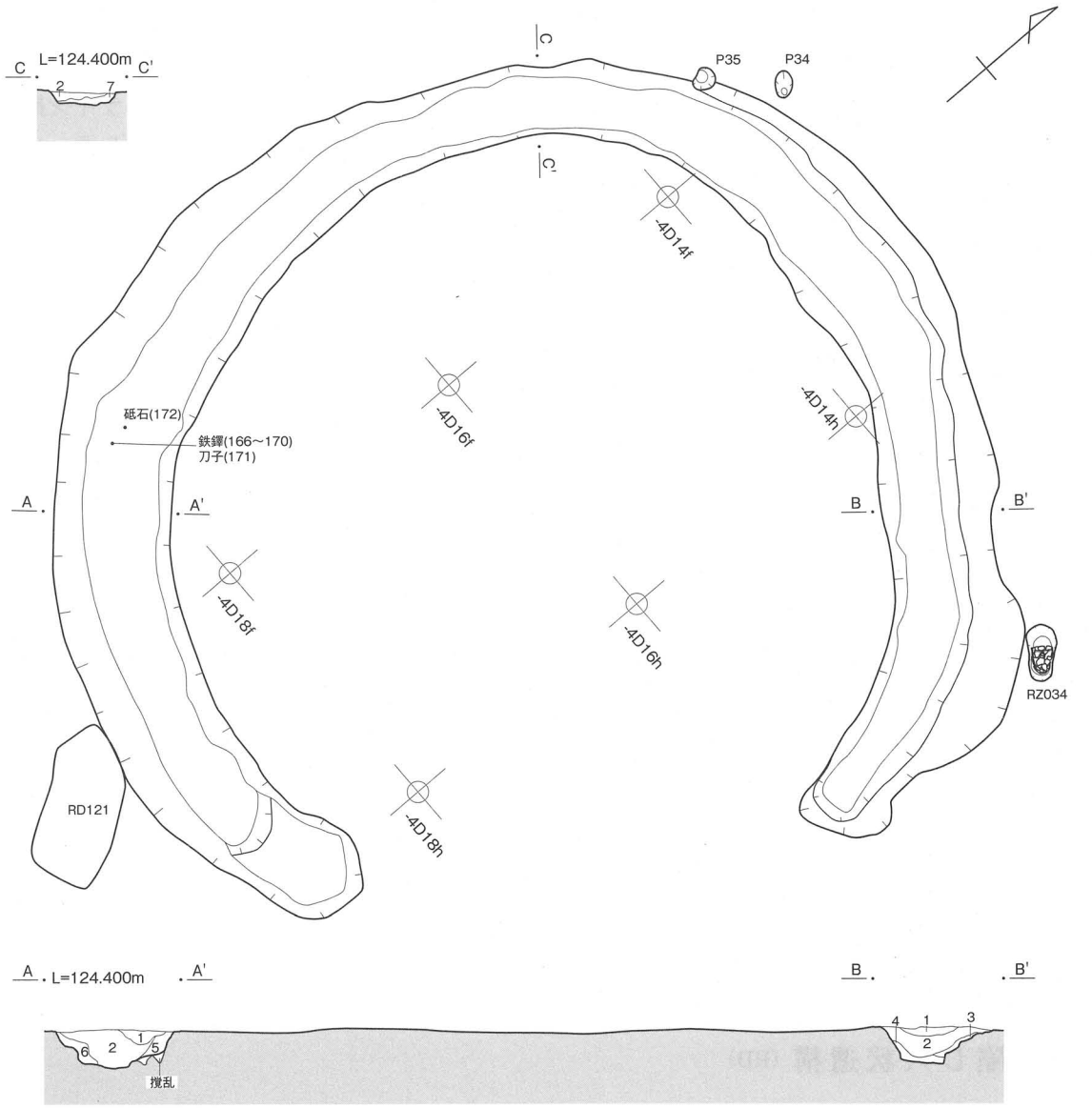
遺　構（第44図、写真図版27）

〈位置・検出状況〉－４D13e～－４D19hグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面で、「C」字状の黒褐色プランとして検出された。

〈重複関係〉周溝の南側でＲＤ121土坑と接しているが、接している部分が非常に少ないことと両者とも上面を大幅に削平されていることから新旧関係を把握することはできなかった。

〈墳丘〉平面形は円形で、推定規模は直径9.8mである。表土直下で既にⅢ層が露出するという状況であったため墳丘の高まりは全く残存しておらず、高さや構築方法などについては不明である。

埋葬施設についても墳丘とともに削平されたものと考えられ、痕跡は確認できなかった。



1　10YR2/2　黒褐色　十和田aテフラ10%含む
2　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック10%含む
3　10YR4/3　にぶい黄褐色　地山ブロック10%含む
4　10YR2/2　黒褐色
5　10YR4/2　灰黄褐色　しまりやや疎　地山ブロック20%含む　全体としてしまり弱い　墳丘崩落土か
6　10YR3/2黒褐色と10YR6/4にぶい黄橙色の混合土　下位に地山ブロック含む
7　10YR7/8　黄橙色　黒褐色土20%含む　墳丘崩落土か

第44図　RZ032

〈周溝〉南東方向が開く「C」字状プランの周溝である。上面幅は残りの良い断面Aライン付近で1.6m、最も狭い断面Cライン付近で0.95mである。検出面からの深さは、A･Bライン付近が0.5mと最も深く、開口部の反対側である断面Cライン付近が0.2mと最も浅い。断面形は逆台形で、墳丘側壁面は垂直気味に立ち上がる。底面には若干掘り方の痕跡が残るものの、凹凸は少なく平坦に整えられている。

〈堆積状況〉黒褐色土が主体であり、7層に細分した。最上位に十和田aテフラブロックを含む黒褐色土（第1層）が薄く堆積しているが、堆積土の大部分は地山ブロックを含む黒褐色土（第2層）である。堆積状況から第4・5・7層は墳丘（盛土）の崩落土、第6層は周辺からの流土と考えられる。なお、第1層は断面Cライン付近では確認されていないが、これは削平によって消失したため

であり、本来は断面Ａ・Ｂライン付近と同様の堆積状況をしていたと考えられる。

出土遺物（第76図、写真図版58）

〈出土状況〉土器類は北東側開口部付近で出土した土師器小甕をはじめ、断面Ｂ－Ｃライン間の堆積土上～中位を中心に約450ｇ出土している。その他には断面Ａラインの西側、底面より５cmほどの位置で鉄鐸・刀子・砥石がまとまって出土している。鉄鐸と刀子は一塊の鉄滓のような状態で出土したが、取り上げ後に錆落しを行ったところ６点の鉄製品が錆着したものであることがわかった。

〈掲載遺物〉土師器２点、鉄製品６点、石製品２点を掲載した（164 ～ 173）。

土師器はいずれも非ロクロ成形の製品である。164は丸底の坏で、内面にミガキ調整と黒色処理が施される。165は小甕である。体部は内外面ともハケ調整が施され、さらに底部は焼成後に意図的な穿孔が行われている。

鉄製品には鉄鐸と刀子がある。166 ～ 169は鉄鐸の本体で、長さ3.5 ～ 5.1cm、中央部の直径1.9 ～ 2.1cmで、いずれも上端より下端が広がる円錐形をしている。鉄板の厚さは約１㎜で、板の合わせ目は166が左上、167・168が右上である。なお、全ての資料についてX線写真撮影を行ったが、上端部に穿孔が施されているものは皆無であった。170は舌と考えられる棒状の鉄製品で、168の内部に錆着した状態で出土しているが、168よりも長いため全体の半分弱が外にはみ出していた。また、167は外面に刀子と考えられる鉄製品が錆着していた。171は刀子である。先端部と柄部を欠損しているため全形は不明であるが、関部の造作は刃部・棟側ともに斜関である。

石製品には砥石と磨石がある。172は凝灰岩製の砥石で、全面に使用痕が認められる。173は砂岩製の磨石で、使用痕は非常に微弱である。

時　期　ＲＤ121と接しているが、接点が少ないため新旧関係は不明である。出土した土器類は奈良時代に属するものであるが、堆積土上～中位からの出土であり本古墳に伴うものかは検討を要する。なお、周溝底面直上から出土した鉄鐸は型式的には８世紀後半代に属するものであり、それを考慮すると周溝の埋没は８世紀後半以降と考えられる。

4　陥し穴状遺構（RD）

今回検出した土坑のうち、平面形が溝状のもの11基を陥し穴状遺構とした。遺物の出土が皆無であるため詳細な年代は不明であるが、いずれも縄文時代に属するものと考えられる。

ＲＤ104陥し穴状遺構

遺　構（第45図、写真図版31）

〈位置〉－３Ｄ８ｂグリッドに位置する。　〈重複関係〉認められない。

〈規模〉上端1.20×3.05m、下端0.13×2.65m　〈深さ〉1.13m

〈長軸方位〉Ｎ－65°－Ｗ

〈平面形・横断面形〉溝形で直線的な形状である。横断面形はV字形である。

〈壁・底面〉長軸方向の壁はオーバーハングして立ち上がる。底面は平坦である。

〈堆積状況〉上位は黒色土と黒褐色土のⅡ層起源の地山崩落土、中～下位は黄褐色の砂質土を主体とする。最下部には黒褐色土が認められる。自然堆積である。

出土遺物　なし。

時　期　出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

ＲＤ105陥し穴状遺構

遺　構（第45図、写真図版31）

〈位置〉－３Ｄ８ｆ・－３Ｄ８ｇグリッドに位置する。　〈重複関係〉認められない。

〈規模〉上端1.08×3.77m、下端0.05～0.42×3.46m　〈深さ〉1.24m

〈長軸方位〉N－50°－W

〈平面形・横断面形〉溝形で長軸側の両端部が広がる。横断面形はY字形である。

〈壁・底面〉長軸方向の壁はオーバーハングして立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈堆積状況〉上位は黒褐色土と暗褐色土、中～下位は粘性の強いにぶい黄褐色土と褐色土からなる自然堆積である。

出土遺物　なし。

時　期　出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

ＲＤ106陥し穴状遺構

遺　構（第45図、写真図版31）

〈位置〉－３B12ｘ・－３B12ｙグリッド付近に位置する。　〈重複関係〉認められない。

〈規模〉上端0.34×2.57m、下端0.09×2.62m　〈深さ〉0.56m

〈長軸方位〉N－50°－E

〈平面形・横断面形〉溝形で直線的な形状である。横断面形はV字形である。

〈壁・底面〉いずれの壁も直立気味に立ち上がる。底面は礫層まで掘り込まれ、ほぼ平坦である。

〈堆積状況〉遺構上部は深く削られているが、上～中位は黒褐色土、下位は黒色土と地山崩落土から構成される。

出土遺物　なし。

時　期　出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

ＲＤ107陥し穴状遺構

遺　構（第45図、写真図版31）

〈位置〉－３Ｃ４ａ・－３Ｃ４ｂグリッド付近に位置する。　〈重複関係〉認められない。

〈規模〉上端0.60～0.76×2.72m、下端0.16～0.57×2.44m　〈深さ〉1.20m

〈長軸方位〉N－54°－W

〈平面形・横断面形〉溝形で長軸側の両端部が広がる。横断面形はY字形で、最下部で広がる

〈壁・底面〉長軸方向の壁は緩く外傾して立ち上がる。底面にも緩い凹凸がある。

〈堆積状況〉上位は黒褐色土と暗褐色土、中位は暗褐色土、下位は黒褐色土と褐色の地山崩落土からなる。最下部には粗砂の堆積（崩落？）が見られるが、底面との境は不明瞭であった。

出土遺物　なし。

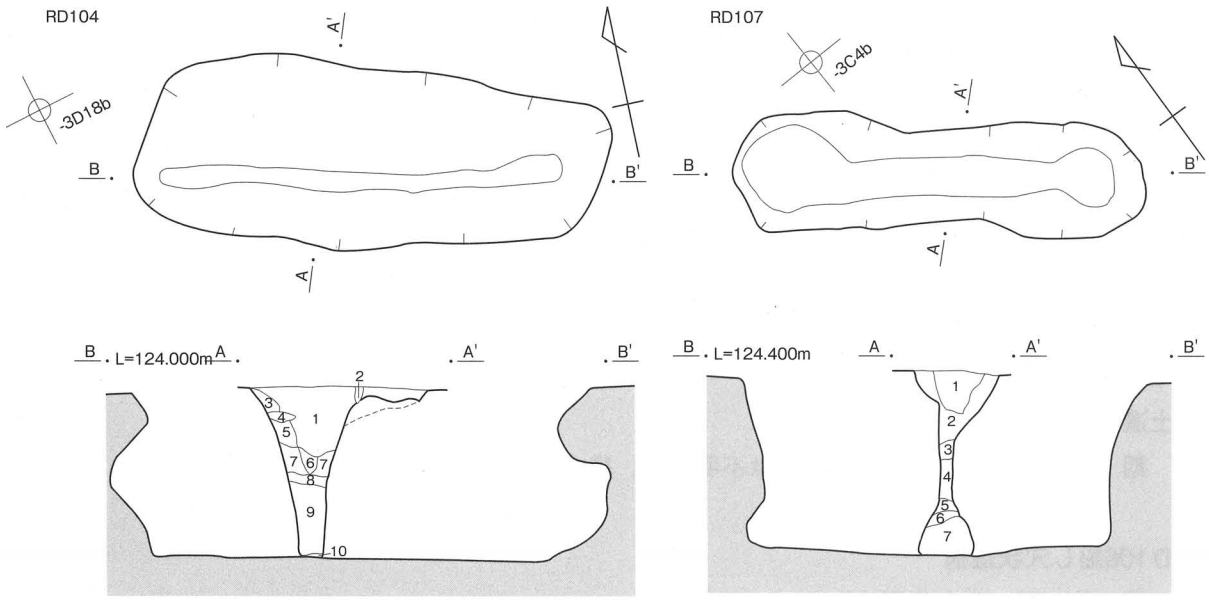
時　期　出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

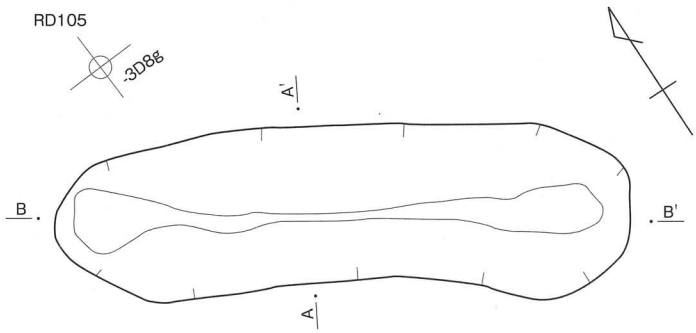
ＲＤ108陥し穴状遺構

遺　構（第46図、写真図版32）

〈位置〉－３Ｃ２ａ・－３Ｃ２ｂグリッド付近に位置する。　〈重複関係〉認められない。

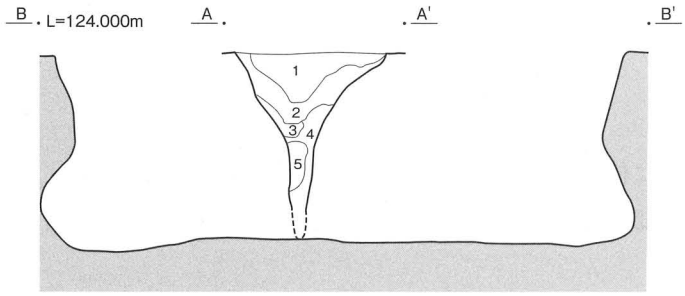
〈規模〉上端0.67×2.75m、下端0.08～0.22×2.73m　〈深さ〉1.20m





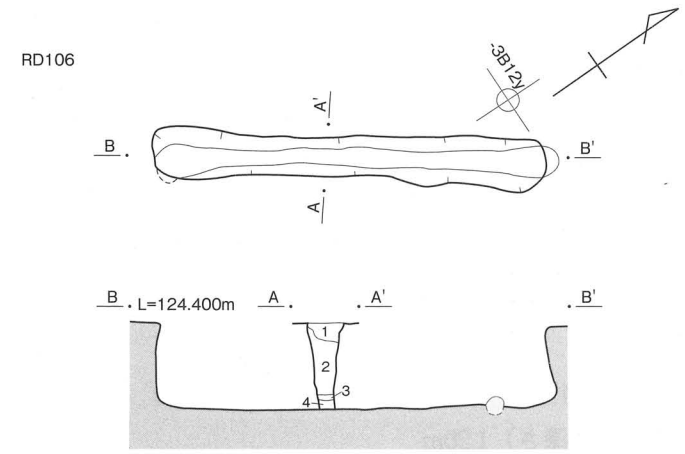
RD104

1	10YR2/1	黒色シルト	褐色土粒をわずかに含む
2	10YR2/2	黒褐色シルト	木根攪乱
3	10YR2/2	黒褐色シルト	地山崩落土
4	10YR3/2	黒褐色粘土質シルト	黄褐色土粒をまばらに含む
5	10YR3/2	黒褐色シルト	黄褐色土・暗褐色土を全体に含む
6	10YR2/3	黒褐色砂質シルト	暗褐色土との混合土
7	10YR5/6	黄褐色砂質シルト	地山崩落ブロック
8	10YR3/2	黒褐色シルト	帯状に堆積
9	10YR5/6	黄褐色砂質シルト	黒褐色土粒をまばらに含む
10	10YR2/2	黒褐色シルト	黄褐色土粒を含み黒味を帯びる



RD105

1	10YR2/1	黒色シルト	
2	10YR3/3	暗褐色シルト	黒褐色土を20%含む
3	10YR4/4	褐色シルト	黒褐色土を10%含む
4	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	粘性強い
5	10YR4/4	褐色シルト	黒色土を20%含む



RD106

1	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	黒色土粒・黄褐色土粒を全体に含む
2	10YR3/2	黒褐色粘土質シルト	粘性強い
3	10YR2/1	黒色粘土質シルト	しまりなし
4	10YR4/4	褐色粘土	粘性の強い地山崩落ブロック

RD107

1	10YR2/2	黒褐色シルト	黄褐色土粒をわずかに含む
2	10YR2/3	黒褐色シルト	地山崩落ブロックを含む
3	10YR3/3	暗褐色粘土質土シルト	明黄褐色土ブロックを含む
4	10YR3/4	暗褐色粘土質シルト	混入物なし
5	10YR4/4	褐色粘土質シルト	地山崩落ブロック
6	10YR3/2	黒褐色粘土質シルト	黒褐色土ブロック
7	10YR4/4	褐色粗砂	地山崩落土と砂の混合土

0　平・断面（1：50）　2m

第45図　RD104 ～ 107

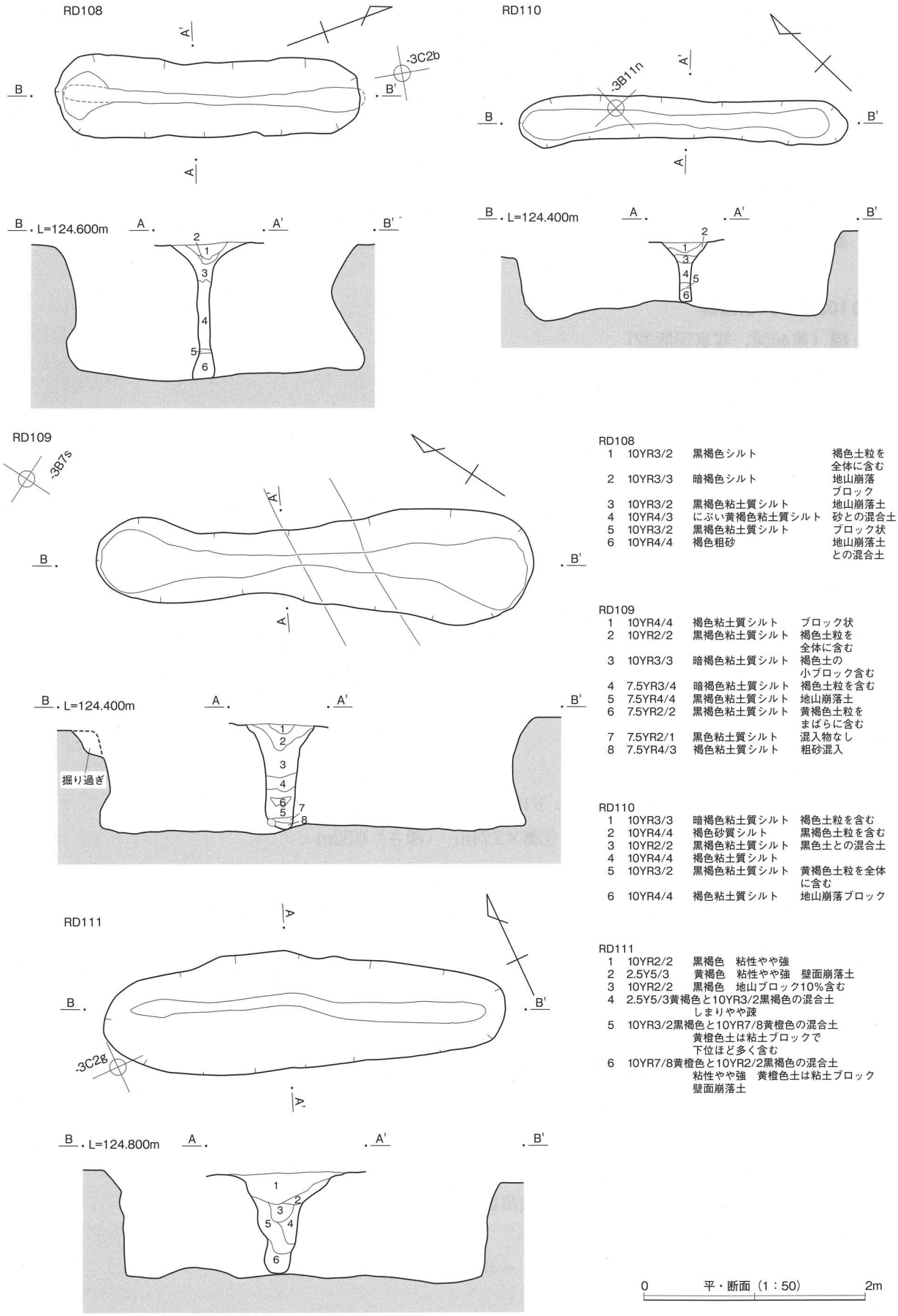
〈長軸方位〉N－11°－E
〈平面形・横断面形〉溝形で長軸側の両端はわずかに広がる。横断面形はY字形で、最下部で広がる。
〈壁・底面〉長軸方向の壁は緩く外傾して立ち上がる。底面にも緩い凹凸がある。
〈堆積状況〉上位は黒褐色土と暗褐色土、中位は黄褐色土粒を含む暗褐色土、下位は黒褐色土と褐色の地山崩落土からなる。最下部には粗砂の堆積（崩落？）が見られるが、壁・底面との境はいずれも不明瞭であった。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

ＲＤ109陥し穴状遺構
遺　構（第46図、写真図版32）
〈位置〉－３Ｂ９ｓ・－３Ｂ９ｔグリッド付近に位置する。
〈重複関係〉ＲＧ056と北側で重複する。本遺構の方が古い。
〈規模〉上端0.56×3.93m、下端0.09～0.67×3.84m　〈深さ〉0.95m
〈長軸方位〉N－30°－W
〈平面形・横断面形〉溝形で長軸側の両端は大きく広がる。横断面形はＶ字形である。
〈壁・底面〉長軸方向の壁はわずかにオーバーハングして立ち上がる。底面は中央部に段差を有する。
〈堆積状況〉上位は褐色土と黒褐色土、中位は暗褐色土、下位は黒褐色土と最下部に砂混じりの褐色土が堆積している。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

ＲＤ110陥し穴状遺構
遺　構（第46図、写真図版32）
〈位置〉－３Ｂ11ｍ・－３Ｂ11ｎグリッドに跨る。　〈重複関係〉認められない。
〈規模〉上端0.34×2.94m、下端0.07～0.26×2.74m　〈深さ〉0.52m
〈長軸方位〉N－41°－W
〈平面形・横断面形〉溝形で長軸側の両端はわずかに広がる。横断面形はY字形である。
〈壁・底面〉長軸方向の壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は大きく波打つ。
〈堆積状況〉上位は褐色土と暗褐色土、中位は褐色土、下位は褐色の地山崩落ブロックからなる自然堆積層である。遺構の上部は削られている。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

（濱田）

ＲＤ111陥し穴状遺構
遺　構（第46図、写真図版32）
〈位置〉－３Ｃ２ｇグリッドに位置する。検出面はＲＡ037と同じくⅢ層上面である。
〈重複関係〉認められない。
〈規模〉上端0.70～1.06×3.60m、下端0.10～0.20×3.30m　〈深さ〉0.90m
〈長軸方位〉N－65°－W



RD108

1	10YR3/2	黒褐色シルト	褐色土粒を全体に含む
2	10YR3/3	暗褐色シルト	地山崩落ブロック
3	10YR3/2	黒褐色粘土質シルト	地山崩落土
4	10YR4/3	にぶい黄褐色粘土質シルト	砂との混合土
5	10YR3/2	黒褐色粘土質シルト	ブロック状
6	10YR4/4	褐色粗砂	地山崩落土との混合土

RD109

1	10YR4/4	褐色粘土質シルト	ブロック状
2	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	褐色土粒を全体に含む
3	10YR3/3	暗褐色粘土質シルト	褐色土の小ブロック含む
4	7.5YR3/4	暗褐色粘土質シルト	褐色土粒を含む
5	7.5YR4/4	黒褐色粘土質シルト	地山崩落土
6	7.5YR2/2	黒褐色粘土質シルト	黄褐色土粒をまばらに含む
7	7.5YR2/1	黒色粘土質シルト	混入物なし
8	7.5YR4/3	褐色粘土質シルト	粗砂混入

RD110

1	10YR3/3	暗褐色粘土質シルト	褐色土粒を含む
2	10YR4/4	褐色砂質シルト	黒褐色土粒を含む
3	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	黒色土との混合土
4	10YR4/4	褐色粘土質シルト	
5	10YR3/2	黒褐色粘土質シルト	黄褐色土粒を全体に含む
6	10YR4/4	褐色粘土質シルト	地山崩落ブロック

RD111

1	10YR2/2	黒褐色	粘性やや強
2	2.5Y5/3	黄褐色	粘性やや強　壁面崩落土
3	10YR2/2	黒褐色	地山ブロック10%含む
4	2.5Y5/3黄褐色と10YR3/2黒褐色の混合土		しまりやや疎
5	10YR3/2黒褐色と10YR7/8黄橙色の混合土		黄橙色土は粘土ブロックで下位ほど多く含む
6	10YR7/8黄橙色と10YR2/2黒褐色の混合土		粘性やや強　黄橙色土は粘土ブロック　壁面崩落土

第46図　RD108 ～ 111

〈平面形・横断面形〉溝形で直線的な形状をしている。横断面形はV字形で、上部は崩落のためハの字状に広がる。
〈壁・底面〉長軸方向の壁は底面から垂直に立ち上がるが、上部は崩落のためハの字状に広がる。底面はほぼ平坦である。
〈堆積状況〉上位は黒褐色土で周辺からの流土と壁面崩落土、下位は黄橙色土と黒褐色土の混合土で構成される。堆積状況をみると、北西から南東に向かって三角形状に堆積していることから、おそらく自然堆積と考えられる。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

ＲＤ112陥し穴状遺構
遺　構（第47図、写真図版33）
〈位置〉－４C14mグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。　〈重複関係〉認められない。
〈規模〉上端0.80×3.40m、下端0.08～0.36×3.08m　〈深さ〉1.05m前後
〈長軸方位〉N－68°－W
〈平面形・横断面形〉溝形で長軸側の両端はわずかに広がる。横断面形はY字形で、最下部が広がる。
〈壁・底面〉長軸方向の壁は底面から垂直に立ち上がるが、上部は崩落のためハの字状に広がる。底面はわずかに凹凸がみられるが、おおむね平坦である。
〈堆積状況〉上位には周辺からの流土である黒褐色土、中位以下は黄橙色土と黒褐色土が互層になって堆積している。壁面崩落土と考えられる第２層は南側、その他の層は北西側から流れ込んでいることから自然堆積と考えられる。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

ＲＤ113陥し穴状遺構
遺　構（第47図、写真図版33）
〈位置〉－４C22lグリッドに位置する。
〈重複関係〉RG056溝と東側で重複し、ＲＧ056に上面を一部壊されている。
〈規模〉上端0.56×2.52m、下端0.05～0.18×2.30m　〈深さ〉0.96m
〈長軸方位〉N－40°－W
〈平面形・横断面形〉溝形で直線的な形状をしている。横断面形はV字形である。
〈壁・底面〉長軸方向の壁は直立するが、北西側の底面は緩やかに立ち上がる。北西側の上面は崩落によって若干ハの字状になっているが、南東側はＲＧ056構築の際に崩落部分が削平されている。底面は中央部に段差があり、北西側が高くなっている。
〈堆積状況〉第１層以外は壁面崩落土または崩落土を含む黄褐色～黄橙色系の粘質土である。最下部には黄橙色砂質土が堆積しており、壁面との境界は不明瞭であった。堆積土の状況を見ると、西から東へレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

ＲＤ114陥し穴状遺構

遺　構（第47図、写真図版33）

〈位置〉－４Ｃ19ｈグリッド付近に位置する。

〈重複関係〉RZ020古墳と重複し、RZ020の周溝に上面を破壊されている。

〈規模〉上端0.40～0.50×2.80m、下端0.05～0.30×2.65m　〈深さ〉1.00m

〈長軸方位〉N－18°－W

〈平面形・横断面形〉溝形で直線的な形状をしている。断面形はＶ字形で、底面は非常に狭い。

〈壁・底面〉長軸方向の壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部はわずかに崩落している。底面はほぼ平坦であるが、北から南に向かって若干傾斜している。

〈堆積状況〉上位が黒褐色土、下位層ほど黄褐色土が多くなる。底面付近には壁面崩落土である黄橙色粘質土が堆積しており、壁面との境界は不明瞭であった。

出土遺物　なし。

時　期　出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

（村田）

5　土坑・墓坑（ＲＤ）

今回検出した土坑のうち、陥し穴状遺構としたもの以外を土坑とした。また、このなかでも平面形や堆積状況から７基を墓坑とした。

ＲＤ115土坑

遺　構（第48図、写真図版33）

〈位置・検出状況〉－３D11ｌ～－３D11mグリッドに位置する。Ⅲ層で黒色土の広がりを検出した。

〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面2.43×1.08m、底面2.0×0.8m　〈深さ〉0.4m

〈長軸方位〉N－45°－W

〈平面形・横断面形〉長方形・逆台形状

〈壁・底面〉壁はいずれも緩く外傾して立ち上がる。底面は細かな凹凸が認められる。

〈堆積状況〉全体に黒色土を基調とし、最下部には７cm前後の褐色土が堆積する。その状況は人為的に埋め戻された様子ではない。

出土遺物　なし。

時　期　出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、形状から古代に属する墓坑の可能性がある。

ＲＤ116土坑

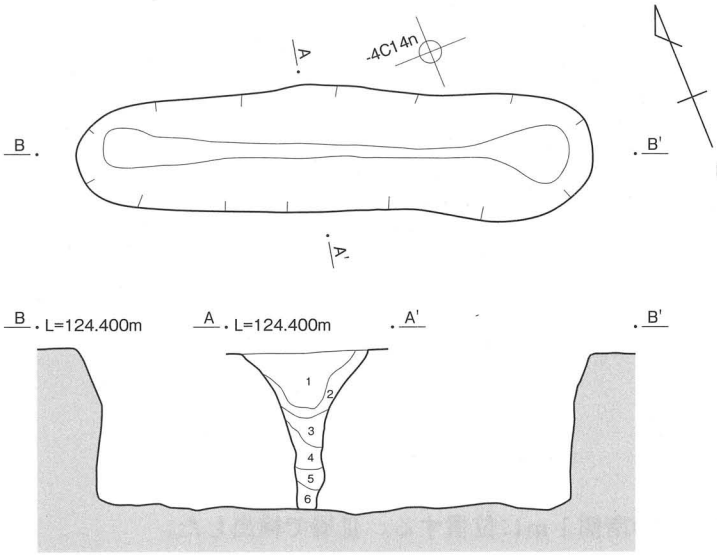
遺　構（第48図、写真図版34）

〈位置・検出状況〉－４D21ｋグリッド杭付近に位置する。Ⅲ層上面で灰白色火山灰を含む白みのある黒褐色土の広がりで検出した。

〈重複関係〉ＲＺ014古墳とその西側で重複している。検出した段階では本遺構のほうが新しく見えたが、断面観察の結果は逆であった。したがって本遺構はＲＺ014よりも古いと判断できる。

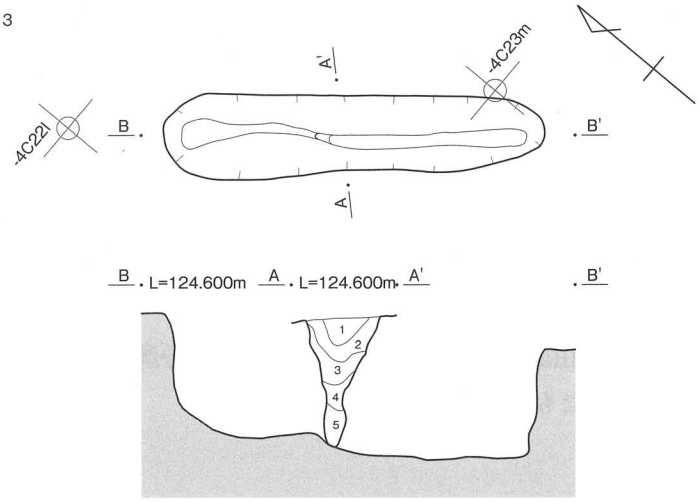
〈平面規模〉上面2.23×0.70m、底面1.91×0.52m　〈深さ〉0.43m

RD112



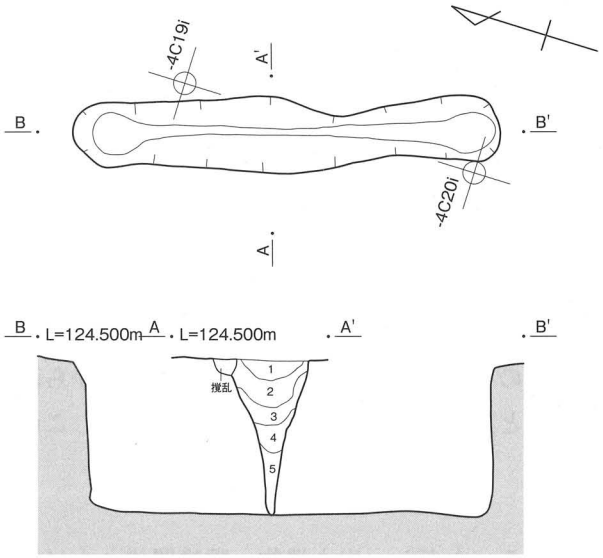
RD112
1　10YR2/2～3/2　黒褐色　粘性やや強　地山ブロック(φ1～2mm)2%含む
2　10YR4/2　灰黄褐色　粘性やや強　やや砂質
3　10YR7/8　黄橙色砂質土　灰黄褐色土30%含む
4　10YR7/8　黄橙色粘質土　粘性やや強　壁面崩落土
5　10YR3/2　黒褐色　しまりやや疎　地山ブロック(φ1～3mm)5%含む
6　10YR7/8　黄橙色砂質土　しまりやや疎　灰黄褐色土30%含む

RD113



RD113
1　10YR3/2　黒褐色　地山ブロック2%含む
2　10YR5/3　にぶい黄褐色　粘性やや強　地山ブロック3%，黒色土微量含む
3　10YR6/4　にぶい黄橙色と10YR2/2黒褐色の混合土　壁面崩落土
4　10YR7/6　明黄褐色　粘性やや強　根撹乱が多く黒ずむ　壁面崩落土
5　10YR7/8　黄橙色粘質土　しまりやや密、粘性やや強　黒色土2%含む　壁面崩落土

RD114



RD114
1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック(φ1～3mm)3%含む
2　10YR3/2　黒褐色　粘性やや強　地山ブロック10%含む
3　10YR3/2黒褐色と10YR7/6明黄褐色の混合土　粘性やや強
4　10YR7/6　明黄褐色　しまりやや密、粘性やや強　黄橙色土と黒色土を含み　若干色調が暗い
5　10YR7/8　黄橙色　しまりやや密、粘性やや強　壁面崩落土で若干明黄褐色に変色

0　平・断面（1：50）　2m

第47図　RD112～114

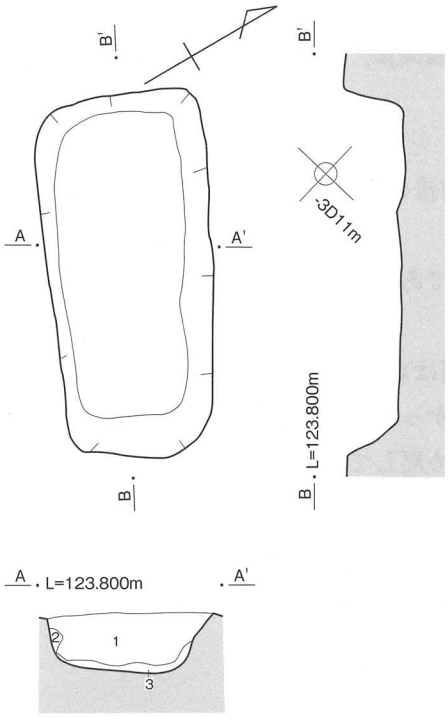
〈長軸方位〉N－9°－W
〈平面形・横断面形〉平面形・横断面形とも長方形である。
〈壁・底面〉壁はいずれも直立して立ち上がる。底面は中央部がわずかに盛り上がり、長軸方向の端部には幅17cm、長さ45cm、深さ10cmあまりの長方形の小孔を有する。
〈堆積状況〉上位は黒～黒褐色土、中位は黒色土を含む暗褐色土、下位は黄褐色土と暗褐色土の混合土からなる。少なくとも中位以下は人為的に埋め戻されている。
出土遺物　なし。
時　期　形状と遺構が人為的に埋め戻されていることから、古代の墓坑と考えられる。

ＲＤ117土坑
遺　構（第48図、写真図版34）
〈位置・検出状況〉－４C23ｎグリッド杭の南側１ｍに位置する。Ⅲ層で検出した。
〈重複関係〉ＲＧ056と重複し、ＲＧ056に南東側約1/3を壊されている。
〈平面規模〉上面　？×1.95m前後、底面　？×1.71m　〈深さ〉0.23m
〈長軸方位〉N－65°－W
〈平面形・横断面形〉南東側をＲＧ056に壊されているため全形は不明であるが、平面形は長方形と考えられる。横断面形は残存する東壁の状況から逆台形と考えられる。
〈壁・底面〉壁は直立ぎみに立ち上がり、底面は長軸方向の北西側に緩く下がる。全体に波打つ。
〈堆積状況〉上～中位は黒色土、下位は粘土質の暗褐色土からなる。水平に堆積しているが、埋め戻されているか否かの判別はできない。
出土遺物　なし。
時　期　形状から墓坑と判断した。堆積土に十和田aテフラ（灰白色火山灰）を含む溝跡（ＲＧ056）に切られることから、10世紀前半以前に構築されたものと考えられる。

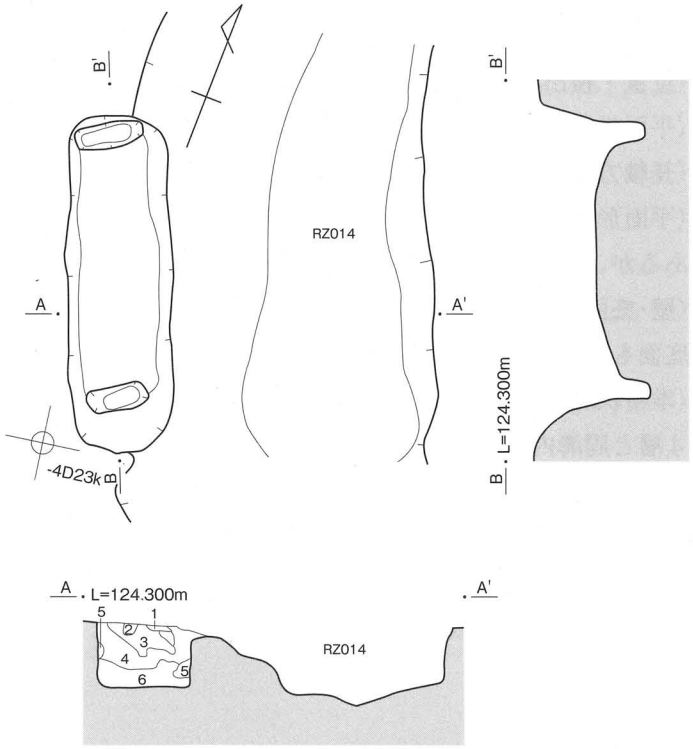
（濱田）

ＲＤ118土坑
遺　構（第48図、写真図版34）
〈位置・検出状況〉－４Ｃ22ｖグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。
〈重複関係〉認められない。
〈平面規模〉上面1.58×0.50m、底面1.4×0.35m　〈深さ〉0.60m
〈長軸方位〉N－62°－E
〈平面形・横断面形〉平面形は長方形で、コーナー部は若干丸みをもつ。横断面形は箱形で、壁面は崩落も無くほぼ垂直に立ち上がる。
〈壁・底面〉長軸方向の壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。
〈堆積状況〉黒色土が堆積しており、締まりの程度により２層に分離した。ただし、若干混和物が異なるのみであることから、本来は同一由来・性質のものと考えられる。第２層は北側から流れ込んだようにもみえるが、他の自然堆積した遺構の状況と比較しても不自然な印象を受ける。これらの状況から、人為的に埋め戻した土の可能性もある。
出土遺物　なし。
時　期　形状的には木棺を納めた墓坑と考えられる。ただし、出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

RD115



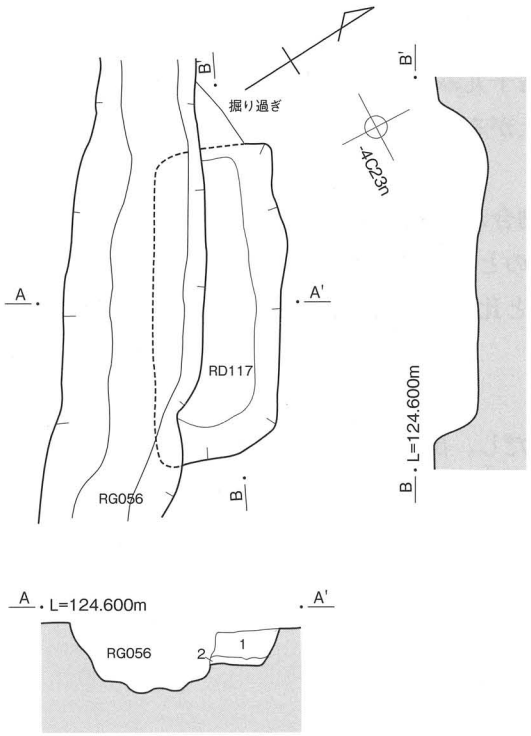
RD116



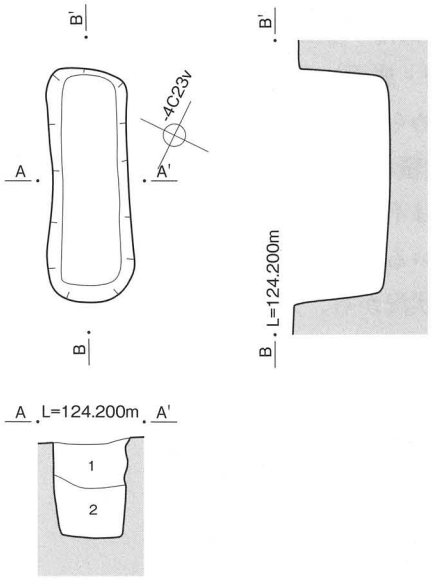
RD115
1　10YR1.7/1　黒色シルト　粘性わずかにあり
2　10YR1.7/1　黒色シルト　褐色土との混合土
3　10YR4/6　褐色シルト　黒色土20%混入

RD116
1　10YR2/1　黒色シルト　混入物なし
2　10YR2/2　黒褐色シルト　木根攪乱
3　10YR3/2　黒褐色砂質シルト　黄褐色土小ブロックを全体に含む
4　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　黒色土・黄褐色土の小ブロックを含む
5　10YR4/4　褐色砂質シルト　地山崩落ブロック
6　10YR3/4　暗褐色シルト　黄褐色土との混合土

RD117



RD118



RD118
1　10YR2/1　黒色　明黄褐色ブロック(φ1～5mm)2%含むが、ほぼ真っ黒　人為堆積層か
2　10YR2/1　黒色　しまりやや疎　明黄褐色ブロック(φ1～5mm)5%含む　1層よりしまり弱い　人為堆積層か

RD117
1　10YR2/1　黒色粘土質シルト　黄褐色土粒をわずかに含む
2　10YR3/3　暗褐色粘土質シルト　黄褐色土との混合土

0　平・断面（1：50）　2m

第48図　RD115～118

ＲＤ119土坑

遺　構（第49図、写真図版34）

〈位置・検出状況〉－４Ｃ13mグリッド付近に位置する。　〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面2.20×0.80m、底面1.90×0.50m　〈深さ〉0.35m

〈長軸方位〉N－35°－W

〈平面形・横断面形〉平面形は長方形で、壁面に沿って幅10cm前後の周溝が巡る。横断面形は箱形であるが、周溝部分のみ深くなっている。

〈壁･底面〉壁面は４面とも垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが､周溝の深さは一定ではなく、底面も凹凸が多い。

〈堆積状況〉堆積土は４層に細分した。堆積状況から第１～３層は東側からの流土と考えられる。第４層と周溝内堆積土との境界は不明瞭であったため分層できなかった。ただし、混和物の割合などはほとんど変わらないことから、周溝から底面直上まで一度に埋め戻している可能性もある。

出土遺物　なし。

時　期　形状的には木棺を納めた墓坑と考えられる。ただし、出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。仮に墓坑であるとすると、底面を巡る周溝は棺を据える為の施設と考えられる。

ＲＤ120土坑

遺　構（第49図、写真図版35）

〈位置・検出状況〉－４Ｃ５ｔグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。

〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面1.92×0.60m前後、底面1.80×0.45m　〈深さ〉0.32m

〈長軸方位〉N－16°－W

〈平面形・横断面形〉平面形は長方形で、コーナー部は若干丸みをもつ。横断面形は箱形である。

〈壁・底面〉長軸方向の壁は底面から丸みをもって立ち上がる。底面には根撹乱による小穴が数ヵ所認められるが、全体としては平坦である。

〈堆積状況〉黒褐色土が堆積しており、粘性と混和物の割合から２層に細分した。ただし、両層の境界は不明瞭であることから、本来は同一由来・性質のものと考えられる。第２層はレンズ状に堆積しているようにもみえるが、他の自然堆積した遺構の状況と比較しても不自然な印象を受ける。これらの状況から、人為的に埋め戻した土の可能性もある。

出土遺物　なし。

時　期　形状的には木棺を納めた墓坑と考えられる。ただし、出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

ＲＤ121土坑

遺　構（第49図、写真図版35）

〈位置・検出状況〉－４Ｄ19ｆグリッドに位置する。検出面はＲＺ032古墳と同じくⅢ層である。

〈重複関係〉ＲＺ032古墳の南側周溝に接しているが、両者とも上面を大幅に削平されているため平面的には新旧関係を把握することはできなかった。

〈平面規模〉上面2.12×0.96m、底面1.50×0.76m　〈深さ〉0.28m

〈長軸方位〉N－34°－W

〈平面形・横断面形〉上面は長方形を基調としているが、北西壁中央が外方へ向かって突出しているため長五角形状となっている。横断面形は左右非対称の台形状で、南西壁は外方に開き、北東壁はほぼ垂直に立ち上がる。

〈壁・底面〉長軸方向の壁面は大きく外方に開きながら立ち上がる。また、底面も平坦であるため、断面形は浅い皿形に近い逆台形となる。

〈堆積状況〉黒褐色土の単層である。性質的にはＲＺ032古墳の第２層とほぼ同じである。人為的に埋め立てた土の可能性もあるが、上面を大幅に削平されているため断定はできない。

出土遺物　土師器片が7.3ｇ出土しているが、細片のため図示できなかった。

時　期　出土遺物が乏しく、重複関係も無いため詳細な年代は不明である。底面の造作と堆積状況、古墳周溝に接していることを考慮すると、古墳に伴う従属埋葬用の墓坑の可能性が高いが、平面形や長軸断面形などが他の墓坑と異なっている。

（村田）

ＲＤ122土坑

遺　構（第49図、写真図版35）

〈位置・検出状況〉－３C14ｂグリッド杭付近にある。Ⅲ層で陥し穴状遺構として検出した。

〈重複関係〉認められない。

〈規模〉開口部径0.20～0.46×5.00m、底部径0.05～0.35×4.87m　〈深さ〉0.17m

〈長軸方位〉N－13°－E

〈平面形・横断面形〉溝形・逆台形

〈壁・底面〉壁は外傾して立ち上がる。底面は全体に大きく波打っている。

〈堆積状況〉３層に分層した。黒～黒褐色土、褐色土からなる。

出土遺物　なし。

時　期　出土遺物、重複関係ともにないため詳細な年代は不明である。なお、検出されたプランから当初は陥し穴状遺構としていたが、他の陥し穴状遺構と比べて非常に浅く、一方で長軸方向の長さが1.5倍近くあることから土坑に変更して報告した。

（濱田）

ＲＤ123土坑

遺　構（第49図、写真図版35）

〈位置・検出状況〉－３Ｃ１ｍグリッドに位置する。Ⅲ層で検出した。

〈重複関係〉ＲＤ124と重複関係にあり、本遺構がRD124の一部を壊している。

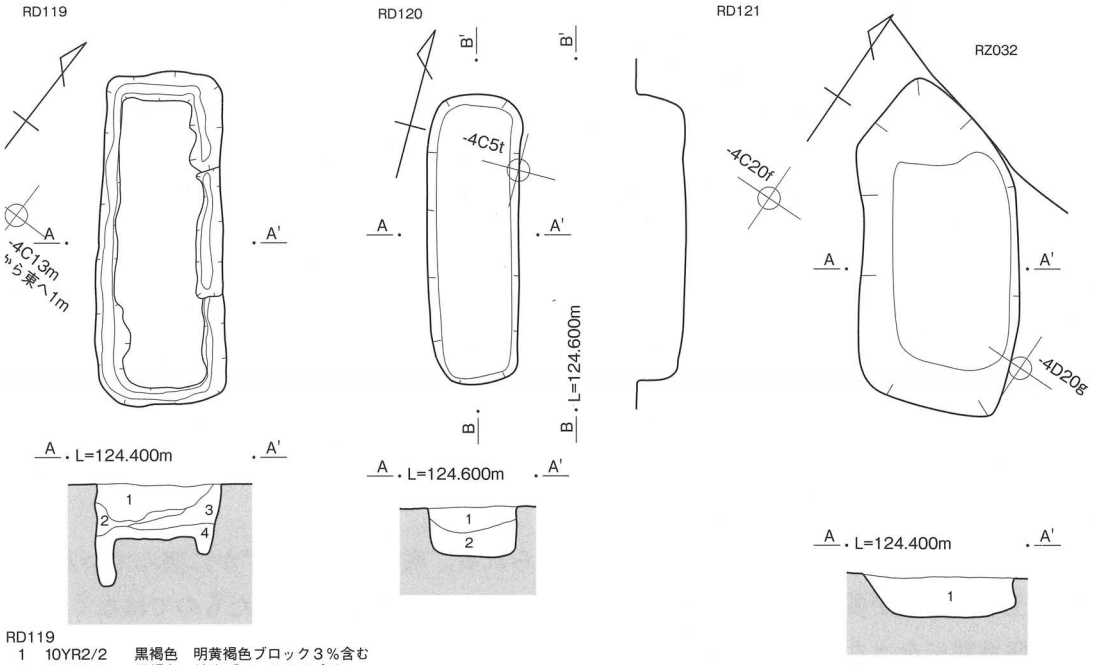
〈平面規模〉開口部径1.45×1.30m、底部径1.05×1.02m　〈深さ〉0.28m

〈形状〉平面形はほぼ正方形で、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形である。横断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦であり、重複するＲＤ124より深く掘り下げられている。

〈堆積状況〉周辺からの流土である黒褐色土、壁面崩落土である黄橙色土と褐色土で構成される。
出土遺物　なし。
時　期　重複関係から平安時代に属するＲＤ124より新しく、平安時代以降に掘削された遺構と考えられる。

ＲＤ124土坑
遺　構（第49図、写真図版36）
〈位置・検出状況〉－３Ｃ11～nグリッドに位置する。Ⅲ層で検出した。
〈重複関係〉ＲＤ123土坑と重複し、ＲＤ124に西側の一部を壊されている。
〈平面規模〉上面0.5～0.8×4.55m、底面0.2～0.5×3.85m　〈深さ〉0.15m
〈長軸方位〉N－91°－E
〈形状〉平面形は溝形で、中央がわずかに膨らんでいるがほぼ直線的に東西方向に延びる。東側に向かうにつれて徐々に浅くなっていき、東端は一段高くなっている。横断面形は逆台形と考えられるが、根撹乱の影響があり底面・壁面ともに凹凸が多い。
〈堆積状況〉地山崩落土である黄橙色土を含む黒褐色土が単層で堆積する。重複するＲＤ123の堆積土とは黄橙色土の混入割合が大きく異なるため、分層は比較的容易であった。
出土遺物（第76図、写真図版58）
中央から東寄りの堆積土中から土師器が62ｇ出土しており、２点を掲載した（174・175）。174はロクロ成形の坏である。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は外方に開く。口縁部付近は横ナデ、外面下半から底部にかけてケズリ調整が施される。また、内面にはミガキ調整と黒色処理が施される。175もロクロ成形の坏である。口縁部は横ナデ調整によってわずかに外方に開く。内面にはミガキ調整と黒色処理が施される。なお、読み取ることはできなかったが、外面には墨書の痕跡が認められる。
時　期　出土した土師器坏がいずれも平安時代（９世紀後半）に属するものであることから、本遺構の掘削年代も同様と考えたい。

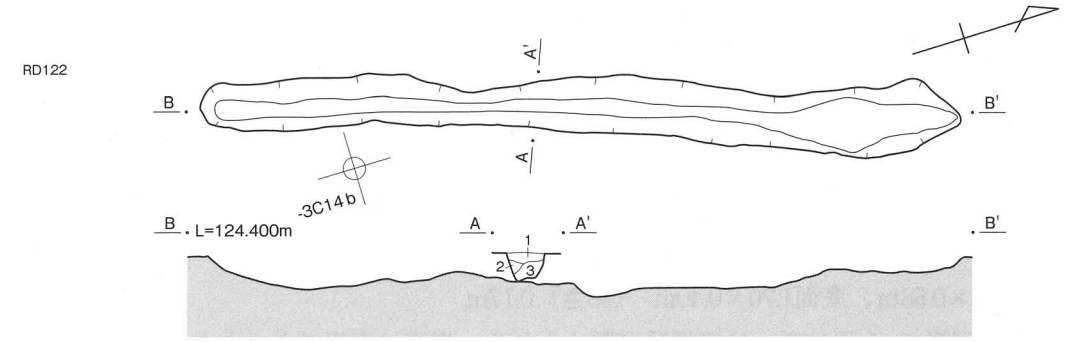
ＲＤ125土坑
遺　構（第50図、写真図版38）
〈位置・検出状況〉－４C25mグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒色の方形プランとして検出した。
〈重複関係〉認められない。
〈規模〉上面1.30×0.90m、底面0.95×0.50m　〈深さ〉0.18m
〈形状〉平面形は上面が長方形で、コーナー部は若干丸みをもつ。底面も長方形を基調とするが、北東壁中央に土橋状の張り出しがあるため「凹」字状となる。断面形は不整形で、根撹乱の影響もあるが底面の深さは一定ではなく、壁面の立ち上がりも緩やかであることから人為的な掘り込みではない可能性もある。
〈堆積状況〉炭化物を多量に含む黒色土が主体となって堆積している。ただし、堆積土および遺構の周辺に焼土は確認されていないことから、炭化物は本遺構内で生成されたものではないと考えられる。なお、材としての形状を保っているものは無いため樹種同定を行うことはできなかった。そのため炭



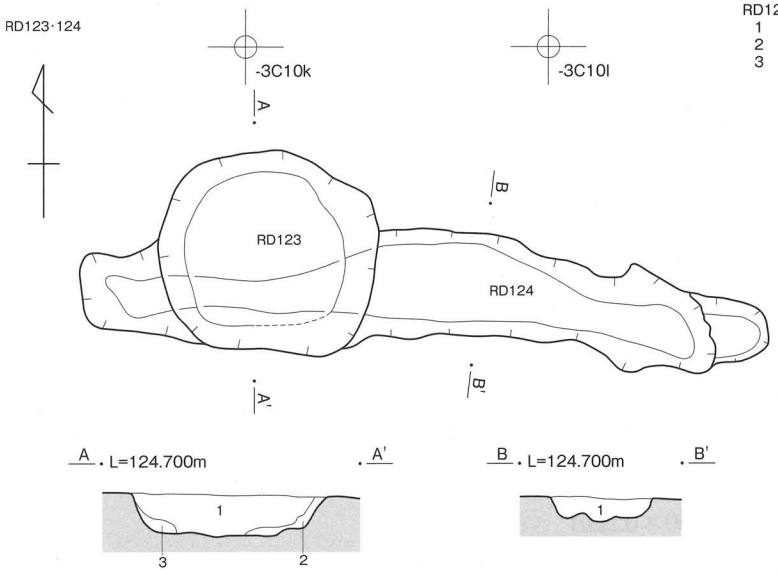
RD119
1　10YR2/2　黒褐色　明黄褐色ブロック３％含む
2　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック30％含む
3　10YR2/2黒褐色と10YR4/3にぶい黄褐色の混合土　しまりやや疎、粘性やや強　地山ブロック（φ1～10mm）20％含み、全体として褐色に近い
4　10YR4/3　にぶい黄褐色　しまりやや疎、粘性やや強　黄橙色砂質土に地山ブロック（φ10mm）が混入した層

RD120
1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック（φ１～５mm）５％含む
2　10YR2/2　黒褐色　粘性やや強　地山ブロック20％含み、１層より粘性強い

RD121
1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック（φ10mm）10％含む



RD122
1　10YR2/1　黒色シルト　混入物なし
2　10YR3/1　黒褐色シルト　黄褐色土粒をわずかに含む
3　10YR4/4　褐色粘土質シルト　地山崩落土



RD123
1　10YR2/2　黒褐色　粘性やや強、地山ブロック（φ１～５mm）15％含む
2　10YR7/8　黄橙色粘質土　粘性やや強　壁面崩落土で壁面付近に黒色土混入
3　10YR4/4　褐色　しまりやや疎　地山ブロック（φ10mm）10％含む　壁面崩落土

RD124
1　10YR3/2黒褐色と10YR7/8黄橙色の混合土　粘性やや強　壁面崩落土と流土の混合層

0　平・断面（1：50）　2m

第49図　RD119～124

化物が堆積した契機や年代についても明らかにすることはできなかった。
出土遺物（第76図、写真図版58）
須恵器坏の破片が１点出土している（176）。底部破片で内外面にロクロナデ調整が施される。
時　期　出土した須恵器坏から平安時代に属すると思われる。ただし、人為的な掘り込みではないとすれば、単に窪地を利用した炭化物の廃棄場所であった可能性もある。

ＲＤ126土坑
遺　構（第50図、写真図版36）
〈位置・検出状況〉－４Ｃ21ｓグリッド付近に位置する。検出面はⅢ層である。
〈重複関係〉認められない。
〈平面規模〉上面2.55×0.85m、底面2.35×0.47m　〈深さ〉0.40m
〈長軸方位〉Ｎ－48°－Ｗ
〈形状〉平面形は長楕円形で、上面は所々に根撹乱が認められる。底面中央はわずかに窪んでいるが、この付近は堆積土中から根が多く認められたことから、人為的に二段に掘り込んだものではなく、根の侵食によって窪地状になったものと考えられる。断面形は逆台形で、若干崩落しているため上部は広がっている。
〈堆積状況〉周辺からの流土である黒褐色土と壁面崩落土である褐色土が互層になって堆積する。断面観察のかぎりでは北西側から流れ込んだ自然堆積と考えられる。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

ＲＤ127土坑
遺　構（第50図、写真図版36）
〈位置・検出状況〉－４Ｃ20ｖグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。
〈重複関係〉認められない。
〈平面規模〉上面1.98×0.68m、底面1.70×0.40m　〈深さ〉0.17m
〈形状〉平面形は長楕円形で、上面は所々に根撹乱が認められる。底面は平坦であったと考えられるが、根撹乱によって部分的に凹凸がある。断面形は箱形で、崩落により上面は若干広がる。
〈長軸方位〉Ｎ－１°－Ｅ
〈堆積状況〉黒褐色土を主体とし、下位層は地山崩落土である黄橙色土ブロックを多く含む。上面が削平されているため不明な点も多いが、堆積状況をみるかぎり自然堆積と考えられる。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

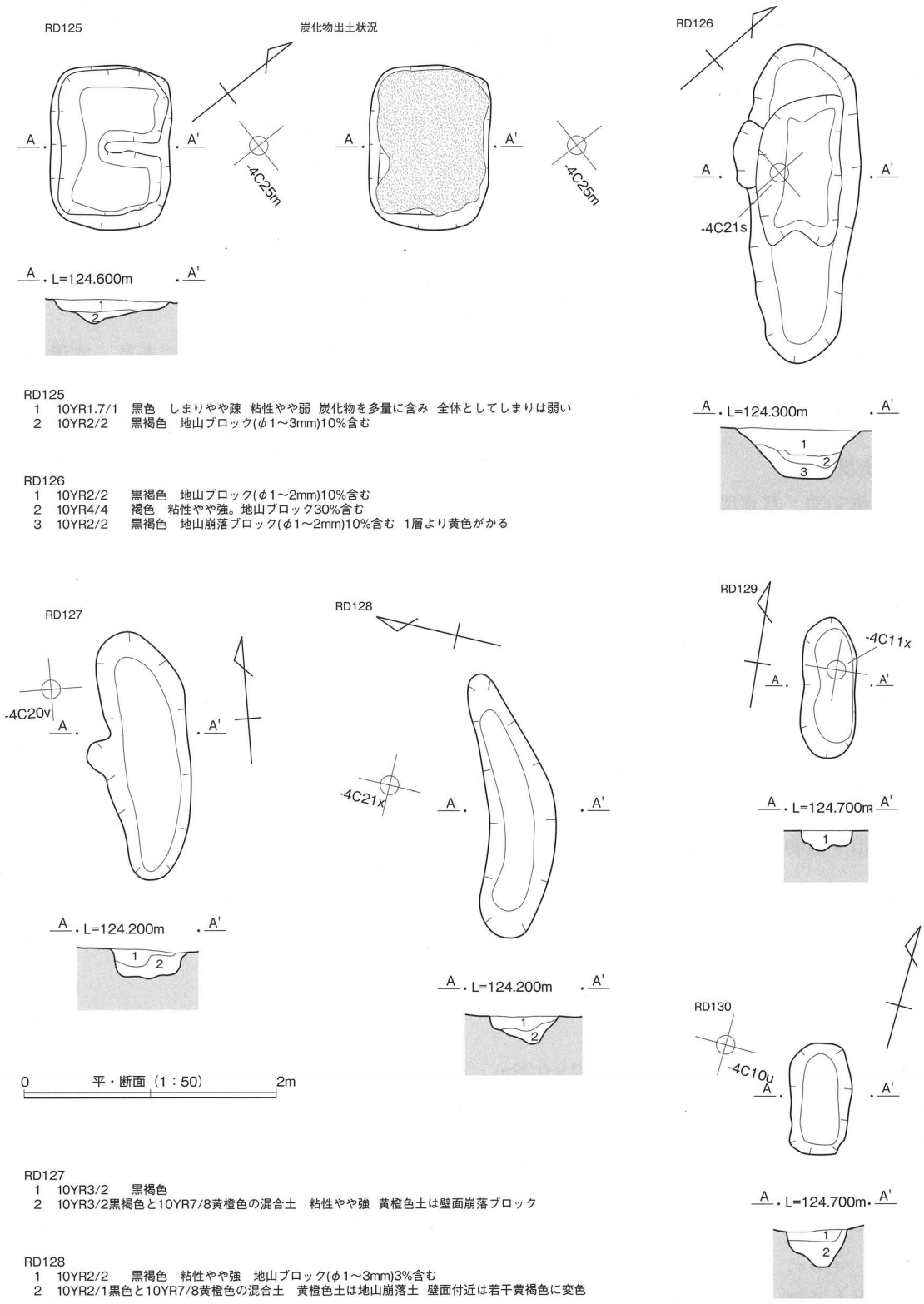
ＲＤ128土坑
遺　構（第50図、写真図版37）
〈位置・検出状況〉－４Ｃ21ｘグリッドに付近に位置する。検出面はⅢ層である。
〈重複関係〉認められない。
〈平面規模〉上面2.12×0.34～0.50m、底面1.60×0.22m　〈深さ〉0.22m
〈形状〉平面形は溝形で、上面・底面ともわずかに弧状に屈曲する。底面は平坦であるが、根撹乱に

よって部分的に凹凸がある。断面形は箱形であったと考えられるが、崩落により上面が広がっているためやや不整形である。
〈堆積状況〉黒褐色土を主体とし、下位は地山崩落土である黄橙色土ブロックを多く含む。上面が削平されているため不明な点も多いが、堆積状況をみるかぎり自然堆積と考えられる。
出土遺物（第76図、写真図版59）
検出面から土師器坏が１点（46ｇ）出土している（177）。非ロクロ成形の土師器坏で、底部脇から外方に立ち上がる。口縁部は横ナデの後にミガキ調整が施される。体部中央は横ナデ調整によって内側に張り出すが、明瞭な段は形成しない。底部は丸底であるが、ケズリ調整の影響で平底風になっている。内面にはミガキ調整と黒色処理が施される。
時　期　出土した土師器坏は古墳時代末～奈良時代初めに位置づけられるものであり、本遺構もその時期に属する可能性があるが、検出面からの出土であるため検討を要する。

ＲＤ129土坑
遺　構（第50図、写真図版37）
〈位置・検出状況〉－４Ｃ11ｘグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。
〈重複関係〉認められない。
〈平面規模〉上面1.00×0.38m、底面0.90×0.28m　〈深さ〉0.10m前後
〈形状〉平面形は楕円形で、上面・底面とも中央の幅が若干狭くなっている。底面は平坦であるが、根撹乱によって凹凸が認められる。断面形は箱形であるが、壁面も根撹乱による凹凸があって不整形である。
〈堆積状況〉黒褐色土の単層であるが、底面付近は根撹乱によって若干変色している。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

ＲＤ130土坑
遺　構（第50図、写真図版37）
〈位置・検出状況〉－４Ｃ10uグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。
〈重複関係〉認められない。
〈平面規模〉上面0.90×0.48m、底面0.72×0.28m　〈深さ〉0.29m
〈形状〉平面形は長方形で、東壁上面は崩落のため若干広がっている。底面は根撹乱の影響が著しく高さは一定ではない。断面形も底面と同じく根撹乱の影響で不整形である。
〈堆積状況〉上位に黒褐色土、下位に地山崩落土を多く含むにぶい黄褐色土が堆積している。上面が削平されているため不明な点も多いが、堆積状況をみるかぎり自然堆積と考えられる。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

ＲＤ131土坑
遺　構（第51図、写真図版37）
〈位置・検出状況〉－４C13ｐグリッドに位置する。検出面はＲＺ022と同じくⅢ層である。
〈重複関係〉ＲＺ022古墳と重複関係にある。検出段階では新旧関係はわからなかったが、ＲＺ022の



RD125
1　10YR1.7/1　黒色　しまりやや疎　粘性やや弱　炭化物を多量に含み　全体としてしまりは弱い
2　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック(φ1～3mm)10%含む

RD126
1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック(φ1～2mm)10%含む
2　10YR4/4　褐色　粘性やや強。地山ブロック30%含む
3　10YR2/2　黒褐色　地山崩落ブロック(φ1～2mm)10%含む　1層より黄色がかる

RD127
1　10YR3/2　黒褐色
2　10YR3/2黒褐色と10YR7/8黄橙色の混合土　粘性やや強　黄橙色土は壁面崩落ブロック

RD128
1　10YR2/2　黒褐色　粘性やや強　地山ブロック(φ1～3mm)3%含む
2　10YR2/1黒色と10YR7/8黄橙色の混合土　黄橙色土は地山崩落土　壁面付近は若干黄褐色に変色

RD129
1　10YR3/2　黒褐色　底面付近は若干暗褐色

RD130
1　10YR2/2　地山ブロック(φ5～10mm)5%含む
2　10YR6/4にぶい黄橙色　粘性やや強　やや砂質　黒色土と地山崩落土(φ5～30mm)40%含む

第50図　RD125 ～ 130

周溝を掘り下げた結果、周溝内堆積土が本遺構の堆積土を切っている状況が確認されたため、ＲＺ022の周溝掘削の際に南東側を大幅に削平されたものと判断した。
〈平面規模〉上面　？×1.45m、底面0.4×0.5m　〈深さ〉0.44m
〈形状〉南東側を大幅に削平されているため全形は不明であるが、円形もしくは楕円形プランの土坑と考えられる。上面に比べて底面は狭く、下位はほぼ垂直に立ち上がるが、上面は崩落が著しいため断面形は朝顔形となる。
〈堆積状況〉すべて黒褐色土であり、粘性と混和物の割合で３層に分類している。重複するＲＺ022の周溝内堆積土と比較すると黒味が強く、地山ブロックの割合が大きく異なることから分層は比較的容易であった。
出土遺物　なし。
時　期　重複関係からＲＺ022構築以前には埋没していたものと考えられる。ＲＺ022が奈良時代に属するものであるため、年代的にはそれより古いと考えられるが、本遺構からの出土遺物が無いため詳細は不明である。壁面の立ち上がりは明瞭であり、人為的に掘り込まれた土坑であるが、その性格については不明である。

ＲＤ132土坑
遺　構（第51図、写真図版38）
〈位置・検出状況〉－４Ｃ11oグリッドに位置する。検出面はＲＺ024・025と同じくⅢ層である。
〈重複関係〉ＲＺ025古墳の周溝に重なるように検出された。検出段階では周溝と一連のものと判断していたが、掘り下げの結果、周溝とは走行方向が異なっており、深さも異なることから別遺構と判断した。ただし、後述するように堆積土は非常に類似しており、明確に分離することができなかったため、最後まで新旧関係を把握することができなかった。
〈平面規模〉上面1.8×0.45～0.72m　〈深さ〉0.38m
〈形状〉平面形は長方形を基調とするが、上面は西側が狭く弧状になるため不整形である。底面の深さは一定ではなく、東端から西端に向かって高くなっていき徐々に消滅する。底面中央には0.9×0.5mの小土坑が確認されているが、人為的に掘り込まれたものかは不明である。断面形は逆台形と考えられるが、根撹乱の影響で底面・壁面とも凹凸が多くみられる。
〈堆積状況〉粘性の強い黒褐色土が堆積している。ＲＺ025古墳の周溝内にも同様の黒褐色土が堆積土しており、断面観察では両者の判別は困難であった。そのため両遺構にまたがる形でトレンチを設定して断ち割りを行ったが、新旧関係を把握するには至らなかった。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物が無いため詳細な年代は不明である。ＲＺ025との関係についても判然としなかったが、堆積土の状況から両遺構の埋没時期にそれほどの時間差は無いと考えられる。

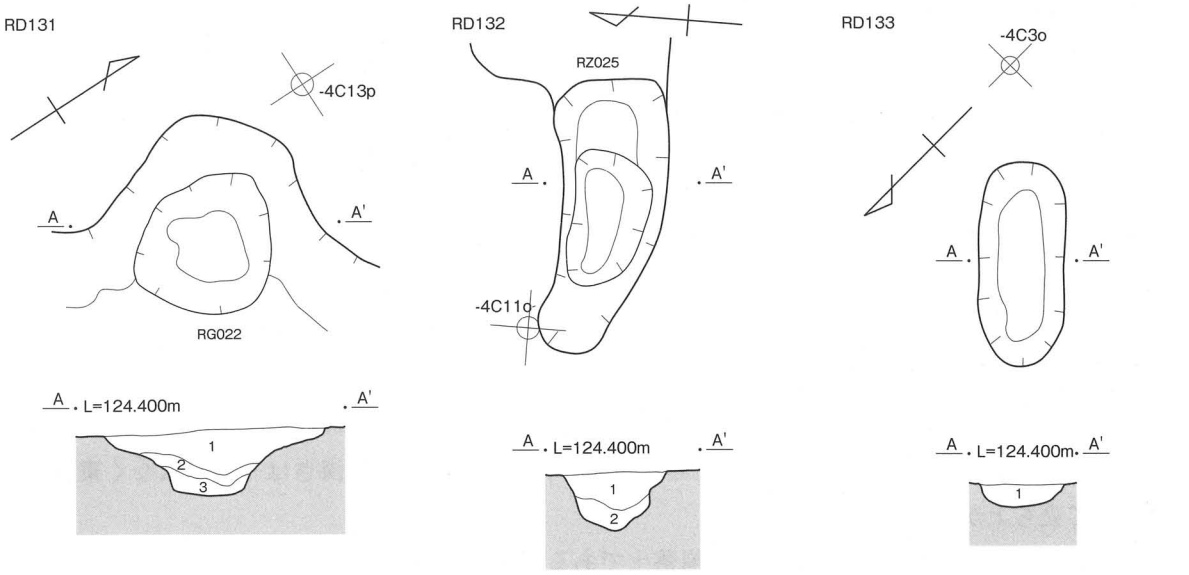
ＲＤ133土坑
遺　構（第51図、写真図版38）
〈位置・検出状況〉－４Ｃ２oグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。
〈重複関係〉認められない。
〈平面規模〉上面1.34×0.58m、底面1.0×0.32m　〈深さ〉0.15m
〈形状〉平面形は長楕円形である。断面形はⅢ形で、底面はほぼ平坦である。

〈堆積状況〉黒褐色土の単層である。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物、重複関係ともにないため詳細な年代は不明である。

ＲＤ134土坑
遺　構（第51図、写真図版38）
〈位置・検出状況〉－４Ｃ２nグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。
〈重複関係〉認められない。
〈平面規模〉上面1.05×0.40m、底面0.80×0.22m　〈深さ〉0.05m前後
〈形状〉平面形は長楕円形である。上面は大幅に削平されており不明な点が多いが、断面形はⅢ形、底面はほぼ平坦である。
〈堆積状況〉黒褐色土の単層である。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

ＲＤ135土坑
遺　構（第51図、写真図版38）
〈位置・検出状況〉－４D11ｈグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。
〈重複関係〉認められない。
〈平面〉上面2.58×0.60m、底面2.34×0.48m　〈深さ〉0.15m
〈形状〉南北方向に長軸をとる長楕円形プランの土坑で、北端は緩やかに屈曲する。断面形は箱形で、壁面は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、根撹乱により若干黒く変色している。
〈堆積状況〉黒褐色土の単層である。
出土遺物（第76図、写真図版59）
底面付近から土師器小甕の破片が112ｇ出土している。後述するＲＤ140土坑出土の破片と接合関係にあり、ほぼ完形に復元された（178）。破片数としてはＲＤ140からの出土が多いが、出土状況と残存部位を考慮すると本遺構に帰属する遺物と考えられる。非ロクロ成形の小甕で、体部外面には縦方向、内面には横方向にハケ調整が施される。頸部には明瞭な段が形成され、口縁部は強い横ナデ調整が施されており、端部はほぼ垂直に引き上げられる。底部には切り離し後に再調整が施されているようであるが、磨耗が著しいため工具は不明である。
時　期　出土した土師器小甕が奈良時代に位置付けられることから、本遺構もその時期に掘削されたものと考えられる。

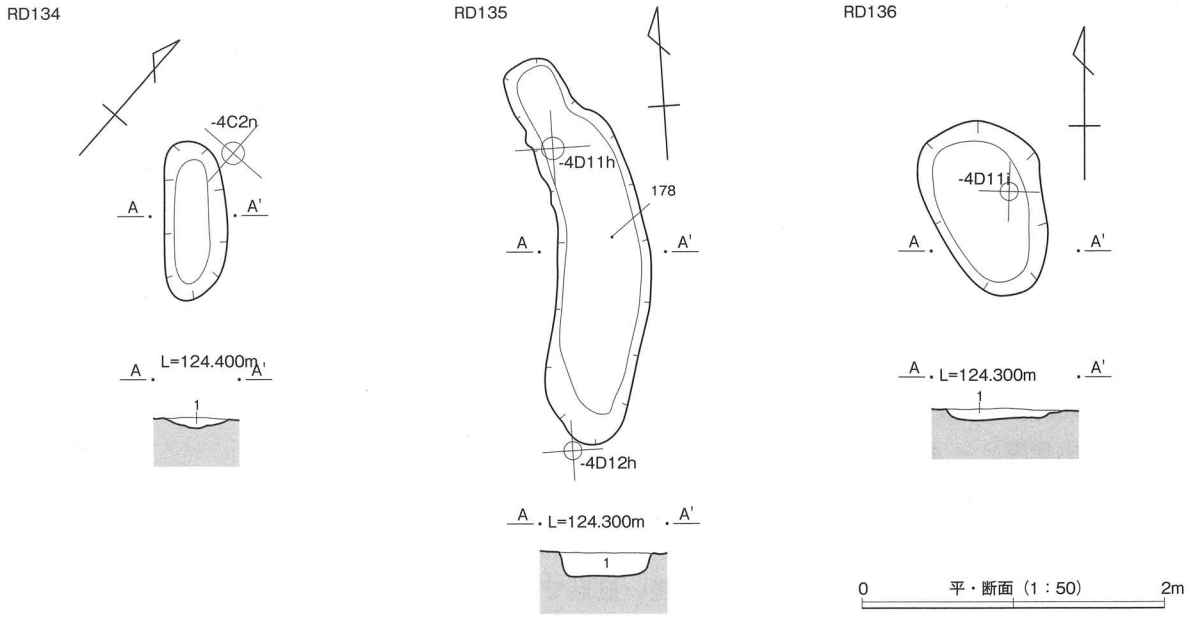
ＲＤ136土坑
遺　構（第51図、写真図版39）
〈位置・検出状況〉－４D11iグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。
〈重複関係〉認められない。
〈平面規模〉上面1.20×0.75m、底面0.96×0.54m　〈深さ〉0.08m前後
〈形状〉平面形はほぼ円形に近いプランである。上面を大幅に削平されているため断面形は不明である。底面は若干根撹乱が認められるがおおむね平坦である。



RD131
1　10YR2/2　黒褐色　粘性やや強　RZ022　1層より黒くしまりも強い
2　10YR3/2　黒褐色
3　10YR2/2　黒褐色　下位に黄色砂質土（地山）30%含む

RD132
1　10YR2/2　黒褐色　粘性やや強
2　10YR3/2　黒褐色　粘性やや強　地山ブロック25%含む

RD133
1　10YR3/2　黒褐色　地山ブロック（φ2～10mm）20%含む



RD134
1　10YR3/2　黒褐色　地山ブロック（φ2～10mm）20%含む

RD135
1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック（φ2～5mm）5%含む

RD136
1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック（φ2～5mm）5%含む

第51図　RD131 ～ 136

〈堆積状況〉黒褐色土の単層である。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

ＲＤ137土坑
遺　構（第52図、写真図版39）
〈位置・検出状況〉－４D16ｊ・17ｊグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。
〈重複関係〉認められない。
〈平面規模〉上面2.30×0.55～0.75m　〈深さ〉0.28m
〈形状〉平面形は長楕円形で、中央が緩やかに屈曲する。南端側は崩落のため広がっている。断面形は逆台形であるが、西壁の崩落が著しいため左右非対称である。底面の深さは一定ではなく東端は段差をもって立ち上がる。
〈堆積状況〉上位に黒褐色土、下位に地山崩落土である黄橙色土が堆積する。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

ＲＤ138土坑
遺　構（第52図、写真図版39）
〈位置・検出状況〉－４D18ｊグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。
〈重複関係〉認められない。
〈平面規模〉上面2.10×0.65m、底面1.80×0.42m　〈深さ〉0.15m
〈形状〉平面形は長楕円形で、北西端が若干屈曲する。断面形は箱形であるが、底面・壁面とも根撹乱により凹凸がみられる。
〈堆積状況〉地山崩落土ブロックを含む黒褐色土の単層である。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

ＲＤ139土坑
遺　構（第52図、写真図版39）
〈位置・検出状況〉－４D10ｆグリッド付近に位置する。検出面はⅢ層である。
〈重複関係〉認められない。
〈平面規模〉上面1.54×0.57m、底面1.20×0.44m　〈深さ〉0.10m前後
〈形状〉平面形は長楕円形である。断面形は浅い皿形であるが、底面・断面ともに根撹乱により凹凸がみられる。
〈堆積状況〉上位に黒褐色土、下位ににぶい黄橙色土が堆積する。堆積状況から北側から流れ込んだ自然堆積と考えられる。
出土遺物　なし。
時　期　出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

ＲＤ140土坑

遺　構（第52図、写真図版40）

〈位置・検出状況〉－４D12ｇグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面1.50×0.50～1.02m　〈深さ〉0.28m

〈形状〉円形の土坑と不整形の土坑が２基結合した鼓形に近いプランの土坑である。底面西側（円形プラン側）はほぼ平坦であるが、東側（不整形プラン側）は根撹乱も多く一定ではない。壁面の立ち上がりも弱く、外方に開きながら立ち上がる。なお、本来的には２基の土坑が重複している可能性があるが、堆積土の状況から判断できなかったため今回は同一遺構として報告している。

〈堆積状況〉黒褐色土とにぶい黄橙色土の混合土で、根撹乱が多いため全体として締まりは弱い。

出土遺物（第76図、写真図版59）

堆積土上位から土師器小甕の破片が出土している。前述したＲＤ135土坑出土の破片と接合関係にあり、ほぼ完形に復元された（178）。

時　期　堆積土上位から奈良時代に属する土師器小甕が出土していることから、奈良時代以降に埋没したものと考えられる。

ＲＤ141土坑

遺　構（第53図、写真図版40）

〈位置・検出状況〉－４D10ｋグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面0.72×0.36m、底面0.58×0.23m　〈深さ〉0.08m

〈形状〉平面形は長方形である。断面形は浅い皿形で、根撹乱により凹んでいる部分もあるが、底面はほぼ平坦である。

〈堆積状況〉黒褐色土と地山崩落土である黄橙色粘質土の混合土が堆積している。

出土遺物（第76図、写真図版59）

底面直上から土師器坏が口縁を伏せた状態で出土した（179）。ロクロ成形の坏で、体部は丸みをもって立ち上がり、内彎気味に口縁部へと至る。外面はロクロナデ、内面にはミガキ調整と黒色処理が施される。底部はヘラ削り調整によって切り離し痕跡が消されている。器壁は非常に厚く重みがある。

時　期　出土した土器から平安時代（９世紀後半代）と考えられる。

ＲＤ142土坑

遺　構（第52図、写真図版40）

〈位置・検出状況〉－４D10ｆグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉認められない。

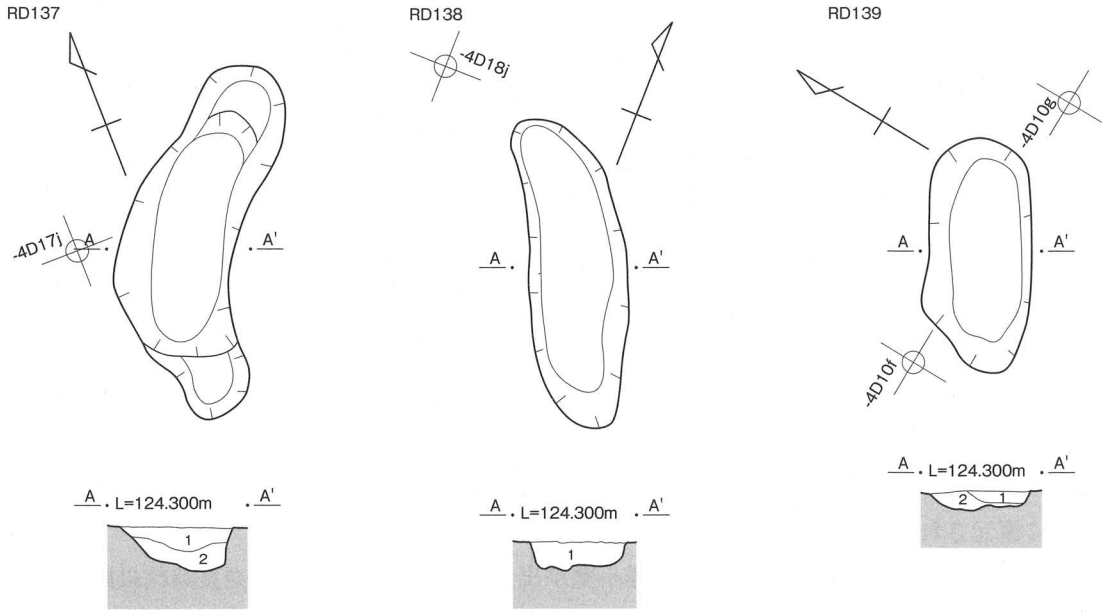
〈平面規模〉上面1.44×0.42m、底面1.08×0.17m　〈深さ〉0.10m

〈形状〉平面形は長楕円形である。断面形は浅い皿形で、根撹乱により凹んでいる部分もあるが、底面はほぼ平坦である。

〈堆積状況〉地山ブロックを含む黒褐色土の単層である。

出土遺物　なし。

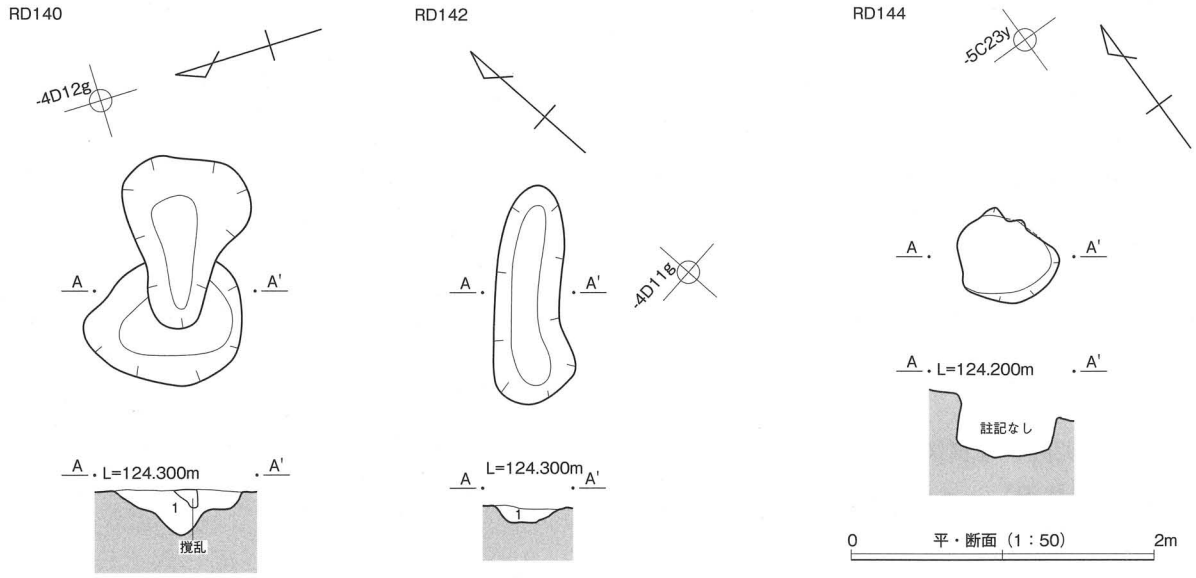
時　期　出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。



RD137
1　10YR3/2　黒褐色　地山ブロック(φ1mm)3%含む
2　10YR7/8　黄橙色　粘性やや強　地山崩落土で黒褐色土混入

RD138
1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック(φ2～10mm)20%含む

RD139
1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック(φ2～3mm)5%含む
2　10YR6/4　にぶい黄橙色　地山ブロック(φ5～15mm)20%含む



RD140
1　10YR2/2黒褐色と10YR6/4にぶい黄橙色の混合土　下位に地山ブロック10%含む

RD142
1　10YR2/2　黒褐色　地山ブロック20%含む

第52図　RD137～140・142・144

ＲＤ143土坑

遺　構（第53図、写真図版41）

〈位置・検出状況〉－４Ｄ２ｅグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉P43・56と重複関係にあり、いずれも本遺構より新しい。

〈平面規模〉上面（1.56）×（1.20）m、底面（1.35）×1.02m　〈深さ〉0.22m

〈形状〉三角点が設置されていたため東側が未調査であるが、検出された範囲をみると平面形は長方形と考えられる。平面形は箱形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、西壁付近では焼土の広がりを確認した。焼土は0.45×0.30mの範囲に広がっており、被熱深度は浅いが良く焼け締まっていることから現地性の焼土と考えられる。

〈堆積状況〉上層が黒褐色土、壁面付近に地山ブロックを含むにぶい黄橙色土が堆積する。焼土の影響もあり底面付近の堆積土には炭化物が混入して若干黒ずんでいる。

出土遺物　なし。

時　期　P43・56より新しい遺構といえるが、いずれも出土遺物が無いため詳細な年代は不明である。規模・形状および焼土の検出状況から古代の小型竪穴遺構もしくは土坑墓の可能性もあるが、全形が不明であることから今回は土坑として報告した。

ＲＤ144土坑

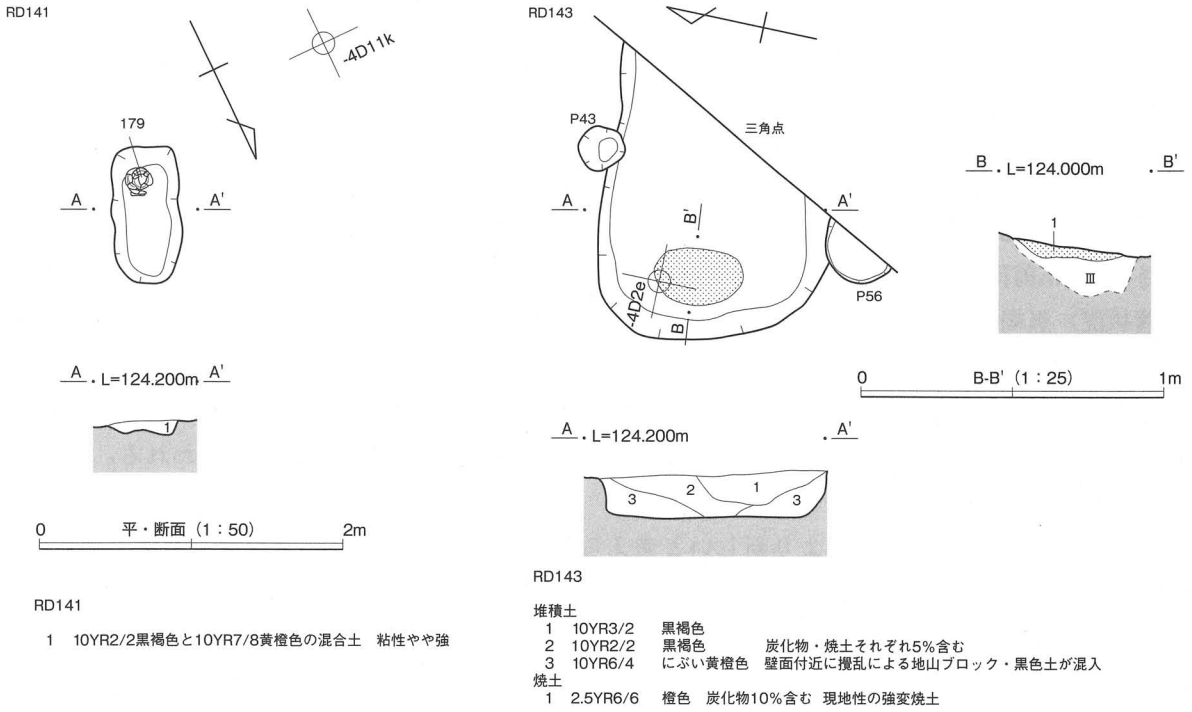
遺　構（第52図、写真図版41）

〈位置・検出状況〉－５C23ｘグリッドに位置する。ＲＡ040の貼床除去中に検出したものであるが、当初はＲＡ040の掘り方として認識しており、完掘後に別遺構であることが判明した。

〈重複関係〉ＲＡ040と重複関係にあり、本遺構埋没後にＲＡ040が構築されている。

〈規模〉上面0.65×0.52m、底面0.60×0.50m　〈深さ〉0.40m

〈形状〉平面形はほぼ円形である。断面形は箱形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦



RD141

1　10YR2/2黒褐色と10YR7/8黄橙色の混合土　粘性やや強

RD143

堆積土

1　10YR3/2　黒褐色

2　10YR2/2　黒褐色　炭化物・焼土それぞれ5%含む

3　10YR6/4　にぶい黄橙色　壁面付近に攪乱による地山ブロック・黒色土が混入

焼土

1　2.5YR6/6　橙色　炭化物10%含む　現地性の強変焼土

第53図　RD141・143

であるが、根の影響か部分的に凹凸がある。
〈堆積状況〉ＲＡ040の掘り方の一部として掘り下げを行ったため断面図の作成と写真撮影を行っていない。ただし、掘り下げ途中の状況をみるかぎりではＲＡ040第７層と色調はほぼ同一であった。
出土遺物　なし。
時　期　ＲＡ040構築以前の遺構ではあるが、出土遺物が無いため詳細な年代は不明である。

（村田）

6　溝　　跡（ＲＧ）

ＲＧ032溝

遺　構（第28・55図、写真図版43・44）
〈位置・検出状況〉－３Ｃグリッドから－４Ｄグリッドへ斜行するように位置する。Ⅲ層上面で黒褐色の溝状プランとして検出された。
〈重複関係〉RZ014古墳と重複関係にあり、本遺構がRZ014の中央を横切るように構築されている。
〈規模〉北東－南西方向に走る直線的な溝で、中央付近は削平されているが、第７次調査区分とあわせて約60m検出された。上幅は0.56～1.30mである。
〈深さ〉0.15～0.20m前後　〈断面形〉浅い皿形または逆台形
〈堆積状況〉底面付近や壁面付近には灰黄褐色土と地山崩落土である黄橙色土、上位には周辺からの流土である黒褐色土が堆積していた。
〈性格〉水が流れた痕跡が認められないことから、古代における何らかの区画溝と思われる。
出土遺物　なし。
時　期　重複関係からRZ014より新しい遺構であると判断できるが、出土遺物に乏しいため詳細は不明である。なお、RZ014と同様、一部は第７次調査区に位置しているため記載内容は第７次調査区分を含んでいる。

ＲＧ055溝

遺　構（第54図、写真図版43・44）
〈位置・検出状況〉－２Ｂ～－３Ｂグリッドに位置する。Ⅲ層上面で黒褐色の溝状プランとして検出された。
〈重複関係〉RG056溝と重複関係にあり、本遺構がRG056より新しい。
〈規模〉東西に走る直線的な溝で、調査区内では37.8m検出された。上幅は0.8m前後である。
〈深さ〉0.25m前後　〈断面形〉浅い皿形または逆台形
〈堆積状況〉黒褐色土主体で４層に細分した。後述するＲＧ056堆積土と性質は類似しているが、十和田ａテフラを含まないことから判別は容易であった。堆積要因については明らかではないが、堆積状況から自然に埋没したものと考えられる。
〈性格〉水が流れた痕跡が認められないことから、古代における何らかの区画溝と思われる。
出土遺物　なし。
時　期　重複関係からRG056溝より新しいと考えられる。RG056は十和田aテフラを堆積土中に含むもので平安時代に属すると考えられることから、本遺構はそれ以後に掘削されたと考えられる。

ＲＧ056溝

遺　構（第54・55図、写真図版42）

〈位置・検出状況〉調査区南東側に位置する。

〈重複関係〉RG055溝と重複関係にあり、一部をRG055に破壊されている。

〈規模〉五角形に巡る溝で、調査区内では約166m検出された。上幅は0.55～1.20mである。

〈深さ〉0.30～0.50m　〈断面形〉浅い皿形または逆台形

〈堆積状況〉５層に細分した。上位に十和田aテフラを含む黒色土、その直下に二次堆積と考えられる十和田aテフラが薄く層状に堆積する。中～下位は黒褐色土が堆積しており、下位ほど粘性が強くなる。前述の通り古墳（ＲＺ018・022）との重複部分は他の部分より深く掘り込まれており、古墳の周溝内堆積土が流入しているためその他の部分と堆積状況は異なる。なお、ＲＺ018との重複部分のようにどちらの遺構に帰属するか不明な堆積土もあるが、流入方向などからいずれも自然に堆積した層と考えられる。

〈性格〉水が流れた痕跡が認められないことから平安時代に掘削された区画溝と思われる。溝内部にはほぼ同時期（９世紀後半～10世紀初頭）の竪穴住居が検出されており、これらと外部を区画するための施設の可能性はあるが、竪穴住居はわずか４棟のみであることからこれらのみを区画するための溝とするには疑問が残る。しかし、それ以外に同時期と考えられる遺構も検出されていないため、本遺構掘削の目的と用途については不明と言わざるをえない。

出土遺物（第77図、写真図版59）

〈出土状況〉ＲＺ018･020との重複部分と西側部分を中心に土師器518ｇと須恵器188ｇが出土している。とくにＲＺ020との重複部分で多く出土しているが、接合関係からＲＺ020から流れ込んだと思われる破片が多く、純粋に本遺構内のみで接合したものは少ない。

〈掲載遺物〉８点を掲載した（180～187）。182～184は非黒色処理坏で、内外面ともに回転ナデ調整が施される。185は壷類の底部である。体部外面にはヘラ削り調整が施され、底部脇は高台風に引き出される。186は把手である。

時　期　重複関係からRG055溝より古く、かつ十和田aテフラを堆積土中に含むことから平安時代前半に掘削されたものと判断できる。

（濱田・村田）

ＲＧ057溝

遺　構（第56図、写真図版43・44）

〈位置・検出状況〉－４Ｃ７ｙグリッド付近に位置する。検出面はⅢ層上面～Ⅳ層上面である。

〈重複関係〉ＲＺ030古墳と重複関係にあり、ＲＺ030の周溝の一部を破壊している。

〈規模〉北東－南西方向に走る直線的な溝で、走行方向はＮ－49°－Ｅである。全長は16.30m、上幅は0.80m前後である。南西側に向かうにつれて浅くなり、南西端は自然消滅する。

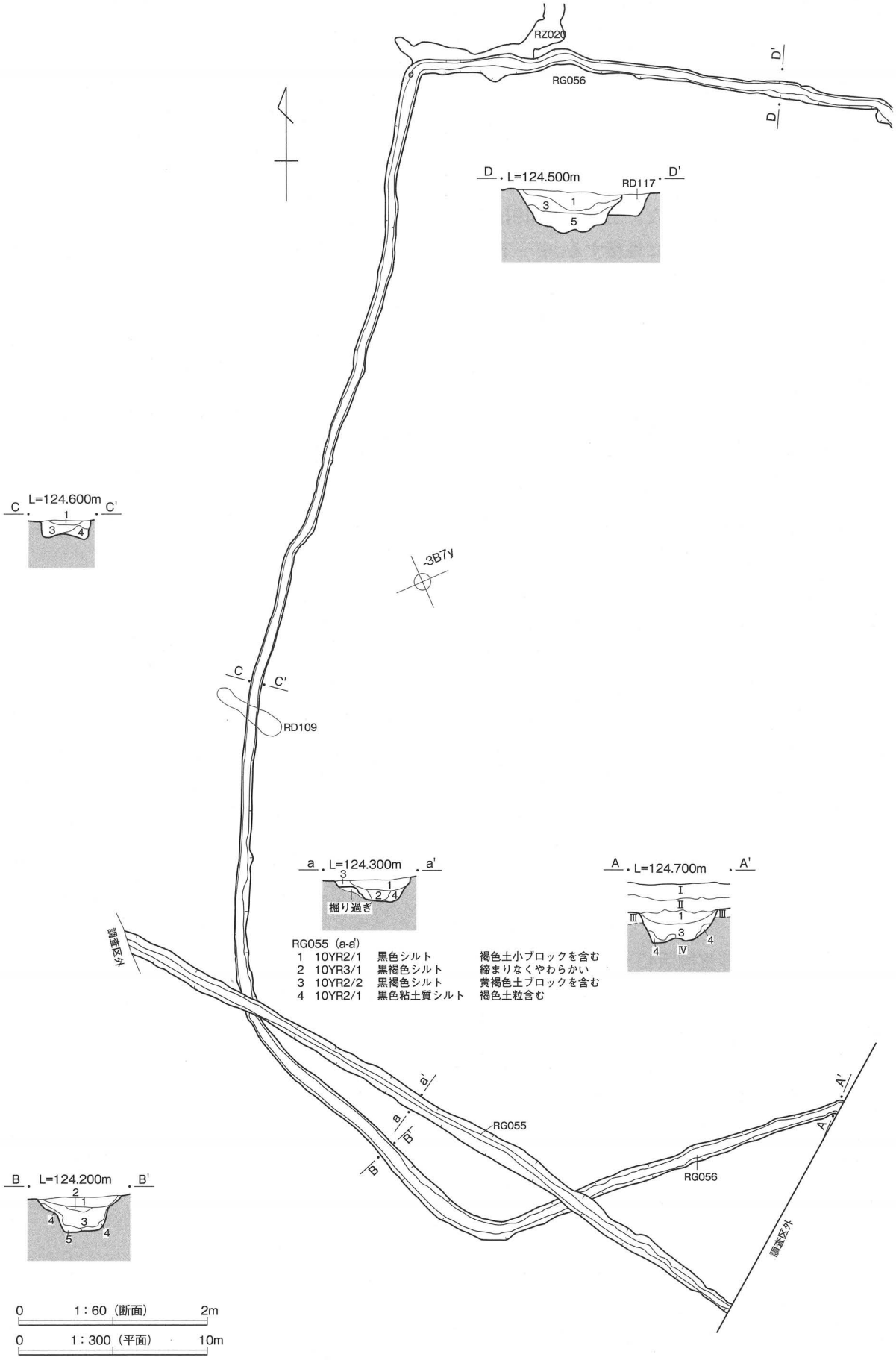
〈深さ〉0.10m前後　〈断面形〉皿形

〈堆積状況〉粘性の強い黒褐色土と地山崩落土である黄褐色土が堆積しているが、上面が削平されているためいずれも層厚は薄い。

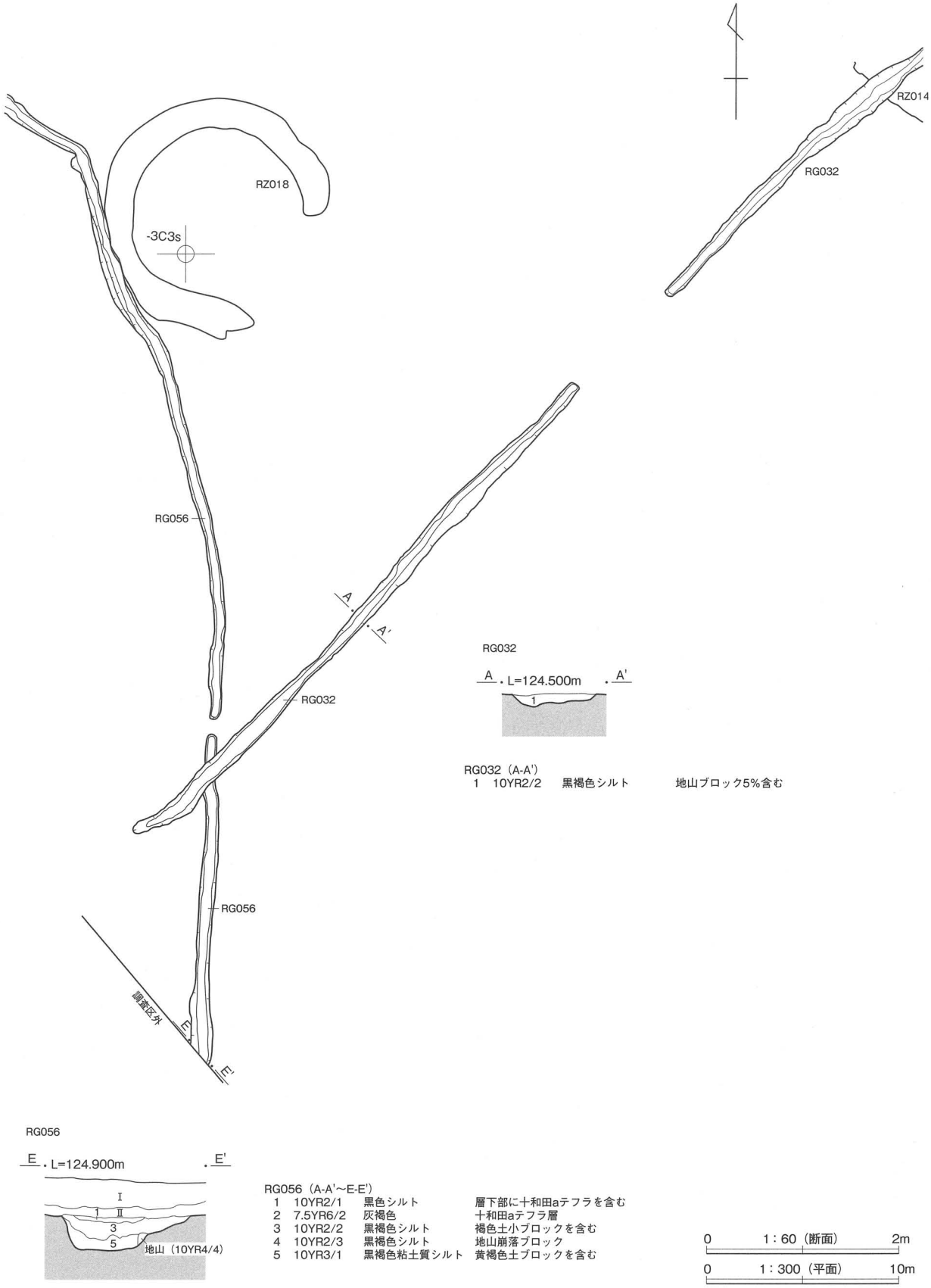
〈性格〉不明である。

出土遺物　土師器片が２点（20ｇ）出土しているが、細片のため図示することができなかった。

時　期　重複関係からＲＺ030より新しい遺構と判断できるが、出土遺物が乏しいため不明である。



第54図　RG055・056（1）



RG032（A-A'）

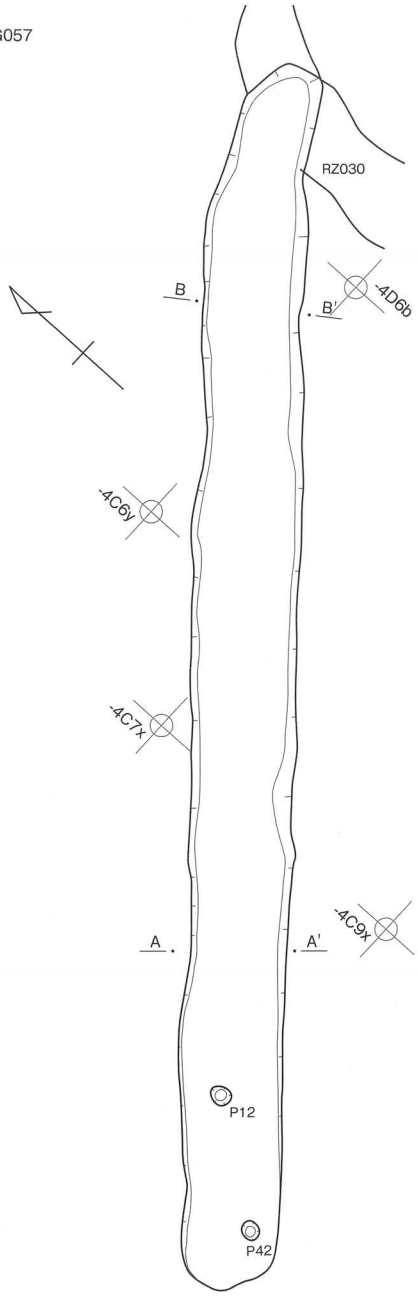
1	10YR2/2	黒褐色シルト	地山ブロック5%含む

RG056（A-A'～E-E'）

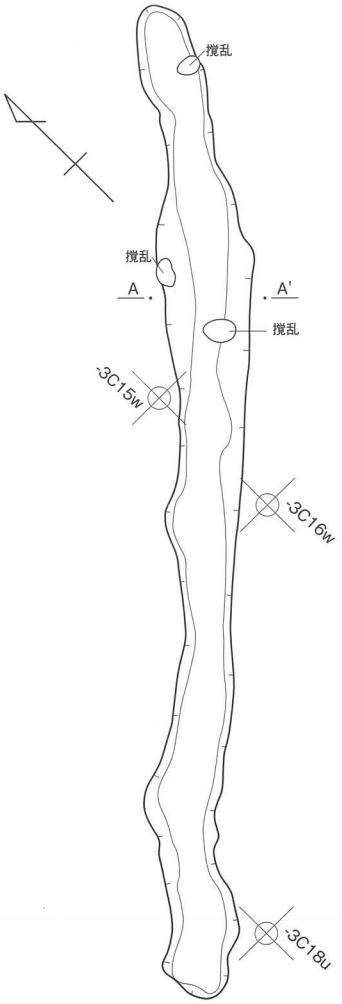
1	10YR2/1	黒色シルト	層下部に十和田aテフラを含む
2	7.5YR6/2	灰褐色	十和田aテフラ層
3	10YR2/2	黒褐色シルト	褐色土小ブロックを含む
4	10YR2/3	黒褐色シルト	地山崩落ブロック
5	10YR3/1	黒褐色粘土質シルト	黄褐色土ブロックを含む

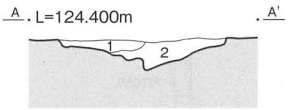
第55図　RG032・056（2）

RG057



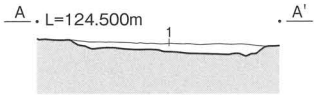
RG058

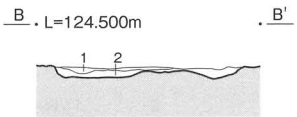




0　断面（1：50）　2m

0　平面（1：100）　4m





RG057
1　10YR3/2　黒褐色　粘性強　褐色粘土ブロック30%含む
2　10YR7/8　黄橙色　粘性やや強　黒色土を多く含む

RG058
1　10YR3/2　黒褐色　しまりやや密　地山粘土ブロック（φ2～5mm）10%含む
2　10YR4/2　灰黄褐色　しまりやや密　地山粘土ブロック（φ3～20mm）30%含む

第56図　RG057・058

ＲＧ058溝

遺　構（第56図、写真図版43・44）

〈位置・検出状況〉－３Ｃ15ｗグリッド付近に位置する。検出面はⅣ層上面及びⅣ層下位の礫層上面である。黒褐色～灰黄褐色の直線的なプランとして検出された。

〈重複関係〉認められない。

〈規模〉北東－南西方向に走る直線的な溝で、走行方向はＮ－42°－Ｅである。全長は13.20m、上幅は0.60～1.30mである。南西端付近は底面が礫層となり、プランの把握が困難であった。

〈深さ〉10～15cm　〈断面形〉皿形を基調とするが、根撹乱が多く不整形

〈堆積状況〉地山ブロックを多く含む黒褐色土と灰黄褐色土で構成される。

〈性格〉不明である。

出土遺物　なし。

時　期　出土遺物・他遺構との重複関係が無いため不明である。

7　土器埋設遺構（ＲＺ）

ＲＺ033土器埋設遺構

遺　構（第57・77図、写真図版41・59）

〈位置・検出状況〉RZ017古墳の南側、－３Ｃ12ｔグリッドに位置する。検出面はⅣ層中で、黒褐色土の中に土器が散布するという状態で検出された。同様の状況で検出されたＲＺ034が土器埋設遺構であったことから、本遺構も同様の可能性を想定しながらプランが明確になるまで遺構の周囲を薄く掘り下げていった。掘り下げの結果、検出面から４cmの深さで柱穴状の円形プラン内に土器が横倒し状態で設置されている状況が確認されたことから、本遺構も土器埋設遺構であることが判明した。

〈形状・設置方法〉土器を埋設する土坑（掘り方）は楕円形プランをしており、平面規模は0.46×0.36m、検出面からの深さは0.21mである。埋設される土器よりも一回り大きく、壁面は外傾しながら立ち上がる。堆積土は３層確認されており、このうち第３層は土器埋設の際に人為的に埋めた裏込め土と考えられ、土器は第３層の上面に口縁部を南東方向に向けた横位の状態で設置されていた。遺構の上面が削平されているため全形は不明であるが、おそらく土器全体を裏込め土で覆った形態であったと考えられ、土器棺墓として設置された可能性が高い。

〈土器の特徴〉188は体部中央やや上に最大径をもつ長胴形の土師器甕である。ロクロを用いて成形されており、頸部は「く」の字状に外方に屈曲し、口縁部外面は横ナデ調整により受け口状となるが、内面は斜め上方に立ち上がる。体部外面には縦方向のヘラ削り調整、内面は底部付近にハケメ調整が施される。なお、体部内面中央やや下位で喫水線と思われるバンド状のコゲの痕跡が確認できる。底部は磨耗により不明瞭であるが、ヘラ削り調整が施されていた可能性がある。

時　期　土器の年代を考慮すると平安時代（９世紀後半）に構築されたものであり、古墳構築以後に設置された埋葬施設と考えられる。ただし、土壌洗浄・フローテーションでも骨や副葬品の類は検出できなかった。

ＲＺ034土器埋設遺構

遺　構（第57・78図、写真図版41・60）

〈位置・検出状況〉RZ032古墳の北東側、－４Ｄ14ｊグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面で、に

ぶい黄褐色土の楕円形プラン内に土器片が散布するという状態で検出された。当初は小型の土坑と考えていたため従来どおり２分法で掘り下げていったところ、底面付近で同一個体の土器の口縁部破片が堆積土に押し潰された状態でみつかった。このことから、意図的に土器を埋設した遺構であることが判明した。

〈重複関係〉ＲＺ032の周溝外縁部に位置しているが、直接的な重複関係はない。

〈形状・設置方法〉土器を埋設する土坑（掘り方）は楕円形プランをしており、平面規模は0.78×0.40m、検出面からの深さは0.16mである。長軸方向は埋設される土器の1.5倍ほど大きいが、短軸方向は土器より若干広い程度である。底面は浅い皿形で、南西壁はオーバーハングしながら立ち上がる。堆積土は２層確認されており、このうち第２層は土器埋設の際に人為的に埋めた裏込め土と考えられる。土器は底面直上に口縁部を北西方向に向けた横位の状態で設置されており、断面計測ラインから北西側が堆積土に押し潰されている以外は、ほぼ元位置を保った状態で出土している。遺構の上面が若干削平されているため推定になるが、おそらく土器全体を裏込め土で覆った形態であったと考えられ、土器棺墓として設置された可能性が高い。

〈土器の特徴〉189は口縁部に最大径をもつ長胴形の土師器甕である。成形にロクロは用いられておらず、体部には輪積み痕が認められる。頸部の屈曲は弱く、わずかに外方に角度を変えながら口縁部へと至る。口縁部は短く、微弱な横ナデ調整が施されるのみである。体部は外面に縦方向のヘラ削り、内面に横方向と縦方向のヘラナデ調整が施される。底部には木葉痕が明瞭に認められる。

時　期　土器の年代を考慮すると平安時代（９世紀後半以降）に構築されたものであり、古墳構築以後に設置された埋葬施設と考えられる。ただし、土壌洗浄・フローテーションでも骨や副葬品の類は検出できなかった。（村田）

８　焼　土　遺　構（ＲＦ）

ＲＦ002焼土

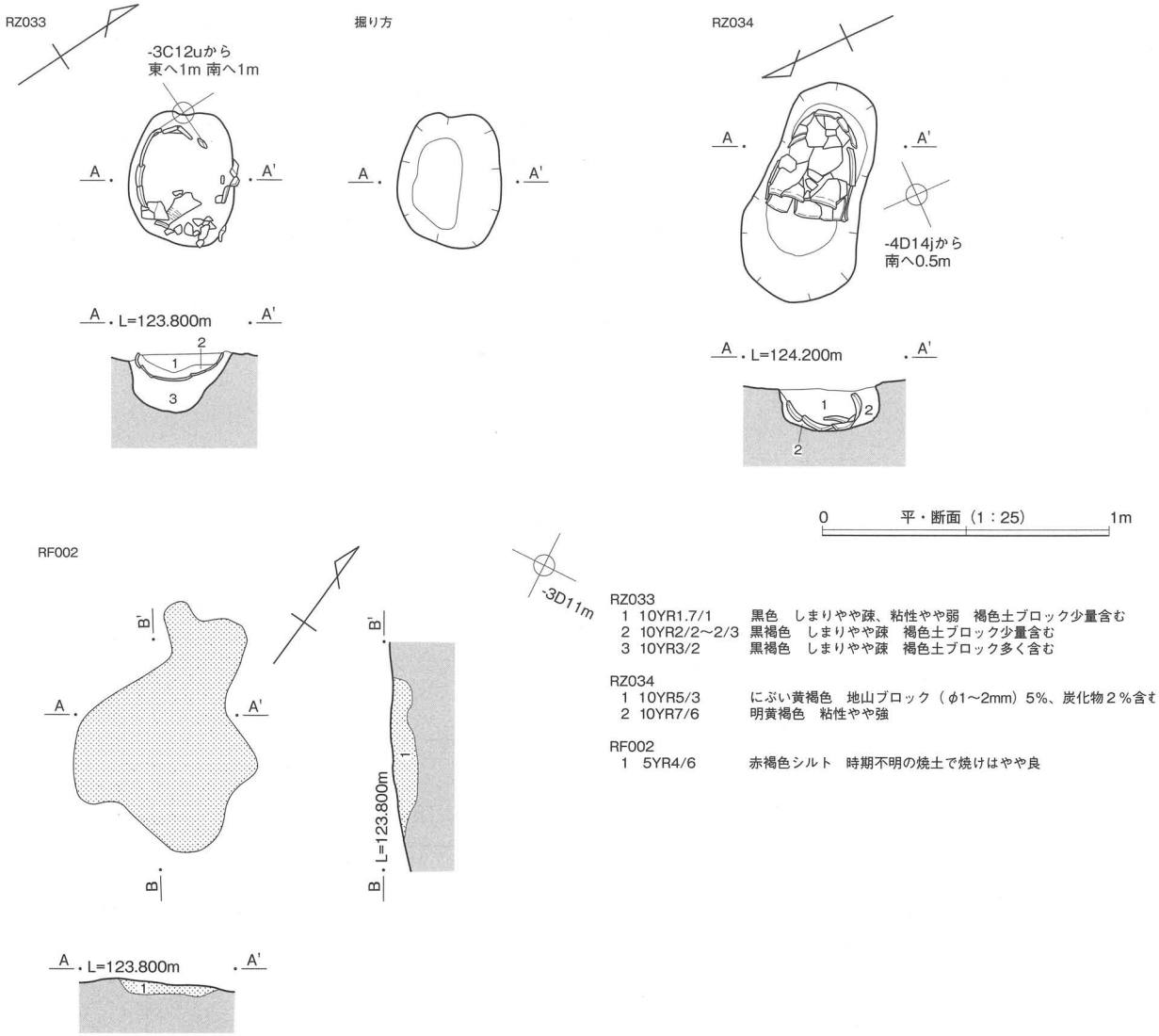
遺　構（第57図、写真図版40）

〈位置・検出状況〉－３D11１に位置する。Ⅱ層上面で検出した。精査後にこの周辺をⅢ層上面まで掘削したところ、新たにＲＤ115土坑が確認された。遺構確認面は異なるが、本遺構はＲＤ115上部に存在していたものであり、一連の遺構であった可能性がある。

〈規模・平面形〉23～62×80cmあまりの不整円形

〈厚さ〉４～8cmの赤褐色シルト質土で焼けは良くない。

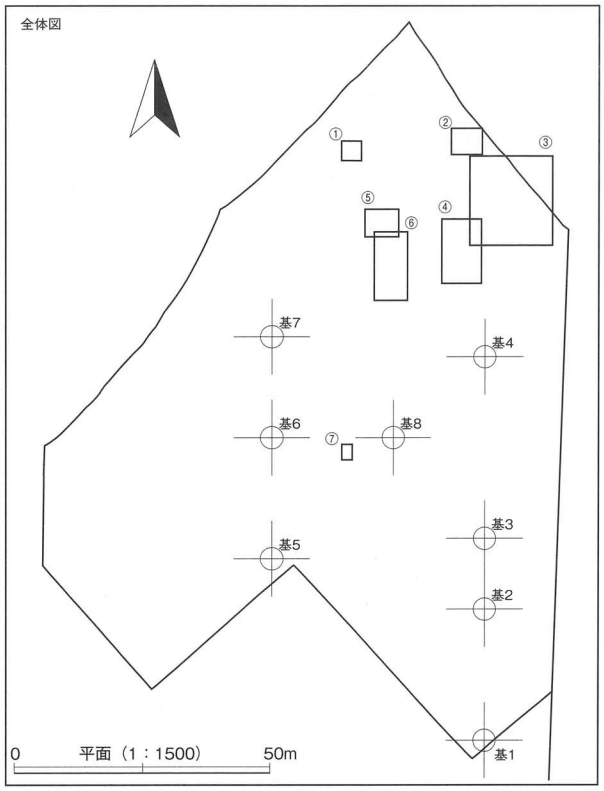
〈遺構の性格・時期〉先に述べたが、ＲＤ115との関連は不明確であり性格は不明である。時期は検出面から古代と考えたい。（濱田）

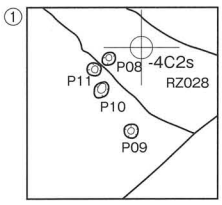


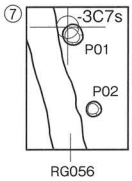
第57図　RZ033・034、RF002

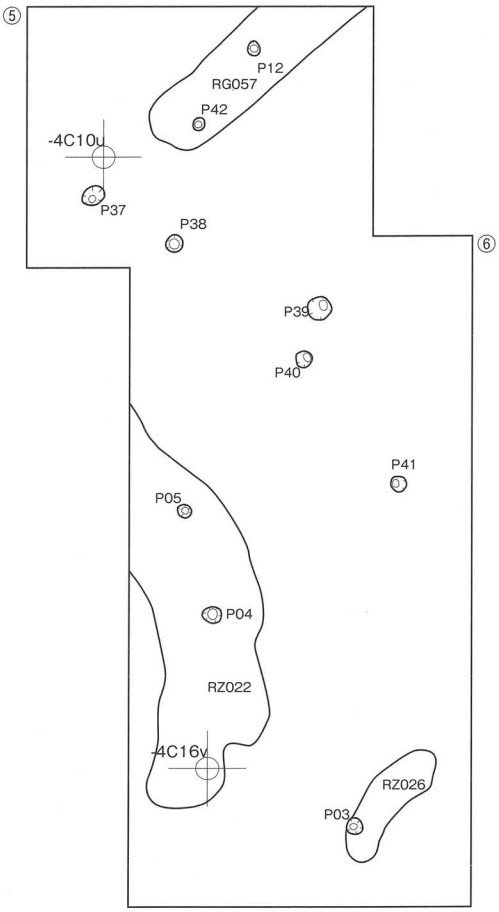
9　柱穴列・柱穴（RC・P）（第58・591図、第3表、写真図版44）

柱穴は、調査区北側を中心に66個検出している。とくに調査区北端の旧河道の肩部付近に列状に集中する傾向があり、間隔に規則性は無いものの、直線的に並ぶ柱穴列が3列（RC003～005）確認された。出土遺物はP22から陶器香炉の破片が1点出土したのみで、掘削年代は不明なものがほとんどである。ただし、柱穴列に関しては遺跡の北西端に位置する農業試験場（明治～大正時代に建設・使用されたと考えられる）に関連する柵列の可能性があるため、近～現代に属すると考えられるが今回は遺構として登録した。



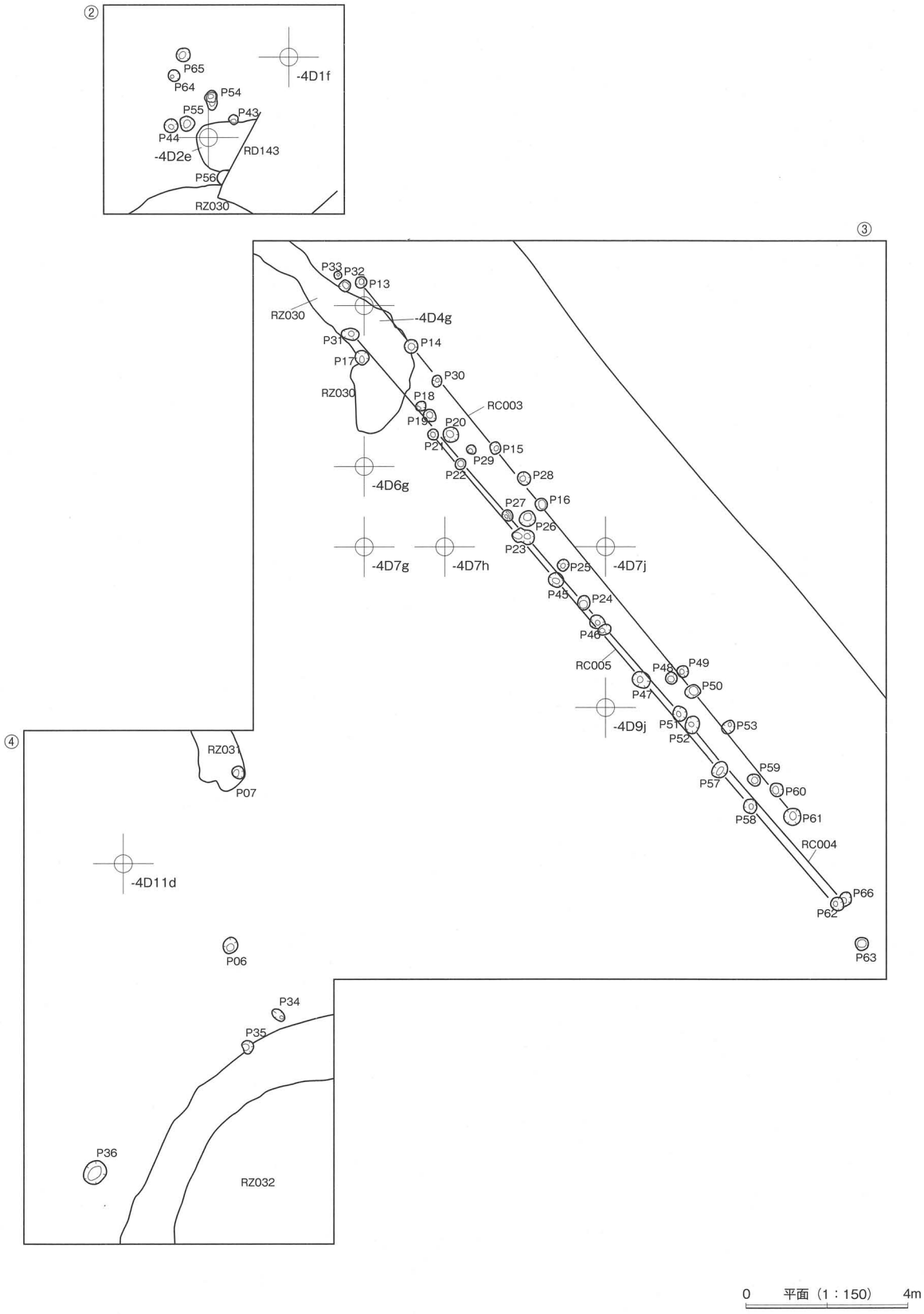






0　平面（1：150）　4m

第58図　柱穴列・柱穴（1）


②
P65
P64
P54
P55
P43
P44
-4D1f
-4D2e
RD143
P56
RZ030
③
P33
P32
P13
RZ030
-4D4g
P31
P14
P17
P30
RZ030
P18
RC003
P19
P20
P21
P15
P29
P22
P28
-4D6g
P27
P16
P26
P23
-4D7g
-4D7h
-4D7j
P25
P45
P24
P46
RC005
P48
P49
P47
P50
-4D9j
P51
P53
P52
④
RZ031
P07
P59
P57
P60
P58
P61
RC004
-4D11d
P66
P62
P06
P63
P34
P35
P36
RZ032
0　平面（1：150）　4m

第59図　柱穴列・柱穴（2）

第３表　柱穴計測表

Pit	計測値（cm）		土層
番号	直径or長軸	深さ	パターン
1	37	22	A
2	29	15	B
3	31	55	×
4	38	30	×
5	28	45	×
6	40	17	B
7	30	40	D
8	27	19	A
9	28	10	A
10	35	50	A
11	27	16	C
12	29	－	B
13	28	16	A
14	32	17	B
15	30	29	A
16	30	12	A
17	38	36	A
18	26	23	A
19	36	32	A
20	39	39	A
21	28	28	A
22	28	28	A

Pit	計測値（cm）		土層
番号	直径or長軸	深さ	パターン
23	39	26	A
24	38	35	A
25	26	25	A
26	39	40	A
27	28	7	A
28	32	19	B
29	24	19	A
30	24	－	×
31	44	20	A
32	26	20	A
33	19	21	C
34	37	8	B
35	32	19	B
36	59	10	C
37	42	55	A
38	35	30	A
39	48	14	A
40	32	25	A
41	30	35	A
42	26	11	A
43	25	20	A
44	34	38	A

Pit	計測値（cm）		土層
番号	直径or長軸	深さ	パターン
45	38	50	A
46	32	56	A
47	46	57	A
48	28	33	A
49	28	22	A
50	38	46	A
51	34	53	A
52	42	39	A
53	28	28	A
54	45	45	A
55	37	50	A
56	38	53	A
57	43	60	A
58	36	48	A
59	33	35	A
60	35	33	A
61	42	46	B
62	34	36	A
63	31	57	A
64	24	37	A
65	33	34	A
66	30	－	×

土層パターン

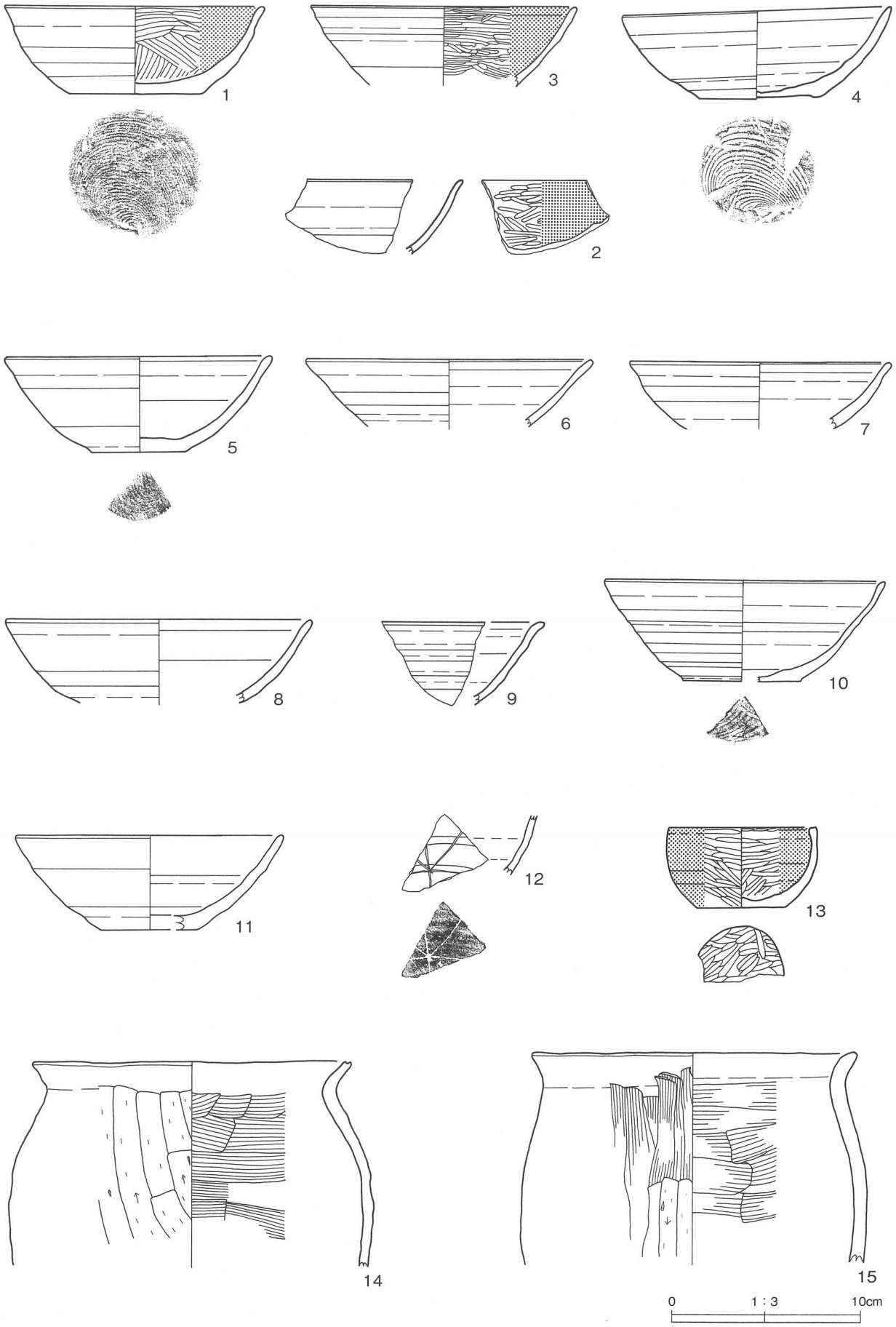
A	10YR2/2　黒褐色　粘性強く地山ブロック10～30％含む
B	10YR3/2　黒褐色　地山ブロック５％含む
C	10YR2/2　黒褐色　地山ブロック５％含む
D	10YR1.7/1　黒色

10　遺構外出土遺物（第78図、写真図版60）

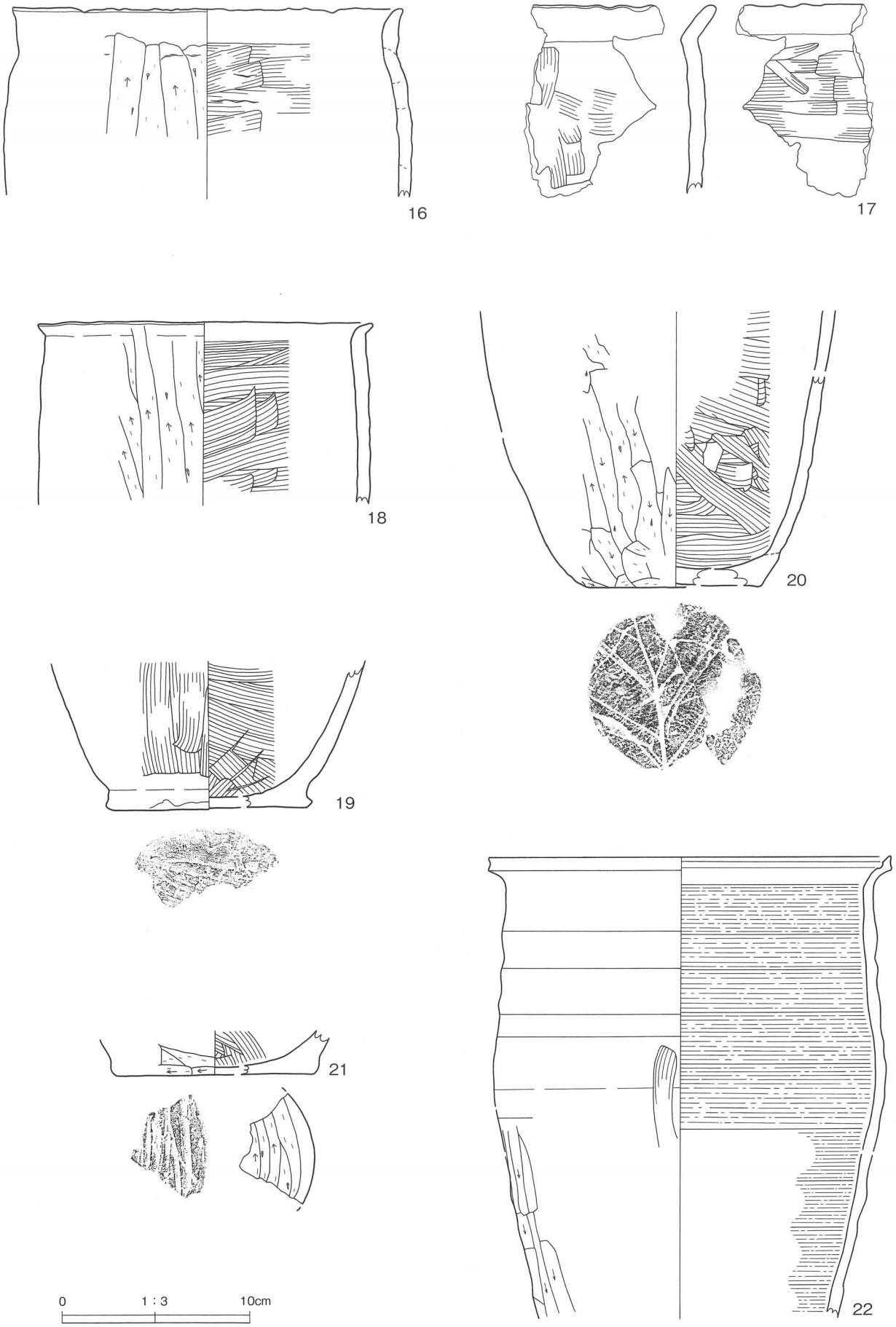
遺構外から出土した遺物の総量は、当センターの遺物収納用小コンテナ（容量:14㍑）１箱弱である。内訳は土師器・陶磁器・鉄製品で、総量で1.0kg弱である。

土師器は調査区中央の竪穴住居や古墳の周辺から出土しており、実測可能な２点を掲載した（191・192）。191はロクロ成形の土師器坏で、内面にはミガキ調整と黒色処理が施される。192は内外面に黒色処理が施された小型坏で、内外面ともにミガキ調整が施される。

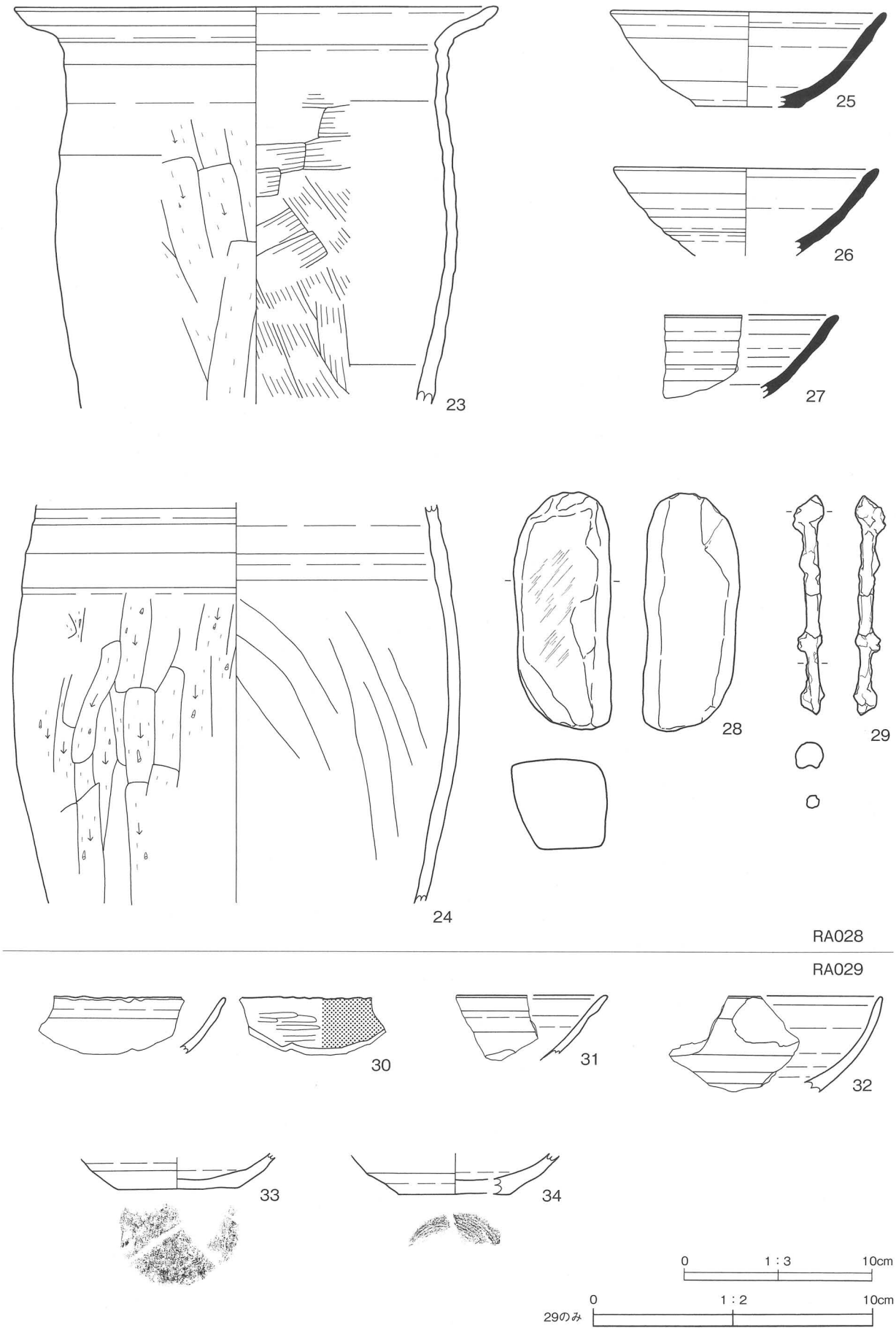
陶磁器と鉄製品は調査区南端側で出土している。陶磁器は近世～現代に属するもので、２点を掲載した（193・194）。193は肥前産の磁器丸碗で、外面には木葉文もしくは木賊文、底部内面には隷字体の銘款が描かれている。194は角型の火鉢と考えられ、内外面に黒色処理が施される。鉄製品は近～現代に属する釘の破片であるが、小片のため図示できなかった。



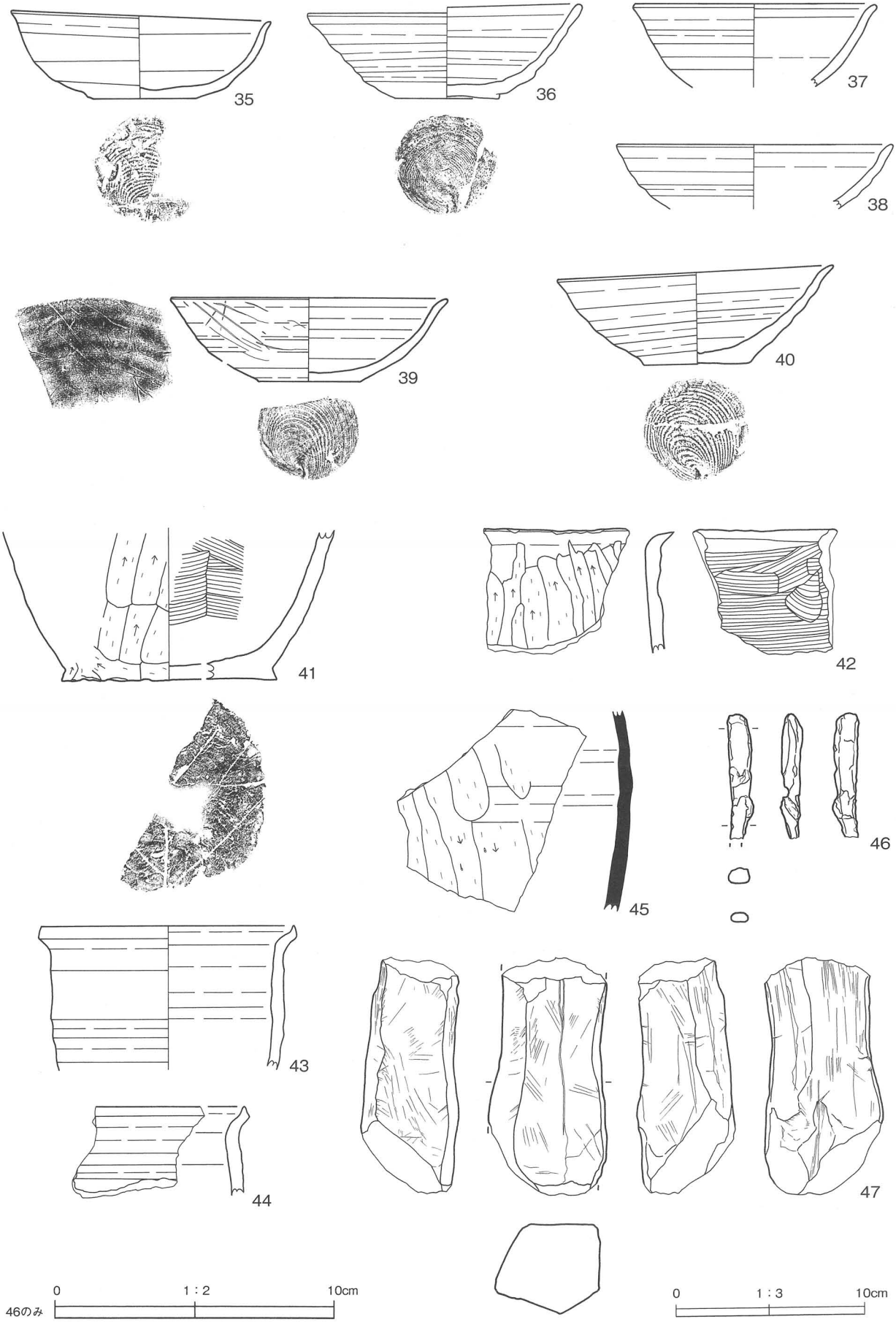
第60図　RA028出土遺物（1）



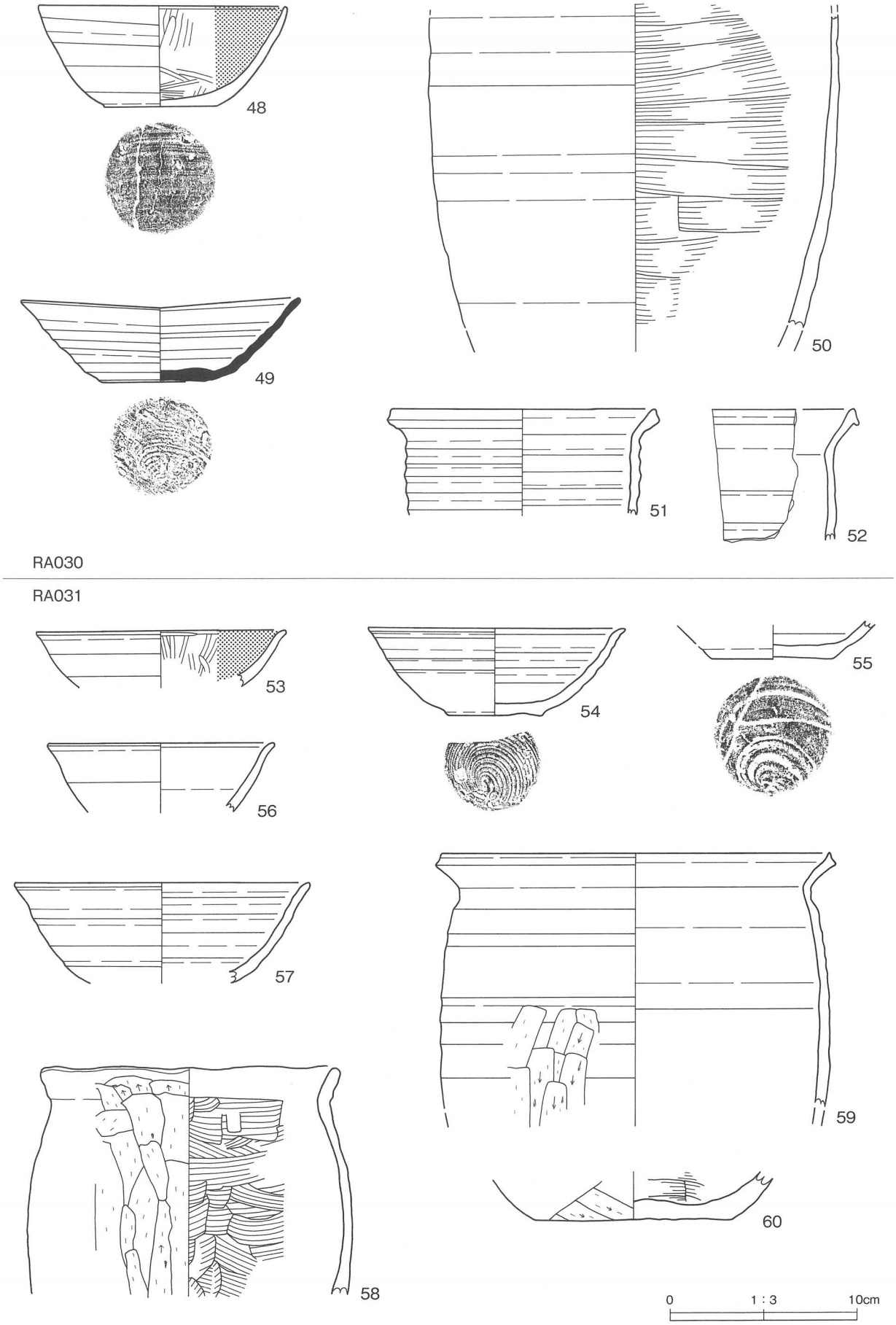
第61図　RA028出土遺物（2）



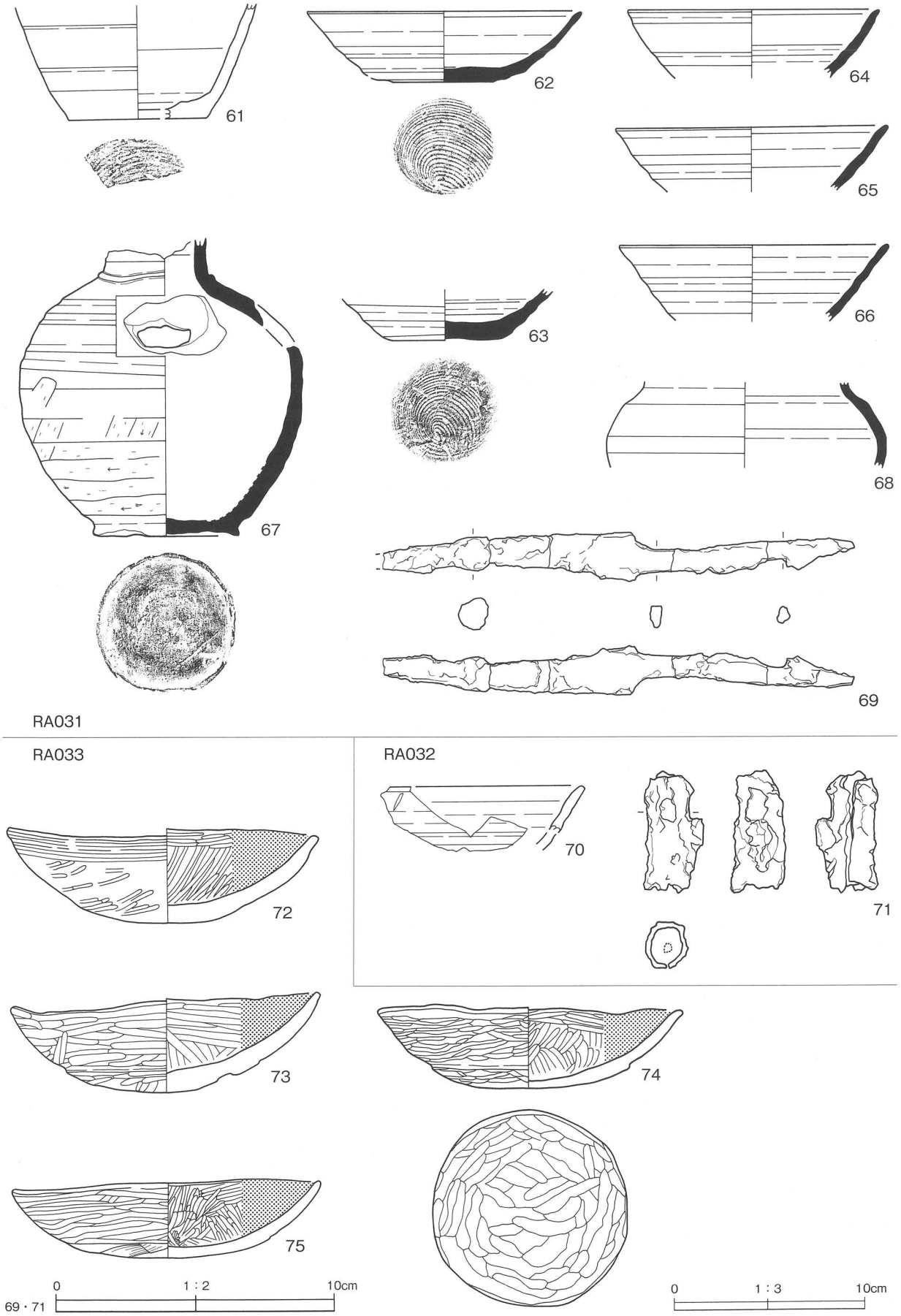
第62図　RA028・029出土遺物



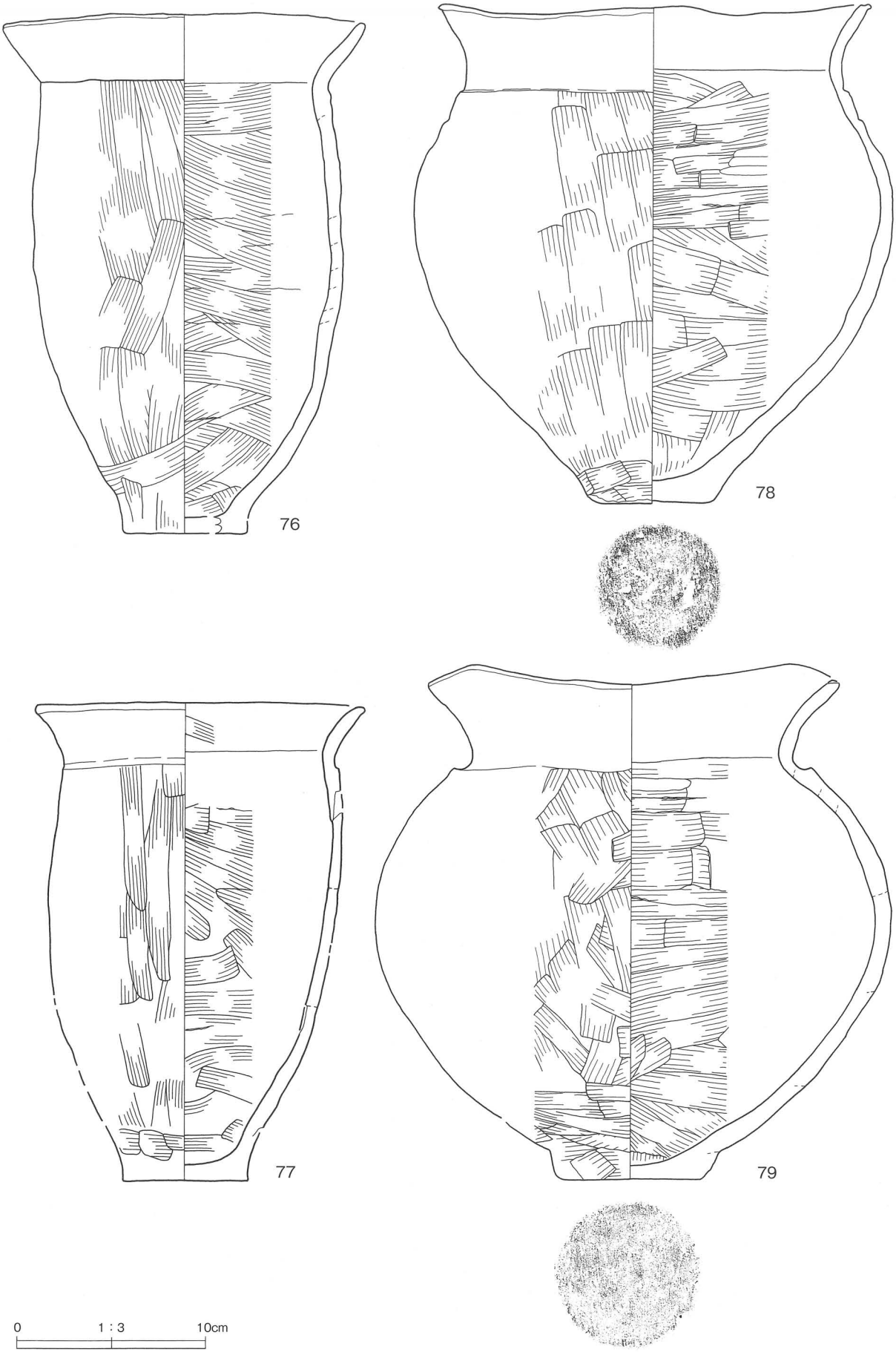
第63図　RA029出土遺物



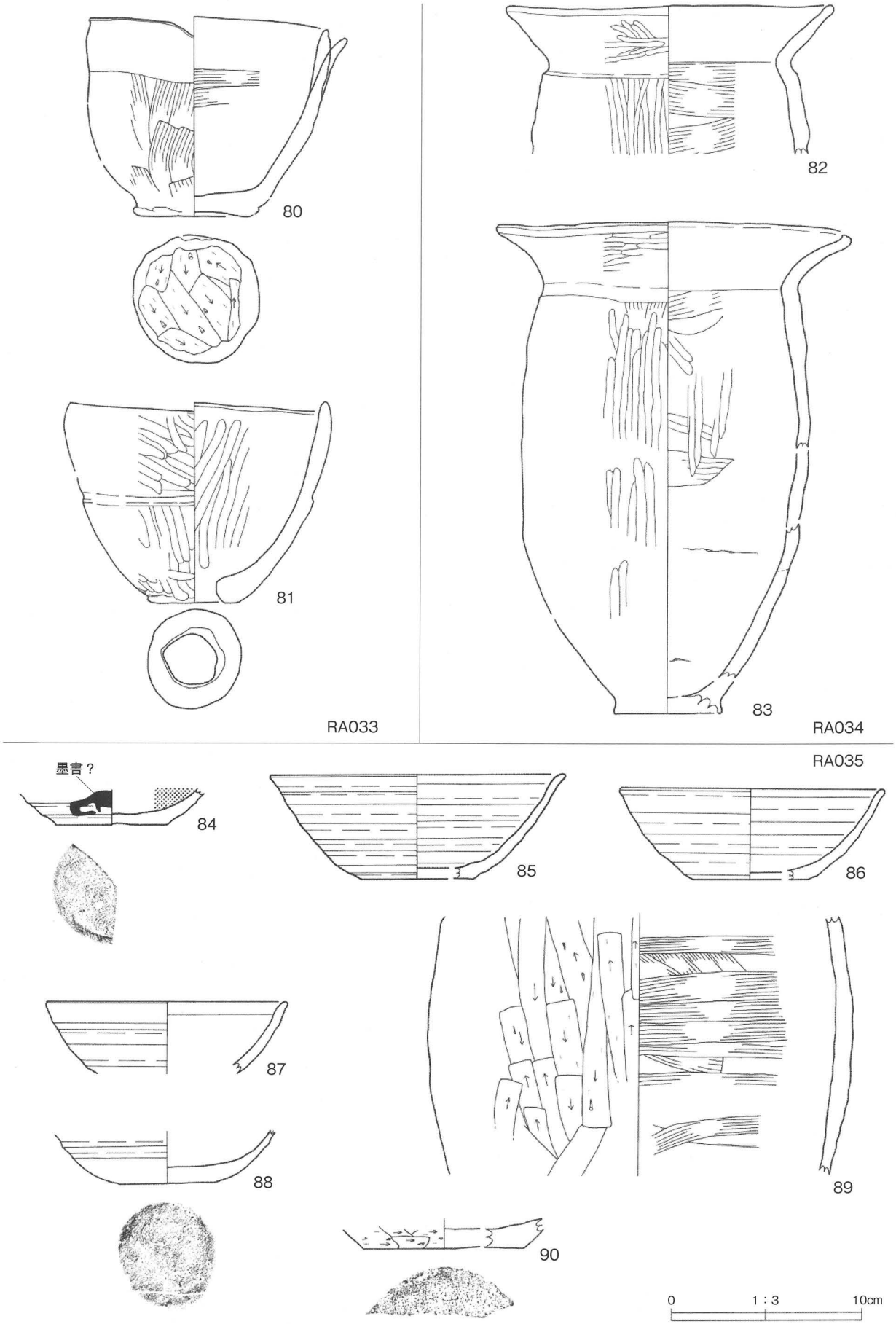
第64図　RA030・031出土遺物



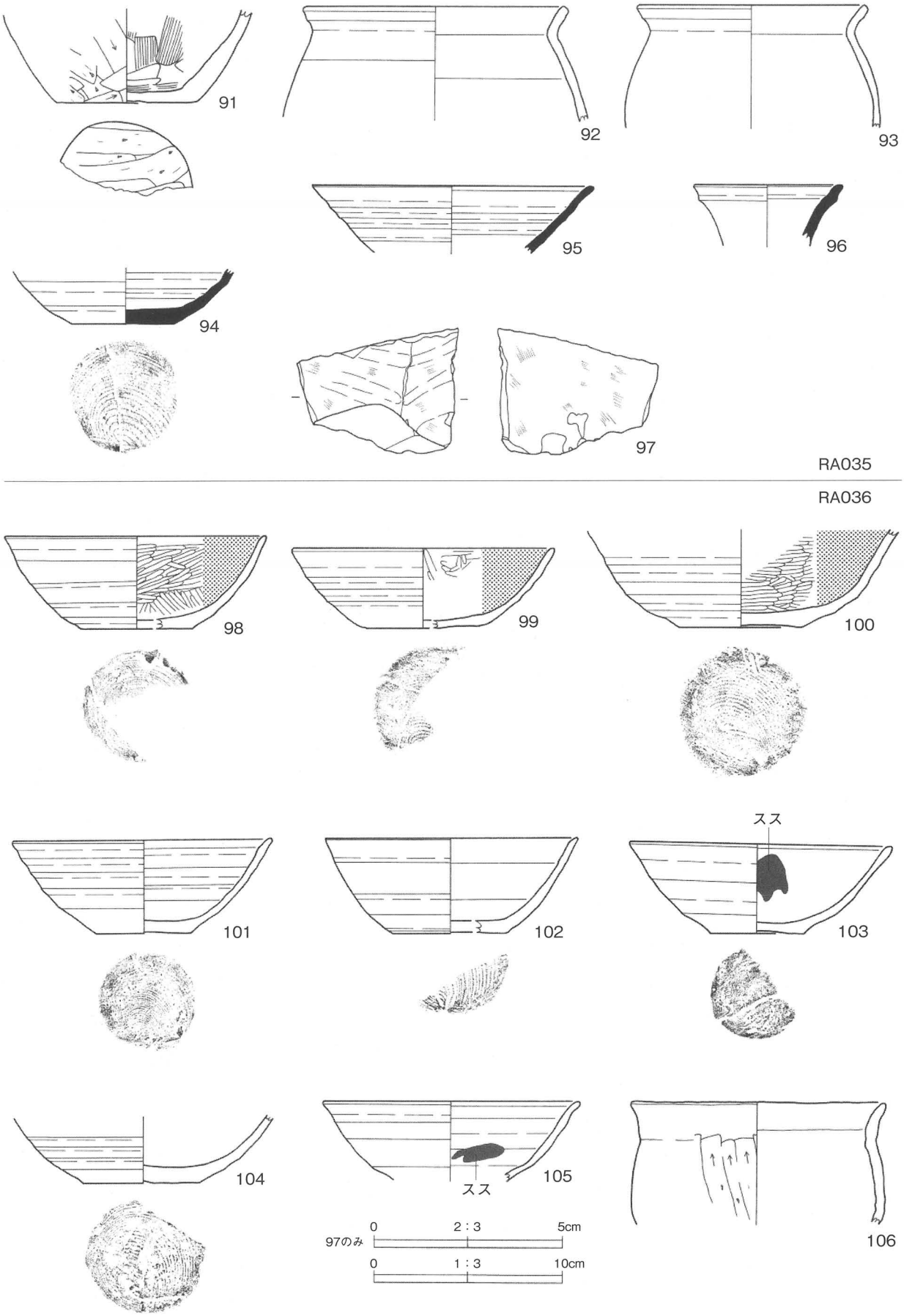
第65図　RA031 ～ 033出土遺物



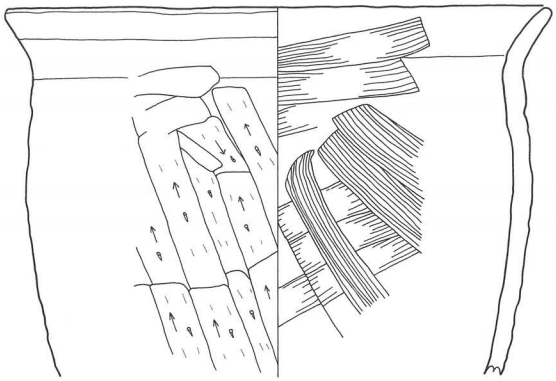
第66図　RA033出土遺物

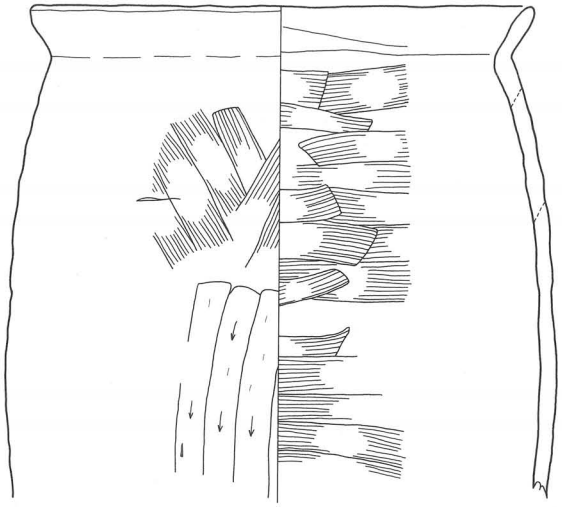


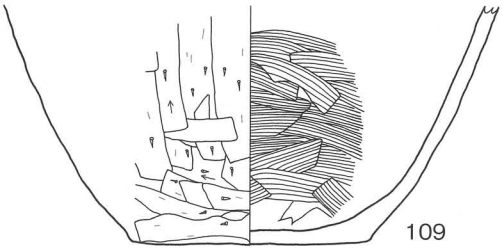
第67図　RA033 ～ 035出土遺物

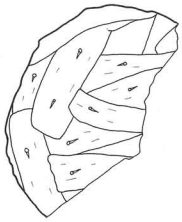


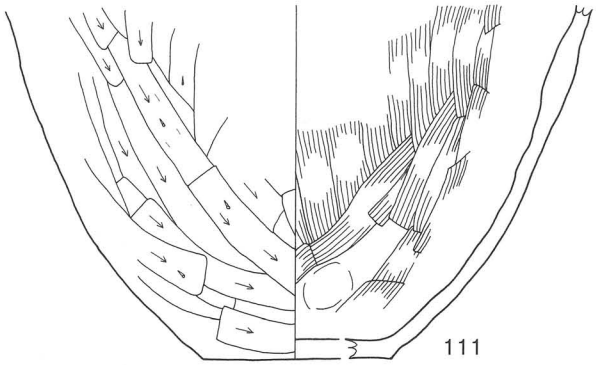
第68図　RA035・036出土遺物

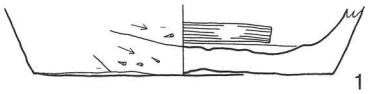


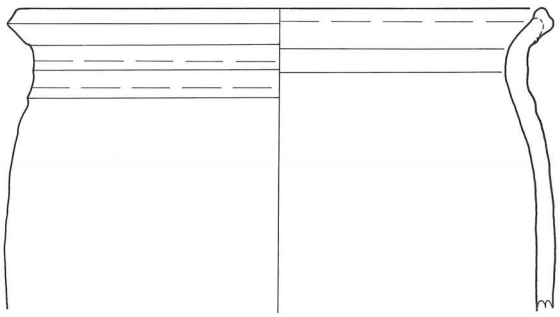


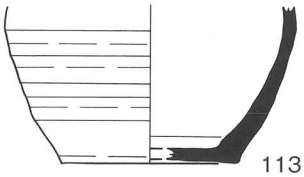






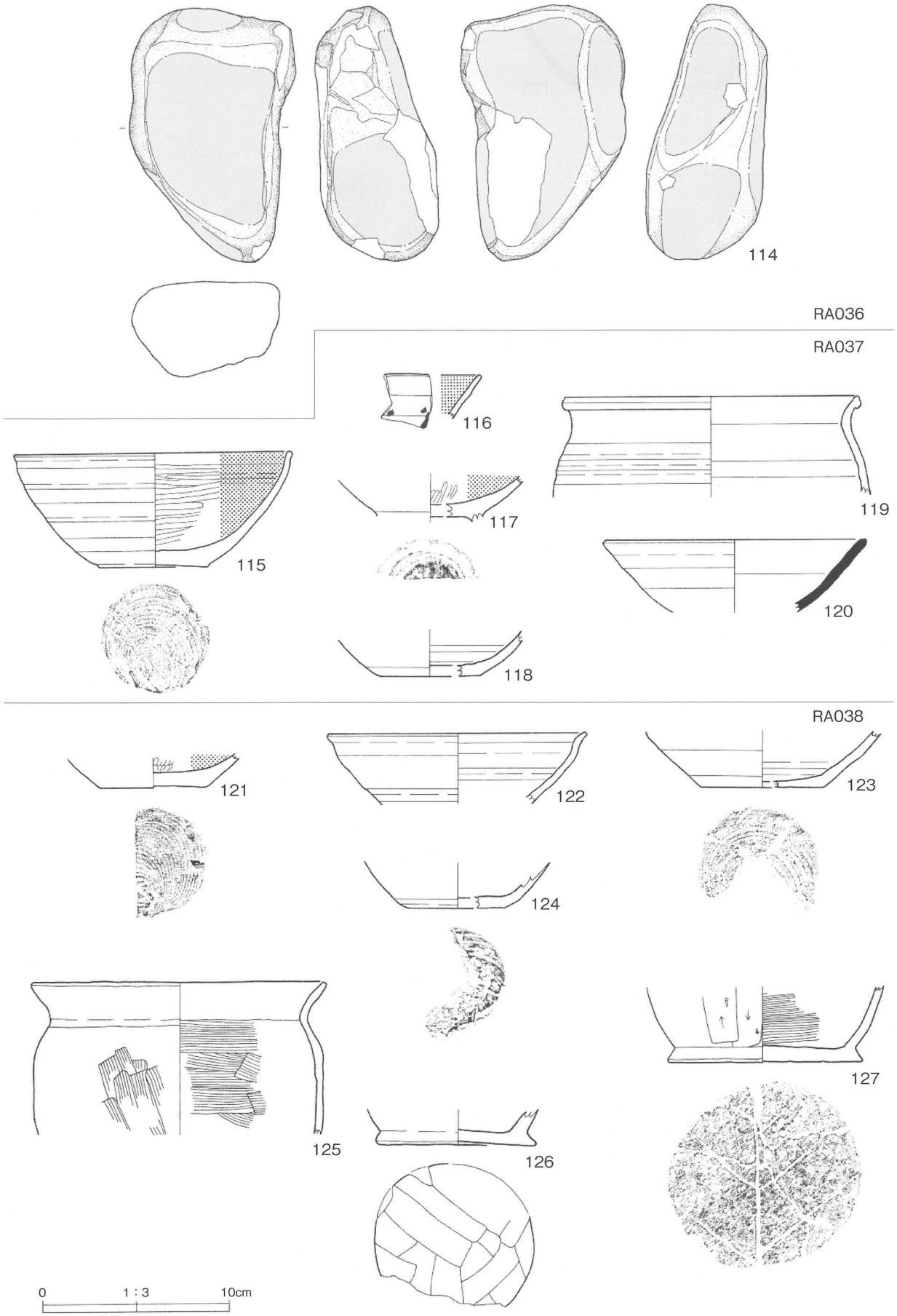




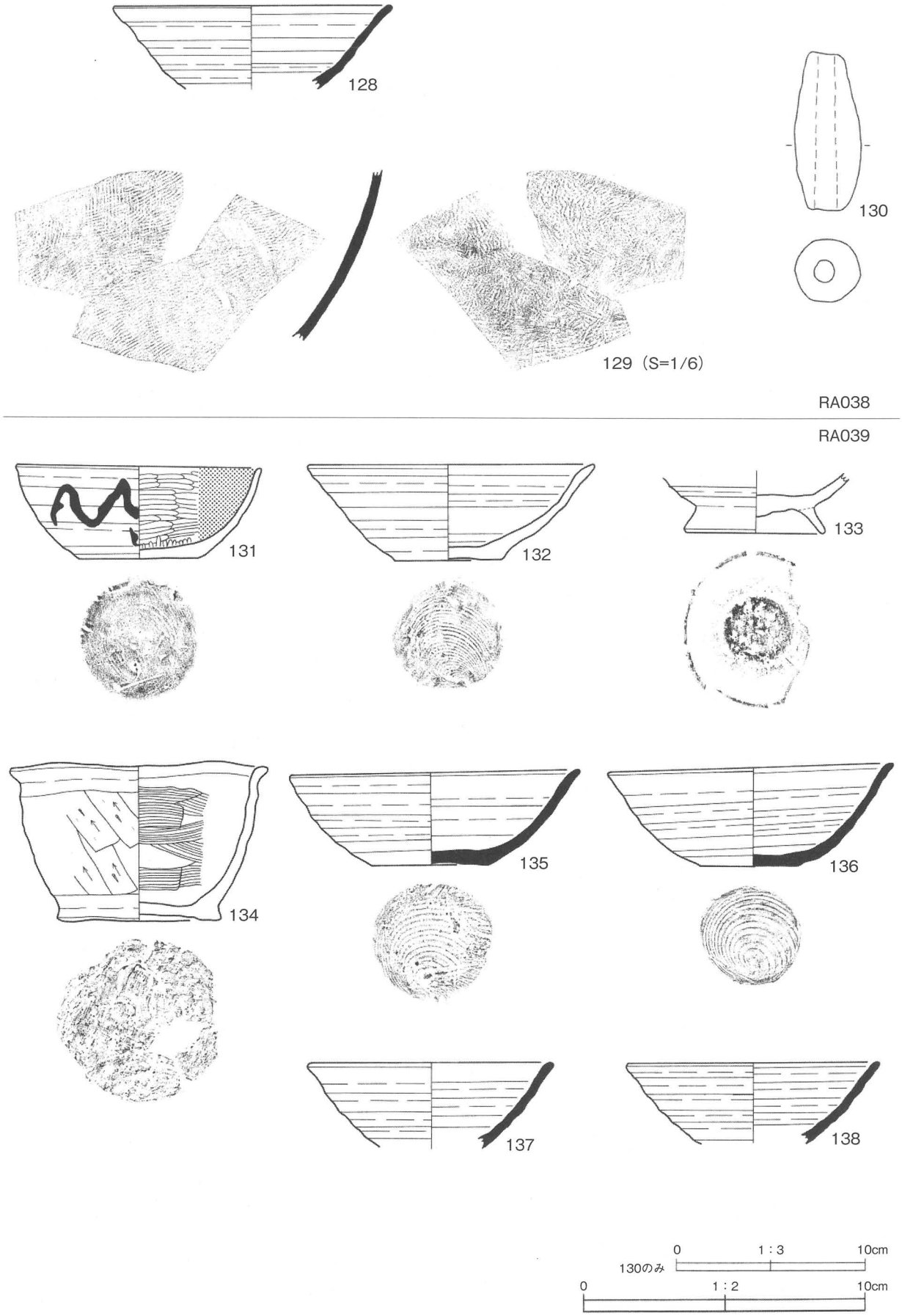


0　1：3　10cm

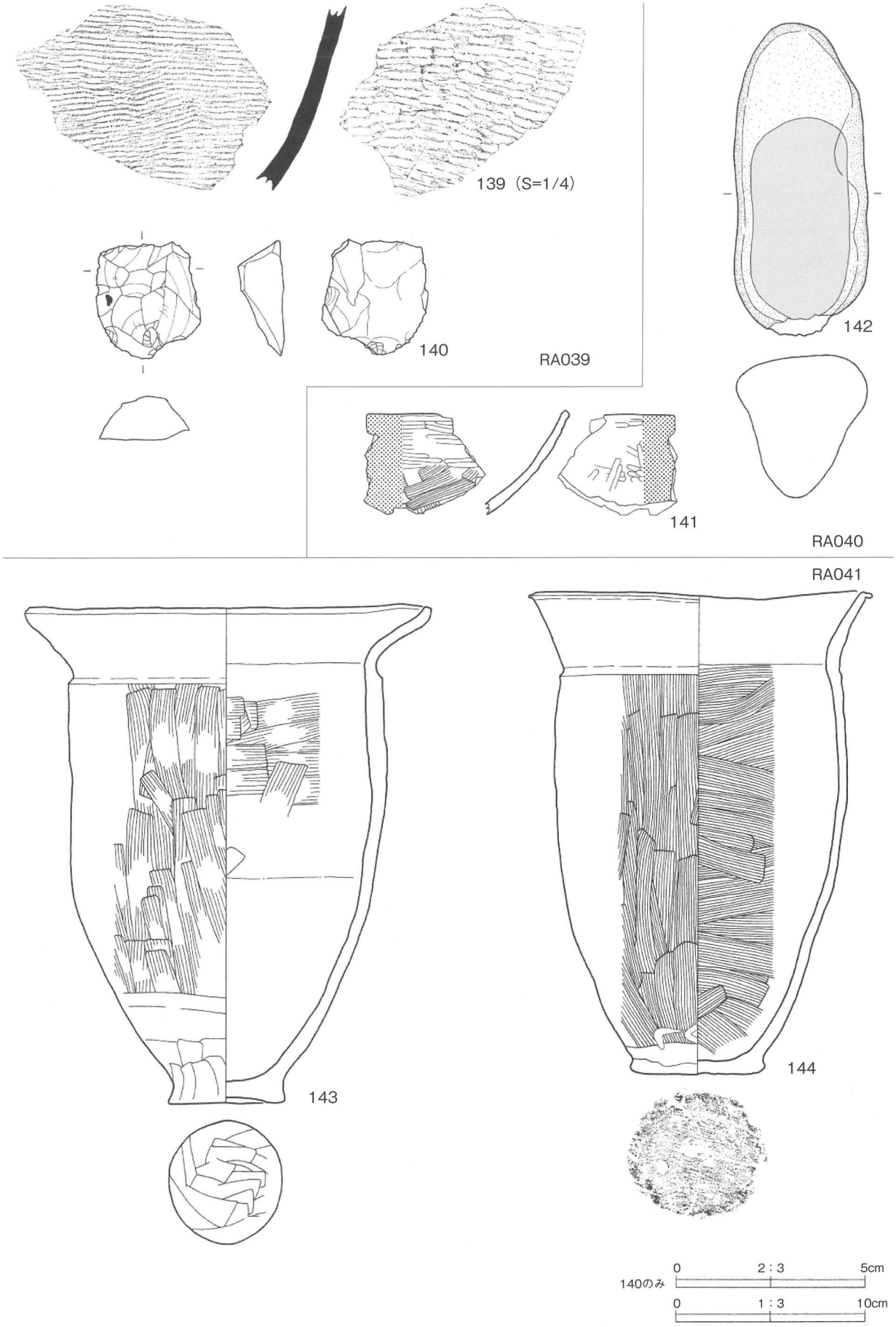
第69図　RA036出土遺物



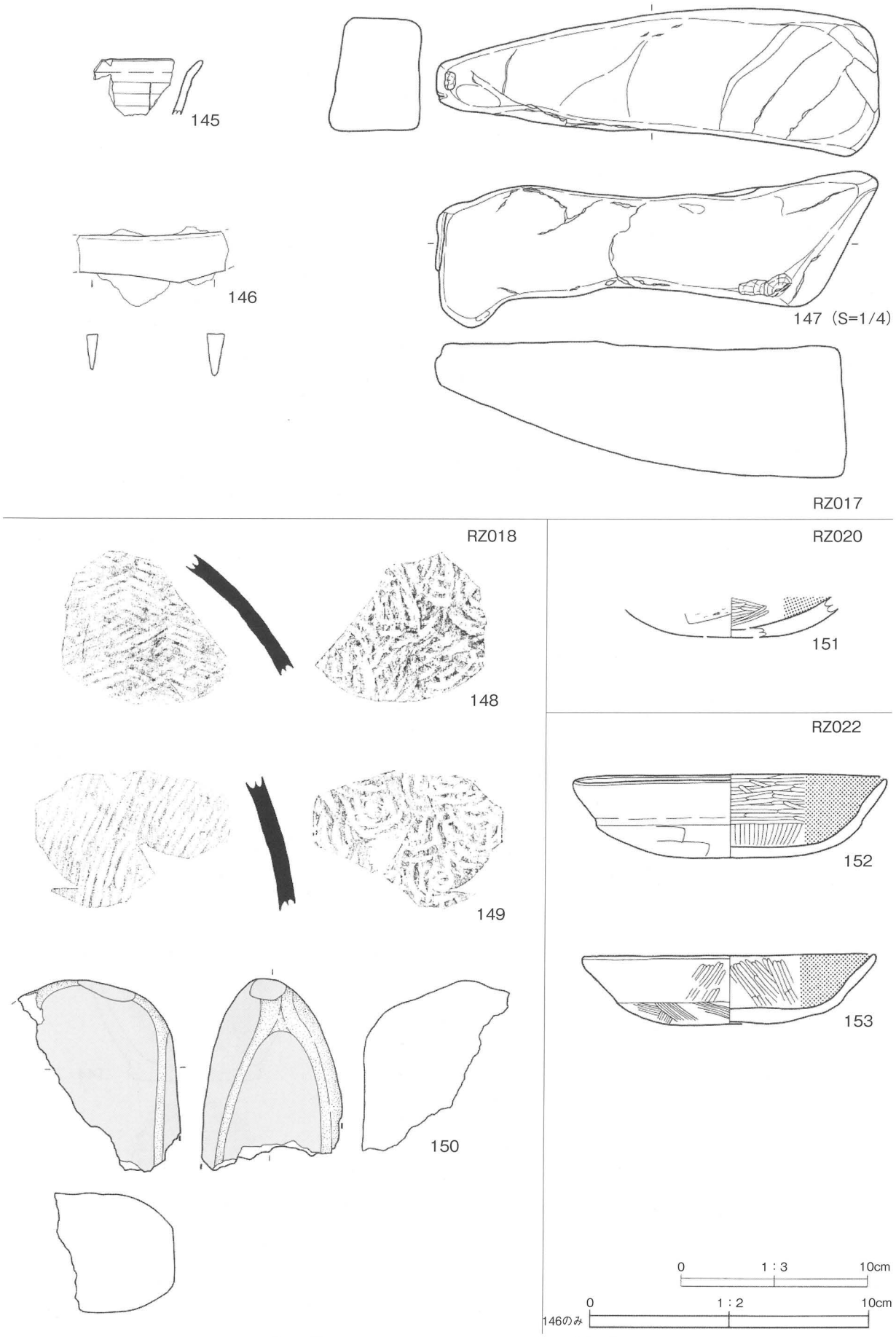
第70図　RA036 ～ 038出土遺物



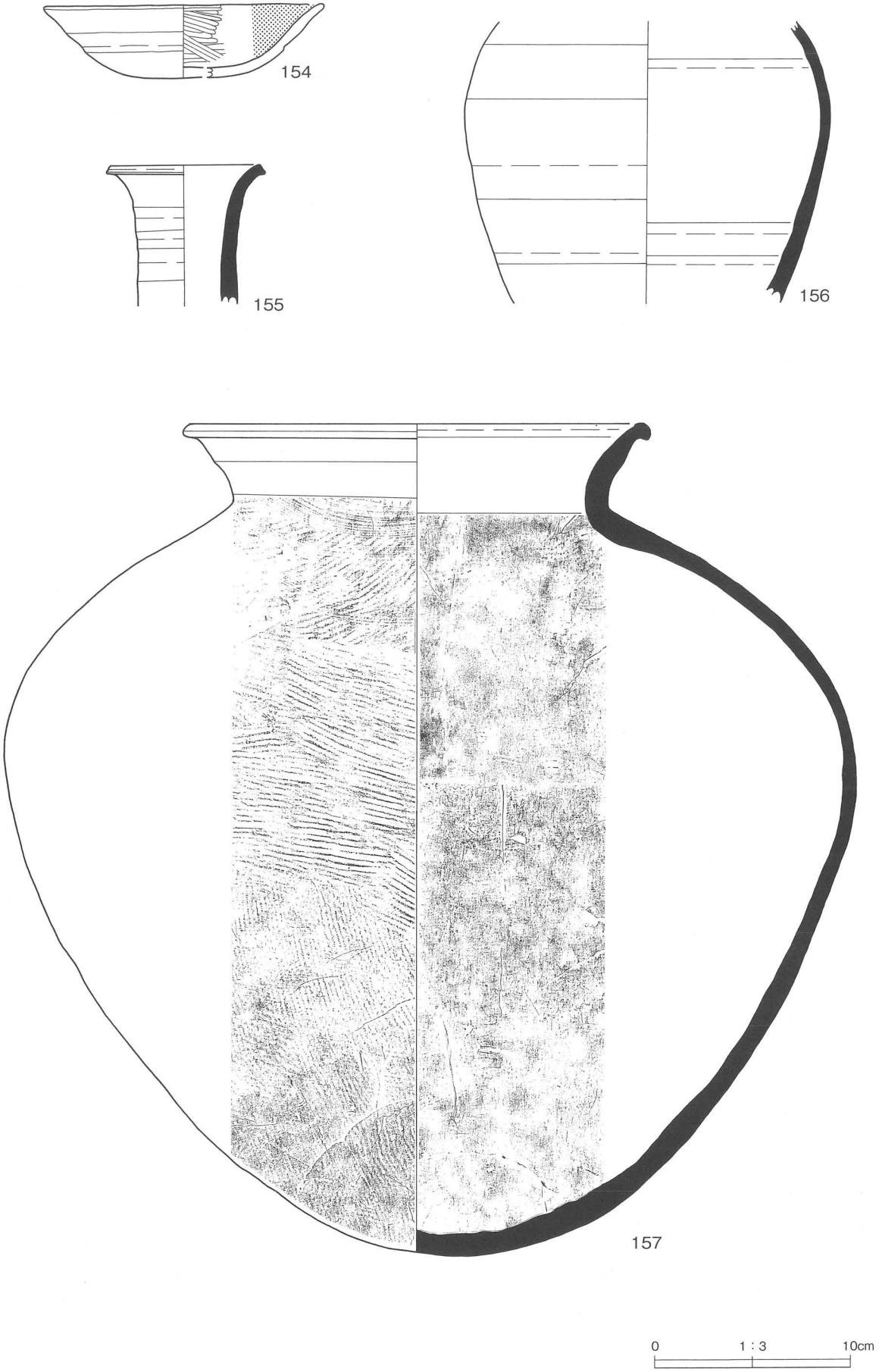
第71図　RA038・039出土遺物



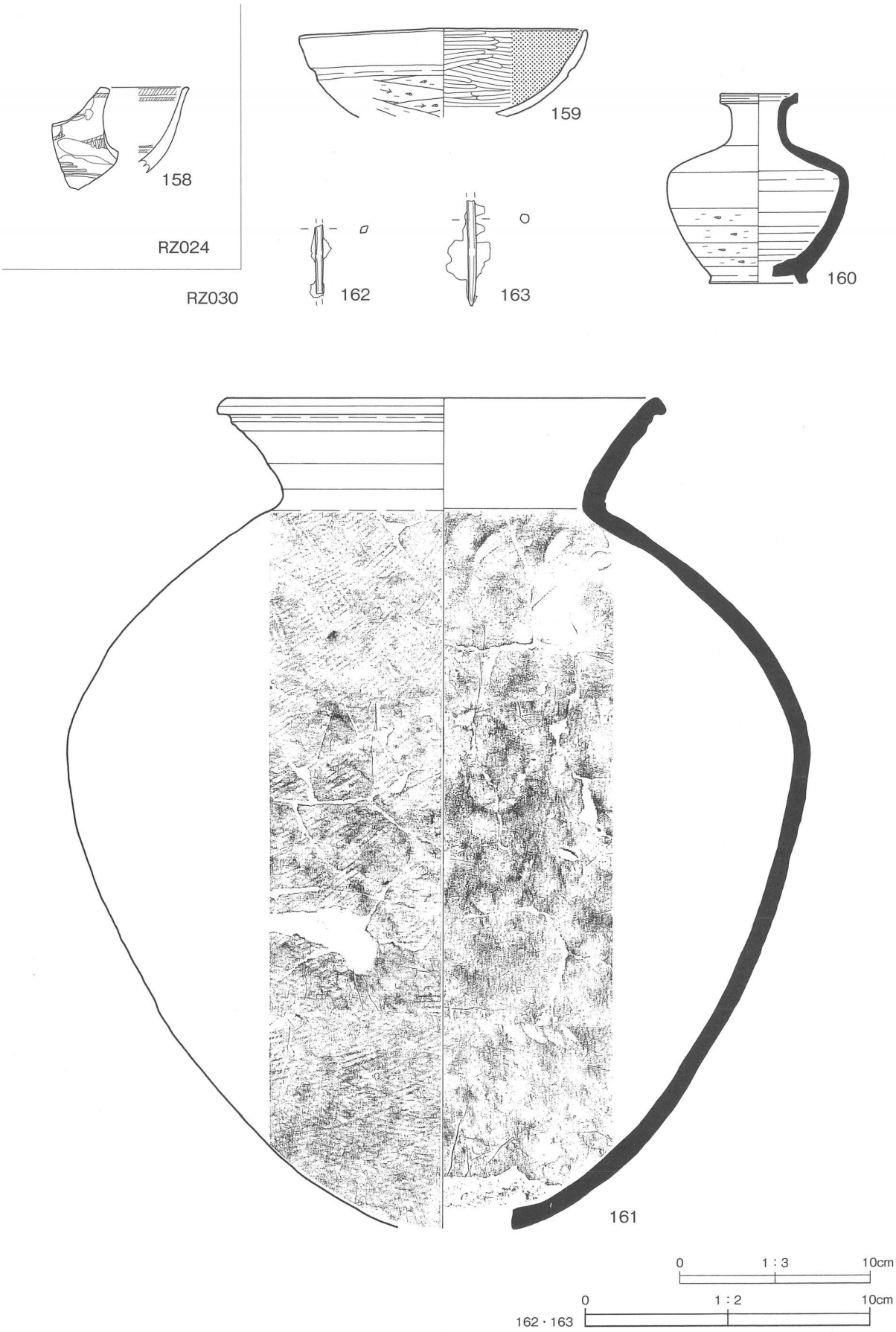
第72図　RA039～041出土遺物



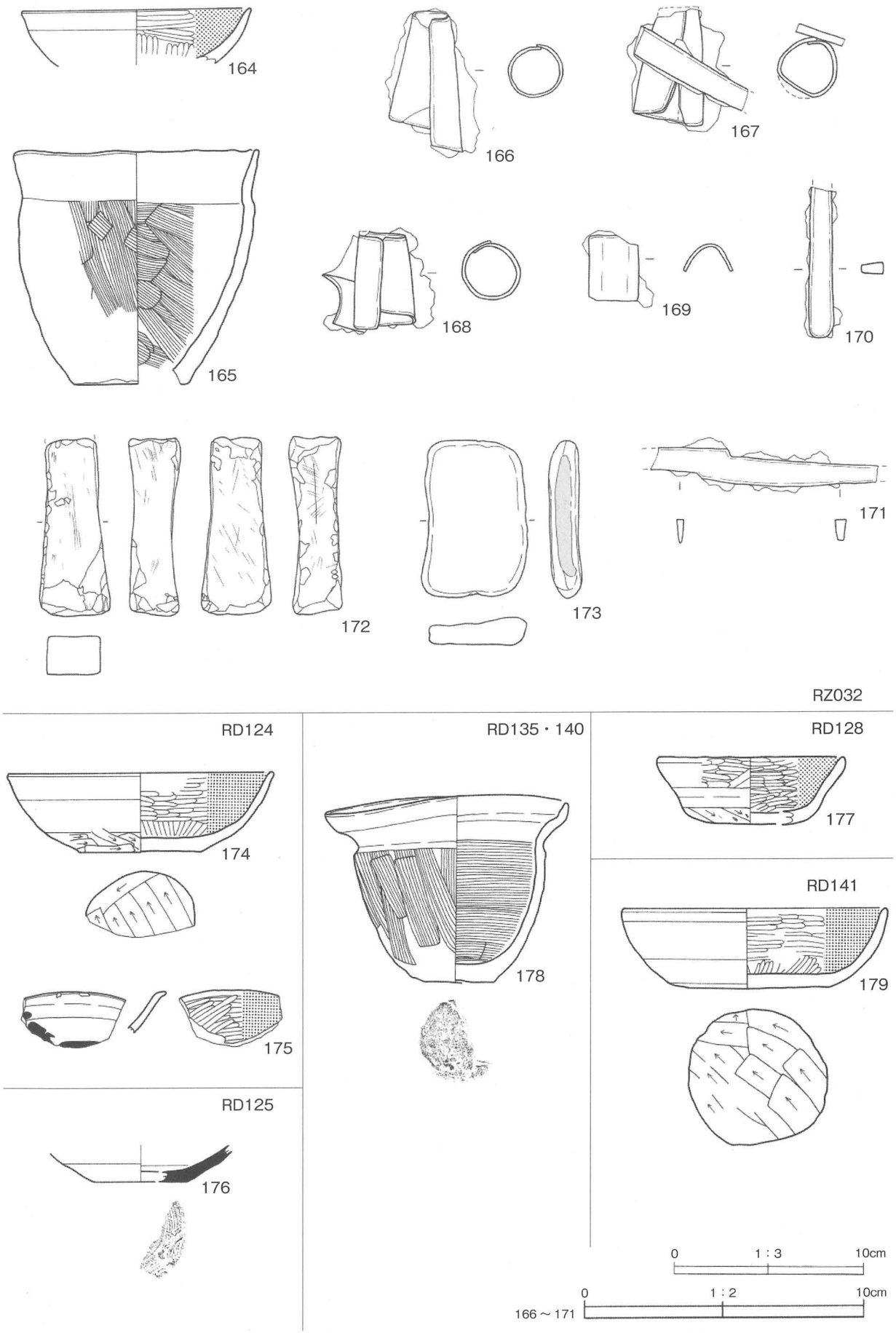
第73図　RZ017・018・020・022出土遺物



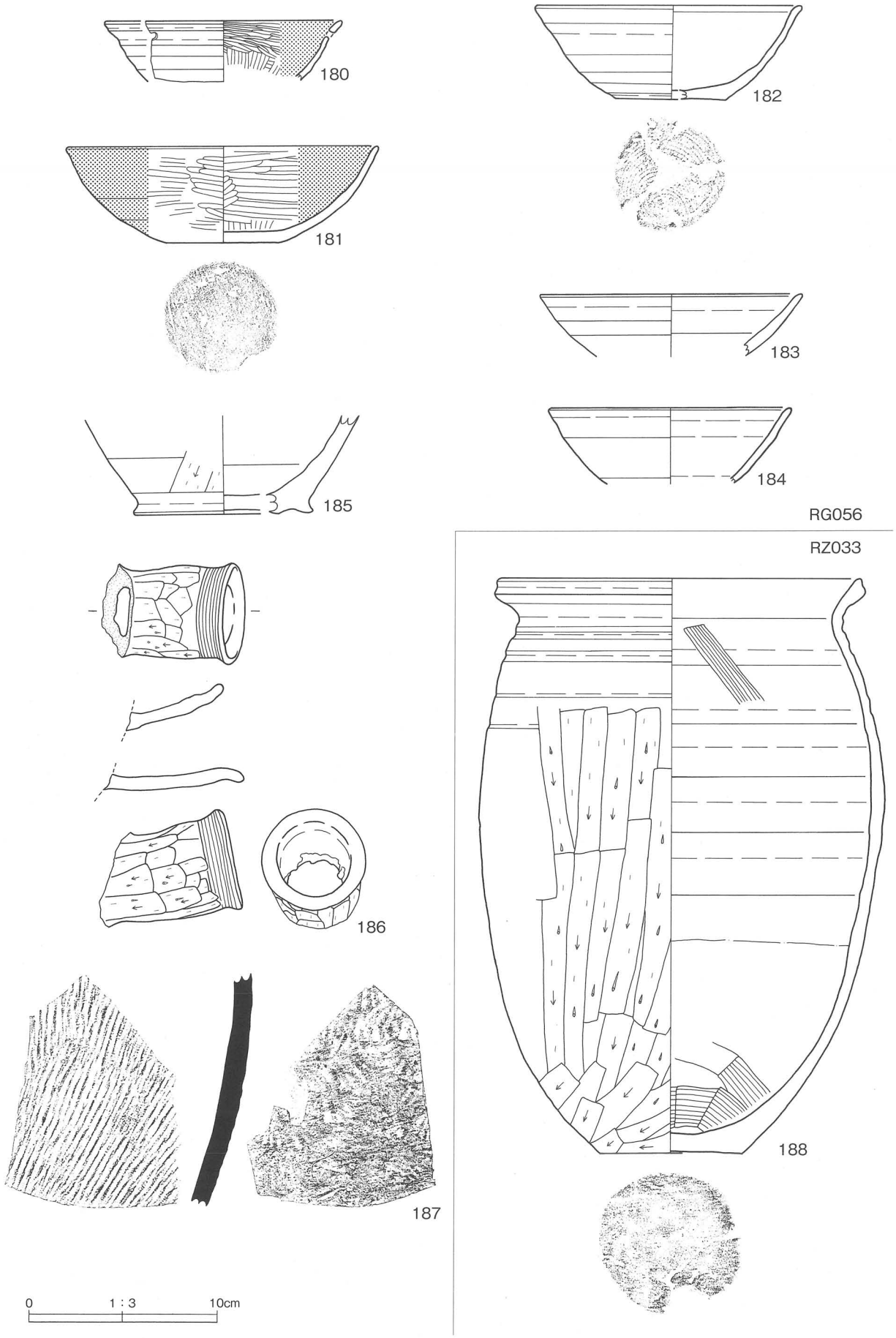
第74図　RZ023出土遺物



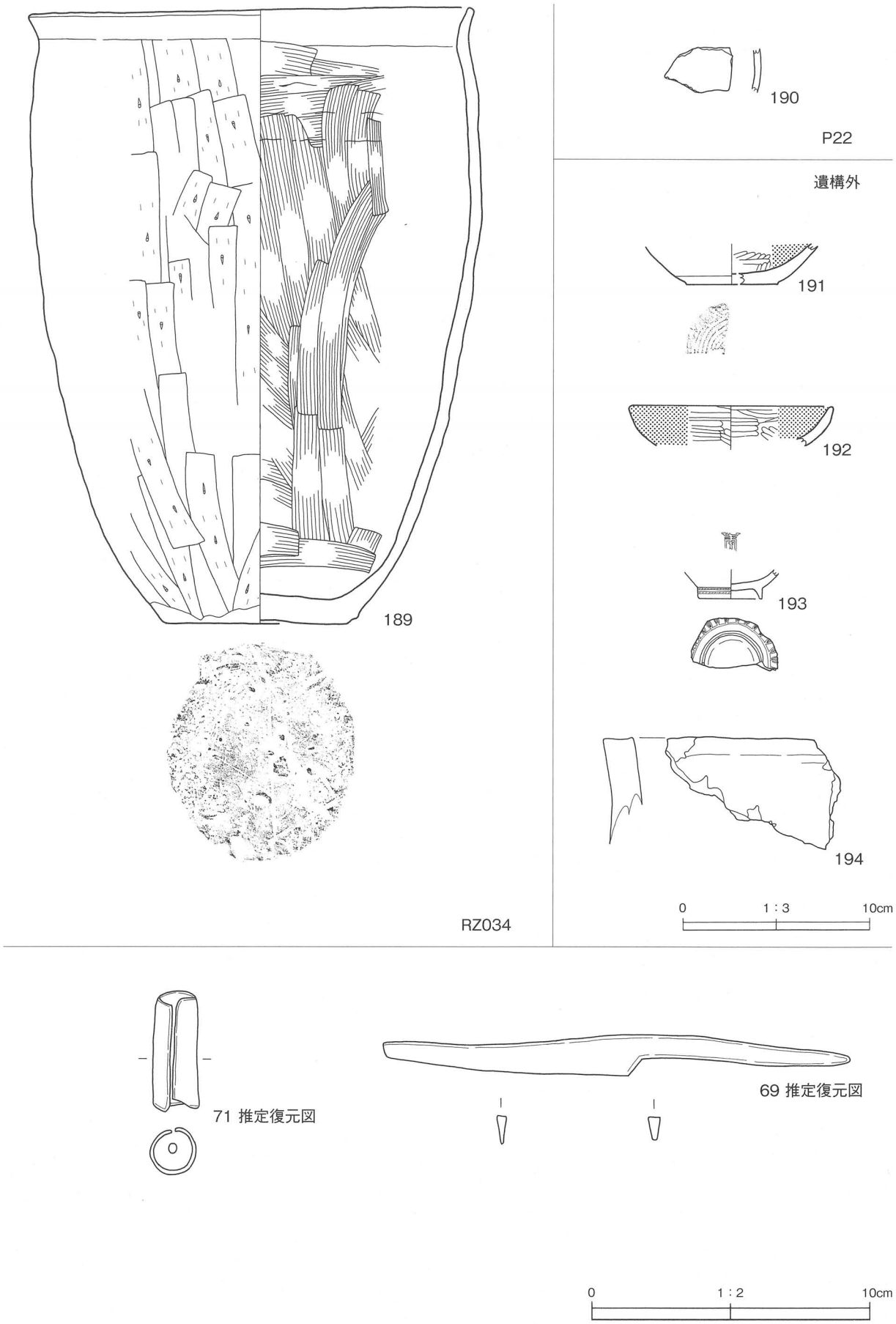
第75図　RZ024・030出土遺物



第76図　RZ032、RD124・125・128・135・140・141出土遺物



第77図　RG056、RZ033出土遺物



第78図　RZ034、P22、遺構外出土遺物

第４表　遺物観察表（１）

図版 No.	写図 No.	掲載 No.	遺構名	種　類	種　類	器　種	整形・調整（○／○は口縁／体部） 外　面	内　面	底　部
60	45	1	RA028	Q4堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	回転糸切
		2	RA028	Q2堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	－
		3	RA028	煙出内	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	－
		4	RA028	カマド内No1	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		5	RA028	Pit 1・カマドほか	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		6	RA028	Q2堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		7	RA028	Q2堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		8	RA028	Q3堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		9	RA028	Q4堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		10	RA028	Pit2堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		11	RA028	Pit3堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		12	RA028	Q2堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		13	RA028	Pit 1 堆積土	土師器	小型椀	ミガキ・黒色処理	ミガキ・黒色処理	－
		14	RA028	カマド内No2、一括	土師器	甕	横ナデ／ケズリ	横ナデ／ハケメ	－
		15	RA028	カマド内一括	土師器	甕	横ナデ／ヘラナデ	横ナデ／ヘラナデ	－
61		16	RA028	Q4堆積土、カマド内	土師器	甕	横ナデ／ケズリ	横ナデ／ヘラナデ	－
		17	RA028	カマド一括、Pit3	土師器	甕	横ナデ／ヘラナデ	横ナデ／ヘラナデ	－
		18	RA028	煙道・煙出内	土師器	甕	横ナデ／ケズリ	横ナデ／ハケメ	－
	46	19	RA028	カマド内	土師器	甕	／ヘラナデ	／ハケメ	－
		20	RA028	Q2・Q4堆積土、Pit1	土師器	甕	／ケズリ	／ハケメ	－
		21	RA028	カマド内一括	土師器	甕	／ケズリ	／ハケメ	ケズリ
		22	RA028	カマド内	土師器	甕	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	－
62		23	RA028	カマド内No3、Pit2	土師器	甕	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ・ヘラナデ	－
	47	24	RA028	Q4堆積土	土師器	甕	／ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ・指による掻き上げ痕	－
		25	RA028	Q2堆積土	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		26	RA028	Q4堆積土	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		27	RA028	Pit2堆積土	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		28	RA028	西壁際	石製品	砥石	長さ12.8cm、幅5.2cm、厚さ4.8cm、重さ418.3 g		
		29	RA028	カマド内	鉄製品	角釘	長さ8.0cm、幅0.6 ～ 1.0cm、厚さ0.4cm、重さ4.04 g		
		30	RA029	Q1・Q4堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	－
		31	RA029	Q3堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		32	RA029	床面	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		33	RA029	Pit1堆積土、Q2堆積土	土師器	坏	／ロクロナデ	／ロクロナデ	－
		34	RA029	南東コーナー、No3	土師器	坏	／ロクロナデ	／ロクロナデ	－
63		35	RA029	床直、カマド内	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		36	RA029	No1・2、床面	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		37	RA029	Q1堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		38	RA029	Q3堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		39	RA029	No2、カマド内	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		40	RA029	床直、Q2堆積土ほか	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		41	RA029	カマド、床面、Q3堆積土	土師器	甕	／ケズリ	／ハケメ	木葉痕
		42	RA029	東壁付近	土師器	甕	横ナデ／ケズリ	横ナデ／ハケメ	－
		43	RA029	Q4堆積土	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		44	RA029	南東コーナー付近	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	－
	48	45	RA029	Q2堆積土	須恵器	甕	／ケズリ	／ロクロナデ	－
		46	RA029	Q1堆積土	鉄製品	釘	長さ4.5cm、幅0.8cm、厚さ0.3 ～ 0.5cm、重さ3.81 g		
		47	RA029	カマド左袖北側	石製品	砥石	長さ12.7cm、幅6.3cm、厚さ4.8cm、重さ511.5 g		
64		48	RA030	南壁際、堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	静止糸切か
		49	RA030	カマド右、No1	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		50	RA030	カマド右、No2	土師器	甕	／ロクロナデ	／ヘラナデ	－
		51	RA030	堆積土	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		52	RA030	堆積土下位	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		53	RA031	Q2堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	－
		54	RA031	Q2堆積土	土師器	坏	ロクロナデ／ロクロナデ	ロクロナデ／ロクロナデ	－
		55	RA031	Pit2・3	土師器	坏	／ロクロナデ	／ロクロナデ	回転糸切
		56	RA031	貼床内	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		57	RA031	Q2堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		58	RA031	床面、Q2堆積土	土師器	甕	横ナデ／ケズリ	横ナデ／ハケメ	－
		59	RA031	Q2堆積土、床面	土師器	甕	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	－
		60	RA031	Q2堆積土	土師器	甕	／ケズリ	／ヘラナデ？	－
65		61	RA031	カマド左、床面	土師器	甕	／ロクロナデ	／ロクロナデ	回転糸切
	49	62	RA031	Q2堆積土	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		63	RA031	土器No1	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		64	RA031	Pit1堆積土	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		65	RA031	Pit1堆積土	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		66	RA031	Pit10堆積土	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－

※〈　〉は残存値、（　）は推定値

計測値（cm）				容量	残存部位	残存率（%）		外面色調	備　　考	掲載
口径	底径	器高	器壁	（l）		口縁	底部			No.
(14.0)	7.2	4.8	0.7	0.30	口～底	25	100	橙色	胎土に金雲母含む	1
–	–	〈4.0〉	0.35	–	口～体	10	0	橙色	胎土に金雲母含む	2
(14.1)	–	〈4.3〉	0.4	(0.33)	口～体	25	0	暗赤褐色		3
14.4	6.2	5.1	0.5	0.32	口～底	70	100	橙色	灯明皿（内面スス付着）	4
(14.3)	5.0	5.2	0.5	0.36	口～底	20	25	橙色	底径小	5
(15.4)	–	〈3.6〉	0.4	(0.32)	口～体	25	0	浅黄橙色	粗砂多い	6
(14.0)	–	〈3.6〉	0.55	(0.26)	口～体	35	0	橙色		7
(15.4)	–	〈4.5〉	0.5	(0.48)	口～体	30	0	浅黄橙色	口径大きめ	8
–	–	〈4.5〉	0.4	–	口～体	10	0	明赤褐色		9
(15.0)	(6.2)	5.5	0.35	0.43	口～底	15	20	橙色		10
(14.4)	(5.0)	5.1	0.5	0.34	口～底	15	15	浅黄橙色	粗砂多い	11
–	–	〈3.1〉	0.4	–	体部	0	0	橙色	刻書「木」か	12
(8.0)	4.6	4.3	0.45	0.11	口～底	50	30	黒色	ロクロ成形	13
(17.1)	–	〈11.1〉	0.55	(2.05)	口～体	50	0	橙色		14
(17.6)	–	〈11.4〉	0.8	(1.94)	口～体	20	0	明褐色		15
(21.0)	–	〈10.2〉	0.7	(2.52)	口～体	25	0	にぶい橙色	輪積み痕	16
–	–	〈10.1〉	0.8	–	口～体	10	0	灰褐色		17
(18.0)	–	〈9.8〉	0.75	(1.66)	口～体	25	0	明赤褐色		18
–	(11.1)	〈8.0〉	0.7	(0.66)	体～底	0	25	明赤褐色		19
–	9.3	〈15.0〉	0.85	(2.26)	体～底	0	90	明赤褐色		20
–	(10.6)	〈2.4〉	0.8	–	底部	0	10	橙色		21
(21.4)	–	〈24.9〉	0.6	(0.29)	口～体	45	0	橙色	A・B体あり。実測A体	22
(25.8)	–	〈21.3〉	0.6	(5.41)	口～体	15	0	橙色		23
–	–	〈21.3〉	0.55	(7.12)	体部	0	0	橙色		24
(14.8)	(5.6)	5.1	0.55	(5.78)	口～底	30	25	灰白色		25
(14.2)	–	〈4.7〉	0.55	(0.29)	口～体	35	0	灰白色		26
–	–	〈4.4〉	0.65	–	口～体	10	0	灰白色		27
					完形	–	–	–	凝灰岩（奥羽山脈産）	28
					略完形	–	–	–		29
–	–	〈3.0〉	0.35	–	口縁部	15	0	浅黄橙色		30
–	–	〈3.5〉	0.4	–	口縁部	10	0	橙色	還元不足か	31
–	–	〈5.2〉	0.45	–	口～体	5	0	橙色		32
–	6.4	〈1.7〉	0.4	–	底部	0	70	橙色	摩滅著しい	33
–	(6.0)	〈2.0〉	0.5	–	底部	0	35	にぶい橙色	還元不足か	34
13.8	5.6	4.8	0.4	0.27	口～底	35	70	浅黄橙色	還元不足か	35
14.6	5.5	5.1	0.45	0.31	口～底	80	100	橙色		36
(13.0)	–	〈4.5〉	0.45	(0.27)	口～体	10	0	にぶい橙色		37
(14.7)	–	〈3.5〉	0.5	(0.31)	口～体	20	0	橙色	還元不足か	38
(14.8)	5.5	4.5	0.45	0.35	口～底	20	65	橙色	還元不足か、外面に線刻、内面にスス	39
14.7	5.7	5.3	0.7	0.30	口～底	70	100	浅黄橙色	灯明皿、内外面スス付着	40
–	(11.4)	〈8.1〉	0.85	(0.85)	体～底	0	55	明赤褐色		41
–	–	〈6.6〉	0.75	–	口～体	20	0	明赤褐色		42
13.5	–	〈7.7〉	0.65	(0.58)	口～体	40	0	明赤褐色	内面コゲ付着	43
–	–	〈4.8〉	0.7	–	口～体	15	0	灰白色		44
–	–	〈10.9〉	0.75	–	体部	0	0	褐灰色		45
					一部欠損	–	–	–		46
					一部欠損	–	–	–	凝灰岩（奥羽山脈産）	47
13.3	5.6	6.0	0.5	0.34	口～底	15	100	橙色	底部は静止糸切りかスノコの痕跡	48
(15.0)	5.6	4.5	0.45	0.32	口～底	30	100	灰白色		49
–	–	〈18.5〉	0.65	(4.59)	体部	0	0	黄橙色	輪積み痕、粗砂含む	50
(14.0)	–	〈5.7〉	0.55	(0.40)	口～体	20	0	橙色		51
–	–	〈7.1〉	0.45	–	口～体	5	0	橙色		52
(13.4)	–	〈3.0〉	0.45	(0.20)	口～体	10	0	浅黄橙色		53
(13.7)	5.2	4.7	0.5	0.28	口～底	25	70	橙色		54
–	6.4	〈2.0〉	0.5	–	底部	0	100	橙色		55
(12.2)	–	〈3.7〉	0.45	(0.21)	口～体	10	0	橙色		56
(15.8)	–	〈5.3〉	0.5	(0.52)	口～体	5	0	明黄褐色		57
16.0	–	〈12.4〉	0.45	(1.77)	口～体	25	0	浅黄橙色		58
(20.8)	–	〈14.7〉	0.55	(3.05)	口～体	10	0	橙色		59
–	(10.6)	〈2.6〉	0.75	–	底部	0	15	明赤褐色		60
–	(7.4)	〈6.1〉	0.6	(0.38)	体～底	0	25	橙色	内面にスス？付着	61
(14.6)	5.2	〈3.8〉	0.4	0.25	口～底	5	100	灰白色		62
–	5.6	〈2.7〉	0.45	–	底部	0	100	灰白色		63
(13.3)	–	〈3.7〉	0.45	(0.26)	口～体	15	0	褐灰色		64
(14.5)	–	〈3.5〉	0.45	(0.30)	口～体	10	0	灰白色		65
(14.4)	–	〈4.1〉	0.4	(0.33)	口～体	10	0	灰白色		66

第５表　遺物観察表（２）

図版 No.	写図 No.	掲載 No.	遺構名	種　　類	種　類	器　種	整形・調整（○／○は口縁／体部） 外　　面	内　　面	底　　部
65	49	67	RA031	南壁隅床面	須恵器	壷	／ロクロナデ・回転ヘラケズリ	／ロクロナデ	再調整
		68	RA031	Q4堆積土	須恵器	壷	／ロクロナデ	／ロクロナデ	－
		69	RA031	北隅	鉄製品	刀子	長さ16.8cm、幅0.7 ～ 1.7cm、厚さ0.4 ～ 0.9cm、重さ19.78 g		
		70	RA032	Q2堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		71	RA032	床面	鉄製品	鉄鐸	長さ4.5cm、幅1.4cm、厚さ1.6cm、重さ20.24 g		
		72	RA033	カマド手前No4	土師器	坏	横ナデ／ミガキ	ミガキ・黒色処理	丸底
		73	RA033	カマド手前No1	土師器	坏	ミガキ	ミガキ・黒色処理	丸底
		74	RA033	カマド手前No2	土師器	坏	ミガキ	ミガキ・黒色処理	平底風丸底
		75	RA033	カマド手前No3	土師器	坏	ミガキ・ヘラナデ?	ミガキ・黒色処理	平底風丸底
66	50	76	RA033	床面	土師器	長胴甕	横ナデ／ヘラナデ	横ナデ／ヘラナデ	－
		77	RA033	床面	土師器	長胴甕	横ナデ／ヘラナデ	横ナデ／ヘラナデ	－
	51	78	RA033	床面	土師器	球胴甕	横ナデ／ヘラナデ	横ナデ／ヘラナデ	－
	50	79	RA033	床面	土師器	球胴甕	横ナデ／ヘラナデ	横ナデ／ヘラナデ	－
67	51	80	RA033	床直	土師器	片口	横ナデ／ヘラナデ	横ナデ／ナデ？	再調整
		81	RA033	床直	土師器	甑？	横ナデ／ミガキ	横ナデ／ミガキ	孔あり
		82	RA034	床直	土師器	長胴甕	横ナデ・ミガキ／ミガキ	横ナデ／ヘラナデ	－
		83	RA034	床面、Pit1、堆積土下位	土師器	長胴甕	横ナデ・ミガキ／ミガキ	横ナデ／ヘラナデ・ミガキ	上げ底
	52	84	RA035	床直	土師器	坏	／ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	回転糸切
		85	RA035	３層上面	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		86	RA035	２層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		87	RA035	３層上面	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		88	RA035	床凹み	土師器	坏	／ロクロナデ	／ロクロナデ	回転糸切
		89	RA035	カマド	土師器	甕	ロクロナデ・ケズリ	ヘラナデ	－
		90	RA035	カマド	土師器	甕	ケズリ	ナデ	砂底か
68		91	RA035	カマド	土師器	甕	ケズリ	ハケメ	ケズリ
		92	RA035	カマド	土師器	甕	ロクロナデ・ナデ	ロクロ目・ナデ	－
		93	RA035	カマド	土師器	甕	横ナデ・ヘラナデ	ヘラナデか	－
		94	RA035	３層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		95	RA035	床直	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		96	RA035	Q4　堆積土下位	須恵器	瓶類	横ナデ／ロクロナデ	横ナデ／ロクロナデ	－
		97	RA035	Q2　堆積土下位	石製品	砥石	現存長3.4cm、幅4.3cm、厚さ1.45cm、重さ17.8 g		
		98	RA036	床直	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	回転糸切
		99	RA036	Pit ３	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	回転糸切
		100	RA036	床直	土師器	坏	／ロクロナデ	／ミガキ・黒色処理	回転糸切
		101	RA036	床直	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		102	RA036	床直	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		103	RA036	Pit ３	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		104	RA036	床直	土師器	坏	／ロクロナデ	／ロクロナデ	回転糸切
		105	RA036	Pit ３	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		106	RA036	床直	土師器	甕	横ナデ／ケズリ	横ナデ	－
69	53	107	RA036	床直	土師器	甕	横ナデ／ケズリ・ヘラナデ	横ナデ／ヘラナデ・ハケメ	－
		108	RA036	カマド	土師器	甕	横ナデ／ケズリ・ヘラナデ	横ナデ／ヘラナデ	－
		109	RA036	床直	土師器	甕	ケズリ	ハケメ（ナデか）	ケズリ
		110	RA036	カマド	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ	木葉痕
		111	RA036	Q3・南ベルト　３層	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ・指ナデ	砂底か
		112	RA036	３層	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロ目	－
		113	RA036	煙出し下層	須恵器	瓶類	／ロクロナデ	ロクロ目	回転糸切
70		114	RA036	床直	石製品	すり石	長さ13.7cm、幅8.9cm、厚さ6.6cm、重さ930 g		
		115	RA037	床直	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	回転糸切
		116	RA037	４層	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ？・黒色処理	－
		117	RA037	２層	土師器	高台坏	／ロクロナデ	／ミガキ・黒色処理	ケズリ（ヘラナデか）
		118	RA037	Ｑ３　３層	土師器	坏	／ロクロナデ	／ロクロナデ	回転糸切
		119	RA037	Pit ２	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロ目	－
		120	RA037	ほりかた	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
	54	121	RA038	２層	土師器	坏	／ロクロナデ	／ミガキ・黒色処理	回転糸切
		122	RA038	Ｑ３　堆積土上位	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		123	RA038	床直	土師器	坏	／ロクロナデ	／ロクロナデ	回転糸切
		124	RA038	１～２層	土師器	坏	／ロクロナデ	／ロクロナデ	回転糸切
		125	RA038	Ｑ３・４　堆積土下位	土師器	甕	横ナデ／ヘラナデ（ケズリか）	横ナデ／ハケメ	－
		126	RA038	カマド周辺　堆積土上位	土師器	甕	／ナデ	／ナデ	ケズリか
		127	RA038	カマド　焼土直上	土師器	甕	／ケズリ	／ハケメ	木葉痕
71		128	RA038	１～２層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		129	RA038	Ｑ１・２　堆積土上位	須恵器	大甕	叩き	叩き	－
		130	RA038	南ベルト９層	土製品	土錘	長さ5.7cm、最大径2.4cm、穿孔部径0.7cm、重さ28.5g		
		131	RA039	床直	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	回転糸切
		132	RA039	床直	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切

計測値（cm）				容量	残存部位	残存率（%）		外面色調	備　　考	掲載
口径	底径	器高	器壁	（l）		口縁	底部			No.
－	7.7	〈16.1〉	0.7	1.13	体～底	0	100	にぶい橙色	焼成後穿孔１箇所ともう一つ痕跡あり	67
－	－	〈4.6〉	0.5	－	体部	0	0	赤黒色		68
					一部欠損	－	－		刃部先端欠損	69
－	－	〈3.5〉	0.5	－	口縁部	5	0	橙色		70
					略完形	－	－		舌あり	71
16.6	－	5.3	0.85	0.30	口～底	90	100	橙色	外面に段	72
16.5	－	5.3	0.85	0.32	口～底	100	100	にぶい橙色	外面に段	73
16.3	－	4.5	0.7	0.34	口～底	100	100	橙色	外面に段	74
16.5	－	4.3	0.6	0.29	口～底	100	100	橙色	外面に段	75
19.0	(6.4)	27.8	0.7	2.74	口～底	50	100	橙色	輪積み痕	76
17.4	6.7	25.3	0.65	2.35	口～底	55	40	浅黄橙色	輪積み痕	77
22.8	6.7	26.6	0.85	6.08	口～底	45	100	橙色	輪積み痕	78
21.6	7.2	22.3	0.85	6.95	口～底	25	100	橙色	輪積み痕	79
12.9	6.8	10.8	0.8	0.68	口～底	50	100	橙色	底部外面張り出し	80
13.8	5.0	10.7	0.8	0.76	口～底	30	100	にぶい橙色	底部に焼成前の孔	81
(17.6)	－	〈8.0〉	0.7	(0.55)	口～底	40		浅黄橙色	頸部に段が明瞭	82
18.9	5.8	26.6	0.7	2.50	口～底	55	50	にぶい橙色	輪積み痕	83
－	6.0	〈1.9〉	0.55	－	底部	0	30	にぶい黄橙色	墨書か	84
(15.8)	(6.0)	5.6	0.45	0.47	口～底	20	5	橙色		85
(14.0)	(6.0)	4.9	0.5	0.34	口～底	25	3	橙色		86
(12.8)	－	〈3.9〉	0.5	(0.24)	口～体	25	0	橙色		87
－	5.1	〈2.8〉	0.4	－	底部	0	100	橙色		88
－	－	〈13.9〉	0.6	(4.22)	体部	0	0	橙色		89
－	(8.6)	〈1.6〉	0.6	－	底部	0	25	橙色		90
－	(7.4)	〈5.0〉	0.6	(0.24)	底部	0	30	橙色		91
(13.6)	－	〈6.2〉	0.5	(0.65)	口縁部	25	0	橙色		92
(12.0)	－	〈6.6〉	0.45	(0.53)	口縁部	10	0	橙色		93
－	5.3	〈3.0〉	0.45	(0.11)	体～底	0	100	灰白色		94
(14.9)	－	〈3.6〉	0.35	(0.41)	口縁部	20	0	灰白色		95
(7.8)	－	〈3.3〉	0.5	－	口縁部	40	0	灰色		96
					大部分欠	－	－	－	凝灰岩（奥羽山脈）	97
13.8	5.7	5.0	0.5	0.35	口～底	55	50	にぶい黄橙色		98
(13.8)	6.1	〈4.3〉	0.4	0.29	口～底	30	40	橙色		99
－	6.6	〈5.2〉	0.55	(0.48)	体～底	0	100	橙色		100
(13.7)	5.4	5.0	0.4	0.33	口～底	40	100	橙色		101
(13.4)	(6.0)	5.1	0.4	0.32	口～底	20	20	橙色		102
(13.8)	5.0	4.8	0.35	0.30	口～底	40	60	橙色	内面にススト付着	103
－	6.1	〈3.6〉	0.5	(0.20)	体～底	0	80	橙色		104
(13.6)	－	〈4.2〉	0.4	(0.27)	口縁部	40	0	橙色	内面にスス付着	105
(13.4)	－	〈6.5〉	0.6	(0.47)	口縁部	20	0	橙色		106
(19.6)	－	〈14.4〉	0.5	(2.76)	口～胴	25	0	橙色		107
(19.6)	－	〈19.5〉	0.6	(4.66)	口～胴	20	0	橙色		108
－	(9.4)	〈9.4〉	0.6	(1.33)	胴～底	0	45	橙色		109
－	(11.8)	〈2.7〉	0.6	－	底部	0	60	にぶい橙色		110
－	(7.8)	〈13.9〉	0.7	(2.60)	体部	0	5	にぶい黄橙色	出羽甕・平底	111
(20.4)	－	〈11.9〉	0.65	(2.79)	口縁部	15	0	橙色		112
－	(7.0)	〈6.2〉	0.5	(0.31)	底部	0	30	灰色		113
					完形	－	－	－		114
(14.8)	5.8	6.2	0.4	0.50	口～底	15	100	橙色	籾痕	115
－	－	〈2.4〉	0.35	－	口縁部	2	0	橙色	墨書	116
－	－	〈2.5〉	0.5	－	底部	0	0	にぶい黄橙色		117
－	(5.2)	〈2.5〉	0.5	－	底部	0	15	橙色		118
(15.7)	－	〈5.4〉	0.5	(0.61)	口縁部	20	0	橙色	ススト付着	119
(13.8)	－	〈3.9〉	0.5	(0.26)	口縁部	15	0	灰色		120
－	5.6	〈1.8〉	0.5	－	底部	0	60	黄橙色		121
(13.8)	－	〈3.8〉	0.4	(0.31)	口～体	20	0	橙色		122
－	6.4	〈3.1〉	0.35	(0.13)	底部	0	0	浅黄橙色		123
－	(5.0)	〈2.5〉	0.45	－	底部	0	30	橙色		124
(15.6)	－	〈8.2〉	0.4	(0.88)	口縁部	20	0	にぶい赤褐色		125
－	8.6	〈2.0〉	0.7	－	底部	0	50	橙色		126
－	10.2	〈4.1〉	0.5	－	底部	0	100	暗赤褐色		127
(14.6)	－	〈4.5〉	0.4	(0.32)	口縁部	5	0	灰白色		128
－	－	〈18.6〉	1.1	－	体部	0	50	灰色	掲載縮尺１／６	129
					完形	－	－	－		130
12.9	6.3	4.9	0.35	0.31	口～底	100	100	橙色	「M」字状の墨書	131
15.2	5.8	5.1	0.45	0.34	口～底	70	100	橙色		132

第６表　遺物観察表（３）

図版 No.	写図 No.	掲載 No.	遺構名	種　類	種　類	器　種	整形・調整（○／○は口縁／体部） 外　面	内　面	底　部
71	54	133	RA039	Ｑ４　１層	土師器	高台坏	／ロクロナデ	／ロクロナデ	不明
		134	RA039	カマド・Ｑ２　床直	土師器	小甕	横ナデ／ケズリ	横ナデ／ハケメ	ケズリ
		135	RA039	床直	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
	55	136	RA039	床直	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		137	RA039	床直	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		138	RA039	床直・RA038　２層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
72		139	RA039	床直	須恵器	大甕	叩き	叩き	－
		140	RA039	Q1　堆積土上位	石製品	剥片	長さ3.1cm、幅2.8cm、厚さ1.15cm、重さ10.1ｇ		
		141	RA040	床直	土師器	椀	ミガキ・ハケ・黒色処理	ミガキ・黒色処理	－
		142	RA040	カマド	石製品	すり石	現存長16.8cm、幅6.9cm、7.6cm、重さ1180ｇ		
		143	RA041	カマド	土師器	甕	横ナデ／ヘラナデ	横ナデ／ヘラナデ	ケズリ
		144	RA041	カマド	土師器	甕	横ナデ・ハケメ	横ナデ・ハケメ	ケズリ
73	56	145	RZ017	検出面	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		146	RZ017	Q4　堆積土上位	鉄製品	刀子	現存長5.2cm、幅1.3～1.7cm、厚さ0.4～0.6cm、斜関		
		147	RZ017	付属土坑　底面	石製品	台石	全長31.1cm、幅6.6cm、厚さ8.2cm、重さ3530ｇ		
		148	RZ018	RG056	須恵器	大甕	叩き	叩き	－
		149	RZ018	RG056	須恵器	大甕	叩き	叩き	－
		150	RZ018	Q3　堆積土	石製品	すり石	現存長10.2cm、幅6.6cm、現存厚さ6.4cm、重さ595ｇ		
		151	RZ020	堆積土中位	土師器	坏	ケズリ	ミガキ・黒色処理	丸底
		152	RZ022	堆積土中位	土師器	坏	横ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	丸底
		153	RZ022	堆積土中位	土師器	坏	ハケ・ミガキ・横ナデ	ミガキ・黒色処理	丸底
74		154	RZ023	堆積土中位	土師器	坏	ケズリ・横ナデ	ミガキ・黒色処理	丸底
		155	RZ023	堆積土上位	須恵器	長頸瓶	横ナデ／ロクロナデ	ロクロ目	－
		156	RZ023	堆積土中位	須恵器	長頸瓶	回転ナデ(ケズリ？)	ロクロ目	－
	57	157	RZ023	堆積土中位	須恵器	大甕	叩き	叩き	尖底気味
75		158	RZ024	Ｑ１　検出面	磁器	端反碗	内外面：透明釉、外面に海浜風景文		
		159	RZ030	堆積土中位	土師器	坏	横ナデ／ケズリ	横ナデ／ミガキ・黒色処理	丸底
		160	RZ030	付属土坑　１層	須恵器	小壷	横ナデ／ロクロナデ	横ナデ／ロクロ目	回転ヘラケズリ
		161	RZ030	堆積土中位	須恵器	大甕	横ナデ／叩き	横ナデ／叩き	尖底気味
		162	RZ030	Q4　堆積土中位	鉄製品	釘	現存長2.5cm、幅・厚さ0.25cm		
		163	RZ030	Q4　堆積土中位	鉄製品	釘	現存長3.7cm、幅・厚さ0.3cm		
76	58	164	RZ032		土師器	坏	ロクロナデ・ケズリか	ミガキ・黒色処理	－
		165	RZ032	堆積土上位	土師器	小甕	横ナデ／ハケメ	横ナデ／ハケメ	不明
		166	RZ032	Q3　堆積土下位	鉄製品	鉄鐸	長さ5.1cm、直径1.9cm、厚さ0.1cm、円筒形		
		167	RZ032	Q3　堆積土下位	鉄製品	鉄鐸	現存長4.2cm、直径2.1cm、厚さ0.1cm、円筒形		
		168	RZ032	Q3　堆積土下位	鉄製品	鉄鐸	長さ3.5cm、直径2.1cm、厚さ0.1cm、円筒形		
		169	RZ032	Q3　堆積土下位	鉄製品	鉄鐸	現存長2.4cm、厚さ0.1cm、円筒形		
		170	RZ032	Q3　堆積土下位	鉄製品	鉄鐸	現存長5.5cm、幅0.7cm、厚さ0.4cm		
		171	RZ032	Q3　堆積土下位	鉄製品	刀子	現存長8.1cm、幅0.8～1.0cm、厚さ0.4cm、刃部・棟部ともに斜関		
		172	RZ032	Q3　堆積土下位	石製品	砥石	長さ9.6cm、幅3.75cm、厚さ2.75cm、重さ129.4ｇ		
		173	RZ032	Q1　堆積土中位	石製品	すり石？	長さ8.5cm、幅5.45cm、厚さ1.6cm、重さ116.6ｇ		
		174	RD124	１層	土師器	坏	ロクロナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	ケズリ
		175	RD124	１層	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	－
		176	RD125	堆積土	須恵器	坏	／ロクロナデ	／ロクロナデ	回転糸切
	59	177	RD128	検出面	土師器	坏	ミガキ・ケズリ・ナデ	ミガキ・黒色処理	丸底・ケズリ
		178	RD135	堆積土中位・RD140堆積土上位	土師器	小甕	横ナデ／ハケメ	横ナデ／ハケメ	再調整
		179	RD141	１層	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	ケズリ
77		180	RG056	堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	－
		181	RG056	堆積土	土師器	坏	ロクロナデ・ミガキ・黒色処理	ロクロナデ・ミガキ・黒色処理	回転糸切
		182	RG056	堆積土・RZ018堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切
		183	RG056	堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		184	RG056	西側堆積土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－
		185	RG056	堆積土	土師器	壷	／ロクロナデ	／ロクロナデ	低い高台風
		186	RG056	西側堆積土中位	土師器	把手？	長さ7.6cm、幅5.0cm、口径5.4cm、外面にケズリ・ナデ調整		
		187	RG056	堆積土上位	須恵器	甕	／タタキメ	／当て具痕	－
		188	RZ033		土師器	甕	ロクロナデ・ケズリ	ハケ（ケズリか）・横ナデ	ケズリか
78	60	189	RZ034		土師器	甕	ケズリ・横ナデ	ヘラナデ・横ナデ	木葉痕
		190	P22	堆積土	陶器	香炉か	外面：灰釉、内面：透明釉		
		191	－５C20ｓ		土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	回転糸切
		192	－４Ｃ４ｑ	撹乱	土師器	坏	ミガキ・黒色処理	ミガキ・黒色処理	－
		193	－４Ｃ区	検出面	磁器	丸碗	内外面：透明釉、外面に木葉文、底部内面に隷字体銘		
		194	調査区南端	Ｉ層	瓦器か	火鉢か	内外面黒色処理		
	52	195	RA035	No.19	鉄製品	鉄滓	重さ479ｇ		
	56	196	RZ017	付属土坑　底面	石製品	台石	重さ6300ｇ、平面形「Ｃ」字状、ホルンフェルス製で風化著しく実測不能		

計測値（cm）				容量	残存部位	残存率（%）		外面色調	備　　考	掲載
口径	底径	器高	器壁	（l）		口縁	底部			No.
－	7.3	〈3.3〉	0.5	－	底部	0	75	橙色		133
13.7	8.7	8.2	0.45	0.52	口～底	55	95	橙色		134
15.4	6.3	4.95	0.5	0.40	口～底	75	100	灰白色		135
15.0	5.3	5.3	0.35	0.35	口～底	25	100	灰白色		136
(12.9)	－	〈4.5〉	0.45	(0.24)	口縁部	20	0	灰白色		137
(12.5)	－	〈4.3〉	0.45	(0.25)	口縁部	15	0	暗灰色		138
－	－	〈13.1〉	1.2	－	体部	0	0	灰色	掲載縮尺1／4	139
					完形	－	－	－	メノウ（奥羽山脈）	140
－	－	〈5.6〉	0.5	－	口～体	5	0	黒色	両黒	141
					一部欠損	－	－	－	支脚として再利用か	142
20.9	6.0	27.0	0.7	2.89	口～底	90	100	にぶい黄橙色	ススコゲ・喫水線	143
18.2	7.1	26.1	0.6	2.47	口～底	60	100	橙色		144
－	－	－	0.45	－	口縁部	5	0	橙色	刻書か	145
					関部付近	－	－	－		146
					完形	－	－	－	196と対	147
－	－	〈6.1〉	0.7	－	体部	0	0	灰色		148
－	－	〈7.2〉	0.8	－	体部	0	0	灰色・赤褐色		149
					大部分欠	－	－	－		150
－	－	〈2.1〉	0.8	－	体～底	0	30	橙色		151
16.8	－	4.2	0.55	0.41	口～底	80	60	橙色		152
(15.4)	5.0	3.7	0.5	0.30	口～底	5	50	にぶい黄橙色		153
(14.3)	－	〈3.8〉	0.5	0.21	口～底	5	0	にぶい黄橙色		154
7.7	－	〈7.2〉	0.7	－	口縁部	85	0	暗灰色		155
－	－	〈14.6〉	0.7	(2.51)	体部	0	0	暗灰色	73と同一個体か	156
23.2	－	43.1	0.8	31.67	口～底	90	100	灰色	焼成後底部穿孔	157
－	－	〈4.5〉	0.3～0.8	－	口～体	2	0	白色	瀬戸窯産、連房10小期以降	158
15.1	－	〈4.6〉	0.45	0.41	口～底	90	0	橙色		159
4.0	5.2	10.0	0.6	0.17	口～底	75	40	灰白色	底部焼成後穿孔	160
22.5	－	〈44.1〉	0.9	23.99	口～底	95	0	灰白色	底部焼成後穿孔	161
					先端欠損	－	－	－		162
					先端欠損	－	－	－		163
(12.2)	－	〈3.1〉	0.5	(0.17)	口縁部	50	0	橙色		164
13.0	(6.1)	〈12.6〉	0.6	0.59	口～底	90	3	にぶい黄橙色	底部焼成後穿孔	165
					完形	－	－	－		166
					略完形	－	－	－	刀子の関部が錆着	167
					完形	－	－	－	別個体が錆着	168
					－	－	－	－		169
					舌部	－	－	－	168の内部に錆着して出土	170
					関部付近	－	－	－		171
					完形	－	－	－	凝灰岩（奥羽山脈）、側面のみ磨痕	172
					完形	－	－	－	砂岩	173
(14.2)	(6.6)	4.3	0.45	0.30	口～底	2	35	橙色		174
－	－	－	0.45	－	口縁部	2	0	にぶい黄橙色	墨書	175
－	(5.0)	〈2.0〉	0.4	－	底部	0	15	灰色		176
(9.8)	(5.0)	3.6	0.5	0.11	口～底	45	15	にぶい黄橙色		177
12.9	(3.7)	10.0	0.5	0.28	口～底	80	20	橙色		178
14.0	7.5	4.3	0.55	0.34	口～底	95	100	橙色		179
(12.6)	－	〈3.3〉	0.3	(0.22)	口～体	20	0	橙色	体部上半に焼成前穿孔	180
(16.5)	6.0	5.2	0.4	0.55	口～底	25	90	黒色		181
14.3	6.0	5.0	0.4	0.33	口～底	70	95	橙色	スス付着	182
(14.0)	－	〈3.3〉	0.6	(0.24)	口～体	15	0	橙色		183
(13.0)	－	〈4.1〉	0.4	(0.25)	口～体	5	0	橙色		184
－	(9.5)	〈5.2〉	0.8	(0.27)	底部	0	10	橙色	還元不足か	185
					把手	－	－	橙色	把手部分と思われる	186
－	－	〈12.7〉	1.0	－	体部	0	0	黒色		187
19.0	7.6	31.1	0.6	6.30	口～底	100	80	橙色		188
23.4	9.7	33.1	0.65	8.89	口～底	100	100	にぶい黄橙色	北奥型	189
－	－	〈2.4〉	0.35	－	体部	0	0	暗緑色		190
－	(5.0)	〈2.2〉	0.55	－	底部	0	25	橙色		191
(10.8)	－	〈2.3〉	0.5	－	口縁部	10	0	黒色		192
－	3.3	〈1.6〉	0.4	－	底部	0	45	灰白色	肥前産、大橋Ⅳ器以降	193
－	－	〈5.8〉	1.6	－	口縁部	2	0	黒色	箱型の火鉢か	194
					－	－	－	－	写真掲載	195
					略完形	－	－	－	写真掲載、147と対	196

Ⅴ　調査のまとめ

今回の調査では、陥し穴状遺構・竪穴住居・古墳・墓坑・土器埋設遺構などの遺構、土師器・須恵器・鉄製品など主に古代に属する遺物が確認されている（第79図）。最後に主要な遺構・遺物について若干の検討を加えることで調査のまとめとしたい。

1　陥し穴状遺構

溝状プランのものが11基確認されている。ほとんどが北東－南西方向に長軸をとる。年代の根拠となる遺物が出土していないため推定になるが、形態から縄文時代に属すると考えられる。削平の影響をあまり受けない底面の規模をみると、長軸2.30～3.90m、幅0.05～0.67mで、壁面崩落によって変形しているものもあるが横断面形はＶ字形である。

配置状況は必ずしも整然としていないが、北東－南西方向に長軸をとるものは10～20m間隔で並んでおり、とくに調査区の南西側ではＲＤ106～114が遺跡範囲の西側の境界となる旧河道に平行するように配置されている。過去の調査でも遺跡範囲の南側（第５・６次調査区）で旧河道と考えられる黒色土層付近で同様の状況が確認されており、水場に集まる動物を対象とした罠猟が行われていたと考えられることから、今回検出されたものについても同様の意図を持って設置された可能性が高い。

2　土器の分類

今回の調査で出土した土器はいずれも土師器・須恵器で、形態・成形技法（ロクロ使用・黒色処理の有無）から奈良時代のものと平安時代のものとに分類することができる。ここでは出土点数の多い土師器坏・甕を中心として分類と年代について検討を行う。

奈良時代

ロクロ不使用の土師器坏・甕・甑？、須恵器大甕・瓶類がある。

土師器坏はＲＡ033、ＲＺ020・022・023・030・032、ＲＤ128から出土している。全て丸底で内面に黒色処理を施すものであり、体部外面に段を有するＡ類（152・153・154）、沈線・稜線をもつＢ類（73～75・159・177）、段・沈線をもたないＣ類（72・164）に分類できる。東北地方で出土する古墳～奈良時代の土師器坏は体部の「段」と底部形状の二点を指標として変化の方向性が考えられてきた。具体的には段の省略化、丸底から平底への変化ということであり、これらはロクロ技術の導入と製作工程の簡略化に起因するものと考えられる[1]。本遺跡出土事例をこの変化に対応させると、体部内外面に段を有するＡ類→内面の段が消失し外面が沈線化するＢ類→内外面ともに段・沈線をもたないＣ類という変遷を考えることができる。

周辺遺跡をみると、A類は盛岡市野古A遺跡ＲＡ047・滝沢村高柳遺跡Ｅa60住居跡・岩手町仙波堤遺跡１号住居跡などに類例がある。高柳遺跡は７世紀末～８世紀初頭、その他は８世紀前半代に位置付けられていることから、A類は８世紀前半に属すると考えられる。B類は、盛岡市台太郎遺跡ＲＡ130・野古Ａ遺跡ＲＡ048・矢巾町館畑遺跡ＳＩ04などで出土しており、いずれも８世紀後半代に位置づけられている。ただし、口径が17cm近くと大きいこと（73～75）、８世紀前半に属する野古Ａ遺跡ＲＡ047からも159と同形態のものが出土していることから、Ｂ類は８世紀後半を主体とするも一部中葉に遡

第79図　飯岡才川遺跡主要遺構配置図

ると考えられる。なお、C類については沈線の有無を除けばB類と形状は同じであり、B類より後出するものの８世紀後半代に属するものと考えておきたい。

土師器甕はＲＡ033・034・041、ＲＺ032、ＲＤ135から出土している。体部形状から球胴形のＡ類（78・79）と長胴形で器高が25cm前後のＢ類（76・77・82・83・143・144）、器高10cm程度のＣ類（165・178）に分類できる。Ａ類は体部中央に最大径をもち、頸部に明瞭な段を形成する。Ｂ類は、底部脇は屈曲するが体部がほぼ直立しながら頸部へと至るもので、最大径は口縁部にある。頸部の段は明瞭で、口縁部は「く」の字状に外方へ開く。Ｃ類は頸部の段は明瞭であるが、類と異なり底部脇は屈曲しない。口縁部形状は、単純口縁のものと受口状のものとがある。なお、Ｂ類は体部形状が類似するもの（Ｄ類）が平安時代にもあるが、頸部の段が明瞭であることと底径が小さく底部脇が屈曲する点が大きく異なるため判別は比較的容易である。ただし、型式変化に乏しいため奈良時代のなかでの詳細な時期決定は難しく、供伴関係から８世紀後半代に属するものを主体として178（Ｃ類・受口状口縁）のみ８世紀前半に遡る可能性があるとしておきたい。

須恵器小壷（160）についても若干触れておきたい。本例のような形状の小壷は周辺遺跡での出土はないが、長頸瓶など大型器種を含めると猿投・陶邑窯で平城Ｉ期（８世紀前葉）に属する製品のなかに類例がある。器種が異なり産地も不明なため単純に同一視はできないが、本例は８世紀前葉を上限として奈良時代に属する可能性があることは指摘しておきたい。

供伴関係をみると、ＲＡ033で土師器坏Ｂ・Ｃ類と土師器甕Ａ・Ｂ１類、ＲＺ023で土師器坏Ａ類と須恵器長頸瓶・大甕、ＲＺ030で土師器坏Ｂ類と須恵器小壷・大甕、ＲＺ032土師器坏Ｃ類と土師器甕Ｃ類が供伴している。その他ではＲＡ034・041では土師器甕Ｂ類、ＲＺ022は土師器坏Ａ類が２点以上出土している。以上から、竪穴住居では土師器坏と甕、古墳では土師器坏と須恵器が基本的なセットであったと考えられる。なお、土師器坏を指標とするとＲＺ022・023、ＲＤ128・135は８世紀前半、ＲＡ033、ＲＺ032は８世紀後半、土師器甕Ｂ類のみ出土したＲＡ034・041も８世紀後半に属する。このことから、奈良時代に属する遺構のうち古墳は8世紀前半から一部後半、竪穴住居は８世紀後半に構築されたものと考えられる。ただし、古墳出土の土器はいずれも周溝内出土であり、古墳については周溝埋没の年代（下限年代）を示しているにすぎない。

平安時代

土師器坏・高台坏・甕・鉢、須恵器坏・壷・瓶類がある。このうち土師器甕にはロクロ使用・不使用が混在するが、その他は全てロクロ成形の製品である。

土師器坏は全て平底で、黒色処理を施すものと施さないものがある。体部形状から、体部が内彎しながら立ち上がるＤ類、口縁部がナデ調整によって外反するＥ類、底部脇が屈曲して体部下半は内彎しながら立ち上がるＦ類に分類できる[(2)]。土師器甕はロクロ不使用のＤ類とロクロ使用のＥ類に分類できる。いずれも長胴で、Ｄ・Ｅ類ともに口縁部形態によってさらに細分できる可能性はあるが、点数が少ないため今回は分類を行っていない。また、後述するように土師器高台坏も年代決定の有効な指標となるが、点数が少ないため分類を行っていない。

平安時代の土器については供伴関係をもとに年代を考えていきたい。上記の分類をもとに遺構ごとの器種構成をまとめると、幾つかのポイントがあることがわかる。とくに土師器坏Ｆ類と高台坏の有無の２点が有効な指標であり、両者を含まないものをＩ群（ＲＡ028・030・035・036・038）、含むものをⅡ群（ＲＡ029・031・037・039）として検討を加える。

まず、両者の前後関係について土師器坏の器形に注目してみていく。これまでの研究成果によると、ロクロ使用の土師器坏は断面形が「椀形」を嗜好するものから口縁部が外反するもの、さらに底部脇

が屈曲するものへ変化すると考えられている（白鳥1980・村田1995・西澤2005）。これを参照すると、本遺跡では相対的にＤ類が古く次いでＥからＦ類へと移行するものと考えられ、Ｄ・Ｅ類のみで構成されるＩ群のほうがＦ類を含むⅡ群よりも古いと判断できる。その他の器種についてみると、土師器甕はＣ・Ｄ類が混在しており両群における比率はほとんど変わらない。

このようにみていくと、Ｉ群は土師器坏がＤ・Ｅ類のみで構成されること、断面形が逆台形を志向した７世紀以来の伝統を引くタイプがみられないことから白鳥良一のいう「C群土器」（以下、白鳥○群とする）以降の土器群であり、さらに白鳥Ｅ群以降に出現する土師器高台坏が含まれていないことから白鳥D群に併行する土器群と考えられる。白鳥D群は村田晃一のいう「１群土器」（村田1995）に相当し、多賀城周辺では黒笹90号窯式期の施釉陶器と供伴することから９世紀後半代と考えられている。Ⅱ群については、土師器坏にＤ・Ｅ類より後出の要素をもった土師器坏Ｆ類と高台坏がみられることから、白鳥E群以降に併行する土器群と考えられる。ただし、底部脇が屈曲するＦ類は依然として客体的な存在であることから、Ｆ類が主体的となる時期（10世紀前半）よりは古いと考えられる。これらを総合すると、Ⅱ群は９世紀後半～10世紀初頭に属するものと考えておきたい。この他、ＲＺ034の土師器甕Ｄ類は９世紀後半代に位置付けられる「北奥型甕」（伊藤2006）であることからＩ群、ＲＺ033の土師器甕Ｅ類も同時期と考えておきたい。

３　竪穴住居

14棟検出した。調査区中央～南側を巡るＲＧ056内に４棟（ＲＡ036～039）、調査区南東側に６棟（ＲＡ028～032・035）、調査区北側に４棟（ＲＡ033・034・040・041）と３ヵ所に集中して造られている。出土土器の年代観から調査区北側の３棟（ＲＡ033・034・041）は奈良時代、それ以外のものは平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）に属すると考えられる。構築年代の根拠については前節の通りであるため、ここでは構造に関する点についてみていくことにしたい。

平面形はいずれも方形で、床面積は3.42～21.46㎡である。建て替え拡張を行ったと考えられるＲＡ031が最も大きいが、その他はほとんどが10㎡以下と小型である。本遺跡における過去の調査で検出された竪穴住居と規模的にはほぼ同じであり、構築年代による差異も見出せない。また、近隣の遺跡で竪穴住居の床面積が掲載されている事例（細谷地第４・５次、・本宮熊堂Ｂ第25次・野古Ａ第23・24・29次など）と比較しても突出したものはないことから、本遺跡の竪穴住居は遺跡周辺では平均的な規模のものといえる。検出面からの深さは10～54cmで、削平の影響もあって構築当時より浅くなっている。ただし、煙道の天井部が残存しているものについては比較的本来の深さに近いと考えられる。なお、柱穴については大型のＲＡ031で規則的な配置が見られるものの、小型のものは配置が不規則なものや検出されないものがほとんどであった。

床面の構築には、①掘り方を掘り、貼床を敷設するもの（ＲＡ035～041）と②貼床を敷設せずⅢ層を平坦に整えるもの（ＲＡ028～034）がある。①には凹凸が著しいもの（ＲＡ035・039）と細かい凹みを埋める程度のもの（ＲＡ036～038）があるが、いずれも壁面付近が深く、中央が浅いといったような掘削時の法則性は見出せなかった。②に属するものは、上面が黒く変色・硬く締まった部分があるため一見すると貼床が敷設されているようにも見えるが、断ち割りによる断面観察ではこの変色部分は２cm以下と非常に薄いことから、これらは住居使用の痕跡として生じたものと考えられる。

カマドは、奈良時代に属するものは西壁（北西壁）中央に設置されているのに対し、平安時代に属するものは東壁のいずれかのコーナー付近に設置されるものが多い。ソデの構築方法は、地山削り出

しをベースにするもの（ＲＡ028・029など）、礫を芯材として使用するもの（ＲＡ039）、芯材を用いないものがある（ＲＡ036など）。いずれも主体となるのは粘性の高い土である。煙道は、平安時代のものは全て刳り貫き式である。燃焼部の端から煙出しに向かって下っており（平均15度）、煙道と煙出し底面の境界が不明瞭なものが多い。奈良時代のものはいずれも天井部が削平されているが、周辺に礫の散布が見られないことから刳り貫き式であったと想定される。残存部分の観察からは、平安時代のものに比べて煙道の傾斜は緩やかで、煙出しはピット状で煙道底面より深く掘り込まれている。なお、煙道の状況に比べてどの住居もカマド燃焼部付近はソデが崩落しているなど残存状況は悪く、なかにはカマドの袖部分を壊したり（ＲＡ036）、人為的な埋め戻しの後に煙出しに礫を詰めたりする例（ＲＡ035）が見られた。このことから、住居廃絶時には意図的にカマド周辺を壊す（機能を失わせる）といった行為が行われていたと考えられる。

付属施設としては、貯蔵用と考えられる土坑が設置される住居が多いが、この他にＲＡ035では壁面を抉り込むように掘り込んだ「横穴状土坑」（高木2002）が検出されている。横穴状土坑は細谷地遺跡など本遺跡周辺の同時期の竪穴住居で確認例があるが、人為的に掘削されたという点を除いて用途に関しては不明である。

4　墓制関連の遺構

古　墳

17基検出した（ＲＺ014・017～032）。隣接する第７次調査を含めると、遺跡範囲の北側では24基の古墳が発見されたことになる[3]。遺跡範囲北側の境界となる旧河道に沿って分布しており、ＲＺ030･031を除いて古墳同士が重複関係にあるものはなく、それぞれが５～20mの間隔で分布している。なお、出土土器の年代観と８世紀後半の竪穴住居に切られるもの（ＲＺ029）があることから、本遺跡の古墳は８世紀前半に属するものが多いと考えられる。

墳丘はいずれの古墳でも残存していなかったため構築方法は不明であるが、周溝の形態から円墳と考えられる。埋葬施設はＲＺ026で１基検出されており、棺の痕跡は確認できなかったが石材の出土がないことから「土壙型」の古墳（八木1996）と考えられる。なお、構築当時の地表面ごと墳丘が削平されているため、埋葬施設と墳丘の構築順序を判断することはできなかった[4]。また、周溝に比べて埋葬施設の残存する古墳が極端に少ないことから、相対的に周溝より高い位置に構築されていたと考えられる。すなわち埋葬施設よりも掘削深度が深かったため、墳丘・埋葬施設が消滅するほどの削平を被っても周溝は残存したものと考えられる。

本遺跡の古墳には周溝が全周するものはなく、全て開口部を有する。開口部は墳丘上へ登る通路の残存部分と考えられ、ほとんどのもので南東側に存在する。なお、周溝の開口部が１ヵ所のものと２ヵ所以上のものがあるが、周溝底面の深さに注目すると、①１ヵ所のみ開口する古墳では開口部に直行する側面部分が深く、開口部の反対側が浅いものが多い。②２ヵ所以上のものでは向かい合う開口部の一方の幅が狭く、周溝端部も緩やかに消滅する、という傾向がみられる。このことから、本遺跡の古墳にみられる開口部には古墳構築時に意図的に作り出されたものと周溝底面まで削平されることで開口部状になった部分があると考えられる。残存状況からの推定であるため例外もあると思われるが、本遺跡の古墳は１ヵ所のみ開口部を有する形態が基本形であったと考えておきたい。

雫石川右岸域では、本遺跡のほかに太田蝦夷森古墳群・高館古墳群・飯岡沢田遺跡で古墳が確認されている。とくに旧河道を挟んで北側に位置する飯岡沢田遺跡では７世紀後半～９世紀前半頃に属す

る40基以上の「古墳（円形周溝）」が検出されており、年代・構築方法の点で本遺跡との共通点は多い。このことは、雫石川右岸地域では奈良時代の前後に古墳を築くという風習があったこと、そして旧河道を挟んだ一帯が古代の墓域として利用されていたことを証明するものといえる。

墓　坑

副葬品の出土が皆無であったため、今回は①方形基調の平・断面形をしており底面が平坦に整えられている、②堆積土中（とくに中～下位）に人為堆積と考えられる層がある、という２点を根拠として７基を墓坑とした（ＲＤ115～121）。

古墳の分布域内に単独で存在しており、配置に規則性は認められないが、古墳の開口方向と同じく北東－南西方向に長軸をとるものが多い。棺の痕跡が残るものが少なく、鉄釘など木棺の存在を窺わせる遺物も出土していないため棺の有無・構造については不明な点が多い。しかし、底面の状況からＲＤ116は小口板埋め込み式、ＲＤ119は四辺埋め込み式の木棺であったと考えられる。その他も木棺を使用したと考えたいが、底面幅が0.5m以下と狭いことから成人の伸展葬であれば直葬の可能性もある。被葬者の性格についても不明であるが、成人用とは考え難い規模のものが多いことから幼児埋葬用の墓坑の可能性もある。なお、年代については重複関係からＲＤ116が８世紀代、ＲＤ117が10世紀以前と推定されるが、その他は出土遺物・重複関係ともに無いため不明である。

本遺跡の周辺では墓域と推定される飯岡沢田遺跡で84基、集落遺跡である細谷地遺跡・野古Ａ遺跡などでも数基が確認されている。いずれも方形基調のプランで人為堆積層があるという点で共通しており、本遺跡周辺では奈良～平安時代には墳丘を築かない土坑墓（木棺墓）が墓制の一形態として存在しており、かつ古墳と異なり集落遺跡内でも使用された埋葬方法であったといえる。

土器埋設遺構

２基検出した。成形技法に相違はあるがいずれも９世紀後半代に位置付けられる特徴をもった土師器長胴甕が古墳の周溝脇の土坑内に１個体設置されているという状況で検出された。理由については後述するが、本遺跡の土器埋設遺構はいわゆる土器棺墓としての機能を有するものと考えられ、９世紀後半に土器を使用した埋葬が行われていたことを示す資料といえる。

古代の土器埋設遺構[5]については東北地方では古くから検討が行われており、とくに岩手県・青森県で出土例が多い（斉藤・沼山1974、沼山1980・1981）。ただし、発見された事例はいずれも土師器長胴甕を２個体以上使用した「合口甕棺墓」であり、単体で埋設される事例は本遺跡が初めてである。沼山によると、東北地方で出土する土師器合口甕棺墓は、①単独で設置され群集しない、②顕著な墳丘はなく地表下に埋納、③平面楕円形の土坑に横位に設置、④使用される甕は日常用のものを転用、⑤副葬品が出土するものは少ない、⑥多くは幼児埋葬用の可能性が高い、⑦構築時期は平安時代前半期、といった特徴があるとされている（沼山1981）。一方で、宮城県多賀城跡周辺では道路交差点付近に設置された事例があること、資料数の僅少さや丘陵部に立地する生産遺跡から検出される事例があることなどを根拠として「道」や生産に関係する祭祀施設として捉えられる可能性があるとし、甕棺墓という性格付けに対する疑念も提示されている（佐藤1996、山口1996）。確かに岩手県本宿羽場遺跡や青森県野尻（１）遺跡における自然科学分析の結果からヒト遺体が埋葬された可能性が高いと考えられるが、東北地方では墓域内に存在するものやこれらで墓域を形成するものがないことから、祭祀に関連する施設であった可能性も十分考えられる。

本遺跡出土例に関してもヒト遺体の埋葬を示すものが検出されていないこと、古墳の脇に設置されているものの古墳の構築年代とは１世紀近い開きがあることなど、土器棺墓とするには根拠として弱い部分はある。しかし、沼山の提示した甕棺墓としての特徴をほぼ備えていること、近畿地方の事例

では古墳周辺に古墳構築後一定期間を置いて設置されることが大半であることから（山田1979、角南2007）、設置状況・年代に共通点がある本遺跡出土例については近畿地方の事例と同様の意図をもって設置された土器棺墓であったと考えておきたい[6]。

なお、土器棺墓とした場合、被葬者の性格が問題となってくる。本遺跡出土事例は出土遺物がないことと脂肪酸分析を行っていないことから推定になるが、火葬骨が検出されなかったことと成人埋葬用としては小型であることなどを根拠として、子供（幼児）用の埋葬施設と考えておきたい（沼山1981、角南2007）。この推定が正しいとすれば、本遺跡には幼児埋葬用の施設として土器棺墓と土坑墓（木棺墓）という二種類が存在していた可能性がある。

5　鉄鐸に関する検討

ＲＡ032竪穴住居から１点（71）とＲＺ032古墳の周溝から４点(166 ～ 169）出土している。鉄鐸とは薄い鉄板を巻いて円筒形にしたもので、内部に棒状の舌を取り付けて音を鳴らす道具と考えられており、単独で使用されるものと錫杖状鉄製品の付属品とがある[7]。古墳時代中期（５世紀後半～６世紀）の事例を初現として平安時代（11世紀代）まで全国各地で出土する遺物であり、とくに単独で使用される鉄鐸は長野県、錫杖状鉄製品の付属品は東北地方（とくに岩手県と青森県）での出土が多い（原1996、井上2002・2006、小保内2005）。以下では、先学の研究成果を参考に本遺跡出土の鉄鐸について若干の検討を行ってみたい。

形態的特徴

本遺跡出土例は、大きく上端と下端の直径がほぼ同じ円筒形（71）と上端より下端が広がる円錐形（166 ～ 169）に分類することができる[8]。このうち71と168は内部に舌と考えられる棒状鉄製品が認められる。いずれも全長は4.5cm以下で、穿孔が施されているものは皆無であった。

単独で使用される鉄鐸は日光男体山頂遺跡のものを祖形として全国に広まったものと考えられており（井上2006）、宮城県東山遺跡や石川県寺家遺跡出土例のように内部に舌を伴う円錐形が多い。一方で錫杖状鉄製品に付属するものは円筒形で舌を伴わないものが主流であり、全長が５cmを超えるものは少ない。ただし、両者の形態は混在しており、単独使用の鉄鐸でも舌を伴わない円筒形（青森県熊野堂遺跡例）、錫杖状鉄製品の付属品でも円錐形（青森県野木遺跡）は確認されている。また、出現から消滅まで大きな型式変化が認められない遺物であり、鉄鐸のみの出土では単独使用のものか否か、そして製作年代を判断するのは困難である。したがって本遺跡出土例についても推定となるが、今回は舌の有無を根拠として円筒形だが舌を伴う71は単独で使用された鉄鐸、円錐形だが舌を伴わない166・167・169、及び舌を伴うが168は錫杖状鉄製品の付属品になるものとしておきたい。

出土遺跡の分布・年代

東北地方における鉄鐸出土遺跡の分布をみると、青森県の津軽平野南東部と太平洋沿岸（八戸市周辺）、岩手県の北上川中・下流域と太平洋沿岸（宮古市周辺）に集中している。出土する遺跡は集落が９割近くを占め、次いで工房（製鉄関連）・古墳群・墓地・官衙関連遺跡となっている[9]。出土遺構をみると、集落遺跡では竪穴住居からの出土が多く、その他には土坑・竪穴状遺構がある。古墳からの出土は岩手県長根Ｉ遺跡の22号古墳と本遺跡のＲＺ032古墳の２例である。しかも長根Ｉ遺跡22号墳では主体部の堆積土最上位から錫杖状鉄製品に伴って出土しており、ＲＺ032のように周溝底面付近から出土した事例は初めてである。この他には秋田県湯ノ沢Ｆ遺跡７号土坑墓に副葬された例や青森県貝ノ口遺跡のように錫杖状鉄製品の一部として土坑内に埋納された例などがあるが、当時の

使用状況を推定できるような出土状況の資料はほとんどない。

供伴遺物の年代観を参照して年代についてみていくと、東北地方では８世紀後半の岩手県山田町沢田Ⅱ遺跡出土例を最古として10世紀後半～11世紀前半の青森県林ノ前遺跡出土例まで確認されている。ただし、出土点数は各時期一様ではなく８世紀に遡る事例はごくわずかであるが、９世紀後半～10世紀には出土遺跡･点数が飛躍的に増加する。本遺跡出土例のうち竪穴住居出土の71は９世紀後半、古墳出土の166～169は８世紀後半のものと考えられる。とくに後者は東北地方における鉄鐸（錫杖状鉄製品）導入期に属する新たな資料を追加したという点で意義があると考えられる。

用　途

鉄鐸・錫杖状鉄製品を含めた東北地方の古代鉄製祭祀具は栃木県日光男体山頂遺跡出土仏具との共通性から雑密による影響下で儀礼に用いられた祭祀具と考えられており（井上2006）、本遺跡でも竪穴住居出土の71については祭祀具として使用されたと考えられる。しかし、周囲からの混入とは考え難い状況で出土した166～169についてはＲＺ032古墳に関連する祭祀に使用された可能性は高いと考えられる。このことは、東北地方における導入期（８世紀後半）の鉄鐸は雑密系の祭祀のみではなく葬送儀礼にも使用されていた可能性を窺わせるものといえるが、本遺跡と同様の状況で出土した事例が皆無であるためあくまで推定の域を出ない。これについては出土事例の増加を待って検討すべき課題であろう。

註

1．今回は出土点数が少ないため参考にしていないが、この他に法量の小型化という変化も認められている（宇部2002）。
2．須恵器坏も同様の器形が確認できるが、全形がわかる資料が少ないため今回は細分を行っていない。
3．遺跡範囲の東側に位置する第３次調査でも時期不明の円形周溝が２基検出されており、これらを含めると26基となる。
4．末期古墳ではまず埋葬施設を掘削して棺を設置し、その後に埋葬施設の埋め戻しと墳丘盛土確保のために周溝を掘削する方法が一般的と考えられている（藤澤1997、小谷地2007）。
5．この種の遺構については「合口埋甕遺構」･「土師器合口甕棺墓」･「合口甕棺」と様々な名称が使用されてきた（沼山1981､山口1996など）。しかし､本遺跡出土例は「合口」ではないこと（状態）､埋葬以外にも用いられる事例があること（用途）、甕以外の器種も使用されること（器種）などの点を考慮して、本書では状態・用途・器種に影響を受けない名称として「土器埋設遺構」を用いている。
6．合口のものより少数ではあるが土師器甕を単体で使用するものも確認されている（角南2007）。
7．錫杖状鉄製品に付属する鉄鐸については筒形金具・無舌鉄鐸など別の名称を用いるべきとの指摘もあるが（小保内2005）、形態的に分類できないものも存在するため今回は両者を一括して「鉄鐸」と呼称する。
8．今回は、実測図上で「下端幅－上端幅＞３㎜」のものを円錐形とした。
9．東北地方と同じく出土例の多い長野県でもほとんどが集落遺跡または墓跡からの出土である。

《参考文献》

伊藤博幸　2006「陸奥型甕・出羽型甕・北欧型甕」『吉岡康暢先生古希記念論集　陶磁器の社会史』同刊行会
井上雅孝　2002「錫杖状鉄製品の研究」『岩手考古学』第14号　岩手県考古学会
井上雅孝　2004「錫杖状鉄製品の研究（２）」『岩手考古学』第16号　岩手県考古学会
井上雅孝　2006「古代鉄製祭祀具から見た蝦夷の信仰と儀礼　－錫杖・三鈷鐃・鉄鐸・錫杖状鉄製品－」『立正史学』第99号
岩田明広　1998「床の硬化を考える」『土壁』第２号　考古学を楽しむ会
小保内裕之　1999「２　青森県」『考古学論究』第５号　立正大学考古学会
小保内裕之　2005「古代編（考古学からみた古代）」『福地村史　上巻』
木村　高　2000「第301号土器埋設遺構について」『野尻（１）遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第277集
小松則也　2004a「飯岡才川遺跡第５次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成15年度）』岩手県文化振興事業団埋蔵文

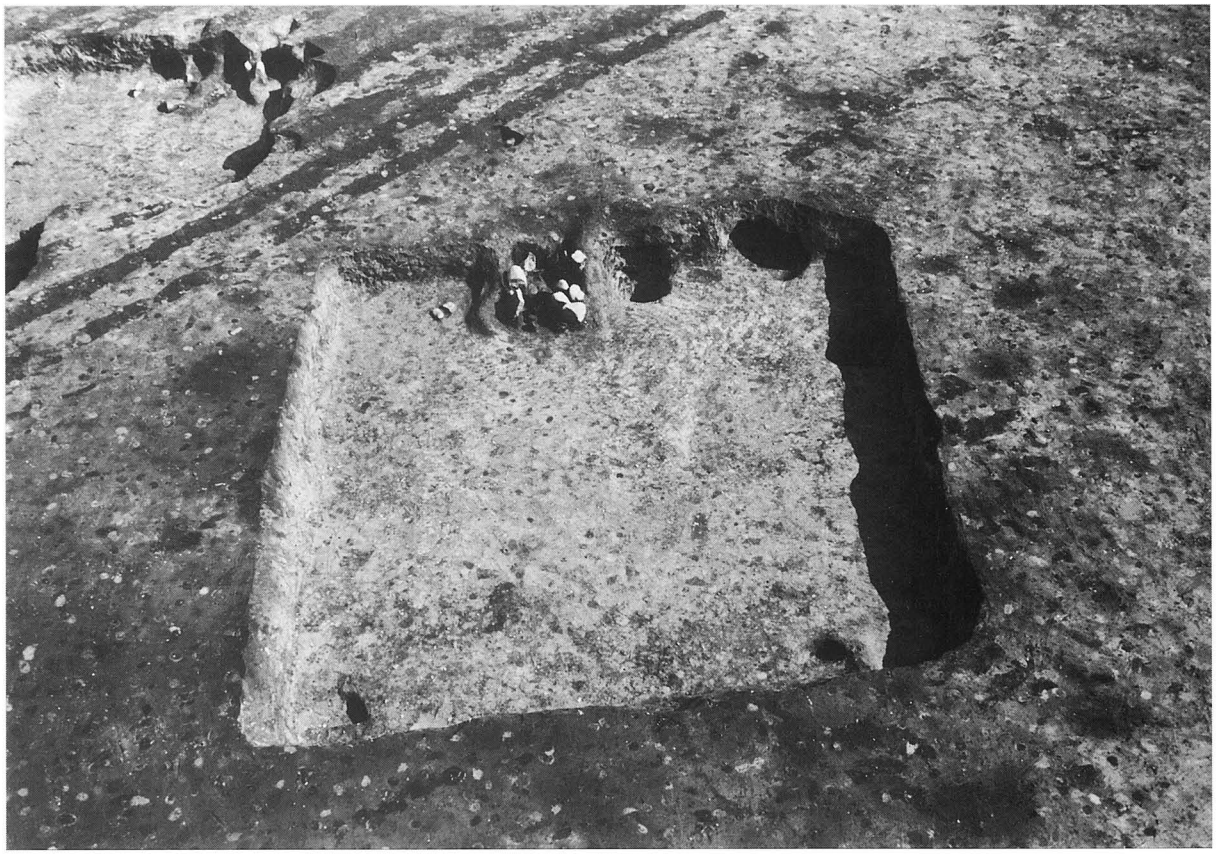
化財調査報告書第455集
小松則也　2004b　「飯岡才川遺跡第６次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成15年度）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第455集
小谷地肇　2007　「第Ⅳ章　考察」『阿光坊古墳群発掘調査報告書』おいらせ町埋蔵文化財調査報告書第１集
今野公顕編　2006　『黄泉への入口　～古代蝦夷首長の墓～』盛岡市遺跡の学び館　第５回企画展図録
斉藤直巳・沼山源喜治　1974　「東北地方の合口埋甕遺構について」『北奥古代文化』第６号
佐藤敏幸　2001　『赤井遺跡Ⅰ　－牡鹿柵・郡家推定地－』矢本町文化財調査報告書第14集
佐藤則之　1996　「３．土器埋設遺構について」『山王遺跡　Ⅳ』宮城県教育委員会
島原弘征・村田淳　2007　「土器・陶磁器の容量　－計測の目的と方法について－」『紀要ＸＸⅥ』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
白鳥良一　1980　「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要　Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所
杉沢昭太郎　2001　『台太郎遺跡第26次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第416集
角南聡一郎　2007　「土師器使用土器棺について　－近畿地方を中心とした検討－」『元興寺文化財研究所創立40周年記念論文集』クバプロ
高木　晃ほか　2002　『細谷地遺跡第４・５次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第414集
溜浩二郎　1999　「飯岡才川遺跡第２次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成10年度）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第311集
中田　迪　2001　「飯岡才川遺跡第４次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成12年度）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第370集
中田　迪　2002　『飯岡才川遺跡第３次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第393集
西澤正晴ほか　2005　『西川目・堰向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第464集
西澤正晴ほか　2006　『飯岡沢田遺跡第９・10次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第489集
沼山源喜治　1980　「東北北部の古代・中世墓について」『日高見國　菊池啓治郎学兄還暦記念論集』同刊行会
沼山源喜治　1981　「土師器合口甕棺葬について　－東日本における諸例を中心に－」『考古学雑誌』第66巻第４号
濱田　宏　2007　『飯岡才川遺跡第８・９次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第494集
原　明芳　1996　「信濃の鉄鐸」『信州の人と鉄』信濃毎日新聞社
半澤武彦　2001　『飯岡沢田遺跡第3次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第393集
東日本埋蔵文化財研究会　1995　『東日本における奈良・平安時代の墓制』
東日本埋蔵文化財研究会　1997　『遺物からみた律令国家と蝦夷』
福島正和ほか　2007　『野古Ａ遺跡第23・24・29次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第501集
藤澤　敦　1997　「東北北部の末期古墳の主体部構造」『東北史学会考古部会研究発表要旨・発表資料』
村木　敬ほか　2006　『本宮熊堂A遺跡第24次・本宮熊堂B遺跡第25次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第470集
村田晃一　1995　「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号
村田　淳ほか　2008　『飯岡才川遺跡第7･13次･細谷地遺跡第12次･矢盛遺跡第9次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第508集
八木光則　1996　「東北北部の終末期古墳群」『岩手考古学』第８号
柳沢和明　1994　「東北の施釉陶器　－陸奥を中心に－」『古代の土器研究　－律令的土器様式の西・東３　施釉陶器－』
山口博之　1996　「山形県の古代のひとびとはどんな墓に入ったのか」『西村山の歴史と文化　Ⅲ』西村山地域史研究会
山田良三　1979　「土師器合口甕棺墓について」『橿原考古学研究所論集　第四』吉川弘文館

写　真　図　版

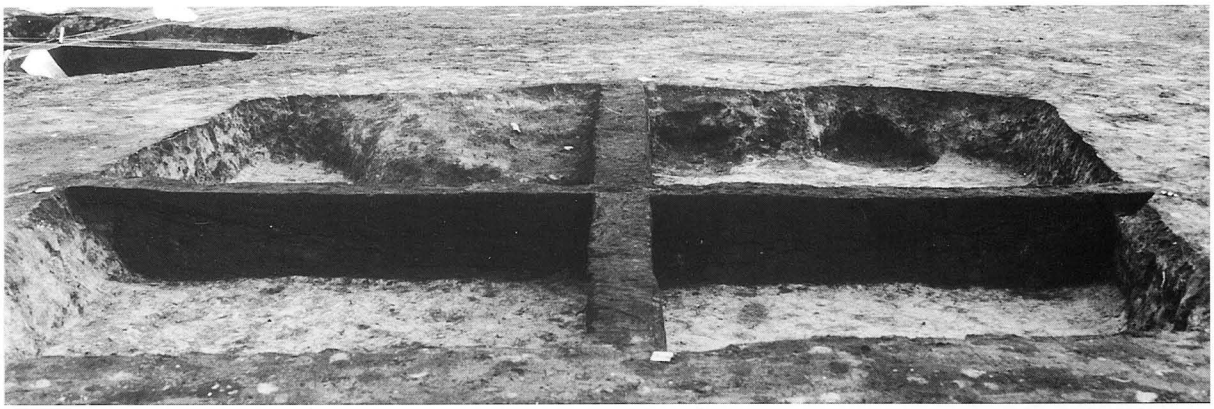
調査区北側古墳検出状況（東から）

調査区南東側竪穴住居群（北から）

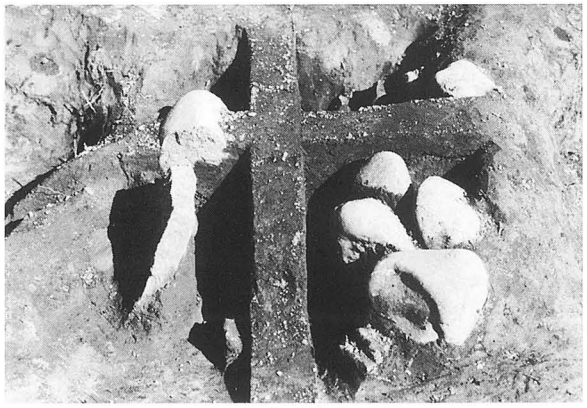
写真図版１　調査区の状況



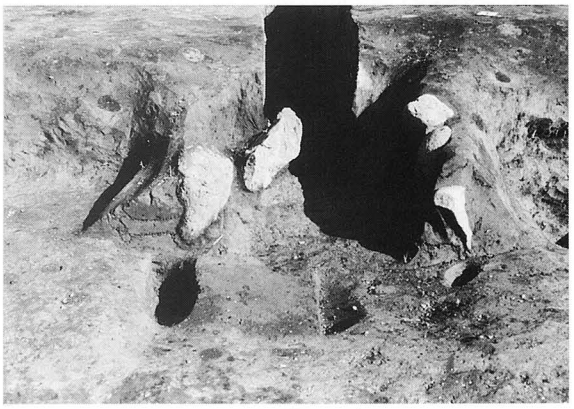
完掘（西から）



堆積土断面（西から）



カマド断面（西から）

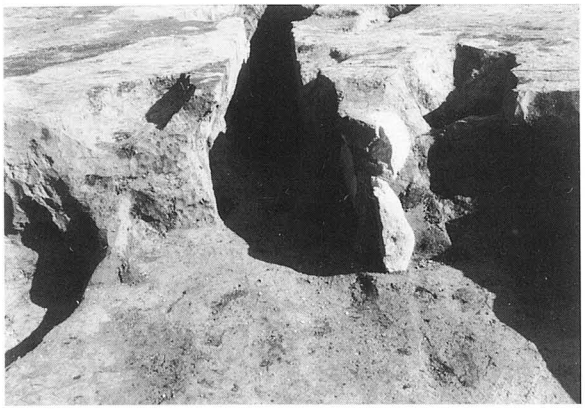


カマド（西から）

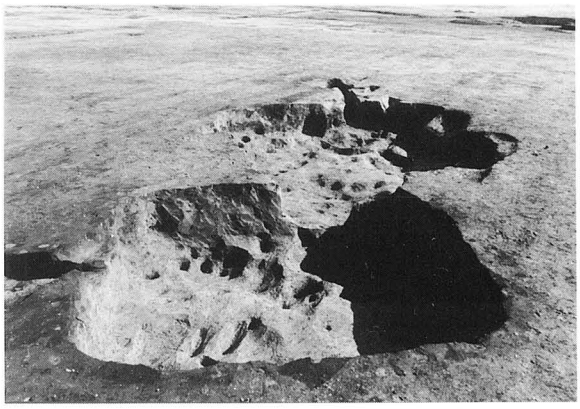
写真図版２　RA028

完掘（西から）

堆積土断面（南から）

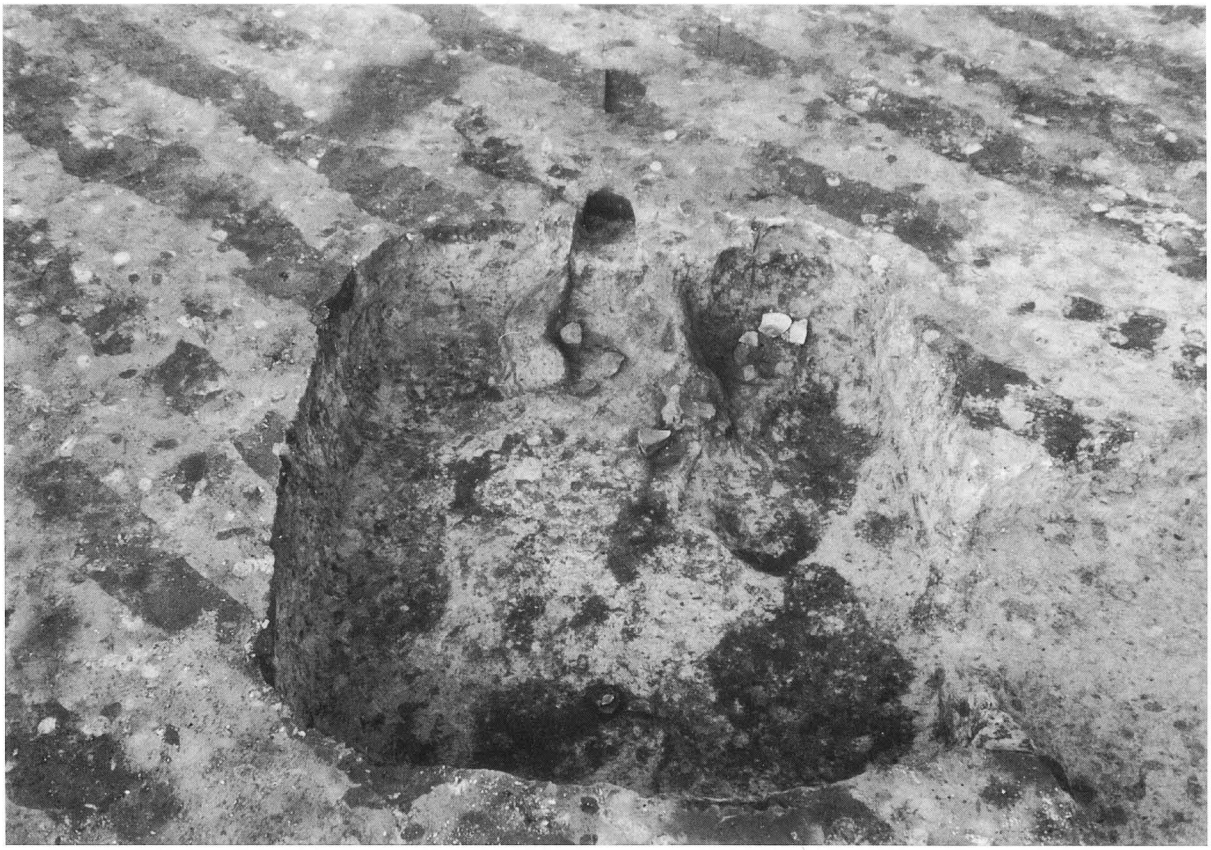


カマド（西から）

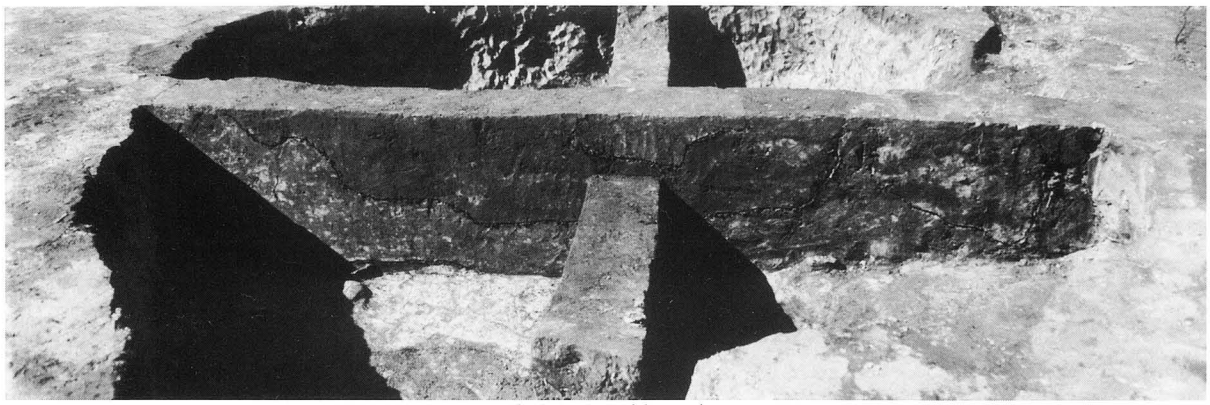


床面除去（RA029・030　西から）

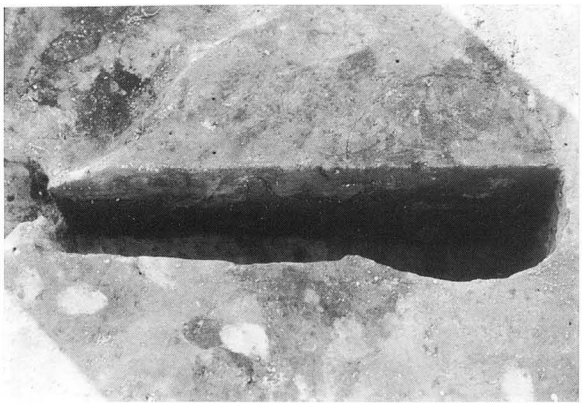
写真図版３　RA029



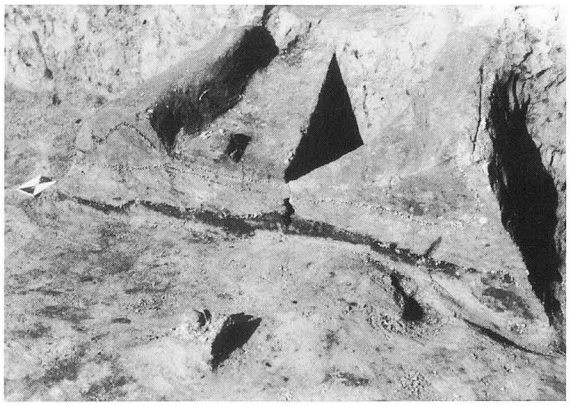
完掘（南から）



堆積土断面（東から）



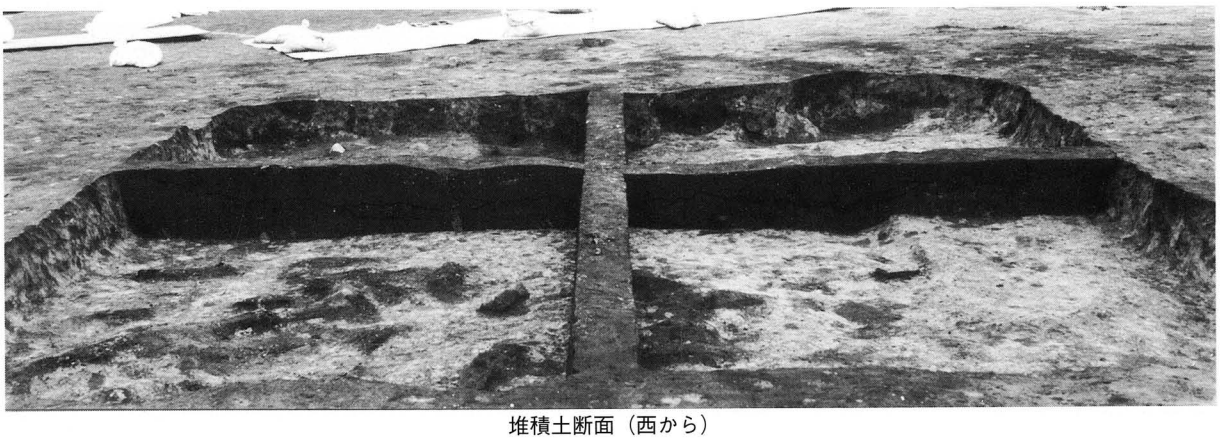
煙道断面（東から）



カマド断面（南から）

写真図版４　RA030

完掘（西から）



堆積土断面（西から）

煙道断面（南から）

カマド（南西から）

写真図版５　RA031

完掘（西から）

堆積土断面（南から）

煙道断面（南から）

カマド断面（西から）

写真図版６　RA032

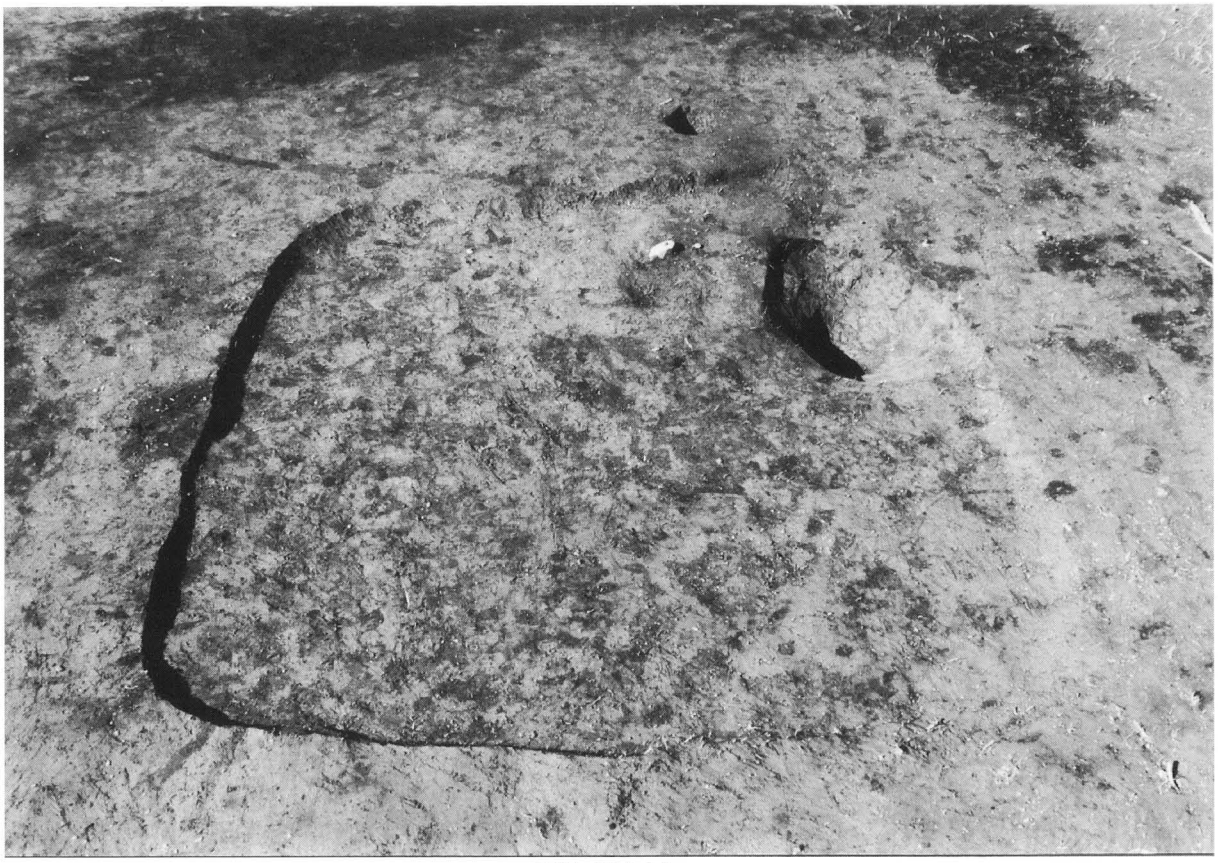
完掘（南東から）

堆積土断面（南西から）

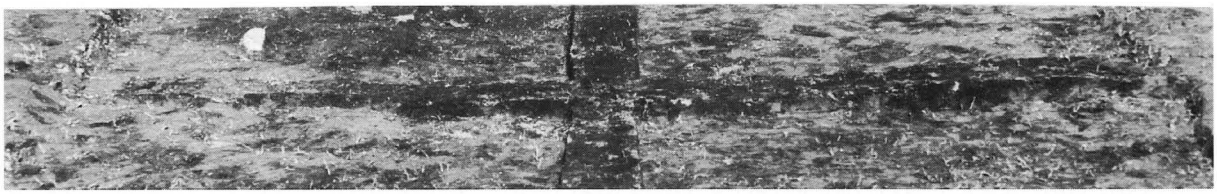
カマド断面（西から）

遺物出土状況（東から）

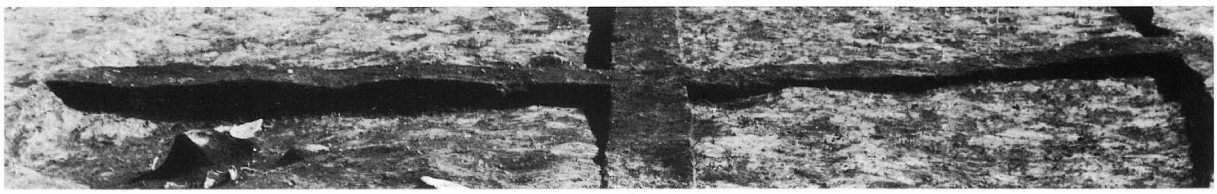
写真図版７　RA033



完掘（東から）



堆積土断面（南から）



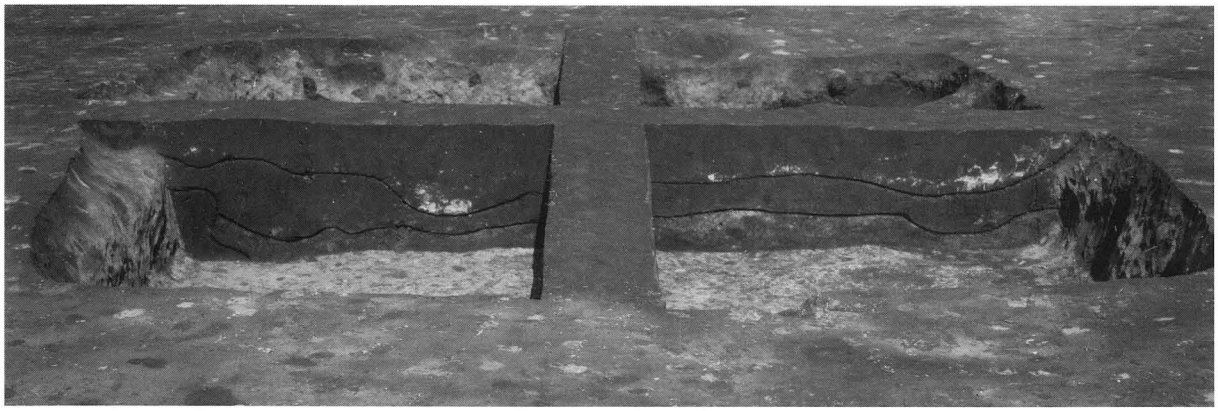
堆積土断面（西から）

焼土たちわり（南から）

Pit1 断面（南から）

写真図版８　RA034

完掘（西から）

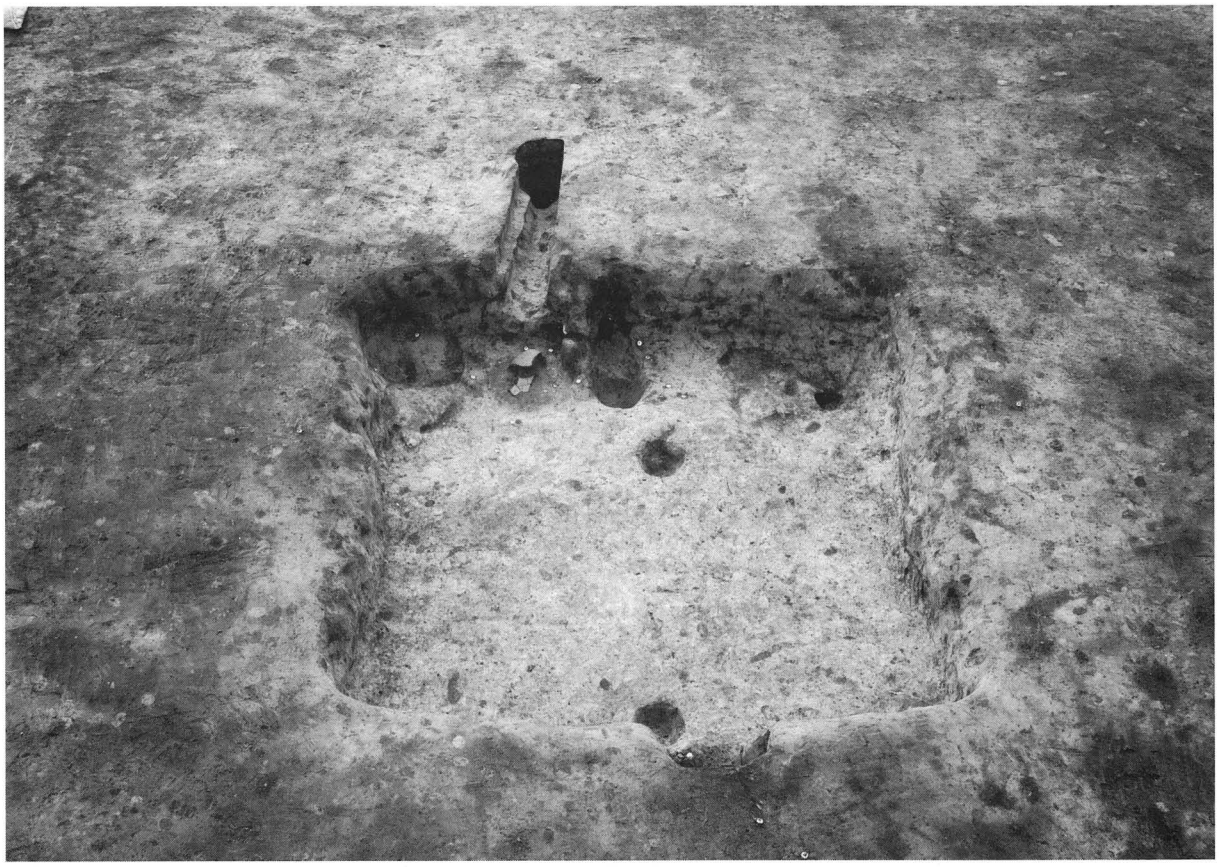


堆積土断面（南から）

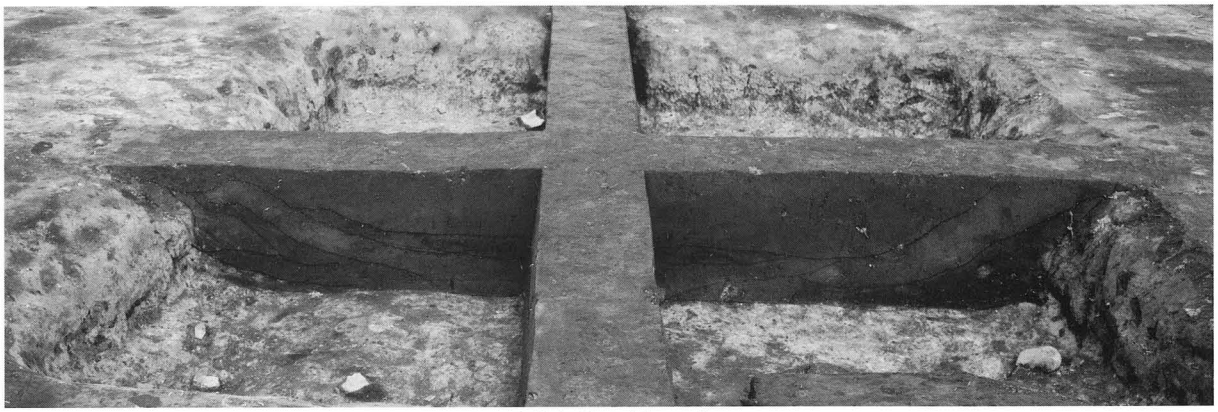
煙道断面（北から）

焼土たちわり（北から）

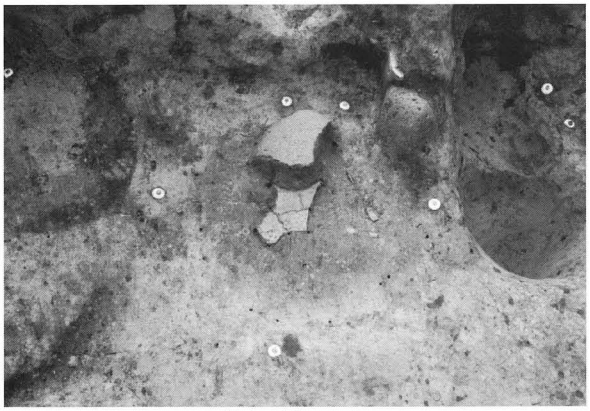
写真図版９　RA035



完掘（北から）



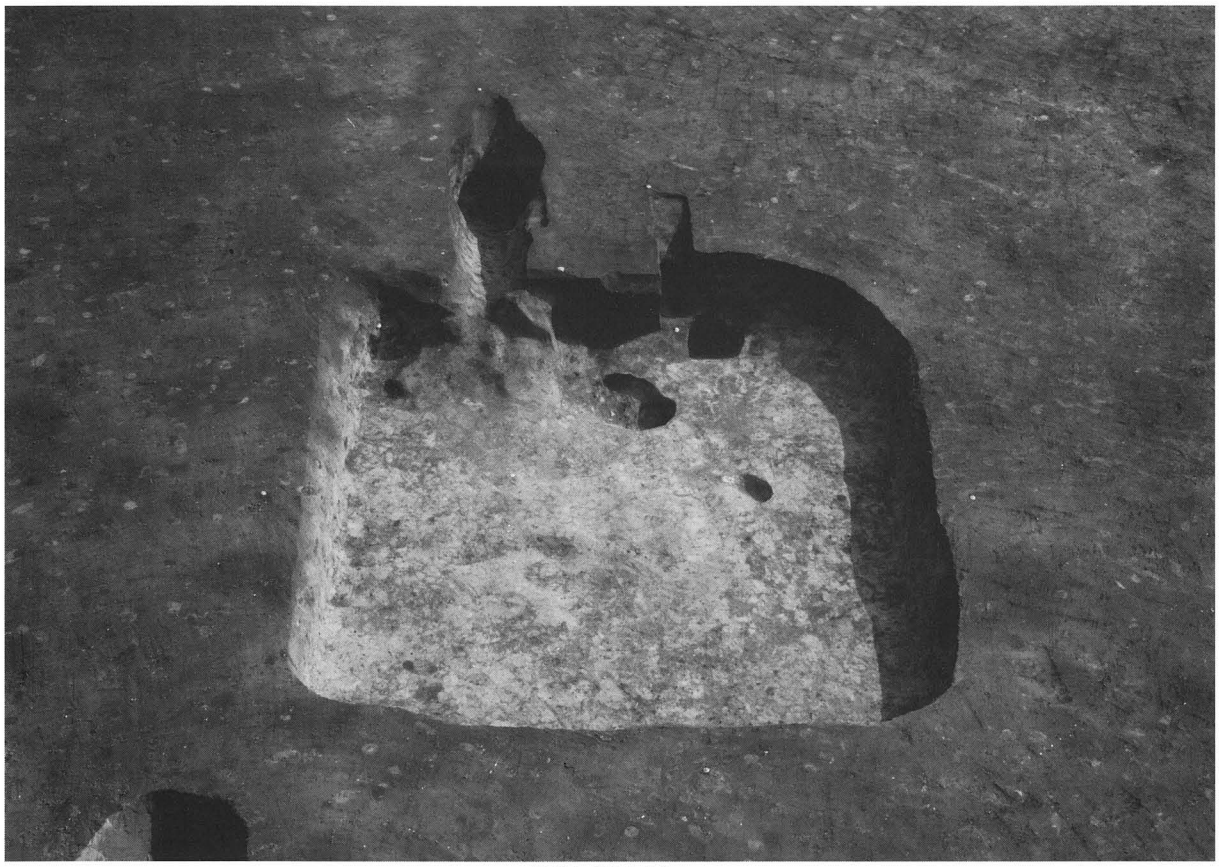
堆積土断面（南から）



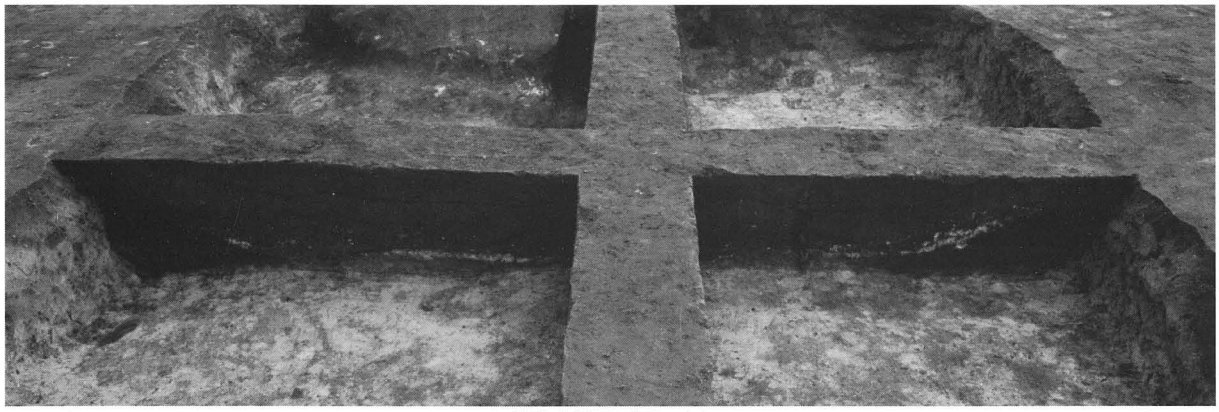
焼土（北から）

遺物出土状況（東から）

写真図版１０　RA036



完掘（西から）

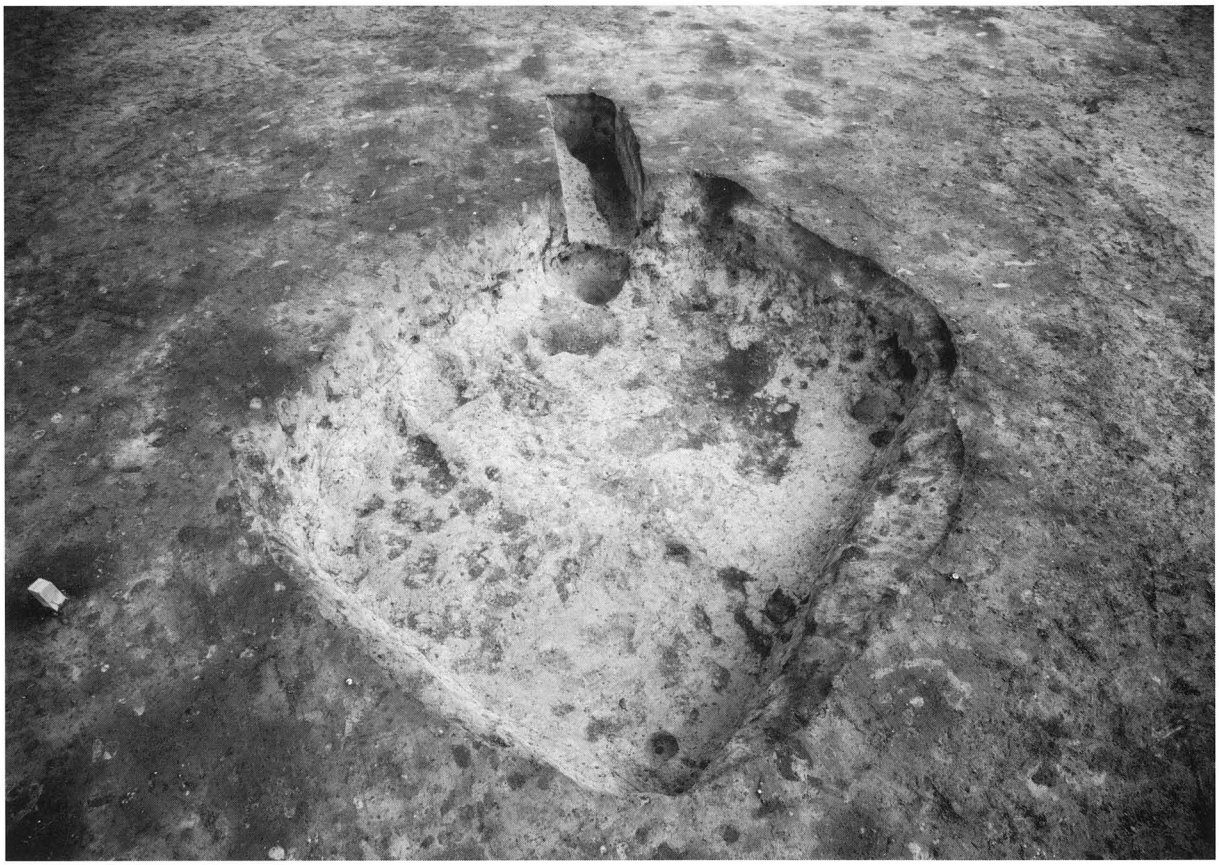


堆積土断面（西から）

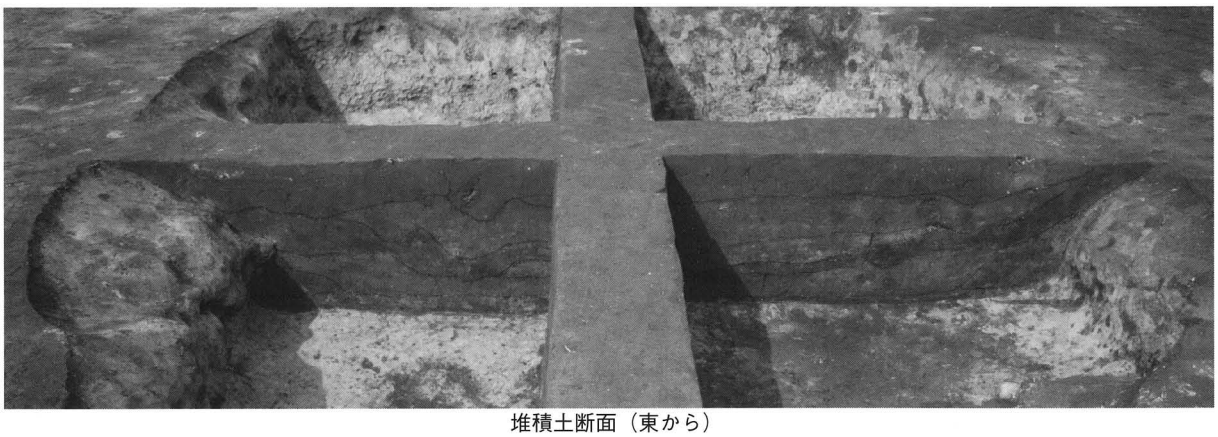
カマド掘り方（西から）

煙道断面（南から）

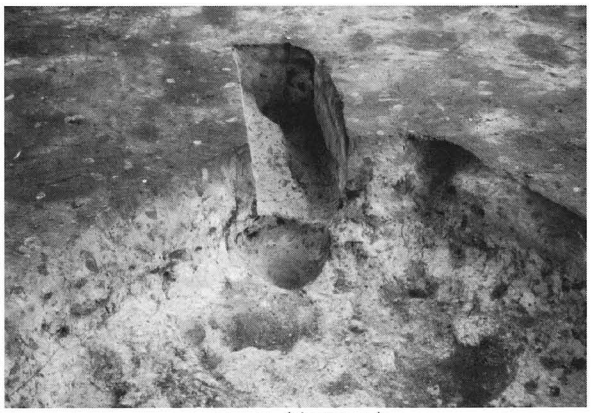
写真図版 11　RA037



完掘（南西から）



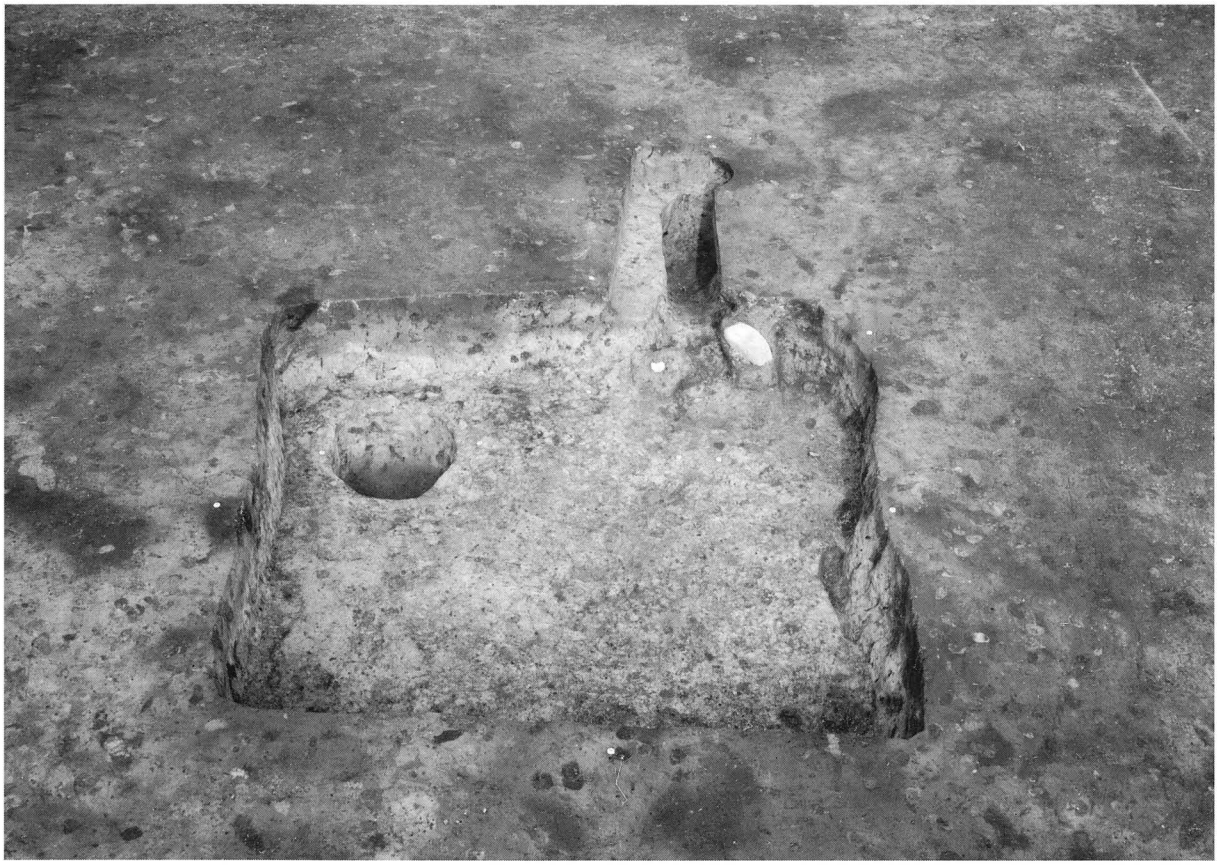
堆積土断面（東から）



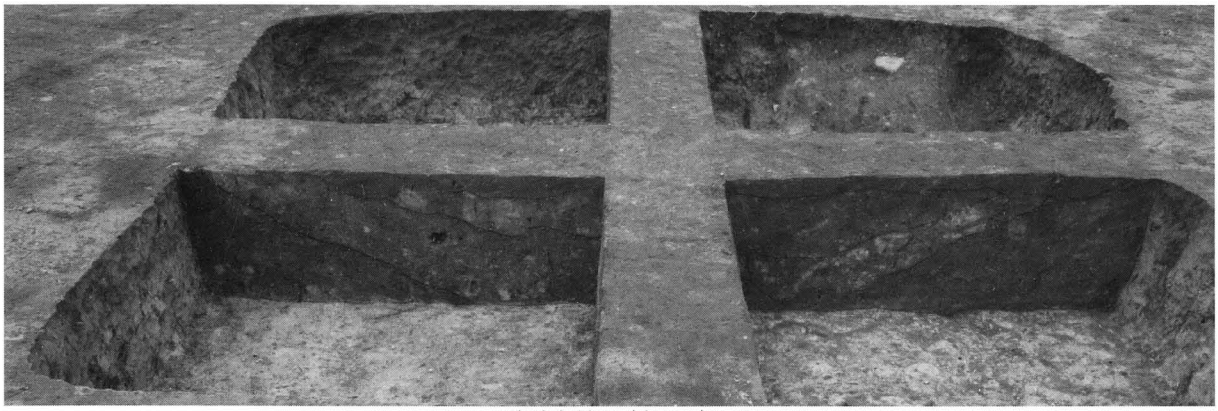
カマド（南西から）

カマド断面（南西から）

写真図版１２　RA038



完掘（南から）



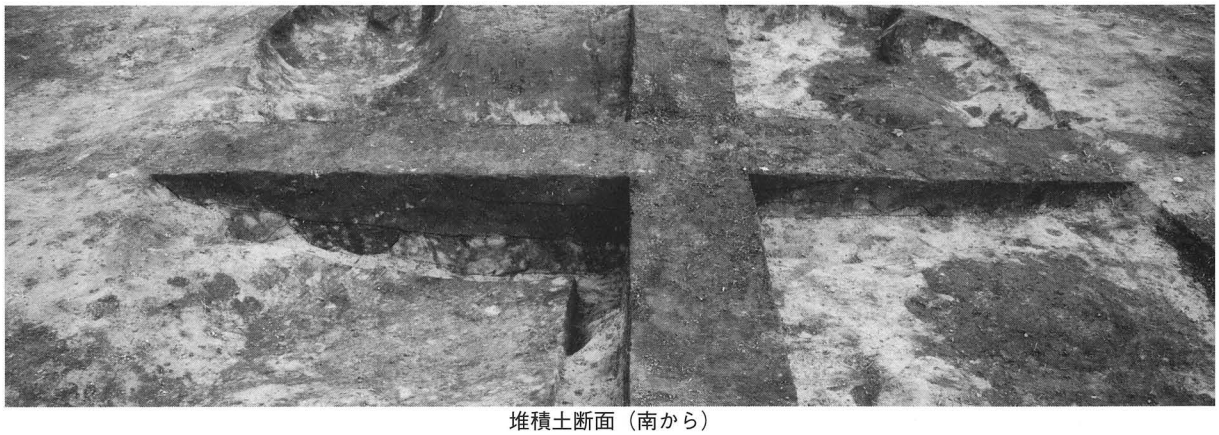
堆積土断面（南から）

煙道断面（西から）

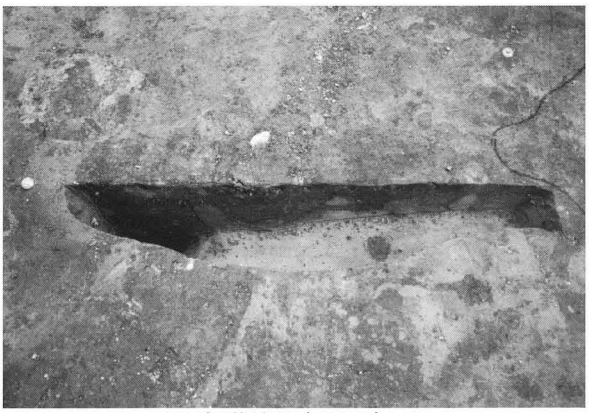
カマドたちわり（南から）

写真図版 13　RA039

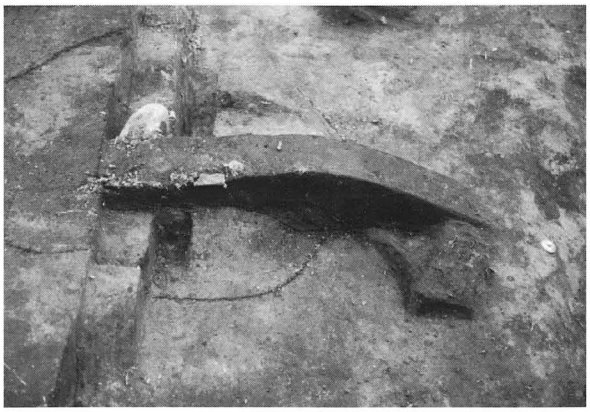
完掘（南から）



堆積土断面（南から）

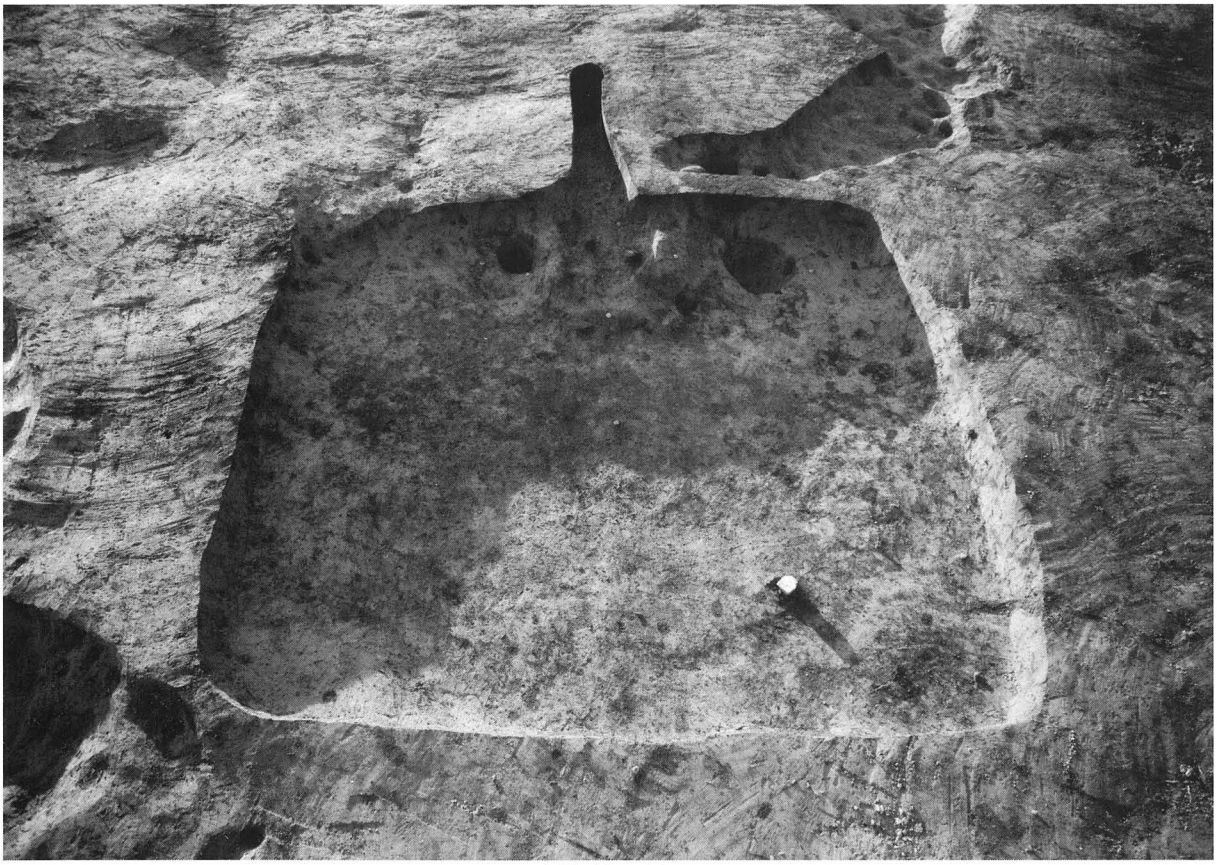


煙道断面（西から）

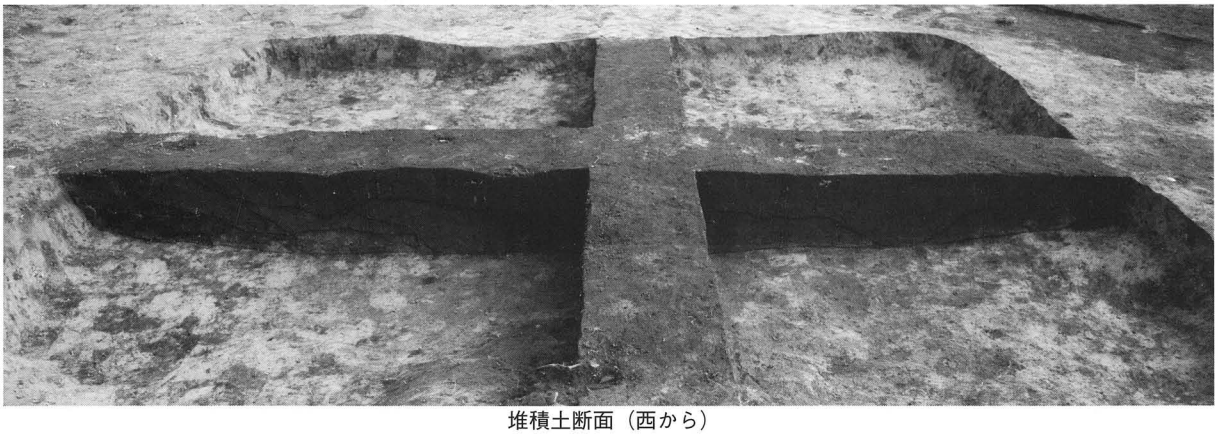


カマド断面（西から）

写真図版１４　RA040



完掘（東から）

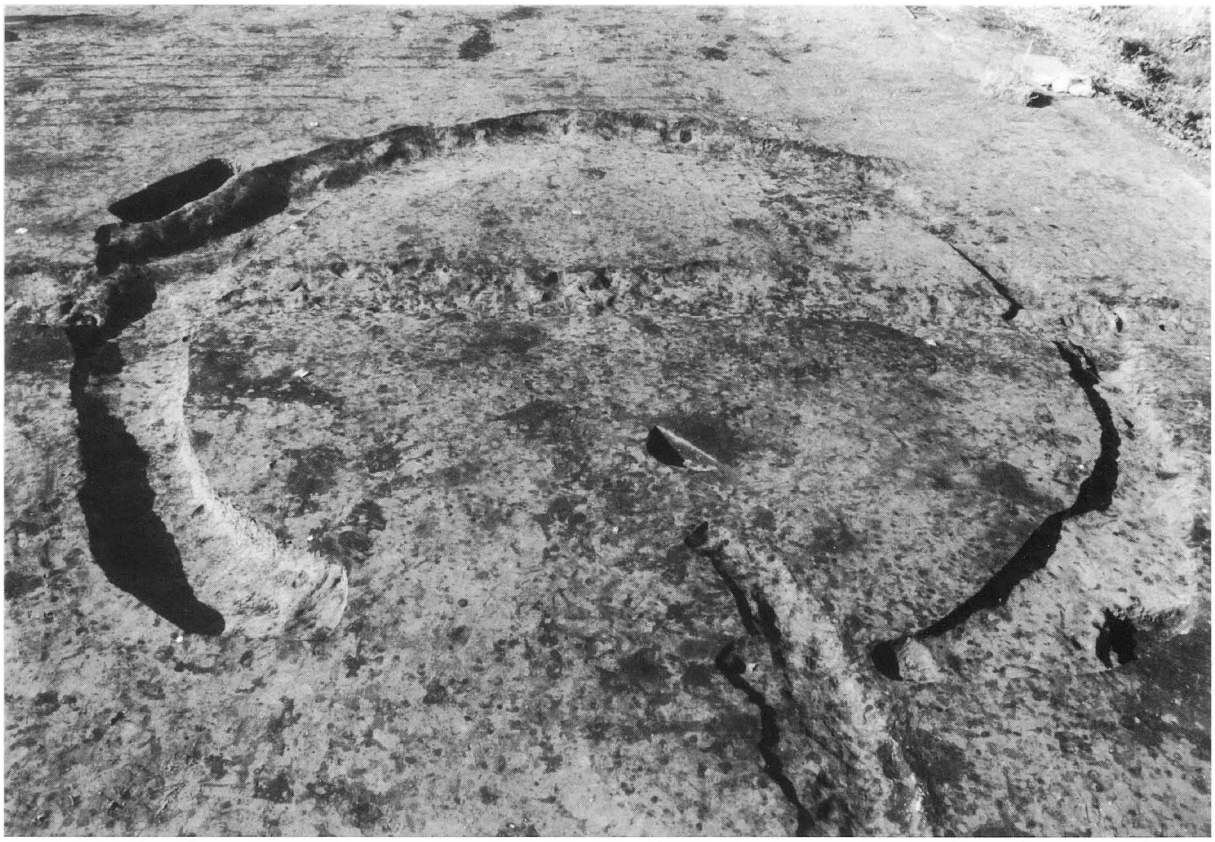


堆積土断面（西から）

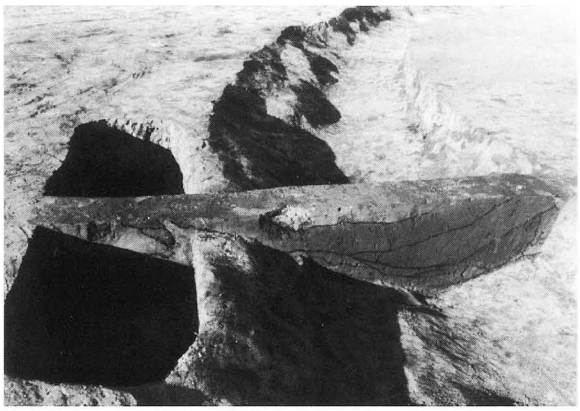
カマド（東から）

カマド断面（東から）

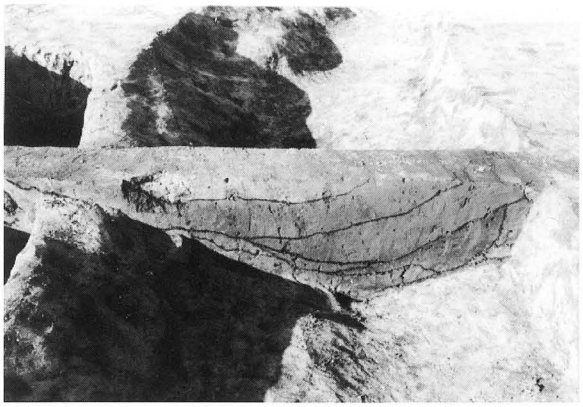
写真図版１５　RA041



完掘（東から）



RZ014・RD116 断面（南から）



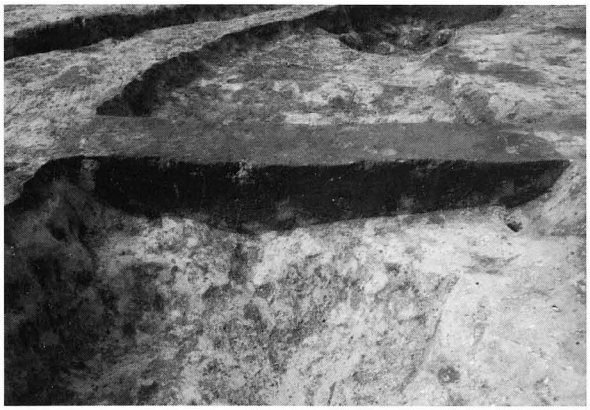
RZ014 断面拡大（南から）

検出状況（東から）

第７次調査区（北から）

写真図版 16　RZ014

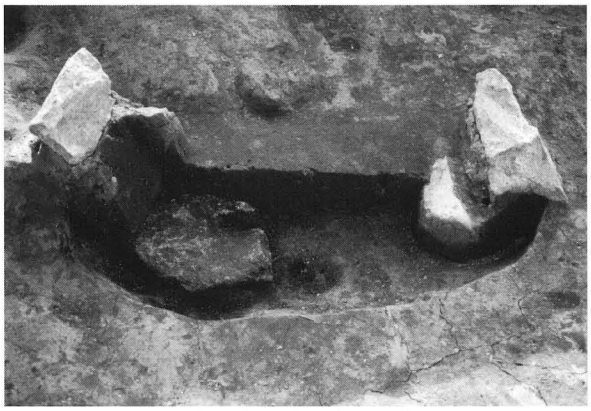
完掘（東から）



断面Ａ（東から）

断面Ｂ（東から）

付属土坑完掘（西から）

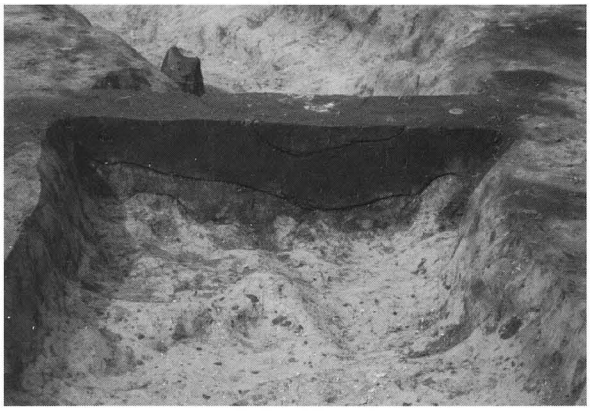


付属土坑断面（北から）

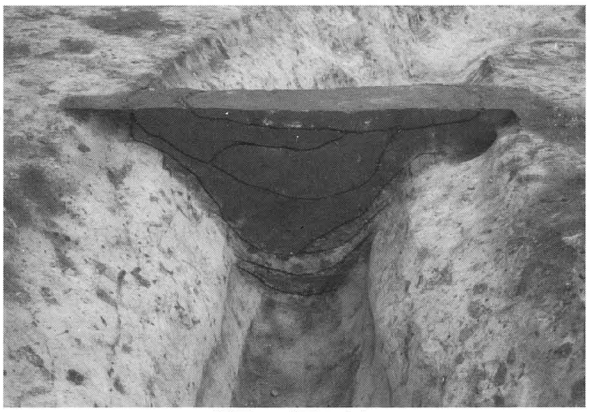
写真図版１７　RZO１７

完掘（東から）

断面Ｄ（南から）



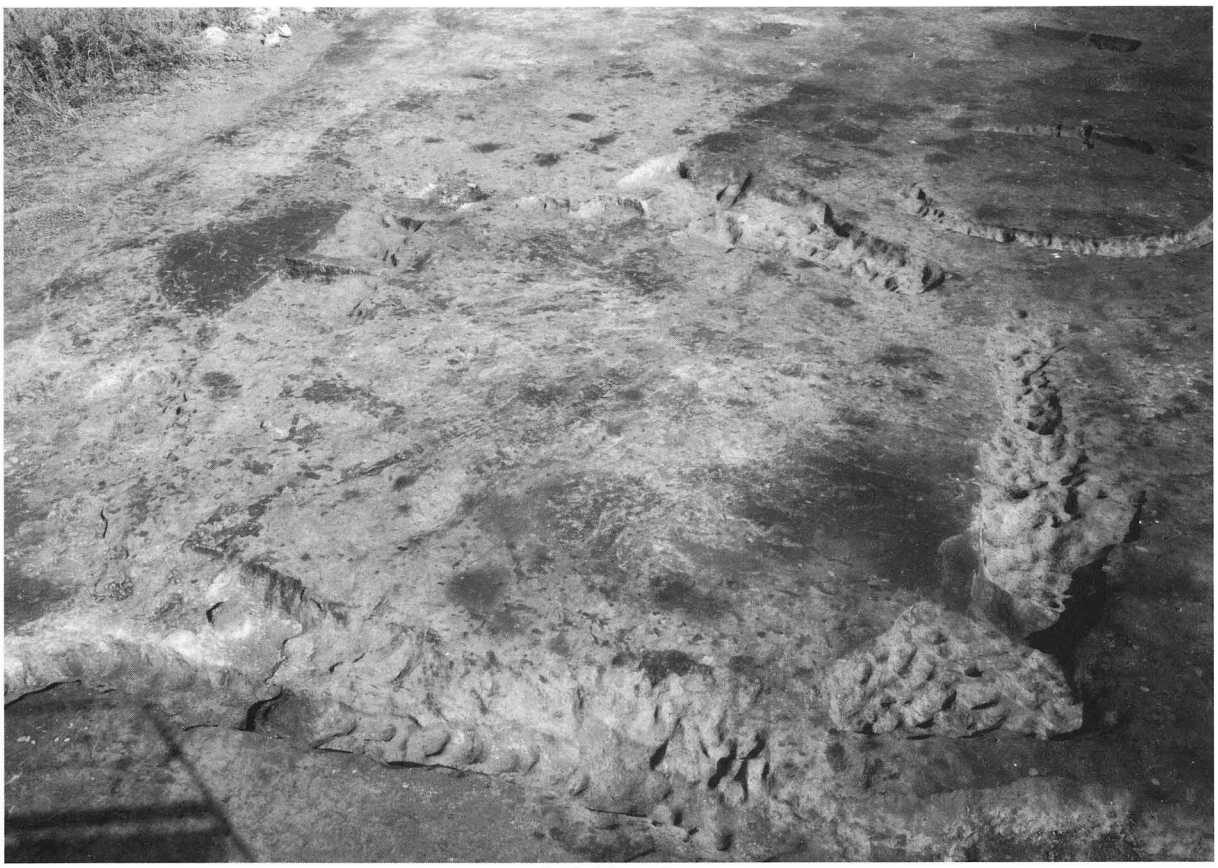
断面Ｂ（東から）



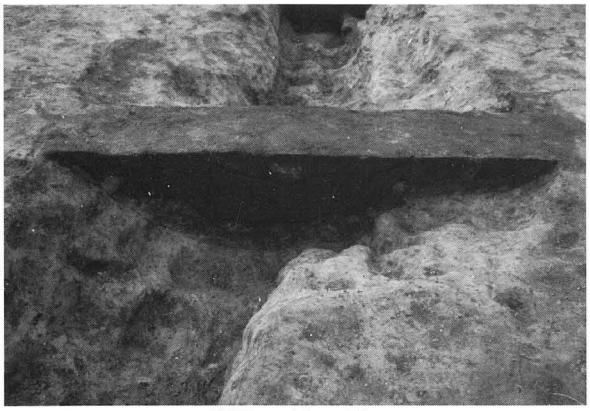
断面Ｃ（西から）

検出状況（東から）

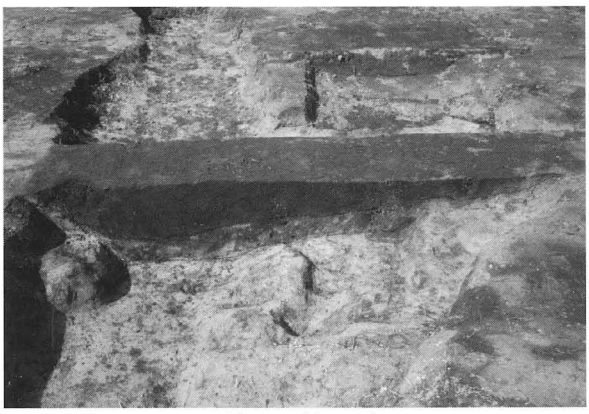
写真図版１８　RZ018



完掘（南から）



断面Ｄ（東から）



断面Ｂ（東から）

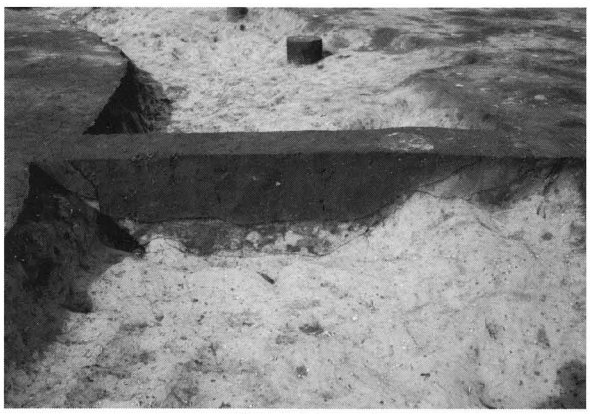
遺物出土状況（東から）

平成 18 年度調査開始状況

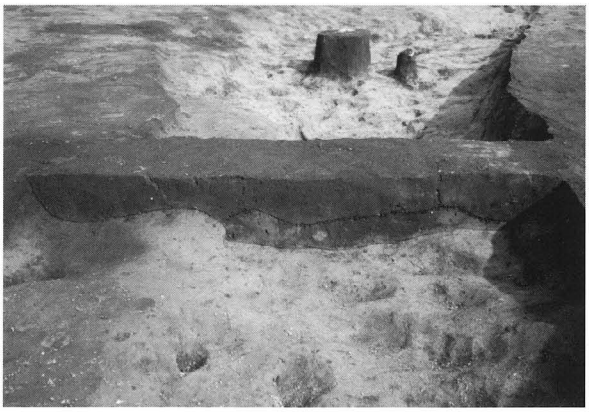
写真図版 19　RZ020

完掘（東から）

断面Ａ（東から）



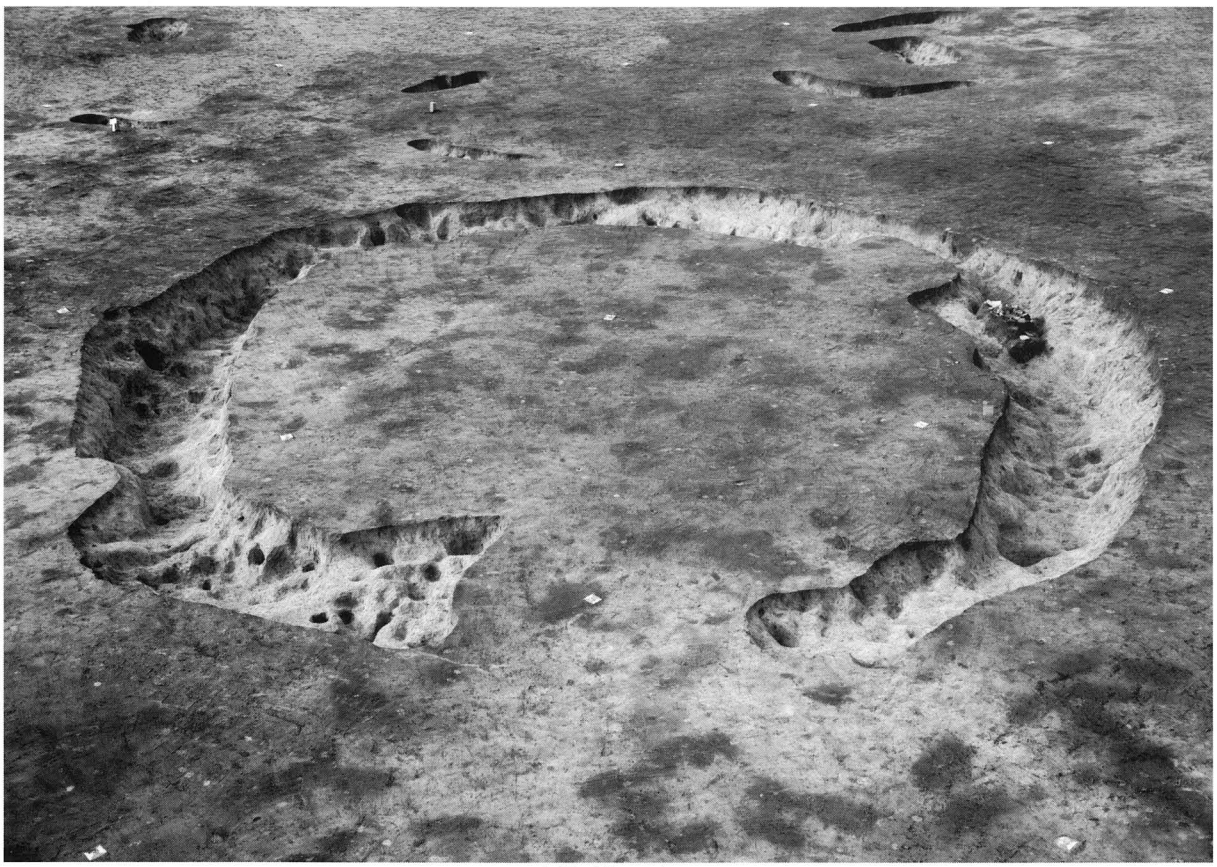
断面Ｂ（東から）



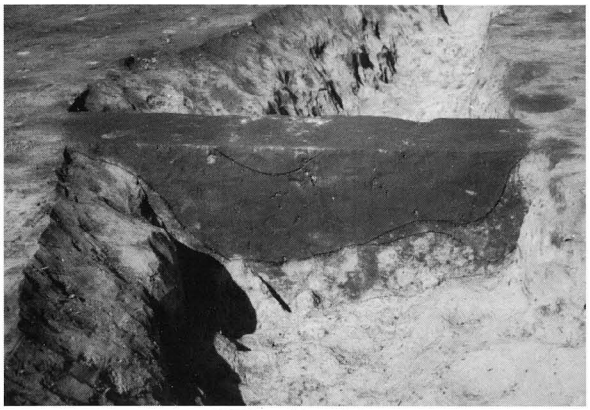
断面Ｃ（南から）

作業風景

写真図版 20　RZ022

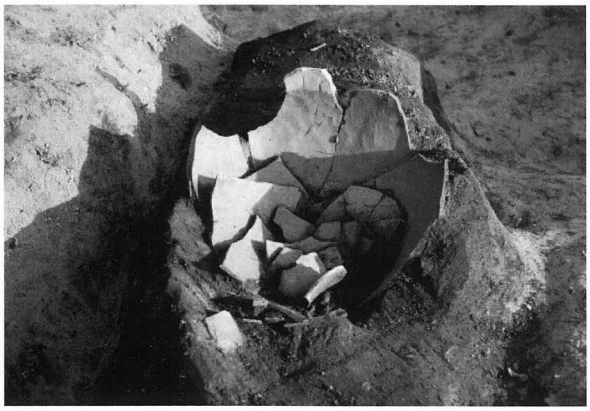


完掘（東から）

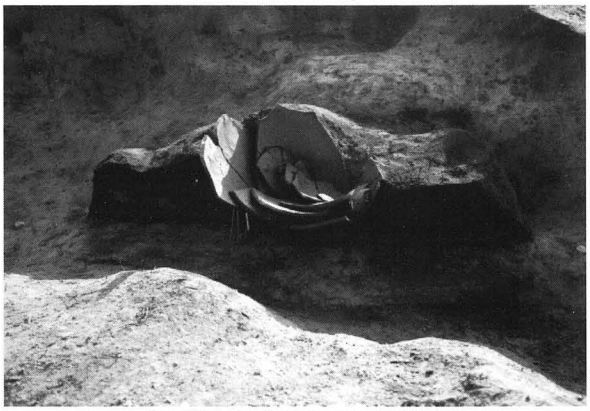


断面Ａ（東から）

断面Ｂ（東から）



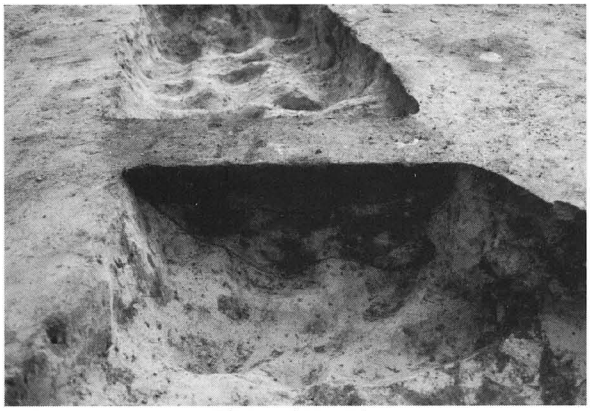
須恵器大甕（157）出土状況（1）



須恵器大甕（157）出土状況（2）

写真図版 21　RZ023

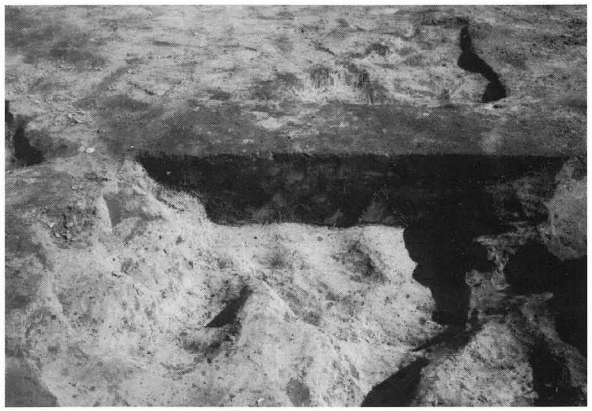
完掘（北西から）



断面Ｄ（西から）

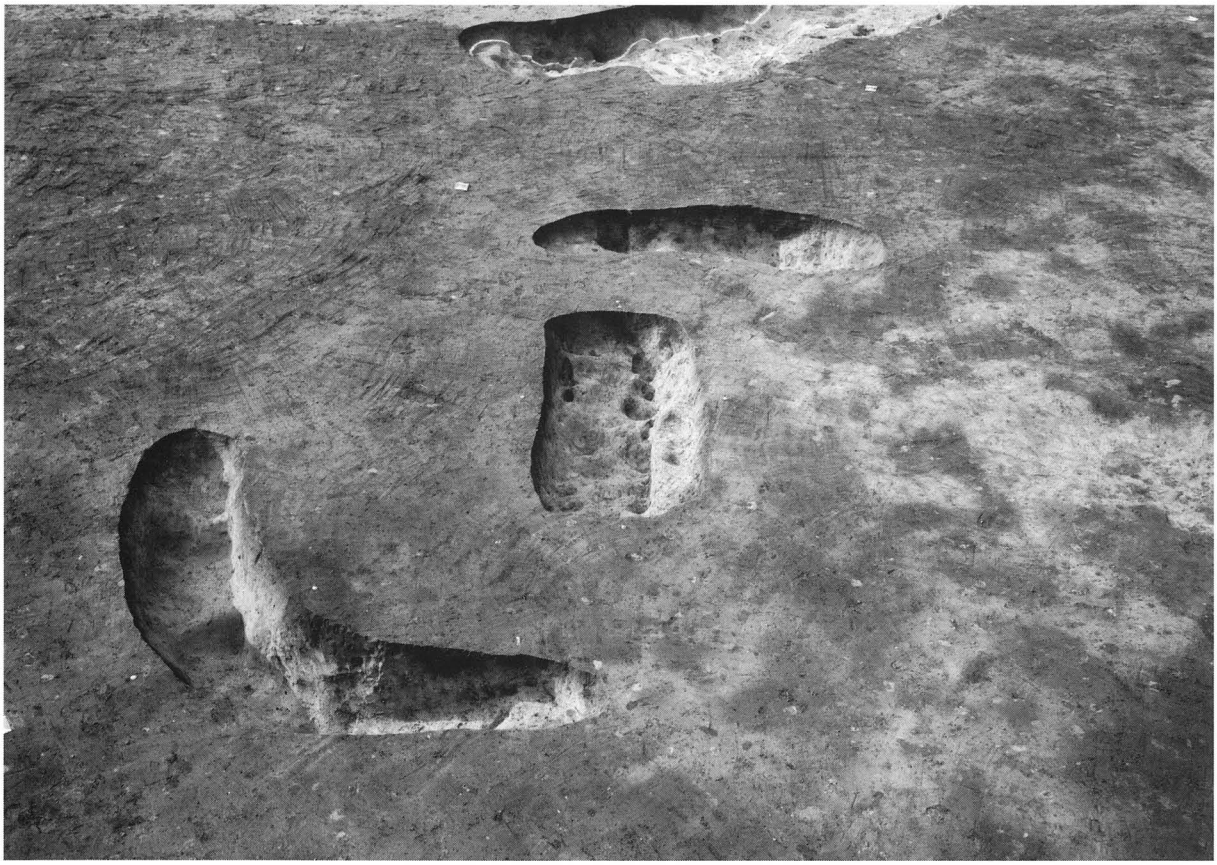
断面Ａ（南から）

断面Ｂ（南から）



断面Ｃ（西から）

写真図版 22　RZ024・025

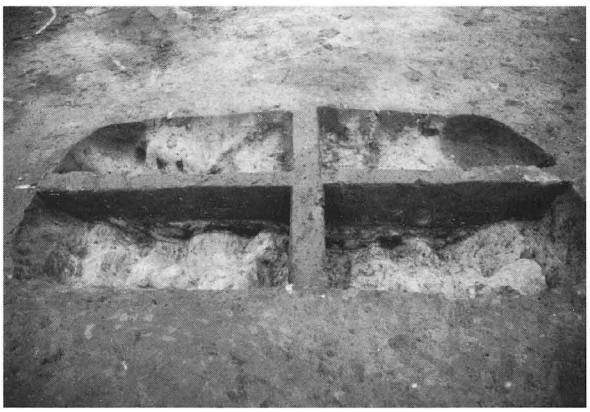


完掘（東から）

断面 A（南から）

断面 B（南西から）

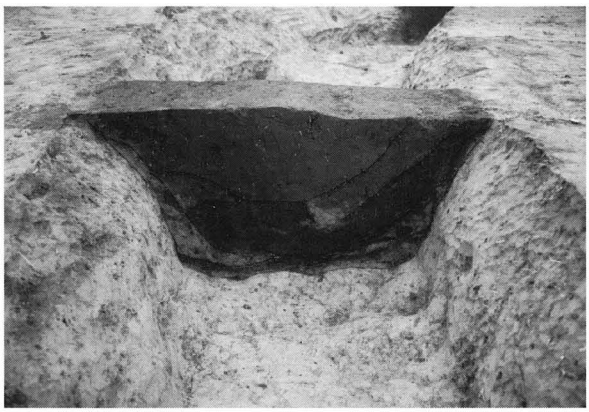
埋葬施設（西から）



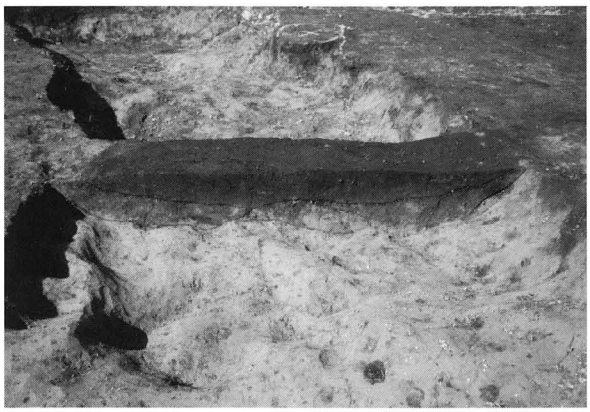
埋葬施設断面（南から）

写真図版 23　RZ026

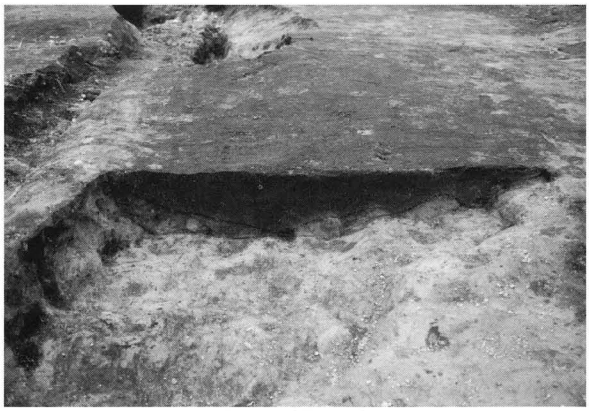
完掘（東から）



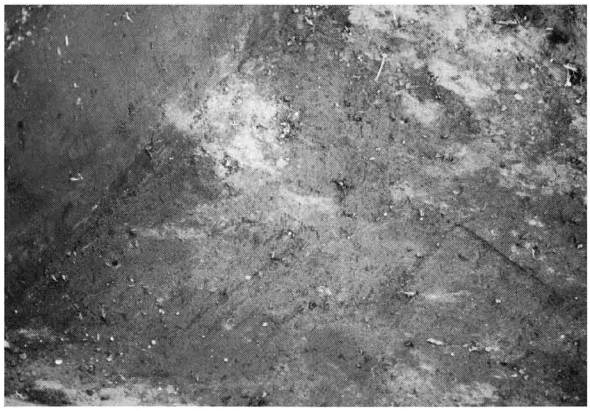
断面Ａ（東から）



断面Ｂ（東から）

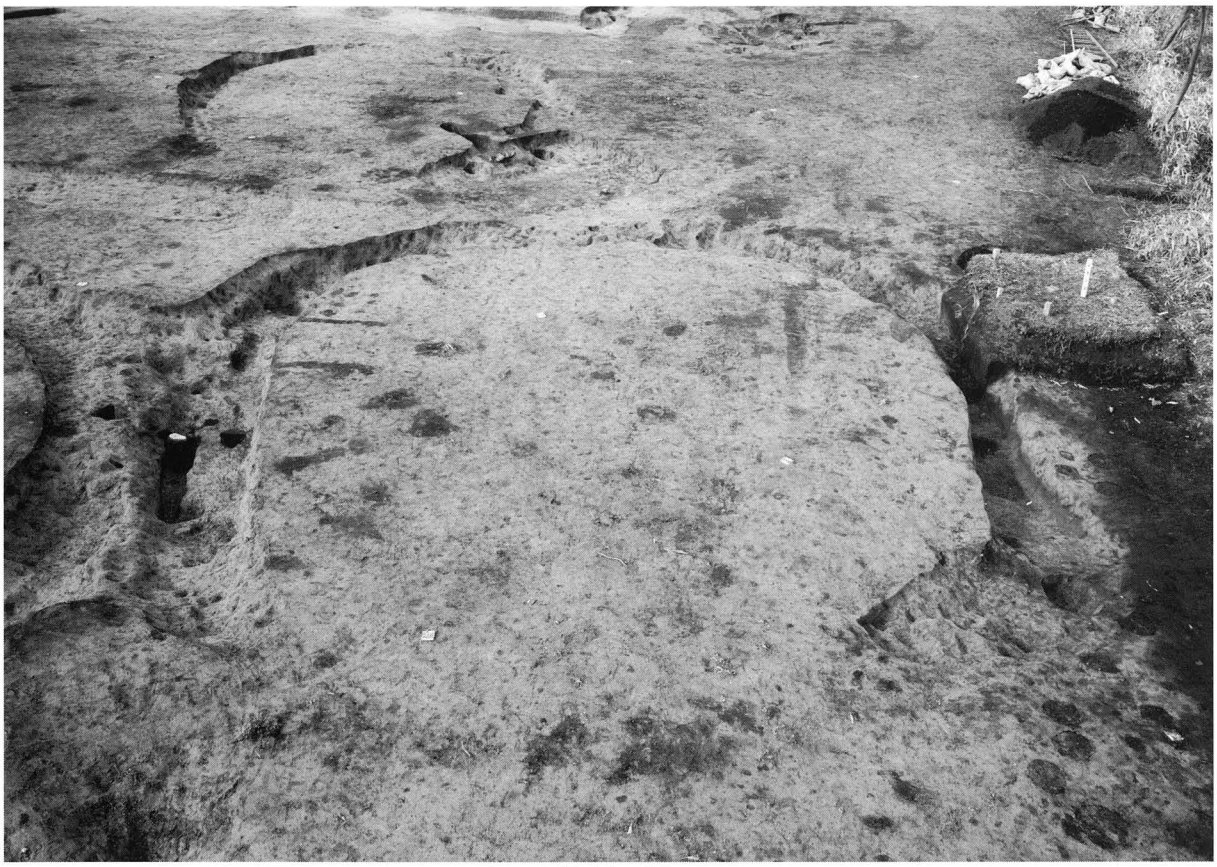


断面Ｃ（北から）

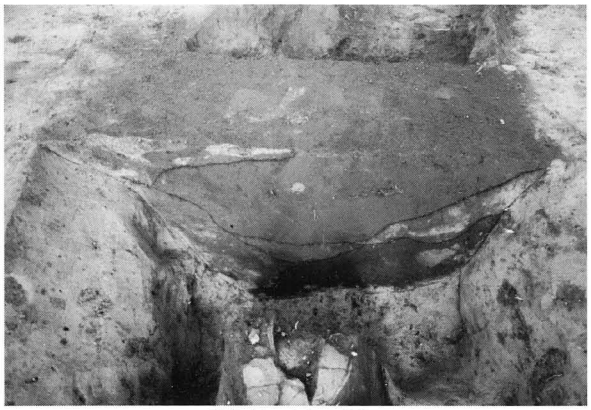


焼土検出状況（南から）

写真図版 24　RZ028



完掘（東から）



断面Ｄ（東から）

断面Ｂ（東から）

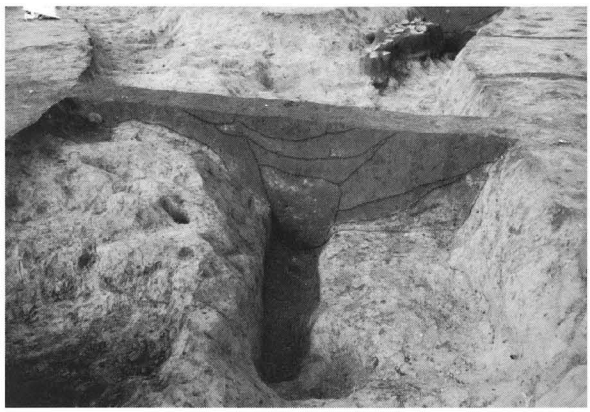
付属土坑断面（西から）

須恵器大甕（161）出土状況

写真図版 25　RZ030

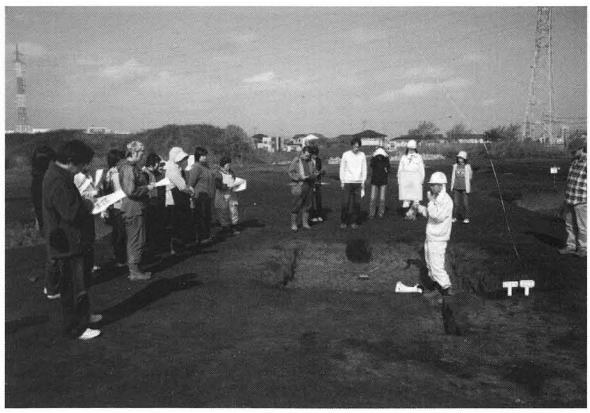
完掘（東から）

断面Ｅ（東から）



断面Ａ（東から）

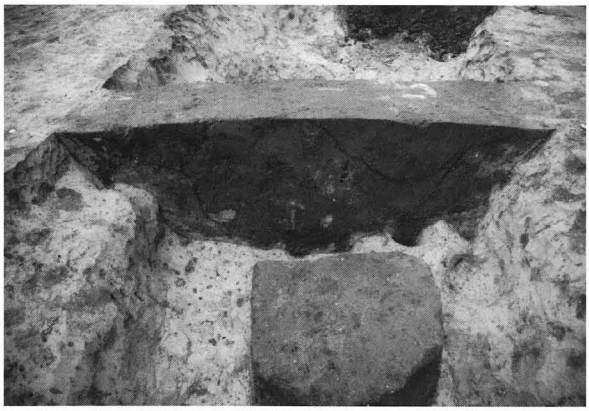
断面Ｇ（西から）



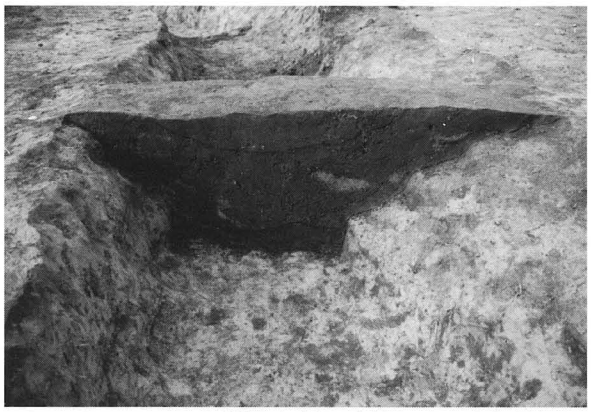
現地説明会

写真図版 26　RZ031

完掘（東から）



断面Ａ（東から）



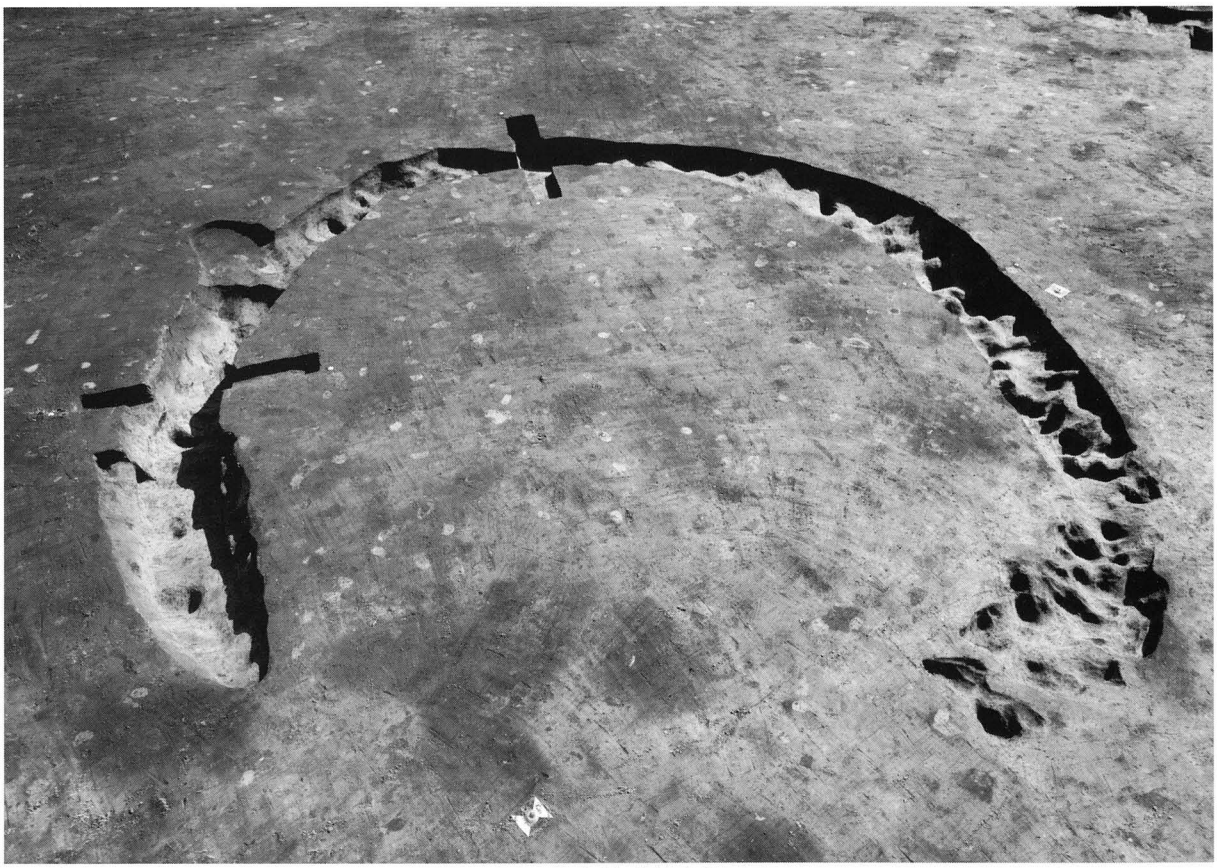
断面Ｂ（東から）

鉄鐸・刀子出土状況（南から）

土師器小甕（165）出土状況（北から）

写真図版 27　RZ032

RZ019 完掘（南から）



RZ021 完掘（西から）

写真図版 28　RZ019・021（1）

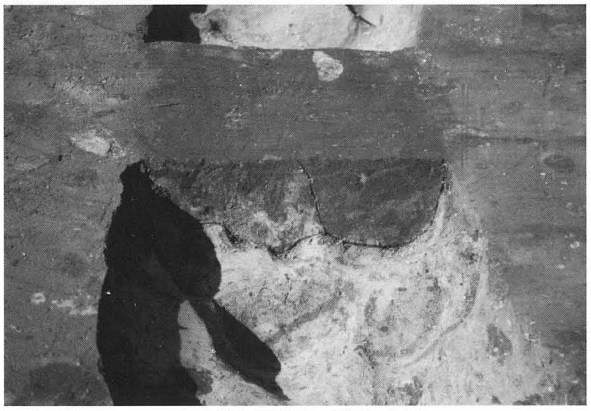
RZ027 完掘（南から）

RZ029 完掘（西から）

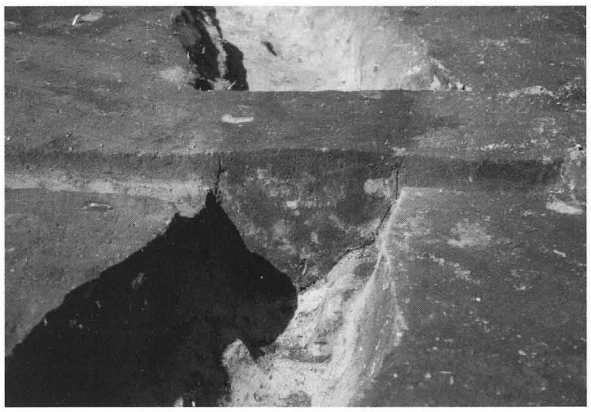
写真図版 29　RZ027・029（1）

RZ019 断面 A（南から）

RZ019 断面 D（南から）



RZ021 断面 B（南から）

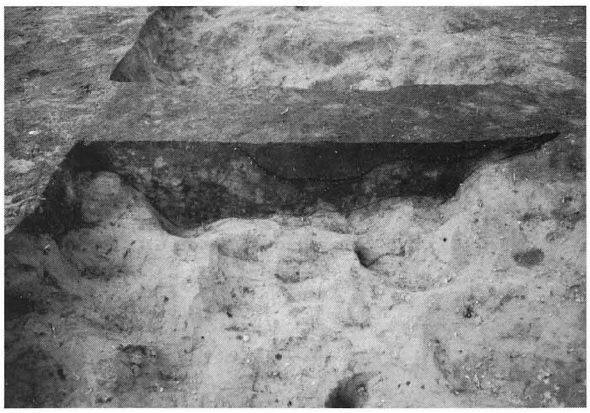


RZ021 断面 A（南から）

RZ027 断面 A（東から）

RZ027 断面 B（南から）

RZ029 断面 A（東から）

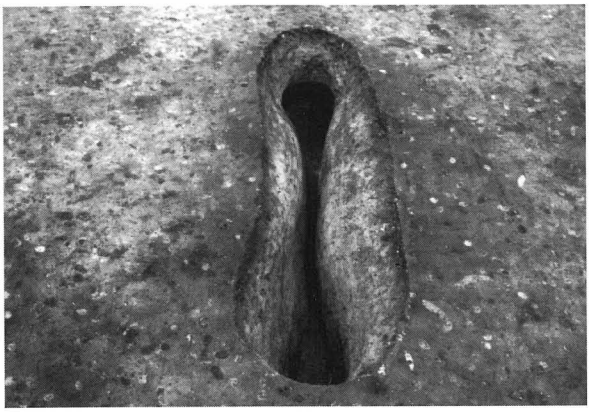


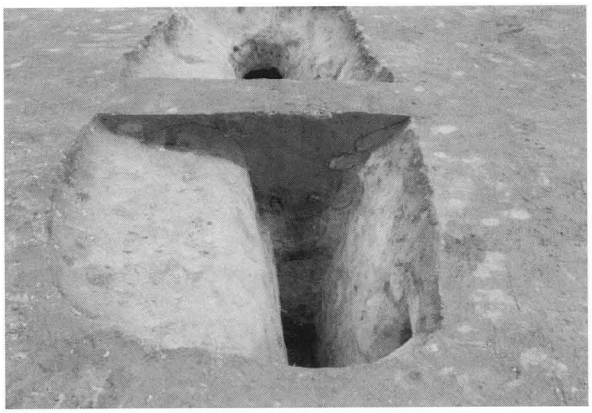
RZ029 断面 C（東から）

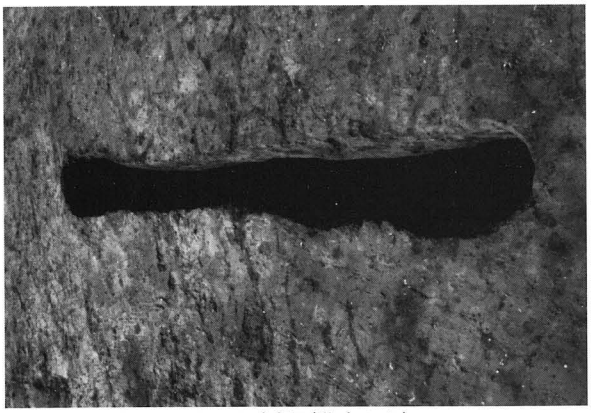
写真図版 30　RZ019・021・027・029（2）

RD104 完掘（東から）

RD104 断面（東から）

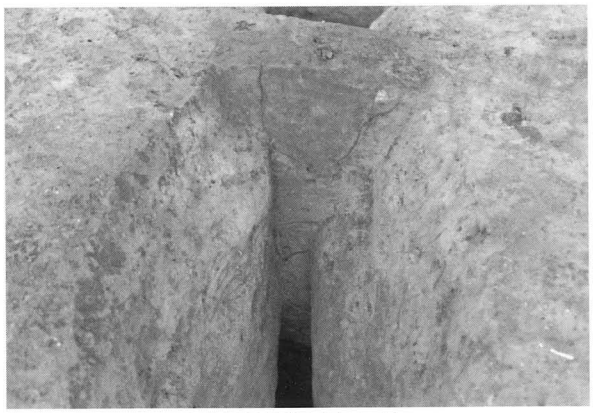

RD105 完掘（東から）


RD105 断面（東から）

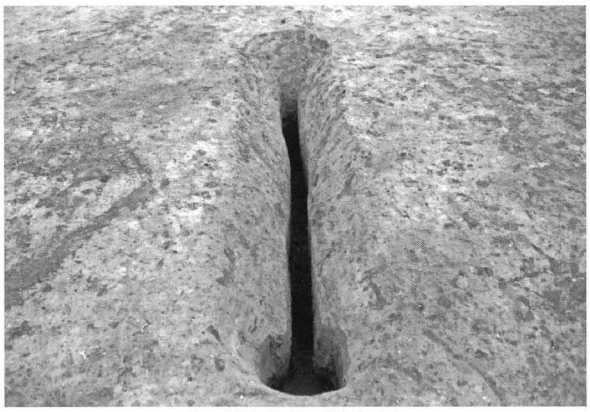

RD106 完掘（北東から）

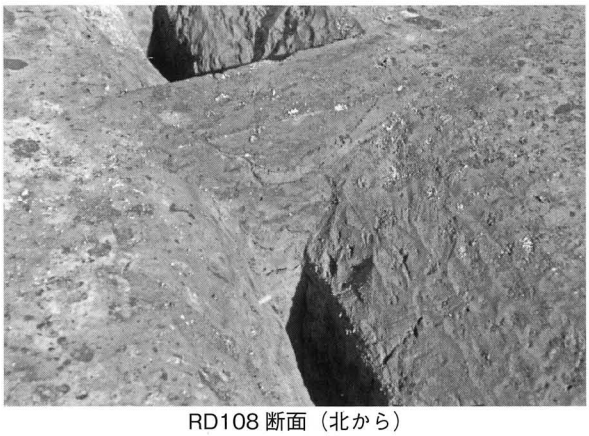
RD106 断面（北東から）

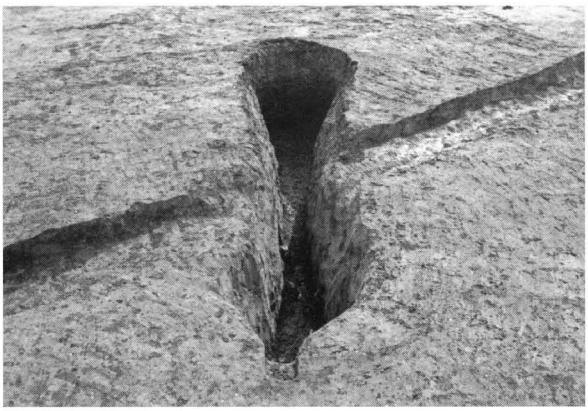
RD107 完掘（東から）


RD107 断面（東から）

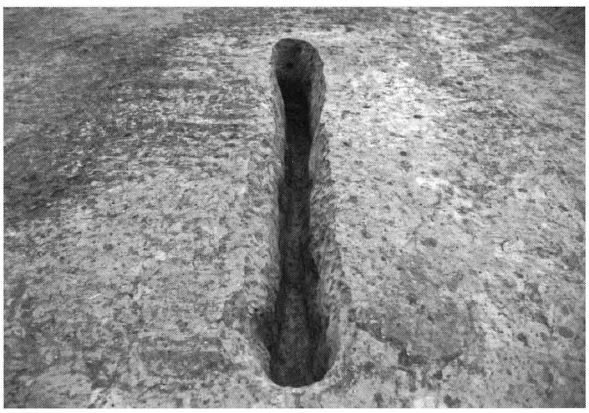
写真図版 31　RZ104 ～ 107


RD108 完掘（北から）

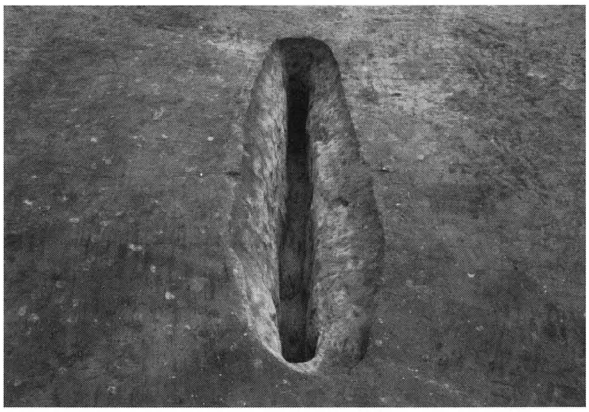

RD108 断面（北から）


RD109 完掘（東から）

RD109 断面（東から）

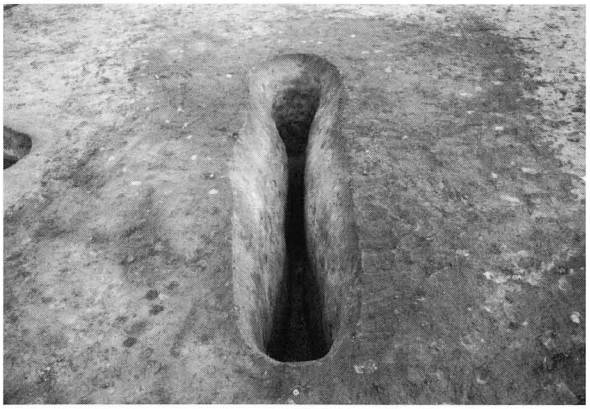

RD110 完掘（東から）

RD110 断面（東から）


RD111 完掘（西から）

RD111 断面（西から）

写真図版 32　RD108 ～ 111


RD112 完掘（西から）

RD112 断面（西から）

RD113 完掘（南東から）

RD113 断面（南東から）

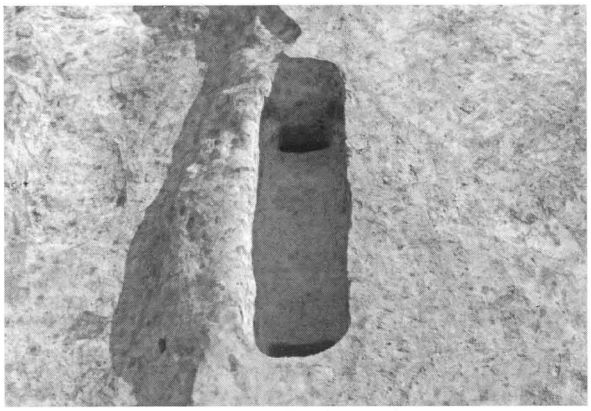
RD114 完掘（北西から）

RD114 完掘（南東から）

RD115 完掘（東から）

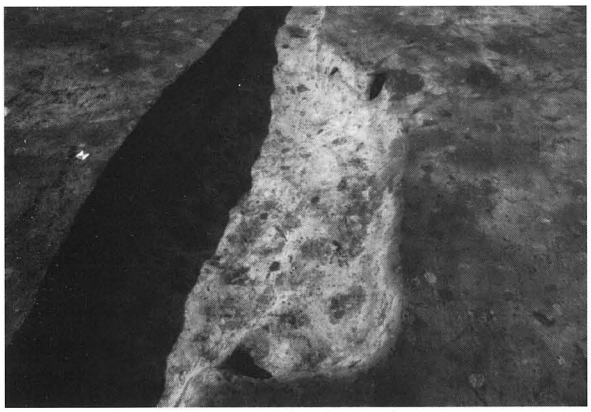
RD115 断面（東から）

写真図版 33　RD112～115

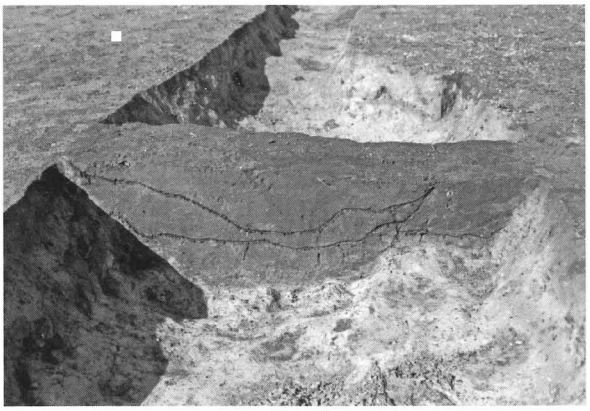


RD116 完掘（北から）

RD116 断面（南から）



RD117 完掘（西から）



RD117 断面（西から）

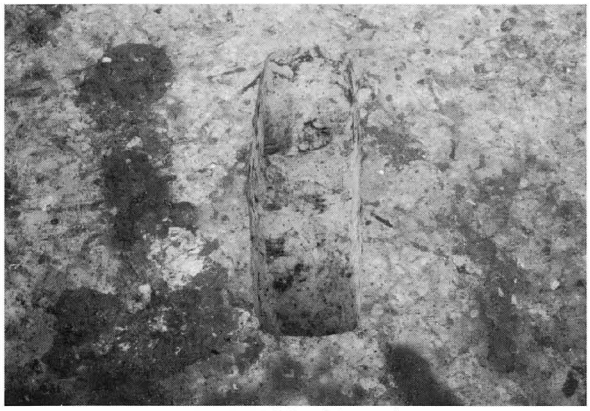
RD118 完掘（南から）

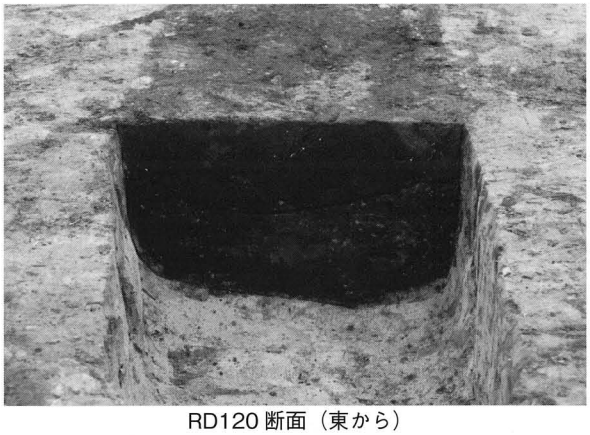
RD118 断面（南から）

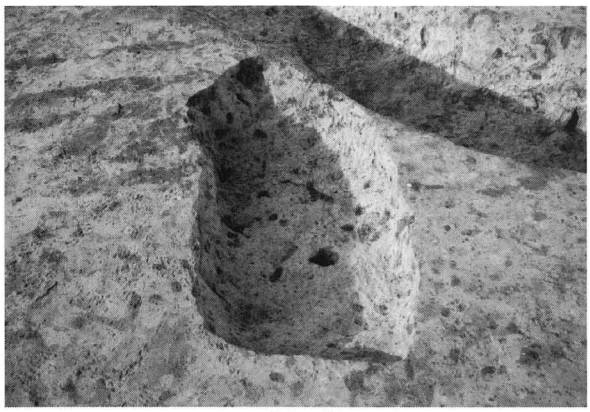
RD119 完掘（東から）

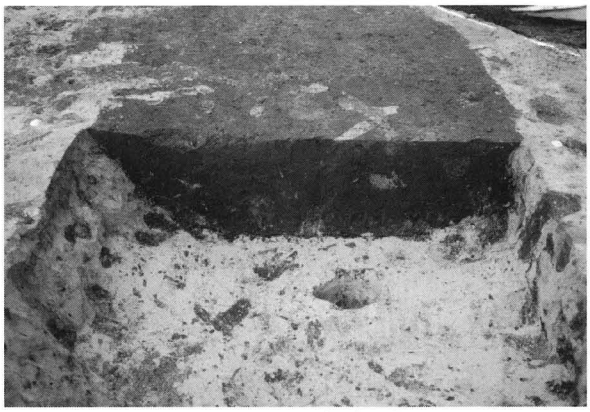
RD119 断面（東から）

写真図版 34　RD116 ～ 119


RD120 完掘（東から）


RD120 断面（東から）

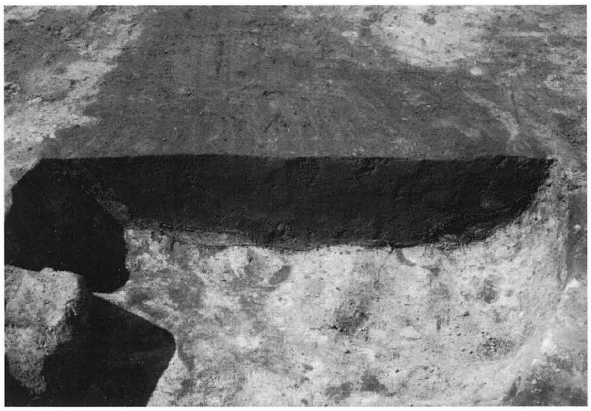

RD121 完掘（東から）


RD121 断面（東から）

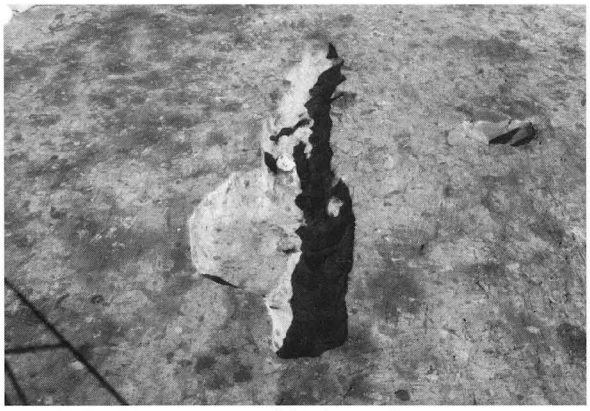
RD122 完掘（北から）

RD122 断面（北から）

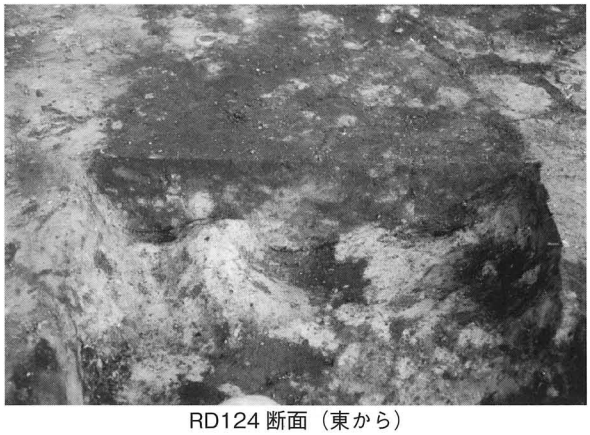
RD123 完掘（西から）


RD123 断面（東から）

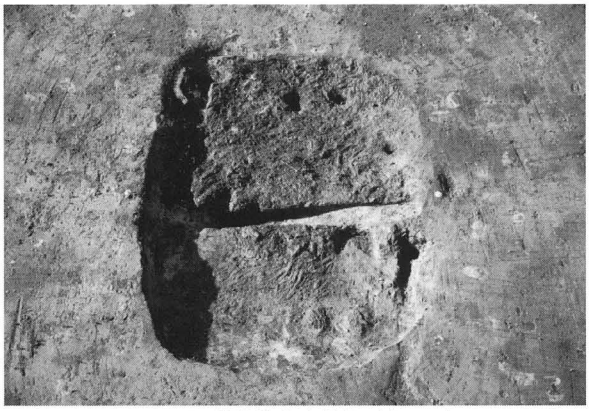
写真図版 35　RD120 ～ 123



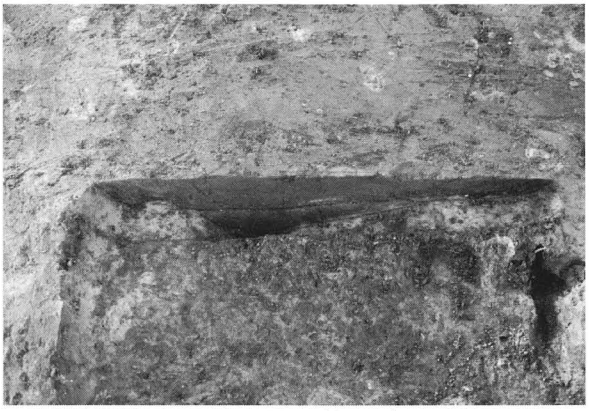
RD124 完掘（西から）



RD124 断面（東から）



RD125 炭化物出土状況（東から）



RD125 断面（東から）

RD126 完掘（西から）

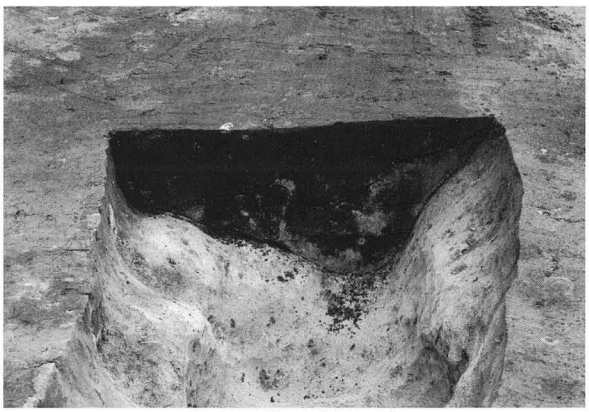
RD126 断面（東から）

RD127 完掘（東から）

RD127 断面（東から）

写真図版 36　RD124 ～ 127

RD128 完掘（南から）

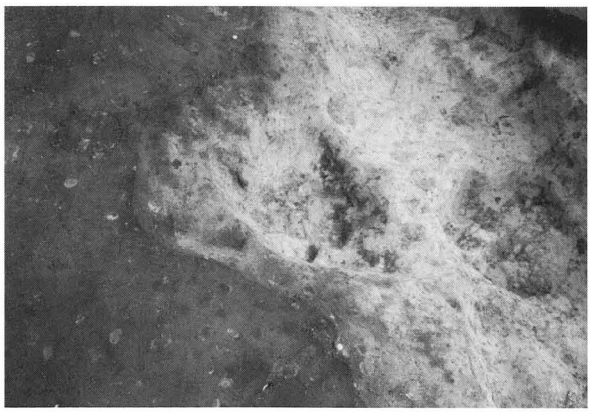

RD128 断面（南から）

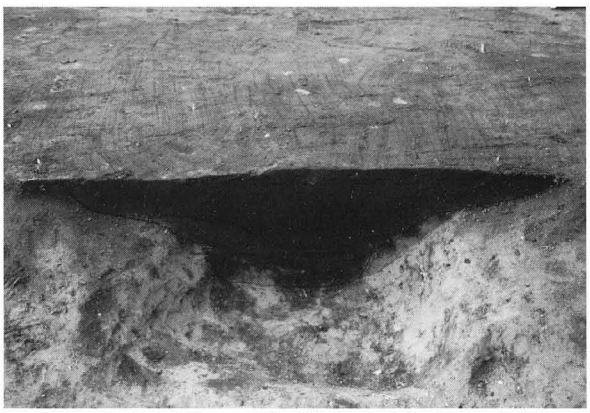
RD129 完掘（南東から）

RD129 断面（南東から）

RD130 完掘（南東から）

RD130 断面（南東から）


RD131 完掘（南から）

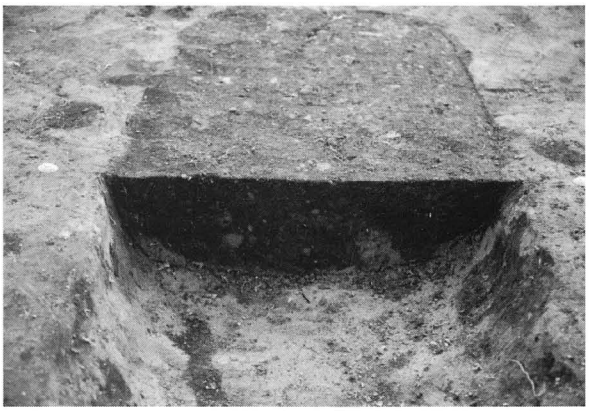

RD131 断面（東から）

写真図版 37　RD128 ～ 131

RD132 完掘（南西から）

RD132 断面（南西から）

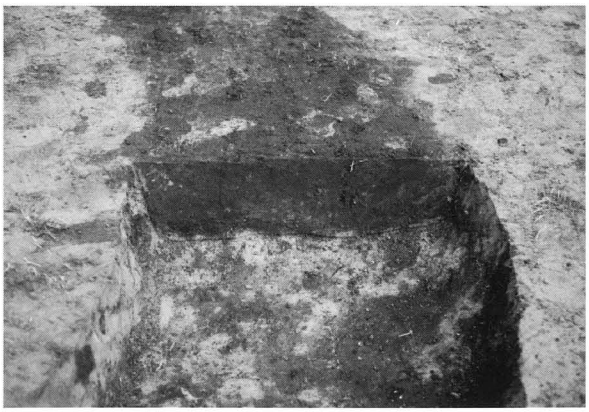
RD133・134 完掘（東から）


RD133 断面（西から）

RD134 断面（東から）

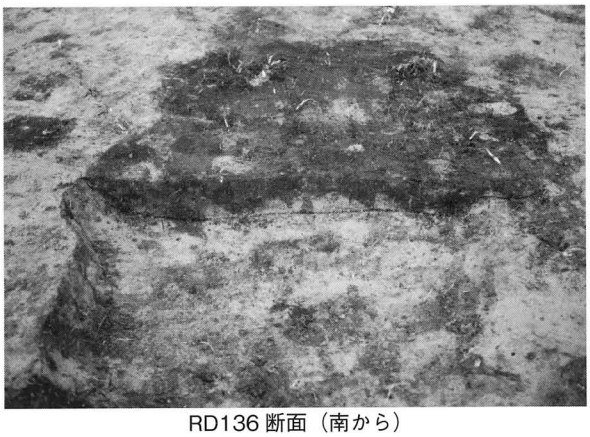
RD135 遺物出土状況（南東から）

RD135 完掘（南から）


RD135 断面（南から）

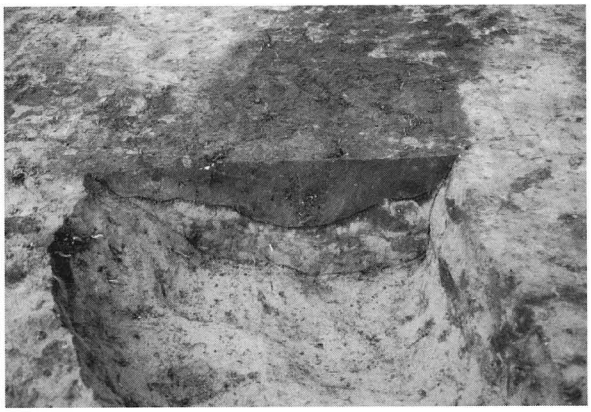
写真図版 38　RD132 ～ 135

RD136 完掘（南から）



RD136 断面（南から）

RD137 完掘（南東から）



RD137 断面（南東から）

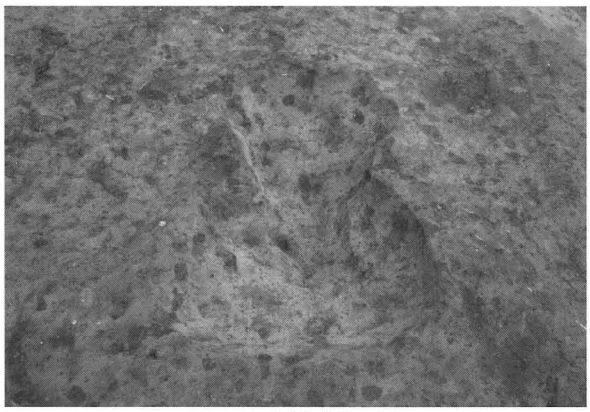
RD138 断面（東から）

RD138 断面（東から）

RD139 完掘（南から）

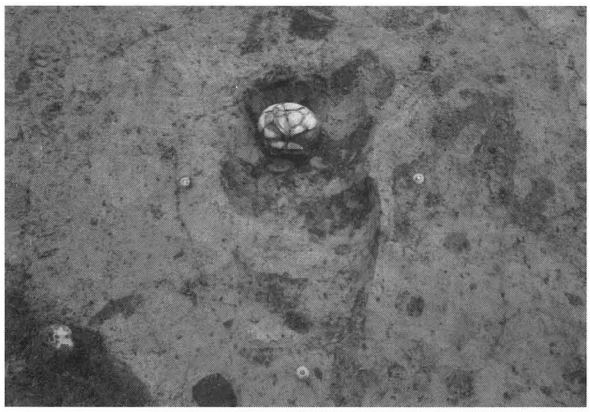
RD139 断面（南から）

写真図版 39　RD136 ～ 139

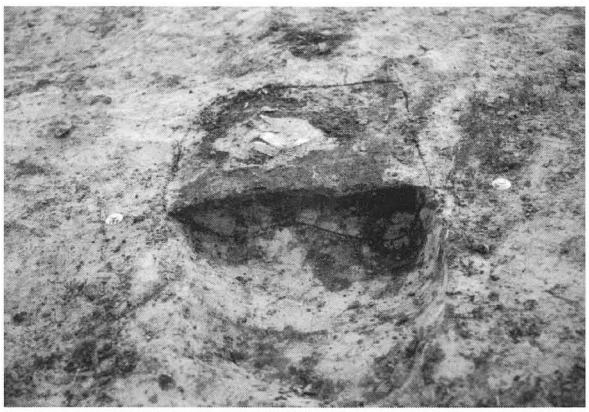


RD140 完掘（西から）

RD140 断面（西から）



RD141 完掘（北から）



RD141 断面（北から）

RD142 断面（南から）

RD142 断面（南から）

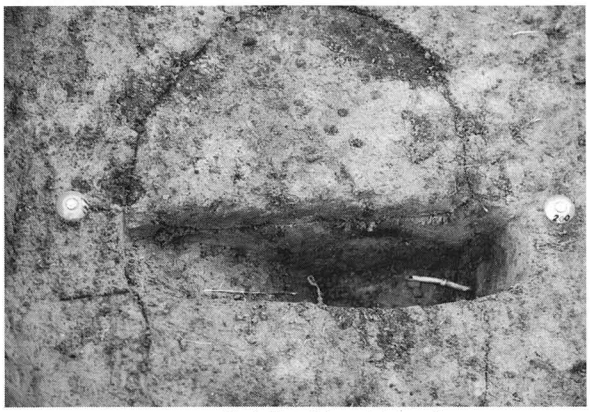
RF002 検出（東から）

RF002 断面（南から）

写真図版 40　RD140 ～ 142、RF002

RD143 完掘（北東から）

RD143 断面（南西から）



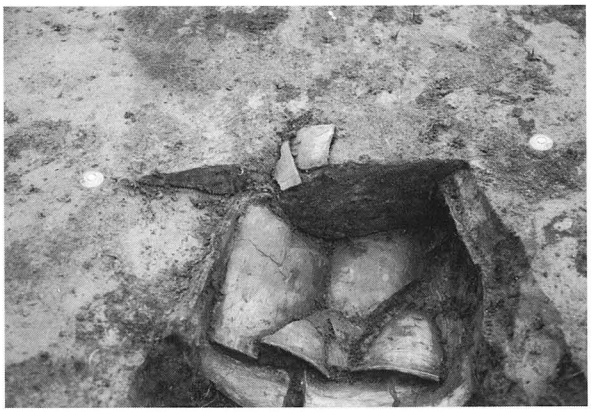
RD143 焼土裁ち割り（東から）

RD144 完掘（南から）

RZ033 検出（東から）

RZ033 断面（東から）

RZ034 完掘（東から）



RZ034 断面（西から）

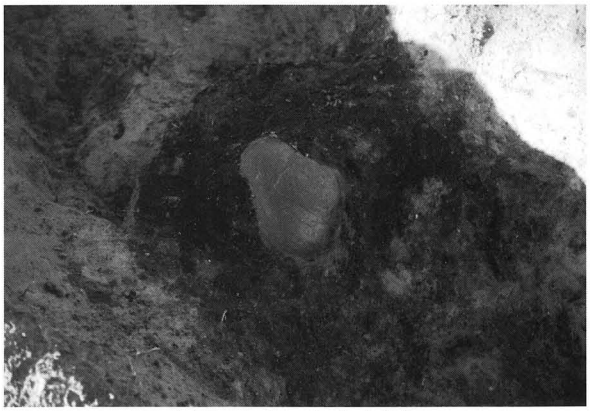
写真図版 41　RD143・144、RZ033・034

完掘（南東から）

断面Ｅ（北東から）

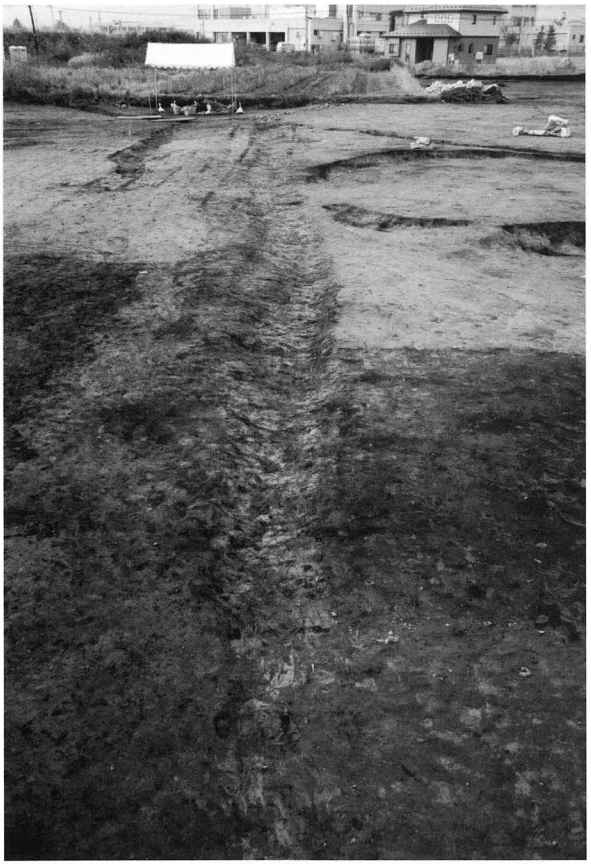
断面Ｂ（東から）

土師器把手（186）出土状況



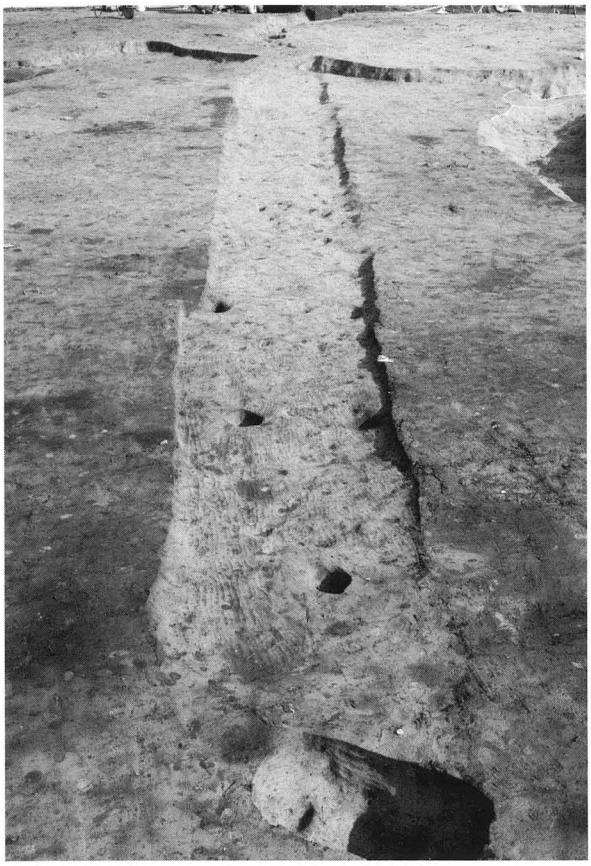
土師器坏（181）出土状況

写真図版 42　RG056



RG032（北から）

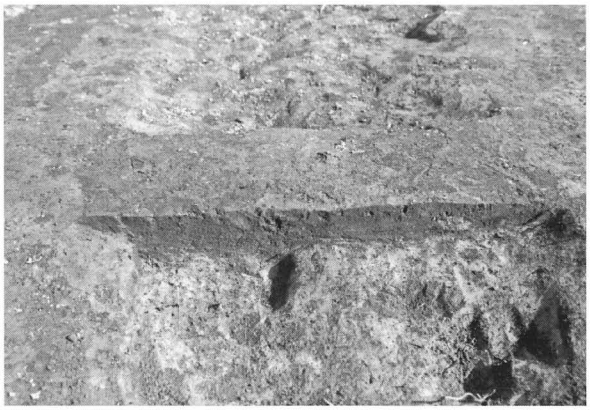
RG055（東から）



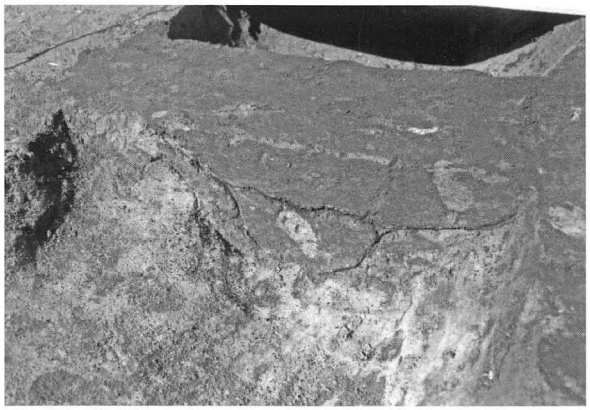
RG057（南から）

RG058（北から）

写真図版 43　RG032・055・057・058



RG032 断面（南西から）



RG055 断面（東から）

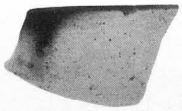
RG057 断面 B（南から）

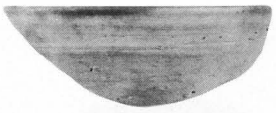
RG058 断面（南から）

柱穴群（西から）

写真図版 44　RG 断面・柱穴群

1

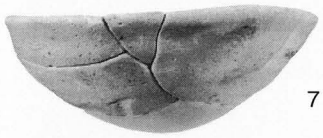

2


3

4

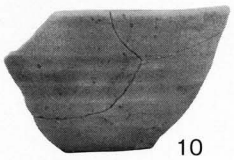
5

6

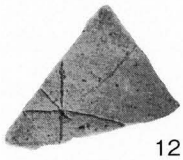

7

8

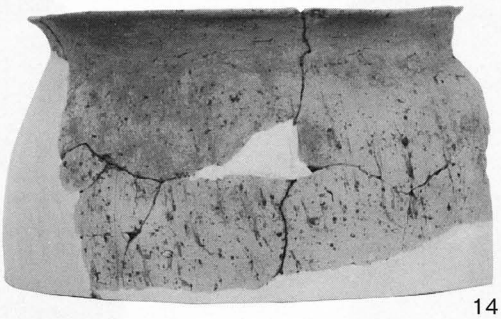
9


10

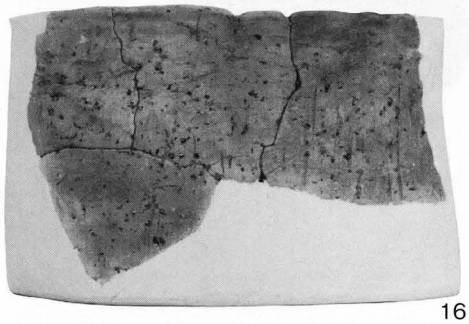
11

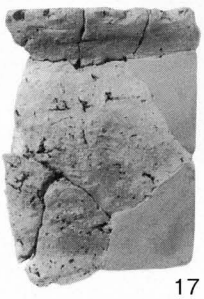

12

13


14

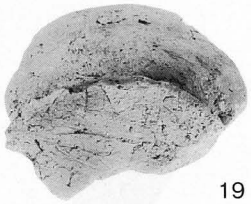
15


16

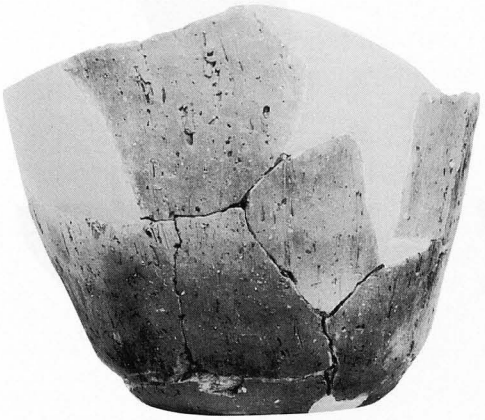

17

18

写真図版 45　RA028 出土遺物（1）



19



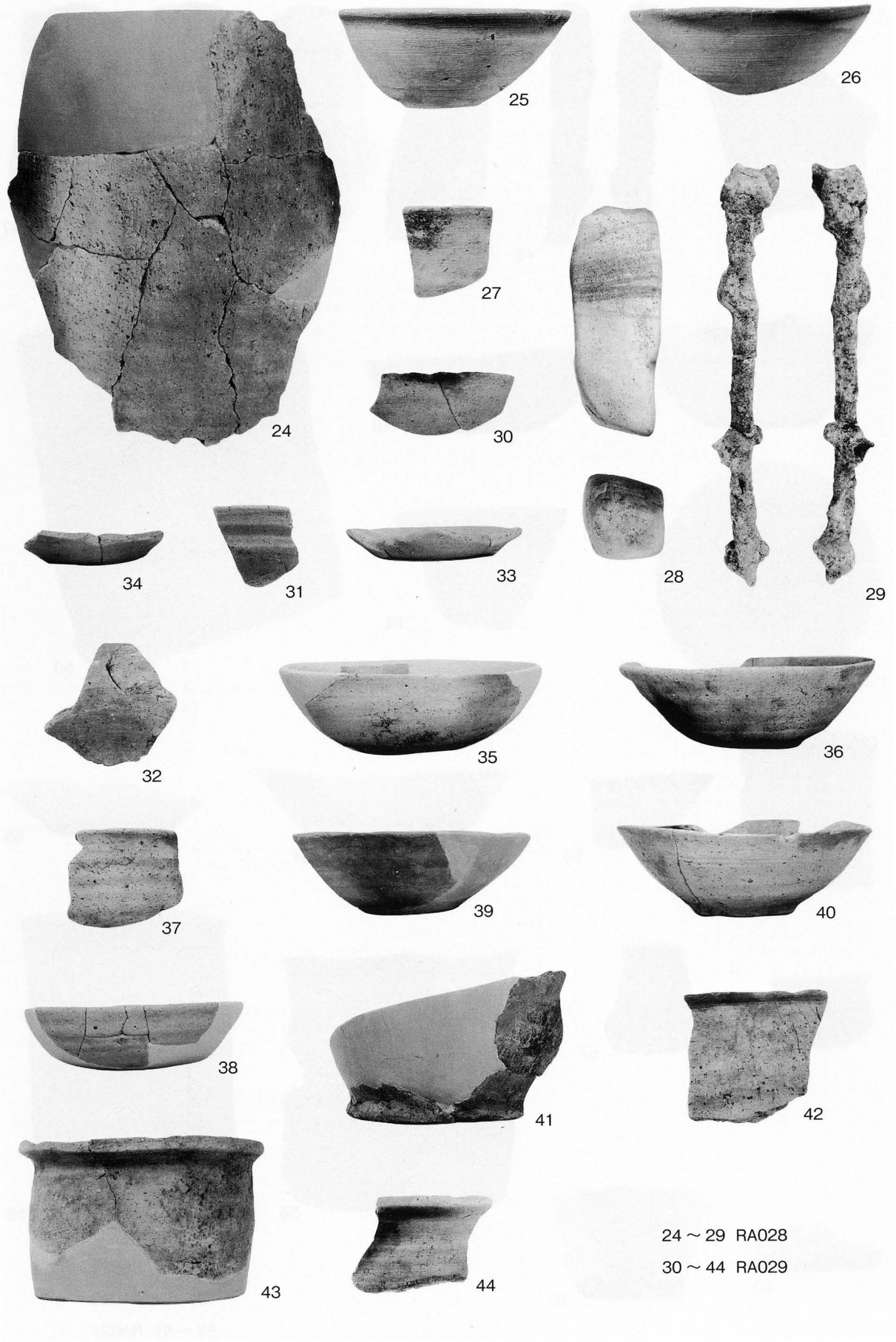
21

20

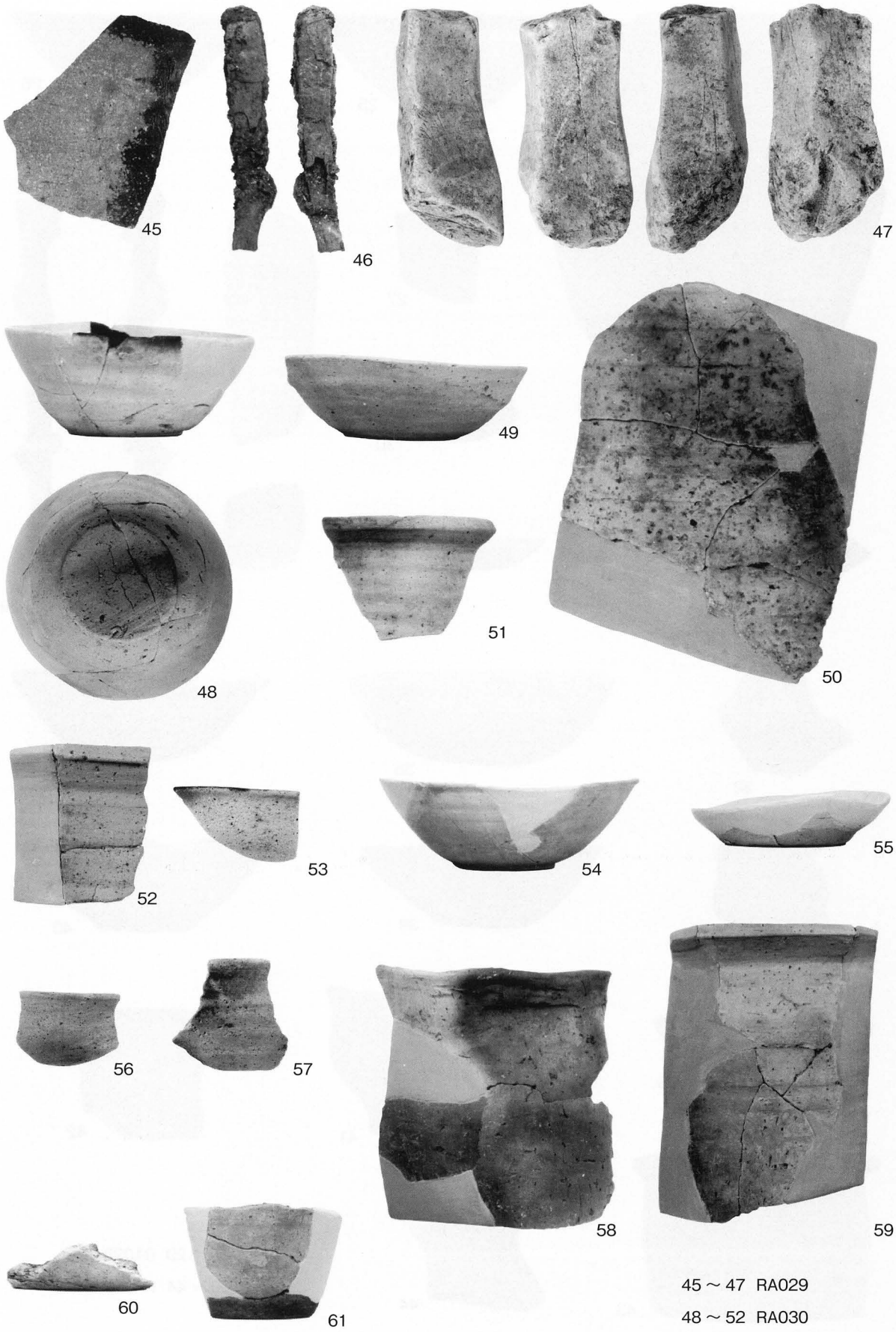
22

23

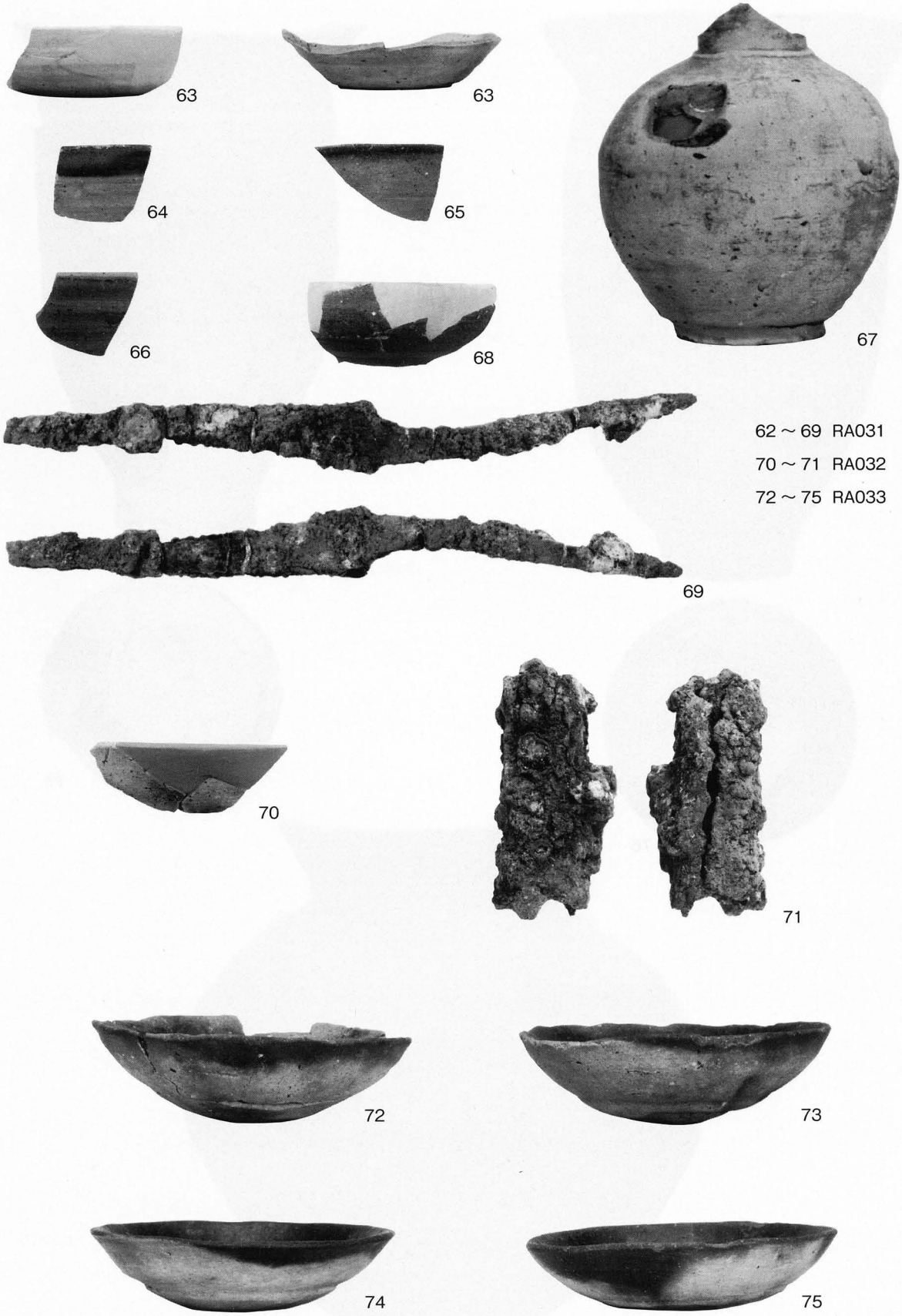
写真図版 46　RA028 出土遺物（2）



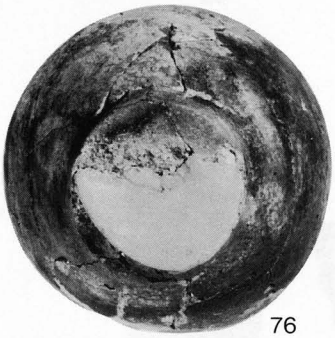
写真図版 47　RA028・029 出土遺物



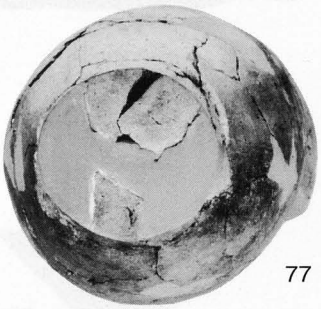
写真図版 48　RA029～031 出土遺物



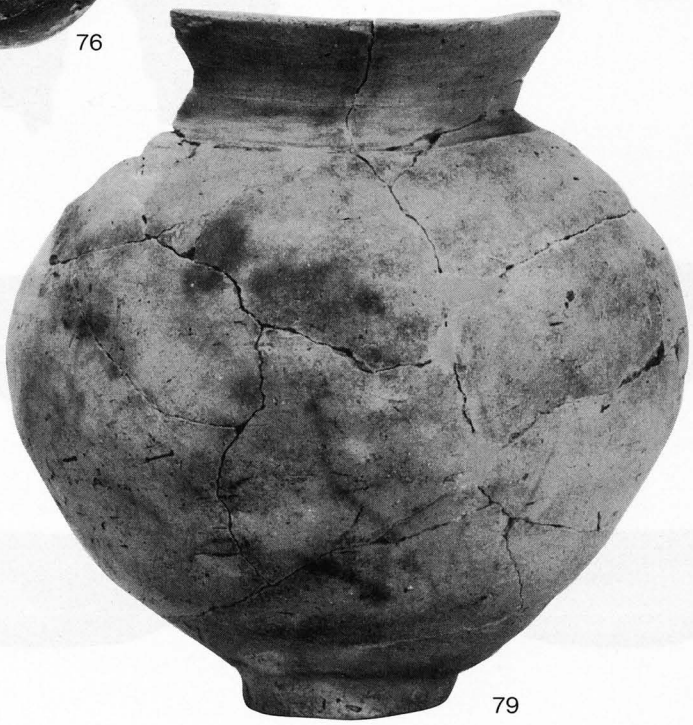
写真図版 49　RA031 ～ 033 出土遺物



76



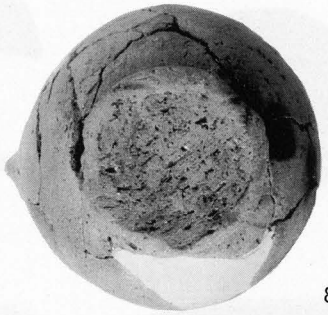
77



79

写真図版 50　RA033 出土遺物

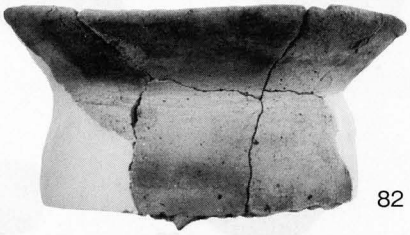
78



80

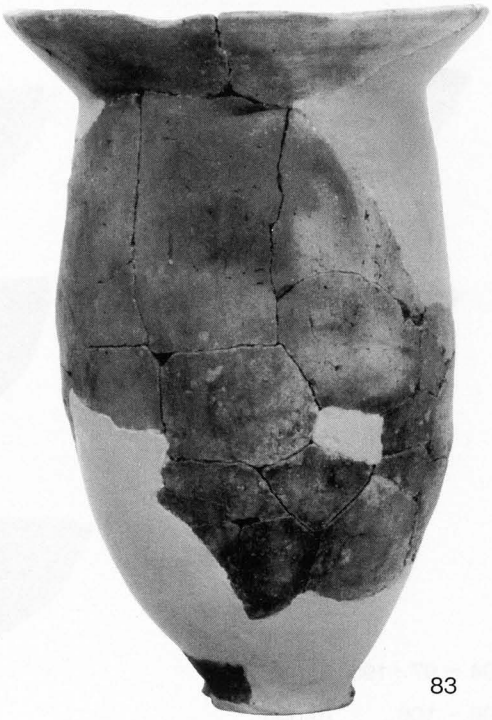
78・80・81　RA033

82・83　　RA034



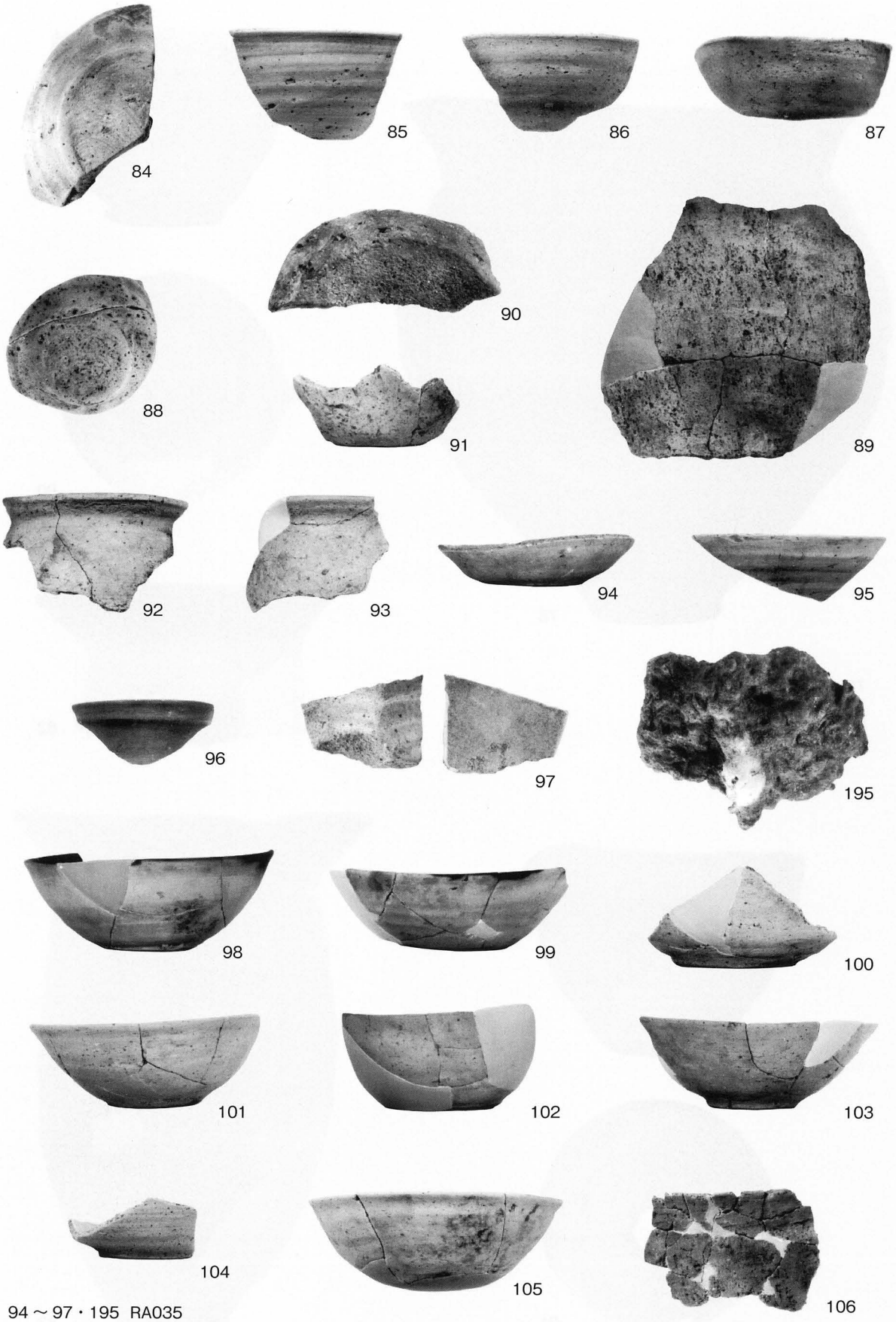
82

81



83

写真図版 51　RA033・034 出土遺物

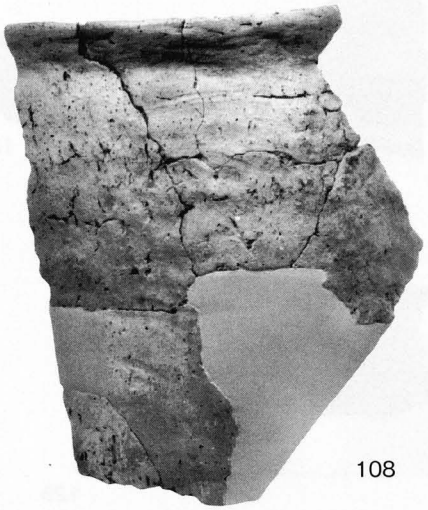


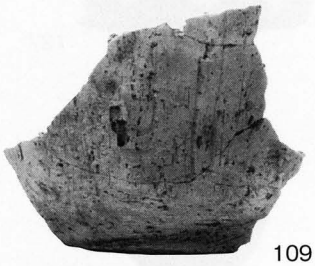
94～97・195　RA035

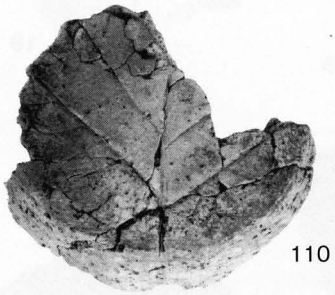
98～106　　RA036

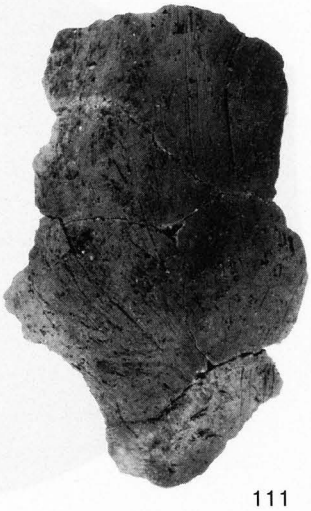
写真図版 52　RA035・036 出土遺物

107


108


109

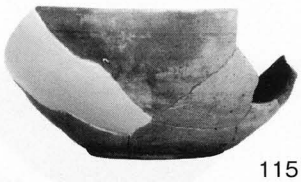

110

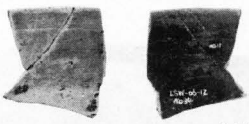

111

112

114

113


115


116

117

118

120

119

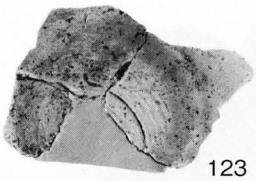
107～114　RA036

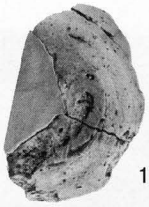
115～120　RA037

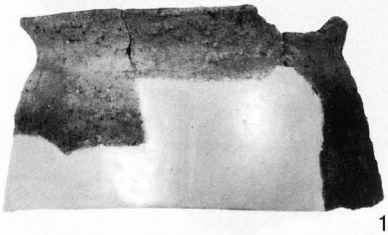
写真図版 53　RA036・037 出土遺物

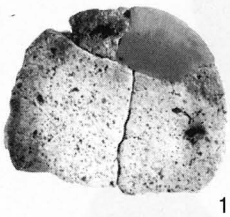
121

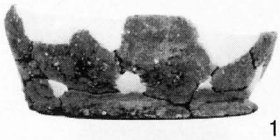
122

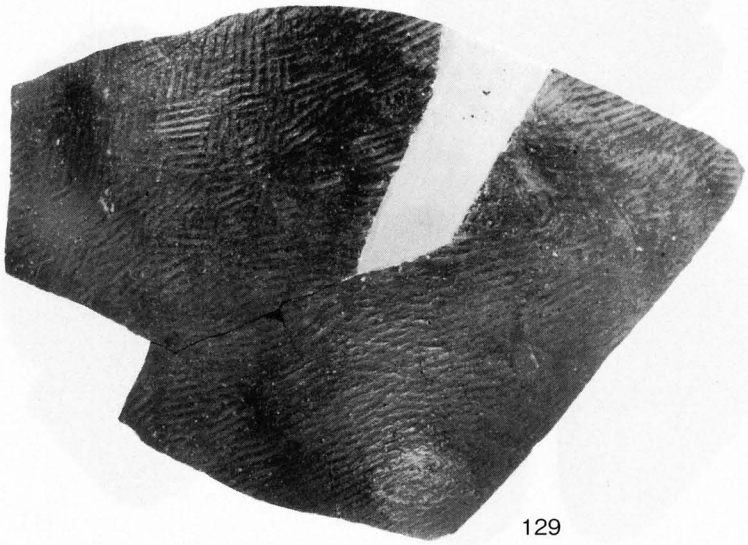

123

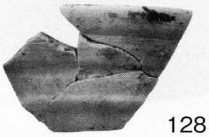

124


125


16


127

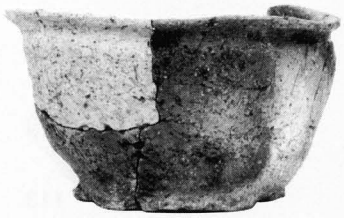

129


128

130

131

132



133

135

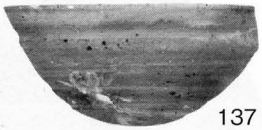
134

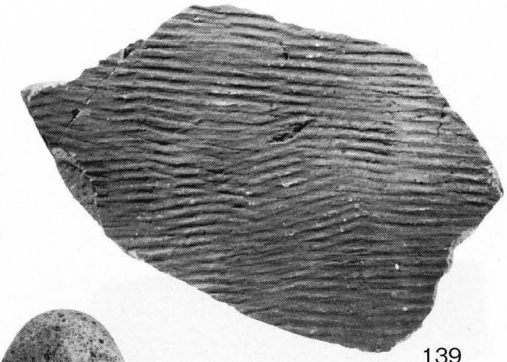
121～130　RA038

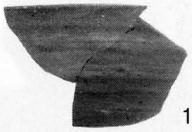
131～135　RA039

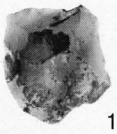
写真図版 54　RA038・039 出土遺物

136


137


139


138

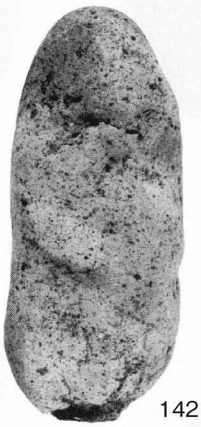

140

136～140　RA039

141・142　RA040

143・144　RA041

141


142

143

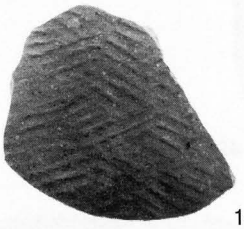
144

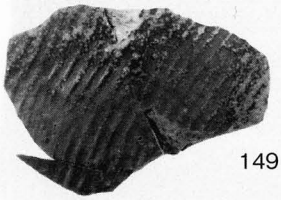
写真図版 55　RA039～041 出土遺物

145

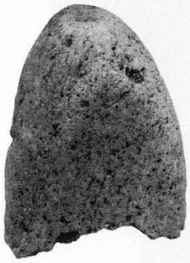
146

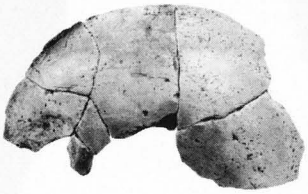
196


148


149

147


150


151

155

154

152

153

156

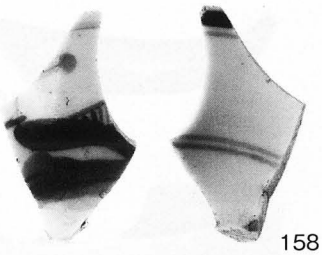
145～147・196　RZ017

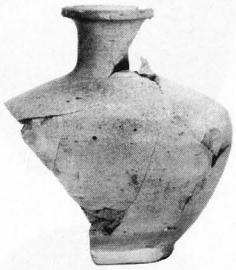
148～150　RZ018　　151　RZ020

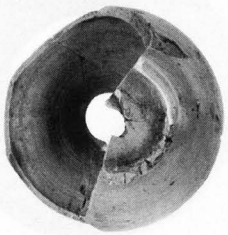
152・153　RZ022　　154～150　RZ023

写真図版 56　RZ 古墳出土遺物（1）

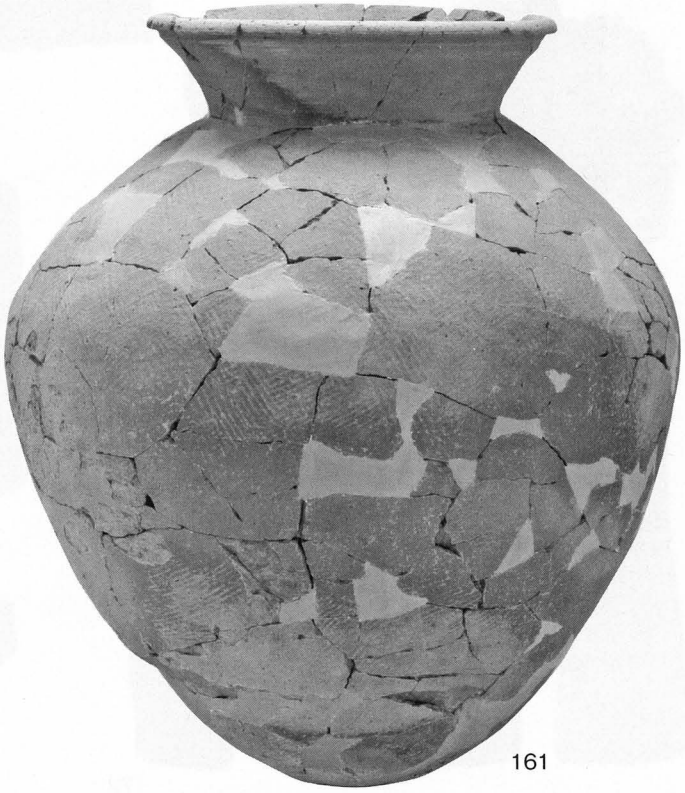
157


158




160

159

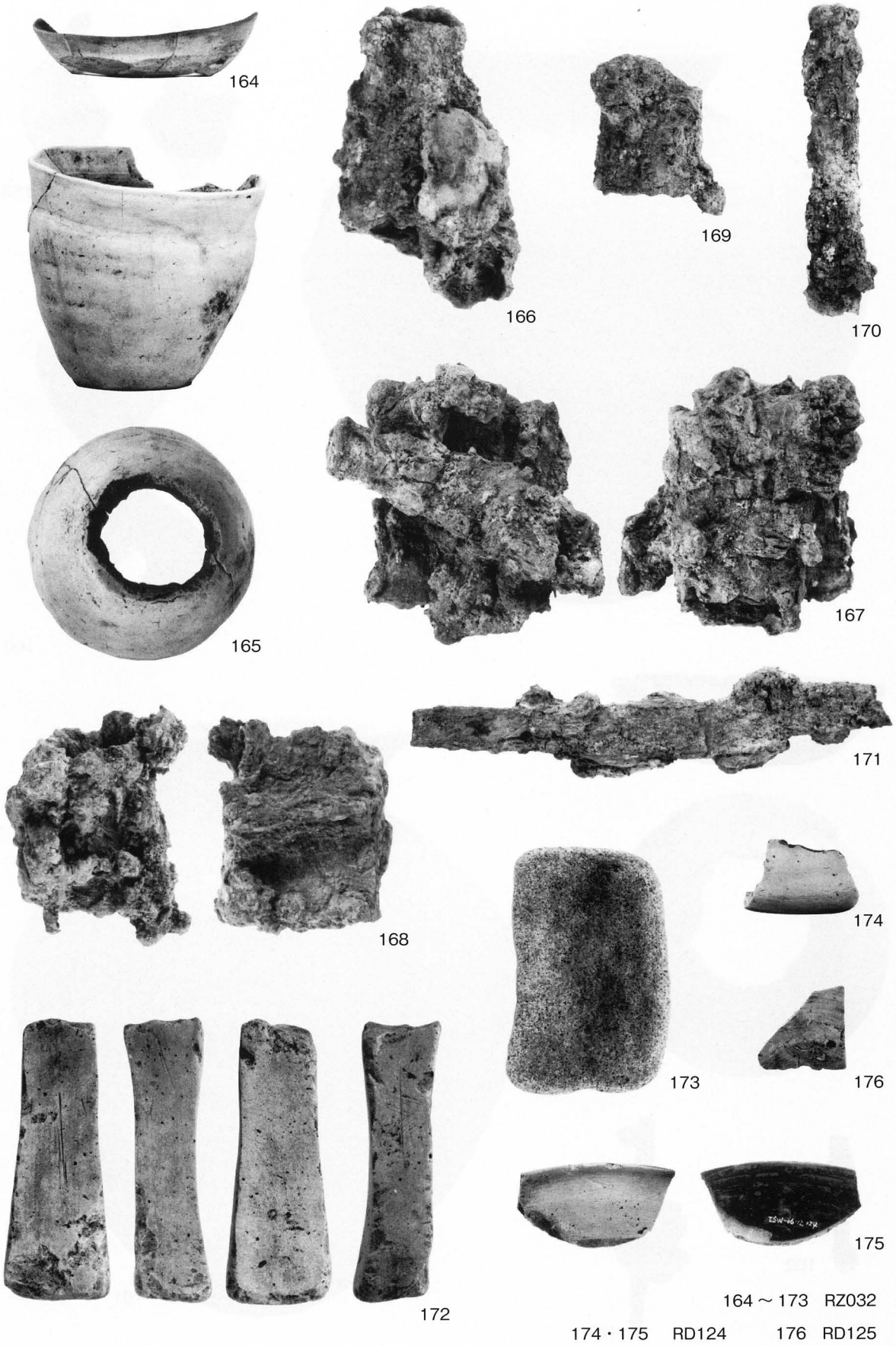

161

162

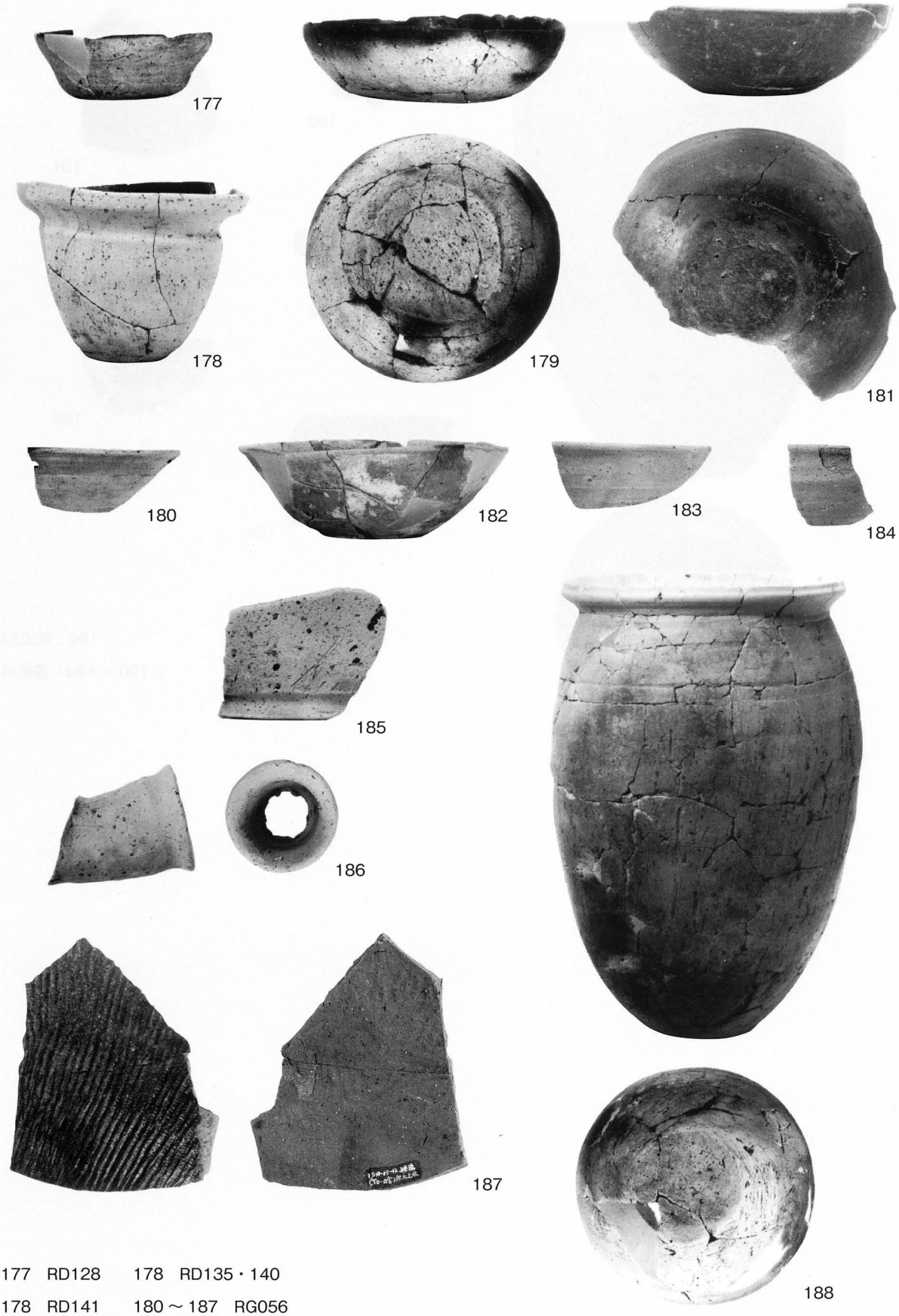
163

157　RZ023　　158　RZ024　　159～163　RZ030

写真図版 57　RZ 古墳出土遺物（2）



写真図版 58　RZ 古墳、RD 土坑出土遺物



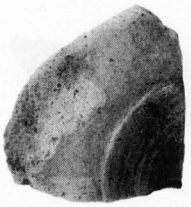
177　RD128　　178　RD135・140

178　RD141　　180～187　RG056

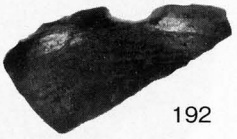
188　RZ033

写真図版 59　RD 土坑、RG 溝、RZ033 出土遺物

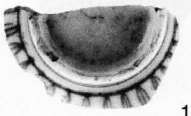
190



191

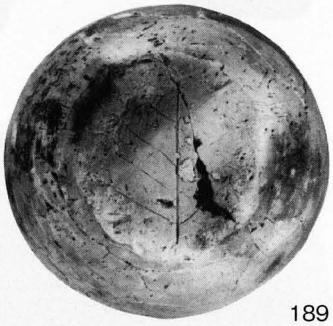


192



193

194



189

189　RZ034

190～194　遺構外

写真図版 60　RZ034、遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いいおかさいかわいせきだいじゅうにじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	飯岡才川遺跡第12次発掘調査報告書
副書名	盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第515集
編著者名	村田　淳・濱田 宏・金子昭彦
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　　TEL (019) 638－9001
発行年月日	2008年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
いいおかさいかわいせき 飯岡才川遺跡 だいじゅうにじちょうさ 第12次調査	いわてけんもりおかしいいおか 岩手県盛岡市飯岡 しんでんちわり 新田2地割43－1 ほか	03201	LE16-2291	39度 40分 45秒	141度 08分 04秒	2005.10.03～ 2005.11.10 (平成17年度調査)	3,200m²	盛岡南新都市開発整備事業関連遺跡発掘調査
						2006.09.19～ 2006.11.24 (平成18年度調査)	4,000m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯岡才川遺跡 第12次調査	狩猟場	縄文時代	陥し穴状遺構　11基		古代墓制の一形態である古墳を検出。墳丘・埋葬施設ともに削平されていたが、周溝内から埋葬や祭祀に使用したと考えられる遺物が出土している。
	集落 ・ 墓域	古代	竪穴住居　14棟 古墳　17基 溝跡　3条 墓坑　7基 土坑　4基	土師器・須恵器 鉄製品（刀子・鐸・釘） 石製品（砥石・磨り石） 土製品（土錘）	
		時期不明	土坑　20基 溝　2条 柱穴　66個		

要約	調査区は遺跡範囲の北側に位置し、縄文～近世までの遺構・遺物が検出されている。とくに調査区北側で検出された古墳は、隣接する飯岡沢田遺跡を除いて雫石川右岸地域では検出例の少ない遺構として注目される。今回の調査により、本遺跡は縄文時代の狩猟場、古墳時代末～奈良時代の墓域、奈良（8世紀中頃）・平安時代（9世紀後半～10世紀初）の集落として機能していた遺跡であることが明らかとなった。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第515集

飯岡才川遺跡第12次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成20年１月28日
発　行　平成20年１月31日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話　(019) 638－9001
FAX　(019) 638－8563
印　刷　有限会社　光文社印刷
〒020-0106　岩手県盛岡市東松園３－12－１
電話　(019) 661－3441(代)

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2008